

新書太閤記

第十分冊

吉川英治

青空文庫

初花 はつはな

一年。——実にわずか一年の間でしかない。

去年天正十年の初夏から、ことし十一年の夏までの間に、秀吉の位置は、秀吉自身すら、内心、驚 きょうもく 目 め したのであろう程な飛躍 と を遂 と げた。

明智を討ち、柴田を斃 たお した。

滝川、佐々も膝 ざっさ を屈 ま した。

丹羽長秀はひとえに信を寄せて協力し、前田利家は義を示していよいよ旧 きゅうぎ 誼 ぎ に変 か るなきを努 こ めている。

およそ、信長の分国は、いまは一国余さず、秀吉の意志下にあつた。いや、その信長頃には、なお敵国であつた分国外の諸州さえも、この一年に、その関係は、まったく一変を呈 ま している。

信長の霸 は 示 し にたいしては、あれほど長年に、また執 しつ 拗 よう に、対抗 たいかう を続けて来た毛利も、いまは質 ちし 子 し を送 くわ つて、盟 めい 下 か に属 ぞく し、九州の大友義 よしむね 統 むね も、こんどは祝書 しゆしよ を寄せて、款 かん を通 つう

じて来たし、また讃岐さぬきの十河存保せうながやすも、和を求めている有様である。

さらに。

越後の上杉景勝も、慇懃いんぎん、賀使を送つて、盟約を履ふみ、四道の風は悉ことごとく、秀吉の袂たもとに吹くを、歡ぶかのような状況である。

——が、ただひとり、宿題の人物がある。

東海の徳川家康だ。

家康が、秀吉のこの旭日昇天のごとき擡頭たいとうを、果たして、どう観みているかは、大きな疑問的存在としなければならない。

(彼が肚はらは?)

と、秀吉の方でも観みていよう。

(さても筑前という者は)

と、家康もまた刮目かつもくしているにちがいない。

そしてこの両者の間は、ここ久しく、音信も絶えていた。双方、ヘタな打つ手は休むに似たり——と無外交の空間に推移を委まかしておいたものといえよう。——が、それは例の無為無策のことではない。既成的事実をもつてそれを示してゆく秀吉の「位くら押し」と、黙

々と先ず自己の陣營をかためている肚芸はらげいのかねあいにあつた期間なのである。

しかし、この無表情の持続は、やがて家康の方から外交形式をとつて動いて来た。

秀吉が京都へ帰還してからやがて間もないうちにある。それは五月二十一日のこと。

徳川家第一の宿将、石川 伯耆守数正ほうきのかみかずまさは、家康の旨を帯びて、山崎 宝 寺城たからでらに秀吉を

訪い、

「このたび、柳ヶ瀬表の御大捷ごたいしやうは、まこと天下の治、定まるの日到来と、主人家康も、

御同慶の至りにたえず、かくは微臣に仰せ遣わされ、御祝のため、罷り越えてござる」

と、披露おこそ厳かに、銘「初花」の茶入れを献じた。

初花の茶入れは、夙つとに天下に鳴っている銘品だった。からもの肩衝かたつきで、これが東 山ひがしや 義政まよしまさの手に入ったとき、義政がよろこびの余り「くれなるの初花染めの色深く思ひし心我れ忘れぬや」の一歌を詠えいじたというのでこの銘がある。

近来、とみに茶にも熱心な秀吉が、まずこの贈物に非常な喜悅を見せたであろうことはいうまでもない。しかし、より以上な満足は、家康から先に、こういう礼を執とつて来たことにあつたことは、これまた、いうまでもないことだった。

数正は、即日、浜松へ帰国する予定であつたが、秀吉は、

「そう急がずもよからう。両三日は遊んで行け。三河殿（家康）へは、筑前よりよしなに申しておこう程に」

と、云い、また、

「わけて、明日はいささか、内祝いの儀もあれば」と、たつて引き留めた。

その内祝いというのは、去年以来の秀吉の内治戦功を嘉賞かしょうあらせられて、朝廷より彼にたいして、このたび従四位下、参議に補せらる、という叙旨じよしを賜ったによるのであった。秀吉は、この栄を、さらに、家臣にも頒わかつべく、七本槍の若者以下、有功の将三十六人、その他へも、広汎こうはんな論功行賞を同時にした。

また、新たに分国二十カ国に、新進の城主を取り立て、畿内五国を藩屏はんぺいとし、この五月から大坂に大築城を企画きかくして、年内にはそこへ移る予定——ということなども発表していた。

「それやこれの歡びじや。まあ居れ、まあゆるゆる居れ」

秀吉にこういわれては、数正も、辞去する口実に窮した。慶祝の意を表しに來た使節が、慶祝の席を断つて去るも妙なもの——と分別された。

宴は三日にわたった。恩賞を受けた将士やら賀客の登城はひきもきらず、城市はせまく城門も小さい宝寺城は、それらの車駕人馬しやがに溢れた。

けれどこの一城市に鬩黈あいたいとたなびいている瑞氣ずいきというようなものを、石川数正は見のがせなかった。

(時代はついにこの人の双肩に——)

と、いう感を正直に抱かずにもいられない。

数正は、今日まで、

(わが主君こそ、その人なれ)

と固く信じて疑わない者であったが、ここで秀吉と起居を共にしている間に、その心境には妙なからぬ変化が起つていた。

彼は事々に、自国とこのことを、見くらべた。徳川麾下きかの一般と、羽柴麾下の一般とを、比較し、反省していた。

そして、内心の結論として、

(何としても、浜松、岡崎はまだ地方的——)

と歎ぜざるを得なかつたし、秀吉、家康の人物比較からも、

(わが御主君といえども、筑前守の天性の大气と、天衣無縫の茫とした人からある衆望には、到底、及ばないものがある。時人は滔々この人の驥尾に付し、時勢は着々この人に次代を築かせてゆくに違いない)

具眼の数正はそう観た。いや、具眼の士でなくとも、秀吉を盟主として興りつつあるものは、悉く日本全州の曉雲のうごきを思わせ、その中心の力たるを実証しているに較べて、浜松の家康はといえ、なおまだ東海の一地区に限度せられた地方的勢力に過ぎないことは、誰とても、否み得ないところであった。

「余りな、おもてなしに、思わず数日を、浮々と、過ぎました。明日はお暇いたしとう存じまする」

「帰るか。では明日は、京都まで、同道いたそう。筑前も、京まで出向けば」

数正の暇乞いに、秀吉はそういつて、さらに半夜を、彼のために、彼と興を共にした。あくる日。——石川数正の帰国と行を共にして、秀吉も京都まで出向いた。

「伯耆(数正)。——伯耆」

途中、秀吉は馬上から列後をふり向いて、やはり馬上の彼をさしまねいた。

数正は、徳川家の使節として、城中では寶札をうけていたが、途上の列伍には、陪

臣なので当然、秀吉の後についていた。

が、頻りに呼ぶので、

「何事で」

と、供廻りをおいて、彼自身のみ、秀吉の側へ馬を寄せて行った。

秀吉は、緩々たる気軽さで、

「伯耆よ、同行の約束じやったぞ。離れ離れにあるいは同行にならぬ。京都までの途、殊に退屈、話しながら参ろうよ」

と、いうのである。

数正は、恐縮したが、

「御意にあまえて」

と、そこからは轡を並べて、話し相手になっていた。

沿道の衆目から仰げば、恐らくこれは、秀吉が数正を京都まで送って行くかのような景観となっていたろう。——が、秀吉は、いっこう無頓着の容子で、

「この地にあつて、京都への出入りは、何とも、不便でならぬよ。往き來の時間の費えも勿体ない。……で、年内には大坂表へ居を移し、浪華と京都とを緊密なる一環の府として、

諸事、そこでつかさど司ろうと思う」

などと、大坂築城の抱負の片鱗を語ったりした。

「大坂とは、よい地を相されました。信長公にも、御生前多年、大坂をお望みであったように伺っておりますが」

「当時なお本願寺の法城堅く、やむなく安土を選まれたが、御本意は大坂であつたやも知れぬ」

「それが今日においては、彼処の御普請ごふしんと聞くや、諸州を挙げて、石を運び材を寄せ、むしろ下命をよろこんで、昼夜、御工事を孜々ししと競いおるとの由。……偏ひとえに御威徳と申すものでしょう」

「なんの、何事も機運じやよ。浪華の地のそうなる機が、今日、熟して来たというに過ぎぬ」

いつか京都の町中だった。数正が別れを告げようとすると、秀吉はまた留めて、

「この暑さに、陸路を廻るは、賢明でない。大津より湖上斜めに、舟便とされるがよい。舟用意のできる間、玄以げんいの家で、弁当なつかおう。まあ、来い、来い」

玄以とは、先頃京都所司代の任についた半夢齋前田玄以のことだろう。否やなく、秀吉

は数正を拉^らして、その玄以の役邸へ伴^らつてしまった。

門は清掃されていた。あらかじめ予報されていたものとみえ、玄以の数正を迎えることは、鄭重を極めた。秀吉は、却^かつて、

「そう、堅^かうするな、堅^かうするな」

と、飽^くくまで寛^くいでみせ、茶亭^{ひる}で午の饗宴^{ひる}がすむと、いやその食事や喫茶の間も、大坂経営のはなしの続きをやめなかつた。

「玄以、絵図^{えず}を持って、絵図^{えず}を」

「御普請^{ごふしん}の図面^{ずめん}で」

「そうじゃ。ここにも、写^かしが一^{いっ}図^ずあつた筈^{はず}」

「ござりまする」

やがて、玄以がそこへ、取り寄せて来た大^お図面^{ずめん}を拈^ひげた。他^た国^{こく}の外^{ぐわい}臣^{しん}にたいして、平然^{へいぜん}とこ^こうい^いうもの^{もの}を^を示^しす秀吉^{しゅうきち}の意^い中^{ちゆう}を、見^みせる者^{もの}も、見^みせられる者^{もの}も、ひとしく惧^{おそ}れるよう^{よう}な顔^{かほ}つきである。

秀吉は開放主義^{きやうはつしぎ}である。この胸^{きょう}襟^{きん}をひらいて語る前^{まへ}には、数正^{しうせい}が、徳川^{とくがわ}家の臣^{しん}であるとか、その徳川^{とくがわ}家が、自己^{じこ}に取^とつての何^{なに}者^{もの}であるかなども、ほとんど、忘れ去^{わす}れている

かのようにしか思われぬ。

「ま。見てくれい」

と、いうのである。そして、

「御辺は、築城にも精くわしいと聞く。何ぞ、心づきもあらば、遠慮のう申ししてくれい」

ともいつて、その設計の批判を、数正に求めるのだった。

原図は、その茶室一ぱいにもなる大きさだった。いわれた通り、数正は、築城土木には、多少造詣ぞうけいもあり、興味も持っていたので、普通なら、秘中の秘として、他国の使臣などには、絶対に示すものでないものを、秀吉が、どういう心意で自分に見せるかの疑いはまず措おいて……

「では、拝見させて戴きまする」

と、絵図の上へ、身を伸ばして、見入った。

「……………」

秀吉のやること、およそ小さな規模ではあるまいと、予想していた数正も、つぶさに辿たどり見るに従って、その構想の大と、用意の深遠には、まったく気をのまれた容ようす子こだった。

「ははあ」

とのみ、何度も唸うめいて、囃中の夢に囚とらわれ去つていた。

彼が、思い出すのに――

かつて、本願寺の根拠であつた頃には、方八町の城廓であつたが――いま、この設計図を見るに、その方八町は、わずか本丸の一基礎となつてに過ぎない。

そして、その周辺の四川山海の自然を悉ことごとく取入れて、景勝けいしょうを按あんじ、攻守の難易、経営の利害を考え、兵馬の出入、車馬舟楫しゅうしゅうの利便に応じ、本丸、山里丸、二の丸、三の丸などのほか、べつに馬出しと総曲輪そうくわを構え――これらを囲繞いにようする外廓の周りは、実に、六里余にわたつてゐる。

また、結構の中心をなす天守閣はというに、城中の最も高い位置に、数十間の楼台ろうだいを築き、さらに巍々ぎぎたる層々の五重が設計されてあり、総塗り籠めそうぬごめ、大矢狭間を開き、頂上の瓦は、悉く消金けしきんをもつて箔はるとある。

「ううむ。なるほど」

またしても、数正は深く唸うめいた。――驚歎、ただ舌を捲くばかりである。

――が、彼が最前から凝視してゐた部分は、まだ城府の一地区だけでしかない。それを繞めぐる五畿七道の市街交通等を概望すれば、その廣大遠計は、さらに驚目を奪う。

皇城の京に近く、伏見、鳥羽の要津ようしんをひかえ、淀川の流れをひいて、即ち、城濠ぼりを繞めぐらすの水とし、堺の繁華は眼下がんげに近く、中国、朝鮮、南方諸島に通う無数の交易船をそこに繋ぎ、奈良街道は遠く大和やまと、河内の山脈を牆壁しょうへきとして自然の守りをなし、山陰山陽の両道は、四国九州の海陸路をここに結んで、四通八達の関門をなし、まさに、天下第一の地として、將はたまた、天下に号令するところとして、信長の安土に勝ること幾倍、どここといって、不足の見出しようもない。

「どうじゃな。そこらでは」

秀吉はいった。

「申し分ございますまい」

数正は答えた。正直、そういうしか、ほかに言葉もなかった。

そこへ玄以の家臣が、お席を移しましょう、と云って来た。

余り熱心に絵図を見たので、数正もちと肩の凝こった容子である。秀吉はすぐ、

「よかろう」

と、気を変えて、先に立った。広間の松韻亭しょういんていは、翠簾すいれんをかかげ、水を打ってあつた。

「ただ、驚き入るのほかありません」

そこへ来てから、数正は云ったが、

「何が？」

と、秀吉はもう忘れていたかのような顔をした。

「大坂経営の、あの絵図に見る、広大な御計画であります」

「あ、大坂の住居のことか。あれでよいかな」

「もし、あれが成るあかつきには、古今未曾有みぞうの大城市が、地上に実現されましょう」

「そうするつもりじゃが」

「いつまでの、御予定で」

「年内には、移りたいと思う」

「えっ、年内に？」

「あらましのところだな」

「それにしても、あれ程な大土木、優に、十年はかかりましょうに」

「ははは。十年も費やしては、世が変つてしまう。秀吉も老いてしまう。……城内の細部、調度装飾をも、悉しっかい皆、三年で仕了しおわせよと、命じてある」

「工匠の督励とくれいとて、容易とは思われませぬ。また石垣、木材などの数量も、夥おびただしいものでございましょうな」

「二十八カ国より木材を伐り出し、陸海から運ばせおる」

「要する人夫の数は」

「これや、わからぬ、何万何十万を要するやら。……内濠、外濠を掘るだけでも。三カ月、日々六万人を用いても、ざつとであろうと、奉行どもはいうた」

「ははあ」

数正は沈黙した。あきれ顔なのである。また、自国の岡崎城や浜松城と思いくらべて、余りな懸隔けんかくに、気の滅入めいめいるような顔でもあった。

「いつたい、石のない大坂に、そんな巨石が思いのまま集まるか否か。この多端な戦国にその彫ぼうだい大な費用をどこから捻ねん出す気か。疑惑を抱けば、いろいろあるし、秀吉の大気も、或いは、大風呂敷たぐいの類ではないか、などとも疑われたが、当の秀吉は、その数正を前にして、早や何か急用でも生じたとみえ、祐筆の大村由己ゆうこを招いて、

「いちいち申すから、それにて書け」

と、書面の文言を、口述し始めているのである。そして恰あたかも、大坂築城のごときは、片

手間の閑事に過ぎず、いま祐筆に認めしたたさせている方のことこそ、自己の本領たり、ゆるがせならぬ問題と、数正の在るをすら忘れて、章句を按あんじ、また首をかしげては、次の文言を、認めしたたさせているのだった。

「……………」

聞くまいとしても、目の前で秀吉の口述するのは耳に入る。しかもそれは、毛利の一族、こばやかわたかかけ小早川隆景へ返書する大事な外交文書であるらしい。——これにも、数正の常識は、身の措おき所を失うてまごついた。

「御公務、急な御様子。ちと退座しておりましようか」

「いや、要らぬ遠慮。すぐ終るすぐ終る」

秀吉は、意にも何にも介していない。そして縷る々と、口述をつづけていた。

返書というのは。

小早川隆景から、このたびの大捷を賀して来た書にたいして、秀吉が、柳ヶ瀬戦況の報に事よせて、この際、毛利家の将来の向背こうはいを、しかと、その旗幟きしに明らかにすべきことを——思いきったことばをもって促うながしている——私信とはいえ、重大な書面なのであった。

秀吉がいうそばから、祐筆が書いてゆく。

祐筆の筆の運びを眺めては、秀吉が口述する。

石川数正は、黙然と、そのそばで、眼を、庭前の叢竹むらたけに遊ばせていた。

（——柴田に息つがせては、手間どるべきかと存じ、日本の治、この時に候ふ条、兵をも討死させ候ふても、筑前守の不覚にては有まじと存じ、ふつと思ひ切、二十四日寅の下刻、本城へ取掛り、午うまの刻乗入れ、悉く首ことごとを刎はね候事）

これは北ノ庄陥落の状を書かせているのである。——日本の治この時に候ふ——という言葉けいを吐いたとき、秀吉の双眸そうぼうは、まったくその折のもののように、熒けいとして見えた。

文言は一転、毛利家の肚はらへ立ち入つて、

（——総人数をいたづらに置くべき儀も、いらざる事に候ふ条、その御国端くにばへもまかり出て、境目の儀をも相定め、つれつれなきほざりなき胸をも相見せ申すべく候間、御分別ありて、秀吉が腹を立てざるやうに、御覚悟もつと、尤ももつとに候ふ事）

「……………」

数正は、思わず、秀吉の顔をぬすみ見た。大胆な——と舌を巻いた。だが秀吉は、当の隆景を前に、膝組みの談笑でもしているように、こんな露骨な云い分をも、さも気軽げに書かせている。——傍若無人ぼうじやくぶじんといおうか、天真爛漫てんしんらんまんといおうか、数正には、推し

量れないものだった。

（——東国は北条氏政、北国は上杉景勝、共に、筑前守が覚悟に任ずの態に候ふ。毛利右馬頭殿にも、秀吉が存分の次第、御覚悟なされ候へば、日本の治、頼朝以来、いかで勝るものあるべきや。よくよく御量見専用に候ふ。また御異存これあるに於ては、お心おかれず、七月以前に仰せをかうむる可く候ふ。八幡大菩薩、秀吉が存分のごとく候はば、弥 《いよいよ》、互に申し承るべく候ふ事、右の趣き、一々輝元へ相達せらるべく候ふ事、肝要に候）

「……………」

数正の眼は風竹の戯れに見入っていたが、耳はまったく秀吉の低声に魅せられて熱していた。そして、心の奥のものが、風竹の葉のごとく、顫き戦ぐのをどうしようもなかった。——思うらく。

この人にとつては、大坂築城のごときも、ほんの片手間仕事らしい。毛利へたいしてすら、異存あらば、七月以前に、申し越されよ、旗鼓の間に、解決しようと、云い切つているのである。——数正は、歎を越えて、かろい疲れすら覚えて来た。

「お船の御用意ができた由でございます」

折よくも、所司代しよしだいの士が告げて来た。秀吉も、ちようど書面したたを認めさせ終っていた。暇を告げた。

秀吉は、帯びていた一腰を、

「古びたれど、良い刀と人は申す。寸志ぞ」

と、数正に与えた。

数正は、押し戴いた。

外へ出ると、秀吉の馬廻り衆一隊が、彼を大津の船着まで見送るべく、馬を揃えて待つていた。

よじようくるま
予讓の車

京都に出れば京都にも、彼の裁決を待つ問題は山積している。秀吉は座臥ざが間断なく決し去った。

柳ヶ瀬以後、大勢はすでに定まって、戦はすんだかの如くであるが、伊勢方面には、滝川一益が降つてもなお頑がんとして屈しない地方的な局面が、幾カ所かに燻くすぶっていた。

長島、神戸などにたて籠こもっている伊勢の残軍である。

その方面には、専ら、織田信雄が当つた。掃討そうとうも終りを告げかけていた。

で。——秀吉が越前から還かえつたと聞き、信雄は、戦地から京都へ来ていた。そして、この日、京都で秀吉と会つた。

「長島が陥ちたら、長島城へお還りあるがよい。美濃、伊勢には、御縁故の深い家すじや侍どもも多く、あなたをお慕いしていよう」

秀吉はいつた。

信雄は欣然きんぜんとして、長島へ歸つた。庸劣ようれつなこの公きん達だちは、秀吉から約された微不至みづじたる戦捷せんしやうの分け前をもつて、鬼の首でも取つたように、得々とくとくとして去つた。

「大徳寺の使僧が、御寸暇にお目通りねがいたいと、今朝から控えておりますが」

信雄が辞去した後の客は、大坂表から来た池田輝政であつた。この輝政が長尻ながじりで、折々、秀吉と共に、笑声を洩らして来るので、近習がこう伺い出ると、

「お、お」

秀吉は、思い出したように、

「二日の法要の打ち合わせか。——今朝参ると、自分から大徳寺へ申しやつておきながら、

うかと、忘れおつた。——彦右衛門へいえ」

「蜂須賀どのには、昨夜、榎島まきしまへお立ちでございました」

「そう、そう、彦右衛門はいないの。……はて、誰か、法要の儀に、明るい者はおらぬか」
側にあつた輝政は、自ら任を求めた。

「六月二日は、故右府様の御一周忌。そのお営みについて、大徳寺の僧どもと、打ち合わせの儀でございますか。……それなれば、拙者が出て、諸事、談合をすませましょう」

「む、古新こしん(輝政のこと)には、昨年の大法要にも、奉行の一人であつたな。今年の一
周忌も、何かと、頼もうか」

「承知いたしました」

輝政は、別室へ立つて、大徳寺から来た仙岳せんがくおしよ和尚や四、五の使僧たちと膝まじを交えて、
夕刻まで、一周忌法要の相談をしていた。

灯ともし頃——

その間の訪客のひとりだつた公卿くけいが、牛車でここの役邸の門から帰つてゆくと、しばし
客も絶えて、秀吉は夕風呂ふろを出、丹波から来た養子の秀勝や前田玄以げんいなどを加えて、夕食
を摂とっていた。

ところへ、役邸の門の柳へ、従者に駒を繫がせて、どこからか立帰って来た者があつた。秀吉の座へ、すぐ近習の知らせがあつた。

「ただ今、蜂須賀どのが、槇島からお帰りになりました」——と。

心待ちにしていた使いとみえ、秀吉は聞くと、

「帰つたか。これへ」

と、すぐ膳を退げさせた。

軒の翠簾に、風がうごき、どこかで女童たちの笑いさざめきが流れていた。

彦右衛門正勝は、すぐ奥へは通らず、風呂所のわきの流しで、口を漱ぎ、鬢の毛など、撫でていた。

宇治の槇島に使いし、帰日も馬だったので、埃を浴びていたからである。

使命は、槇島の配所に送檻してある佐久間玄蕃允に会つて、秀吉の意を伝えることにあつたのである。これが、やすきに似て、なかなか難しい使いであり、秀吉もそれを知つて、

(そちでなくば……)

と、昨夜特に旨をうけて、宇治まで出向いたわけだった。

越前の足羽山中で捕えたあの玄蕃允げんぱのじょうを、すぐ斬ることなく、宇治の槇島まぎしまへ送らせ
ておいた時からして、秀吉には、今日の下心があつたとみえる。

その送檻の道中も、秀吉は護送の武者にむかつて、

（つれなく囚人扱いにすな。縄目はぜひなしとするも、あれぞ越前の捕虜と、道々、人目
の辱はじに曝さらすまいぞ。縄もゆるやかにし、乗り物にのせて、槇島におけよ）

と、自身こまかい注意までしていた程であつた。

野に放てば立ちどころに猛虎と変じるかも知れない無双むそうの勇者とは分りきつていたので、
槇島の牢には、きびしい番を付けておいたが、食事その他は、秀吉の内意とあつて、極め
て、優遇ゆうぐしていた。

敵の虜りよしやう将しょうとはいえ、秀吉は、明らかに、心のうちで、玄蕃允盛政を惜しんでいたの
である。勝家同様、秀吉もまた、彼の天質のどこかを愛して、

（殺すに惜しきもの）

と、きょうまで、宿題に附しておいたに違いない。

で、秀吉は、京へ還ると、間もなく、使いを遣つて、率直に意中を告げ、もつて玄蕃允
に諭さとさせた。

その旨というのは、つまりこうなのである。

(勝家はすでに逝く。この上は乃公だいこうを勝家と思え。やがて帰国もできるから、その方のために、どこか大國一カ城を宛て行くであろう。よくよく思い直すがいい)

これに答えて、玄蕃允は、

(勝家は勝家なり。勝家に代えて思い替うべき御方がなおあるべしとは思われず……)

と、笑い、

(すでに、勝家自害の上は、玄蕃ひとり浮世に留まる念慮ねんりよはない。——たとい、天下を下され候とも、筑前に仕うるなどは存じもよらぬこと)

と、云い切った。

昨夜、蜂須賀彦右衛門が、旨をうけて行ったのは、その使いがむなしく帰ってから数日後の、二度目の使いだったのである。

それだけに、彦右衛門は難しいと思つて行つたが、果たせるかな、夜来、根氣よく説いてみた彼の老熟の弁も、玄蕃允の意をひるがえさすことはできなかつた。

「彦右か。どうであつた？」

秀吉は彼を見るや問うた。銀母屋ぎんぼやの蚊遣りかや炬ろうからのぼるその燻煙くんえんがその姿を巻いてい

る。

「いけませぬ」

彦右衛門が答えると、あらまし、それとは知っていたように、秀吉も、

「だめか」

といった。

「ひとえに、首を刎ねられ候えとのみ、どう諭しても、玄蕃の心はかたく、一切、余事を申しませぬ」

「そちがいうてみても、それのみとあれば、なお強いるは、情けであるまい」

秀吉は、ふっと、あきらめ顔に、顔の筋を解いた。

「せつかくの思し召も、よう使いを果し得ませんで……」

彦右衛門は、調わぬ使命を、ふつつかとして詫びた。

「詫びには及ばぬ」

秀吉は却つて、なぐさめた。

「——囚われの身となるも、利にうごかず、筑前に屈せず、玄蕃の節義見事よ。その骨ぶし、面だましいこそ、秀吉が惜しむものなれど……これや無理なはなしじゃ。……もし彼

がそちに説かれて、筑前の前に節を変じて来たら、その姿を見ると共に、秀吉の愛惜あいせきは失せるやもしれぬ」

「おそらく、左様なことになりましょう」

「ははは。そちも武門、そこまでのことが、肚の底に分つていては、無態むたいに、玄蕃を説けぬのもむりはない」

「おゆるし下さいまし」

「なんの、大儀大儀。……が、玄蕃は、ほかに何も申さなかつたか」

「されば、もう強しいだてはせぬと約して——他の話の末に、てまえが、玄蕃にむこうて、いかなれば、おぬしほどのさむらいが、戦場でも死なず、山中にのがれ入つて、百姓ばらの手にかかり、捕われなどされたのか。——また、かく、虜りよしゆう囚の日を送りながら、自刃もせず、首斬らるるのを待つておられるにや？ ……と訊ねましたところが」

「ウム、何というたの」

「玄蕃申すには。——否とよ彦右どの、御身は、腹切り斬り死のみが勇士の勇の最大なものと申し召すや。それも武門の華なれど、それがしの場合、さばかりも弁わきまえ申さぬ。——生きて生きて生きぬかん所存にてありしにて候う、というのでござりました」

「うむ。……して？」

「柳ヶ瀬、茂山の乱軍より落ちのびた節は、まだ勝家の生死も定かならねば、北ノ庄まで落ちのびて、共に再挙をはからんとしたものでしたが、途中、手傷の悩みにたえかね、農家へ立ち寄つて灸治きゆうじのもぐさを求めたことから……武運拙つたなくもかくの如し……としばし眼をふせておりました」

「無念、さもあろう」

「また、檻車かんしやをもつて榎島まきしまへ送られ、虜將の生き恥に耐え忍びおるも、番士の隙あらば、ここを破つて脱出し、晋しんの予讓よじょうに倣ならうまでもなく、いつかは筑前に狙い寄り、お命をいただいで、亡き勝家の怨念おんねんをなぐさめ、賤ヶ嶽しず中入りの不覚の罪を、ひたすら詫びせん心底なり——と、平然として云い払うのでありました」

「ああ、惜し、惜し」

秀吉は歎声を発すると共に、眼に涙すら見せて、玄蕃允の心底に同情していた。

「それほどな男をよ……。へたに使い殺したは、やはり勝家のほうが不覚じゃ。……よし、よし、望みにまかせて、きれいに死なせて遣つかわさん。彦右、取り計らえ」

「畏かしこまりました。——では、明日にも」

「うむ。早いがよい」

「首の座は？」

「槇島の野」

「引き廻しますか」

「……………」

考えていたが、

「むしろ、それは玄蕃の、望むところであろう。京中を引き廻したうえ、その夜、槇島の野で斬れ」

と、命じた。

そして次の日、彦右衛門が槇島へ出向くに際して、秀吉は、

「さだめし囚衣も垢あかじみていよう。死装束しにしょうぞくに、これ与えよ」

と、小袖二重ねを、玄蕃允へ、持たせてやった。

彦右衛門は秀吉の意を帯して、その日、再び槇島の配所はいしよへ赴いた。

そして幽居中の玄蕃允に会い、

「望み通り、近日、京中引き廻しの上、槇島の野において、斬首ざんしゅのこと、仰せつけられ

た」

と、伝えた。

玄蕃允は、悪びれた風もなく、

かたじけの
「忝うござる」

と礼をのべた。

そこで、彦右衛門は、さらに、

「その日は、これを着られ候えとて、特に、お小袖二重ねを、筑前守様より下しおかれま
した。お受けあれ」

と、秀吉の好意を告げて、ひろぶた 広蓋にのせた衣裳を見せた。

玄蕃允は、見ていたが、やがて云った。

「御芳志は寔まことにありがたい。さりながら、この衣裳の紋から仕立てよう、玄蕃允盛政が晴
着としては、気に入り申さず。……お返しおき願いたい」

「ほ。気に入らぬとか」

「銃卒が着る如きものを着て、京中の人目に、あれが柴田の甥おいかと思はれるは、亡き勝家
にたいしても面つらよごしでござる。つづれたりといえ、まだこの鎧よろい下着したぎの垢あかじみたまま

引廻されたほうがよろしゅうござる。——しかし、筑前どのに、新たな小袖の一つも玄蕃に着せてやらんという御好意がなおあるなれば、もそつと玄蕃が好みの衣裳を下されたい」

「お伝え申そう。……お望みは」

「大紋の紅のものの広袖ひろそで。裏はもみ紅梅こうばいに銀摺ぎんずりの小袖をこそ賜われ」

齒きぬに衣を着せぬ玄蕃允が云い分であつた。

なお、彼のいうには。

「すでに、越中の山中にて、百姓ばらに召捕られ、縄打たれて榎島へ送られたことは、世間に隠れもないことござる。——その間の生き恥もしのび、折もあらば、筑前どのお首をいただかんと心がけたが、それもならず、今日、玄蕃、首の座につくと聞え渡らば——さこそ都の人々の眼も騒がしからんと存ずる。——見そぼらしき貰い小袖など着るも口惜し、着るならば、戦場にて大差物おおさしものを指すにも似たる派手やかなる大紋広袖をこそ。——その上、縄詫言なわわびごとはせぬ証拠に、車を寄するとき、人前にて、わざと縄を掛けられよ」

率直、実に愛すべきところがある。彦右衛門は早速、この旨を、また秀吉の所へ、云い送った。

秀吉もまた、それを聞いて、

「最後まで、武辺ぶへんの心がけ、しおらし」

とて、さつそく玄蕃允が望みどおりな衣裳を届けてよこした。
刑の日が来た。

佐久間玄蕃允は、その朝、湯あみもし、剃かみそり刀もあて、青髯あおひげのあと涼やかに、髪まで
結いあらためて、もみ紅梅の小袖に、大紋の広袖を着、

「繩を」

と、みずから縛いましめを求めて、車に乗った。

当年、ちようど三十の美丈夫、誰も、その死を惜しむ姿であった。

車は、京の七条、六条から引廻され、夜に入って、槇島へもどると、野に敷皮をのべ、
「お腹を召されよ」

と、情けの脇差わきざしを、扇にすえて差出したが、玄蕃允は笑って、
「斟酌しんしゃく、御無用」

と、繩も解かせず、従容しやうよう、首を斬らせた。

おおさかちくじょう
大坂築城

秀吉を繞る戦後の多忙は、戦前の多端に勝るものがあつた。

大坂築城と、それに附随する、五畿経営のことだけでも、容易な事業ではない。

従来の築城土木の程度なら、天下の智囊と、奉行人たちの進行でも運ぼうが、秀吉の構想は、それまでの如何なる日本人の創意よりも遙かに雄大で、その都市計画面だけでも、余りに規模が大きすぎて到底、他人の頭では間に合わないのである。

設計者が、いかに思いきつた企画のつもりで作成した原案も、秀吉の前に示すと、必ず、「小さい、小さい。——この十倍に。ここはこの百倍にも」であつた。

大に過ぎるゆえ、小さくとか、縮めよ、とかいわれる例はほとんどなかつた。たとえば。

大天守閣、小天守閣の層楼なども、信長の安土城をも遙かに凌ぐものであつたし、また殿館の規模も、当初、設計者の原案は、千八百余坪に、大小約二百余の室数を構図して、「かくなされれば、天下無比です」

と、規模の大を誇つて見せたが——秀吉は一見の後、

「住むには、ちと狭い」

と呟いて、地坪四千六百余坪に拡大し、殿廊客館をあわせて、総部屋数六百二室という途方もない間数に訂正させた。

総じて。

彼の規格眼と、当事者の規模の頭脳とが、甚だしく懸隔けんかくしていることが、この土木によつて明らかになった。

しかし、奉行人や築城当事者の考えるところは、要するに、当時の一般常識の最も高度な創意なのであつて、秀吉の企画や構想の方が、独り余りかけ離れすぎたからであることはいうまでもない。

そしてこの相違の原因が、何によるかを考えてみると、二者の観念に、根本的なひらきがあり、つまり「眼のつけどころ」が全くちがっているのであつた。

日本の一般人士には当然、この創意、構想にも、日本という限界があつた。あらゆる物の比較も、限界の外を出ない。

ところが、秀吉の場合は、その対象を、日本に限ってはず、海外をも考慮にいれていたのである。少なくとも彼は全亜細亜アジアを鳥瞰ちようかんしていた。堺の港湾は一潮遠く欧羅巴ヨーロッパの十

七世紀文化につづき、五畿の経営は、西欧の使臣や宣教師らの本国へ寄する報告によつて、日本の国威にかかわるところ大なりと信じていた。

従つて、彼以外の者が、悉くその大げさにあきれたという程な企画も、彼にとつては、なおまだ腹中の全を尽したものでなかつたに違いない。

それと。

彼のこうした理想の具現は、きようや昨日の思いつきでないこともいうまでもない。

もとよりそういう大気宇は、彼の本質にあつたものに違いないが、時、ようやく、勃興的気運に向いつつあつた日本の文化的使命と、海外からの西漸の風潮などについて、時代の活眼を与えてくれた恩人は、実に、彼にとつては主君であり師でもあつた、故信長なのであつた。

藍より出でて藍より青し。

信長の衣鉢は、まさしく、秀吉によつて継がれたものといつていい。秀吉は故主の長を取つて短を捨て、独味の行き方と、天質の大を加えて来た。

早くから海外に眼を放つて、いつか世界的知性を帯びていたのも、畢竟、信長の恩恵であつた。安土の高閣の一室にあつた世界地図屏風は、そっくり秀吉の脳裡に写し

とられていた。

また、堺さかいや博多はかたの大町人たちから得た知識も少なくない。それらの者たちとは、公用としては、鉄砲火薬の取引などで日常に接し、私人としては、茶友として会することもしばしばだった。

秀吉は、卑賤ひせんに生れ、逆境に育ち、特に学問する時とか教養に暮す年時などは持たなかつたために、常に、接する者から必ず何か一事を学び取るということを忘れない習性を備えていた。

だから、彼が学んだ人は、ひとり信長ばかりでない。どんな凡下ほんげな者でも、つまらなそうな人間からでも、彼は、その者から、自分より勝るまさ何事かを見出して、そしてそれをわがものとして来た。

——我れ以外みな我が師也。

と、しているのだった。

故に、彼は一箇の秀吉だが、智は天下の智をあつめていた。衆智を吸引して本質の中に濾過ろかしていた。また時々、濾過しない衆愚しゅうぐらしい振舞も見せ、本質の個性をむき出して見せる場合もあるにはある。彼は自分を、非凡なりとは自信していたが、我れは賢者なり

とは思っていない。

——とまれ今日、彼にとって、何といつても、忘れがたい人は、やはり故信長であった。
猿よ。

大気者よ。

こつちを向け。

あつちを向いてみる。

ああ、もう一度、そういわれてみたい——という思いもするのだった。——で、この戦後の建設に多忙極まる中にも、六月二日の忌日きじつを忘れず、大徳寺において、総見院そうけんいんでん殿一周忌の法事を営んだのも、決して、単なる政略のみではない。人はそうも見ようが、彼は由来、煩惱ぼんのうじ児である。愚かなる追憶や、その追慕とは相剋そうこくする、信孝の処理や、信雄にたいする考えも、こうして先君の位牌に冥々裡めいめいりに、お告げもし、お詫びしておけば、彼の心は信長の生ける言を聞き得たように、大いに救われる気もするのであった。

その法事もすんだ。

六月の末である。

「だいぶ工事も進んだ頃、いちど見ておこう」

彼は、大坂へ出向いた。

城しろ普請ふしん奉行は——石田三成みつなり、増田長盛、浅野長政の三人。市区建設奉行は、堀久太郎、片桐且元、長束正家などである。

秀吉を迎え、石山の高地に立つて、何かと説明に努めた。

そのむかしの難波なにわの葦原あしわらは、埋めたてられ、切り拓ひらかれ、はや掘割も縦横に掘られ、町地割のできた所には、商人の仮屋が軒を並べ始めている。

堺の港や安治川あじ尻などの海面を望めば、石を積んだ数百隻の石船が、満々と帆を揃えて入って来る。——そして、秀吉の立つた本丸予定地からそれらの眼のとどく限りな地上には、昼夜交代で一刻といえ工事の停止することなき数万の人夫と諸職こうしやうの工匠あひが、蟻ありの如く働いていた。

築城の木工棟とうりよう梁はりには、当時の代表的な者のみ選ばれていた。

金剛こんごう、中村なむら、多門たもん、武辻たけつじ

の四家だった。

人夫の供出はすべて、各藩に賦課されている。怠慢あるときは、諸侯といえ、厳罰に処せられる。

各職の下には、下請したうけがあり、小頭こがしらがあり、現場頭があつて統率されていたが、要するに、それらの組々の名は、責任範囲の名称だつた。

そして、責任者のいる所には、かならず明らかなる責任があつた。

もし、それに欠くる場合は、直ちに、馘くびきられた。監督者たる各藩の士は、責めをまたず腹を切つた。

こうして、平時の土木といえ、その真剣さは、生命いのちがけだつた。戦場と異ならなかつた。また。

この時代の特徴として、工事はすべて、請負うけおい制度だつた。いわゆる「割ぶしん」とよぶ制度である。

割普わりぶしん請は、むかし、清洲城の名と藤吉郎の出世仕事として、有名であるが、あれはべつに藤吉郎が初めて案出した仕組みではない。

戦国時の土木といえ、火急を要さない工事などはほとんど少ない。殊に、城塞じょうさいの工は、大概の場合が、敵前の突貫とつかん工事である。

いかに迅速に、いかに緊密に——しかも敵をして間隙かんげきを窺うかがういとまもなきうちに、これを成就じょうじゆすか——眼目であつた。

割普請制は、それに^{こた}応えて、自然にできた約束なのである。

この制約の^{しんちよく}進捗中に、最も^{いまし}戒められるのは、俗にいう、

(^{はや}迅かろう、^は悪かろう)

の^{せつそく}拙速が常態になりやすいことだった。

反対に。

割普請制の特徴の第一は、働く者各々が、

(俺の領分、俺の時間)

を持つことになるので、そこに^{ひやと}日傭い根性では出て来ない“自己への試し”が現わされて来ることにある。

(俺が本気でやればどのくらいな働きができるか)

を先ず試み、それから、

(やれば、こんなものだ)

という自信をもち、

(迅いばかりじゃないぞ、俺の仕事にケチがつけられるならつけてみる)

という誇りを生じ、ひいては、仕事への熱中と没我から、自然、仕事そのものに魂も入

り、おもしろさも湧き、彼ら独自の、職人的道義も昂あがつて来るのである。

もとより、この請負制は、人間凡衆のもつ利己心を活用したものであるが、結局は、小我に始まつて無我に入り、利に始まつて利を見ざる境地に人を動かすもので——もしこの手段が悪いといえ、人が道を求めて聖賢の語を求めるのも、ひとつの利己だし、仏心を起して菩提ぼだいを求めるのもいけないことになる。ひいては社会万般のこと、人間凡衆の働く活泉ことごとには、悉く不純ありということにもなる。

——が、いま。

大坂城の大工事場では、そんな理念に問うている暇はない。孜孜ししえいせい營々である。昼夜兼行けんこうである。そしてこの割普請制ぶしんの汗の下に、磐石ばんじやくも巨木も、思うままに動かされていた。

以上、述べたように、大工事もまだ半ばの——いや、半ばにも達しない着手そうそう匆々といふのに、秀吉は、それをここに見に来た数日の後、

「ひとつ、初の茶会さかいを、この大坂城で催そう」

と云い出し、にわかに堺の千ノ宗せん易と津田宗及そうえきの許へ、

「すぐ来い」

と、使いをやった。

ふたりは来た。しかし驚いた。広大な地域すべて、さながら土木の戦場である。本願寺時代の古い建物とてみな取り毀こわされている。どこで茶会などやる気かと疑われた。

「こういう中での一会も、またおもしろかろうが」

秀吉はいうのである。

そして、彼の滞在のために、にわかにつた飯屋作りの八畳で、七月七日から十三日まで、七日のあいだ茶事を興行するゆえ、その趣向しゅこうをせよ、と命じた。

「御即意、いちだんと、興深いことでございましょう」

ふたりは、畏かしこまつて、宗易と宗及とが、隔日に、席を持った。

七月七日は、七夕たなばたに因ちなみ、玉ぎよつかんの暮鐘ぼしやうの絵を床に、紹鷗じやうおうのあられ釜かまを五徳ごとく

にすえ、茶入れは、初花はつはなの肩かたつきが用いられた。

客は、築城の工に奉行している諸侯たちで、一夕、四、五名ずつ順次に招いた。

掛けもの、花入れなどは、その日その日にかえられたが、初花はつはなの茶入れだけは、連日

つかわれた。そして亭主の秀吉から、

「これは近頃、柳ヶ瀬の勝ち軍いくさの賀に、三河どの（家康）からわざわざ使いをもって、祝

うてよこした物で……」

と、東山伝来のそのことよりも、もつぱら家康が自己にたいして、かくの如き礼を執つて来たという点を、しきりに……いや名器自慢に事よせて、罪なく語り聞かせるのだった。また、聞く方でも、それが世に隠れもない名器と、みな知っているだけに、

「まことに、三河どのにも、よく思い切つて、これをば……」

と、その懇厚こんこうな信問しんもんには、誰もが、事実どおり、家康の秀吉に対する礼のなみなみならぬことに、領うんき合あうのであつた。

七日間の茶事に、主なる諸侯は、あらましこの初花を拝見した。いや、亭主の吹ふい聴ちようを聞かせられた。

亭主は、茶事といえは、茶事にも、戦争へかかる時のような熱心を示して、七日間、ぶツ通しでやった。秀吉の口ぐせは、

「たぎりたツた茶の湯をやる」

ということだった。彼は、何事にまれ、ぬるいことが嫌いなのである。

こうして、諸將をよろこばせながら、工事も励まし、また一面の目的も彼は達していた。——いま彼の心のうちに、何が最も大きく伏在しているかといえは、それは家康のほかの

者ではない。

秀吉が今日までの一生中、故主信長をのぞいて、真に、人物中の人物——畏るべき人間——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

——とひそかに観ていたのは、ただひとりの徳川家康あるのみだった。

彼は、侍臣津田さまのすけのぶかつ 左馬允信勝へむかい、

「浜松へ参つて、徳川家へ答礼して来い」

と、特使を命じた。

託すに、不動国行ふどうくにゆきの名刀をもつてし、こう伝言した。

「いつぞやは、御家臣石川数正かずまさをよこされ、またとない名器を賜わつて、筑前は無性によろこんでおります——とな」

不動国行は、その折の、茶入れの礼として、彼から家康への贈り物に持たせたのである。

「ついでに、数正にも会い、その節は、大儀であつたと、よろしく申せ」

秀吉の心くばりは、数正にまで届いていた。数正への音物いんもつもあつた。

左馬允は、月の初旬、浜松へ出発し、十日頃に帰つて来た。

徳川家の歓待は、こちらが恐縮するほどで、実に、行き届いたものでありました——と

報告した。

「三河どのも、達者に見えられたか」

「至極、御壮健のていにござりました」

「家中の土風はどうか」

「他家には見られぬものが感じられます。質素のうちにも何やら皆、不屈な面構えを潜めて」

「新参も多いと聞くが」

「多くは、武田武者のように思われました」

「さこそ……」

秀吉はうなずいて、使い、ご苦労であつたと犒らつた。その間に、彼はふと、自己の年齢と、家康の年齢とを胸のうちで、比較していた。

彼は、家康より年上である。家康は四十二、彼は四十八。——六つちがう。

はるかに年上であつた柴田勝家よりも、年下の家康に対する方が、彼の心は、大きな要心を強いられていた。

——が、すべては胸三寸の秘にあることで、表面の秀吉には、寸毫も、戦後間もなく、再びそんな大戦が予期されていようなどと外から見られる風は窺えなかつた。——というよりは、二者の關係は、いかにも円満に見えた。

十月。

秀吉は家康のために、その功を朝議に仰いで、正四位下左近衛権中将の昇進を

奏請し、程経てふたたび、從三位参議に任叙さるべく取做した。

秀吉は、その時、從四位下の参議であつた。彼は、年下の家康に、自分以上の位階を取做しても、なおかつ、ここしばしは、家康の歡心をつなぐことをもつて、最善の方策としていた。

かくて、その年十二月には、予定のとおり、彼は、宝寺城の旧居を払つて、撰津大坂の新たなる大城に移り住んだ。

中庸

左近衛権中将三河守家康は、強健な胃ぶくろのように、腹いっぱい食い溜めたものを、この半年は、——去年天正十年の下半期から、ことし十一年の上半期にわたる一年の收穫を、——悠々とただ消化するだけに留めていた。

彼は、風貌からして、のっそり坊に見えた。

首が、猪首である。からだは肥えていた。顎が厚く、耳が大きい。

——徳川家康ほど、をかしき人はなし。下腹ふくれておはす故みづから下帯しむるこ

とかなはず、侍女共にうち任せ結ばしめらるる。

このたぐひさまざまにて、すべて云ひ立つれば、おほやう過ぎたる大名なり。

当時のものの本などにもそんな風に書かれていた。いささかの鋭さもない、伶俐なふうもない。

鈍重で、田舎臭くさえ見える大将だった。いや、そう見せているところに、彼の真面目はあった。

しかし、信長の死後、忽ち、甲信に兵を入れて、宿望の地を拡大し、二女の徳姫を北条氏直へ嫁がせて、その小田原とは矛を収め、

(上州には手はつけぬ。二家の争うは、徒らに、越後の上杉をよろこばすのみではないか)と、占領範囲の悉くを、既成事実として認めさせ、一稼ぎの後は、恬として、澄まし込んでいる迅さの如きは、蟊が蚊を呑んで嘔いているような横着さである。

その陣中へ、北ノ庄の遠くから勝家が鄭重な使者と音物を齎して来たことにたいしては、それきり答礼もせず、書信も送らず、柳ヶ瀬役の帰趨が明らかになつてから、却つて、無沙汰の秀吉の方へ、われから初花の茶入れなどを贈つて、その歡心を試みているなども、この人、ひと筋縄や二筋縄で測られる“下腹ぶくれ”でないことがわかる。

日を経て、今度は。

秀吉の方から、不動国行の名刀が贈られて来たり、つづいてまた、正四位下権中将に昇すなどの、吉事の取做しとりなが齎もたらされて来ても、さして欣うれしそうな顔つきでもなく、

「筑前も、このところ、いこう気を遣つかうような」

と、ひとりの侍臣に、皮肉な笑顔を見せただけであつた。

この頃――

彼の侍坐しじざに、いつもよく見える家臣は、返り新参の本多弥八郎正信であつた。

勘当がゆるされて、又帰りする家臣もなくはないが、正信のように長かつたのは稀である。

正信は、家康が幼時、質子ちしとして、今川家に養われていた頃から仕えていたほど、生え抜ぬきの三河武士であつたが、長島一揆いっきの際、勘気をうけて、以来、十八年のあいだ諸州を浪々していたものである。そして去年、本能寺変の直後、家康が堺の旅行中からあわてて国許へ引つ返す途中、その急に駈けつけて、危難の道を払い、無事浜松へ守つて来たことよつて、実に十九年ぶりの帰参がかなえられたのであつた。

「羽柴どのの気を遣うのが、殿にお分りのようでは、殿にも、少々、お心をつかわれてお

られますな」

その正信も、家康に似て、どこという特徴も見えない、平凡なる侍だったが、年は主人より四ツ上だし、多年、世間をひろくあるいて、家康とはちがう苦勞をなめているので、おのずから人間の錆味さびが、彼には、古天妙こてんみょうの釜肌かまはだのように自然身こてんみについていた。

正信の帰参以来、彼と家康とは、よく主従二人きりで、こうして地味に、話すことをただ楽しむ如く話していることがあった。

憎くもなく、恨みもふくまず、十八年間も別れていた幼少からの主従が、ふたたび盆に返つて、水魚のような君臣の情契じょうけいを新たにしたことなので、往時の追懐だけでも、尽きないものがあるのであろう。

——が、家康は、そう情懷にのみ耽ふける者ではない。彼がしきりに、本多正信を近づけているのは、正信の流浪中に学んだ諸州の実状やら、世路せいろの苦勞ばなしに、得るところが多かったからである。

それと。

近年、浜松の家中には、その版図はんとの増大に伴つて、以前、今川家に仕えていた駿河衆や、武田家出身の甲州武者が、夥おびただしく麾下きかに加わつて、それに松平村から起つた一族同様のい

わゆる譜代ふだいの家臣を交え、このところ実に錚々そうそうたる人材がおのずから叢淵そうえんをなして来た観があつたが——その中に、また一人の本多弥八郎正信が帰り新参として殖ふえたのを見ると、

(これは、これほどある家臣のうちでも、二人と類のない男だ)

という点に、家康の眼と、彼を珍重する所以ゆえんがあつたようである。

かつて正信の流浪中に、松永久秀も、彼の為ひととなり人を見ることがあつて、

(三河武士といえ、みな艱苦かんくによく耐え、質朴しつぼくにして卑いやしからず、氣骨稜々きこつりようりよう、鷹たかのごとき概を感じるが、正信は、素朴にして、言語温和、人に接してかどがなく、しかもどこかにふくみのある腹据わりはらすが窺うかがえる。三河衆にしては、ちと、毛色がちがう者のようだ)

と、評したというが、この言はなお、家康の眼をもつていわしめれば、決して、正信の全貌ぜんぼうを云い尽したものはしまい。

家康が、正信にひそかに期待したものは、

(これは、何事にまれ、一応分別させてみるによい相談あいてじや)と、思つたことにある。

智囊ちのうということでは、家康はおのれ一箇の智をもつて、決して、足りないとはしていない。けれど彼は、その大頭おおあたまのうちに豊かに持っているもの他に、もう一つ、非常な特質を持つていた。

おそろしく、用心ぶかいのである。

智者ハ智二溺ルオホ

という戒めいましめを、彼は常に身に持しているらしい。銳智の錐きりをつつむこと、そののっそり然たる風貌でもなお足らぬとしているかのようだった。

「——数正のはなしによれば、筑前の取りかかっておる大坂の城は、古今未曾有みぞうのものという。昇天の勢いとは、近頃の筑前をいうことばと思わるる。かくては、この家康も、少しは心を向けていざばなるまいが」

「少しでは足りませぬ」

正信は、笑いもせず答えて、

「唇やぶれて齒寒し——のたとえもあります。追々、風当りが参りましょう」

「早いか。遅いか」

「思いのほか、早いこと、確かでございます。うわさの如く、羽柴どのが、年内にも、

大坂の城へ移つたら、時はもう迫れりとしてよろしいでしょう」

「……と、せば、何を名分に」

「ちと、申しあげ難うござる。御推量を——」

「む……」

家康は、信雄を、思いうかべていた。

正信は、なお久しく、家康の前にひきつけられて話していた。

この主従の間に、早くも、対秀吉策がしきりに練られていたことは疑いなかった。——けれど、表面はあくまでも、互いに、相手の歛心かんしんを求め、どちらも謙讓けんじょうの礼を取つて、敢えて、驕傲きょうごうに出るふうなどは毛頭もない。

ここ、何らかの大機をふくむ、名人と名人との対局の序盤じよばんを見るようなものがある。一手、さしては相手の肚はらを見、一手酬むくいては相手の意を逸そらして嘯うそいぶき——いわゆる七分三分のかねあいの状態が——天正十一年から十二年に入ろうとする期間の、大坂と東海方面の間に孕はらみつつある気象だった。

そして——

この気流配置による二者の二天地は、著しく対蹠たいしよてき的な相貌そうぼうを違えていた。

新興難波なになわの大坂は、一夜明ければ明るるごとに、隆々たる旭昇の勢いをもって、人心と物資を蝟集いしじゆうせしめつつあるに反し、ここ東海浜松を中心とする駿遠甲信すんえんこうしんに跨またがる一団の雷雲は、むしろ晦冥濛々かいめいもうもう、なお地方的な潜勢力たるに留まっていた。

——が、家中一般の士気は、決してそうでなかった。三河武士の通念としては、依然、(秀吉、何者ぞ)

である。また、

(彼は元来、匹夫ひつぷより成り上がった織田家の一家臣。わが殿は由来、信長公とも同座の御方。同位置にある盟国の大将。——彼より来つて礼を取るなら知らぬこと。何ぞ、われより礼使を送る理あらんや)

となす固執こしつは、家中のほとんどすべてが持っているものといつていい。
ところへ。

石川数正が帰つて来て、しきりに秀吉の大気や、大坂築城の経綸けいりんの大を称たたえたので、家中の反感は、却つて勃然ぼつぜんたるものを現わし、

(気鋒きほうすでに、天下を横奪おうだつの肚はらとは見ゆ。織田の宿老と争いを構えて、柴田を討ち、滝川を亡ぼすなどは、まだ見のがしもなるが、織田一門の信雄公をもって、信孝公を自滅さ

せ、居館を大坂に起して、早や天下人の虚態を装うなど、沙汰のかぎり、徳川家として、それを許しておるべきではない)

という者が多かつた。

ひいてはまた、先頃、秀吉の許へ使いした石川数正個人にまでも、へんな眼が向けられて、

(数正どのには、だいぶ筑前に頭をなでられて、お帰りじやそうな)

などと専らもっぱいわれていたところへ、やがて秀吉の答礼として、津田左馬允さまのすけが来た折は、他の重臣に訪礼はなかつたにかかわらず、ひとり石川数正の私邸だけには訪れて、音物いんもつを伝えたということなどからして、数正はよけいに、痛くもない腹をさぐられ勝ちであつた。

そんな事、こんな事、家康の耳にも、何となく聞えてくるが、家康は、鈍根な貧乏性を頑かたくなに守っている吝嗇家りんしよくかのように、本多正信とぼそぼそ話していない時は、独り居室で書物ひもとなど繕ひもといている折が多かつた。

彼の居室の特徴といえば、これは信長にもない、秀吉にも見られない、書卷の気があることであつた。

そこには、論語、中庸、史記、貞觀政要、六韜などの漢書やら、延喜式や吾妻鏡などの和書もあった。中でも、愛読の書は、論語と中庸の二書であり、和書では、吾妻鏡だった。

くねんぼ
九年母

「御書見中にございますか」

「帯刀か。なんじや」

「お邪げでなくば、雨夜のつれづれに、ちと世間ばなしでも、お耳に入れようかと存じまして」

「入るがいい」

家康は書を措いた。

招かれもせぬのに、こうして主君の室を訪うほどの家臣は、主従でも、よほど打解けている者でなければならぬ。——が、それは他家のことで、浜松城という大きな家では、こういう親しきはめずらしくない。

なぜというに、ここの譜代ふだいの臣たちは、かつて海道一の貧乏といわれた小国を守って、久しき逆境と闘いつつ、いまの主君の家康という者を、自分たちの手で襁褓むつきから育てあげて今日に至った者達だからである。

主君が家来を養って来たのではなく、家来が主君を養い育てて来たという変則が、却つて、本来の意味の家族的団結をかため上げ、他家に類のない「徳川家」という独自のものを醸成じょうせいして来た結果にほかならない。

つまるところ、それもこれも、この国が過去において、海道一の貧国であった賜物である。——と共に、今となれば、君臣共に、武門第一の苦勞人揃いの家中——という得難い堅実性をもその基礎に持つものとなっていた。

「では、おゆるしを」

と、帯刀はにじり入って、うしろの障子を閉めた。——冬の雨が、大おお 廂おびさしを寒々と打っている宵である。

「……………」

べつに、何の用でもなさそうに、安藤帯刀たてわきなおつぐ直次は、主君の前に、ぽつねんと、畏かしこま
つたままだった。

「……………」

おかしな男かな、と家康もだまつて眺めていた。

——が、何の窮屈でもない。不自然でもない。

雨の音を聞きながら、家康はその間に、この者の亡父を思い出していた。——幼少から「爺じイ、爺じイ」といつて困らせてばかりいた安藤家重という老臣の面影をである。

——今、いたら。

と思う功臣は、ひとり家重ばかりでなく、家康の脳裡のうりには、十指に余るほどあつた。みな、今日の盛運あに遭あわず、家康の成人も見ず、この国の逆境中に、敢あえなく先だつた老臣ばかりである。

帯刀たてわきも、その功臣中の一名の子だつた。

——が、年は家康よりずっと上なので、その子すらもう髪に初老しよの霜しもを見せている。

「帯刀。……何を見ておる？」

「はあ」

と、帯刀は初めて、にやりとしながら、

「御書物が、いつも変わらないので、不審に眺めておりました」

「これか……」

と、家康は書見台に眼を落して、

「書は同じでも、心は折々にちがう。従つて、読み得る所も、時により同じではない。――たとえば、中庸ちゆうようにせよ、論語にせよ、二十歳代に読んだのと、三十代、四十代になつて読むのでは、大いな差がある。……また、書物は、そのようにして、一生読める書でなくば、真実の書とは申されまい」

「ははあ。そういうものでございますかな」

「ははあ。退屈を慰めに來たのやら、退屈を催させに來たのやら、気の知れない帯刀ではある。」

「……………」

また、黙つてしまう。

家康も、黙然という。

瀟々しょうしょう、外の雨声ばかりで、寒室しよくの燭は、油も凍るか、いとど火色も細い。火の氣といつては、家康の側に、手炉しゆろ一つあるきりだった。

「世間ばなしに來たと申すが、何か、變つたことでもあつたか」

ついに家康から催促した。

「は。左様で」

と、帯刀は、口をうごかし始めた。その咄々たる容子ようすでは、この男に、そんな弁巧べんこうは持ち合わせていそうもない。

それを知っている家康は、苦笑をもらして云つてみた。

「帯刀。そちは若い者に尻をつかれて参つたの。近頃、上方に威を張る者にたいして、家康が安閑と坐視しているかの如き態にあきたらぬ若者輩わかものばらにケシかけられ、ひとつ、家康の前へ出て、諫言かんげんを試みよと、唆そされて来たのであろう。……どうじゃ」

「は。……」

「ちがうか」

「い、いえ。違いませぬ」

「ははは」

豪骨な帯刀が、処女のように顔を赤らめて、もずもずするのを見て、家康はいよいよ笑つた。

「——それでもよい。まあいうてみい、帯刀たてわき」

「実は。……今日、登城の前に、作左どのに会いました」

「作左。……おう、奉行の爺じいイに会ったか」

「されば、その奉行の本多作左衛門どのにござります。折入って——と、作左殿がいわるには。——近ごろ、上方において、信雄卿が殺あやめられたりとの聞えがある。秀吉の勢威、日に募つつて、畏るるものを知らぬ折から、ありそうなことだ、何とも心こころ許もとない」

「……………」

「然るに、わが殿には、上方の情勢を何とお考えか、秀吉との使者の遣り取りなどにお心をゆるされてや——近日、甲信の境へ向つて、国境の御巡視にお出ましあるようなお触れ出しを拝しておるが、この際、そんな用でもない辺境の地方をお歩きになっている場合でもあるまいに……いや、困つたものだと——あの鬼作左どのが、顔を皺しわめて、憂うれいでおりましたようなわけで」

「帯刀」

「はい」

「家中の若者がそちをけしかけたものと思うたら、そちの尻を突いたのは、あの爺イであつたのか」

「いや。ひとり作左殿ばかりでなく、御家中の多くも、みな同憂の歎を抱いております」
「それこそ、困ったものじゃ。よい年をして、あの爺イまでが、そのような勘のわるい耳では」

「なぜでございますか」

「三介殿（信雄）が殺されたなどと申すうわさは、いわゆる流言謀説ぼうせつ、そのような巷ちまたの沙汰こそ、奉行が取締まらねばならぬのに、奉行が先に立って、乗ぜられては困る。……帯刀、明日はそちも供をせい。時雨しぐれにかかわらず、わしは甲斐信濃かいしなのの旅へ立つてである」

十二月の初旬。

勅使の参向があった。

折ふし家康は、先月から甲信の境へ出向いて、浜松にはいなかったが、急報によって、早速、旅先から帰って来た。

昇階の御沙汰は、すでに内示ないじされていたが、勅使は公式の伝達に下向したものである。拝受の後、二日間、勅使饗きょう応おうの盛儀が催された。日ごろ質素な浜松の城中にも、猿さ

樂るかくの鼓や笛の音が聞え、城下の庶民も、餅など搗ういて、共に、国主の榮を祝った。
 帰洛きらくの公卿行列を見送るとまもなく、浜松には、師走しわすの風景が訪れていた。歳暮の市は、年ごとに殷賑いんしんを呈した。ここにも、増大してゆく国の富強が見られ、むかしを知っている市の古老は、

「おらが子どもの時分は、餅はおろか、稗粥ひえがゆも見られねえ正月が、何年もあつたもんだが……」

と、隔世かくせいの感を啣かこつて、ようやくここも華奢きゃしゃならんとする町の風を戒いましめるのであつた。

だが、城市のまん中にある嚴いかめしい官衙かんがには、泣く子どもだまるという怖ろしいお奉行が住んでいた。外は他国の謀報ちようほう策動に、内は市民の道義と起居に、いやしくも法ほう繩じようを飾り物にはしていない。正邪断明、罪あきらかなれば嚴科に処し、家中の土とて仮借かしゃくはなかつた。奉行は本多作左衛門重次であつた。

その頃、岡崎、浜松あたりの童歌わらべうたにも、

ほとけ高力こうりき

鬼作左

どちへんなしの

天野三郎兵衛

と、謡うたわれたほど、鬼作左の名は、士民の中の「怖いおやじ」を代表していた。

彼と、高力左近と、天野康景やすかけの三人は、永祿以来、その職をうごかず、徳川家の三奉

行といわれていた。鬼作左は、峻しゅんげん 巖をもつて聞え、仏高力ほとけこうりきは仁者として親生まれ、

天野は、中和の人という定評だった。——どちへんつかずというのは、三河の方言ほうげんで、

どちらにも偏へんせぬということらしい。

その鬼作左が、ひと頃、目かどを立てていた上方方面から出た流言も、歳としの暮には、いつか下火げになつていた。

信雄卿が殺された……などという浮説は、家康が一笑し去つたように、明らかな浮説に過ぎぬものであったことが、やがては、自然に分つていた。

正月を前にして、京から、南洋の九年母くねんぼというものを献上した者があつて、その入荷が、浜松の城へ着いた。

「これは、支那やわが邦くにでいう九年母とはいささか違う。南蛮蜜柑ともいう木の実である」

などと城中でも珍しがったが、美味なので、家康はこれを百顆ほど分けて、先頃、二女の徳姫の嫁いだ北条家へ送った。

ところが、北条家の役人は、これを橙だとばかり思つて、

「浜松には、だいたいが珍しいとみえる。小田原にはこんなにあるということを知らせてやれ」

と、時を措いて、本物の橙を、役夫八人にかかせるほど献じて来た。

家康は、その皮肉に対して、

「小田原の者どもは、人の贈り物を、目にだけ見て、味わいもせず、かかるなめげの挙動をなすことよ。かしこの政事もおよそこれに似たるものか。よし、よし……何もいうな」

と、却つて、家臣の口をかたく慎ませていた。

同憂

安土にある三法師君も、明けて五歳になった。この正月を迎え、その健やかな成長を

拜すべく、年賀に伺候する大名も多かつた。

「勝入どのではないか」

「おお、忠三郎殿よな。さて、よい折に」

本丸の大書院前で、出会いがしら、こう初春らしい声で、御慶を陳べおうている諸侯があつた。

秀吉の大坂移居によつて、去年その大坂から大垣へ移封された池田勝入齋信輝と、ひとり蒲生忠三郎氏郷であつた。

「いよいよ、おすこやかな態。まず何よりで」

「いや、元気は年と共にだが、何とも、忙しゆうてな。……まだ、今度の大垣の地にさえ、幾夜も寝ておらぬ」

「そうそう、勝入どのは、大坂御普請の奉行をも御兼務でしたな」

「ああいう御用は、増田や石田などには打つてつけじゃが、われら武弁には向かぬ。やくたいもないことのみ多くてよ」

「いや、適任でないお人を、一日でも、不適所におく筑前様ではありません。やはり何か奉行衆の中に一枚、あなた様を必要とするものがあるに違いございませぬ」

「ははは。戦いくさ以外に、左様な才覚があると見らるるは、勝入、大迷惑じゃ。……ときに、幼君へのお年賀は」

「いま、おいとま申して来たところですよ」

「わしも退出するところじゃ。……が、よいしおである。折入って、ちと内談申したい儀があるが」

「実は、お顔を見たとき、それがしも、ぜひあなたに伺ってみたいことが胸に呼びおこされてしまったので」

「それや双方の思いが、はからず符節ふせつを合わせたわけじゃ。……どこで語ろう」

「小書院へでも」

人なき一室に二人は坐った。火桶ひおけもないが、障子越しの春の日が程よく暖かい。

「先頃、しきりに行われた、巷ちまたの流言を、聞かれたか」

「聞きました。三介様（信雄）が殺されたと、真まことしやかに伝えられたことでしょう」

「それじゃて……」

と、勝入は眉をひそめ、息を大きく、

「——今年も早や何事か動乱の兆きざしがみゆる。相手によっては、それも大いによろしいが、

火元が火元だけに、近頃の兆しは困る。忠三郎どの、おぬしは若いが、分別はこの勝入にまさると観る。何ぞ、未然によい思慮を施す智囊ちのうはないか」

と、深憂の色を示した。

うじさと
氏郷は、問い返した。

「いったいあのような浮説は、どこから出たものでしょう」

「さて、それはちと、いえんがな。……ただし、こういうことはいえる。火のない所に、煙は出ぬ」

「では、何かそれに紛るまぎるような事実があつたことはあつたので？」

「いや、ない。事実はまったく逆さかさ事じや。——と申すは、三介信雄卿が、去年十一月、

山崎の宝寺たからでらじよう城へ、筑前様をお訪ねなされた。その節、伊勢平定の労をおねぎらい申

すとて、筑前様には、自身御接待のさしずをなされ、大そうな御ごかんたい接待で、城中に四日もお引き留めなされたという」

「なるほど」

「三介様の家臣どもは、翌日御退城の予定が、二日目もその触れなく、三日目も、四日目も、信雄卿の御退出を見ぬために、さてはと、悪く邪じゃすい推して、城外の下人どもまで、あ

らぬ臆測を口走つたものらしい」

「はははは。さては、そうした仔細でしたか。世上の説というものは、根を糺すと、おおむね、他愛ないものですな」

氏郷の眉が得心を見せると、池田勝入は、その問題をまだ語り尽していないように、

「ところが……じゃよ」

と、急いで云い足した。

「その後はまだ、一ト物議もあり、なお種々な浮説が、伊勢長島と、京大坂の間を、虚々実々、伝えられた。——第一には、宝寺の城中で、信雄卿が殺されたなどという虚説の出所は——決して信雄卿のお供衆からではない。羽柴家の小者の口から出たのが、躁ぎとなつた因だとなす一方の云い分と。——いや違う、信雄卿の家臣の疑心暗鬼より出たものじやと、反駁する宝寺城の人々の云い分とが、双方、声を大になすり合っているうちに、世間の方は、いきさつにかまわず、信雄卿が謀殺されたらしいということだけを、風の如く伝えてしもうたわけなのじや」

「世間はやはり、そのようなことを——あり得ぬこととはせず、ありそうなこと也——と、考えているものでしょうか」

「一般の人心は測り難いが、北畠殿に縁故の者どもや侍臣中には、柴田の滅亡につづき、神戸殿の御最期を見た後では——次に来るべきものは何かと……自ら問い自ら悪夢をえがいている者が少なくないことは確かでおざろう」

「さ。そこですが」

と、氏郷は初めて自己の秘懐ひかいを解くかの如く、膝をすすめて、云い出した。

「どんな流言が行われようと、羽柴、北畠両家のあいだに、堅い御理解さえ結ばれておれば……ですが、筑前様と信雄卿のお心の間には、多分に、そこに喰いちごうている遺憾があるやに思われます」

氏郷は、眸ひとみを澄ませた。勝入がそこで大きく頷うなずいたのをみる眼だった。

「これも世の流説るせつではありましようが、近頃、こんな沙汰も耳にしました。——故右府様の御他界に伴うて生じた合戦やら諸事情も、ここ一先ず落着を見、ともあれ平定に帰した上は、筑前どのも、その身を輔佐ほさの分にとどめて、すべての権を、旧主の遺族に還すにちがない。それには、いかに筋目を立てても、三法師君では幼少に過ぎるゆえ、天下の跡目には、どうしても信雄卿を立てることになるであろう。また、そうなくては、筑前守として、義も立つまい。織田家の恩顧おんこに酬むくゆる道もかなうまい——などと専ら聞くのですが」

「まずいのう。……まるで早かんに火を撒まくような言葉じゃ。あの御方の底意が見え透といておる。——却かえつて、その逆の來ることが分らぬとみゆる」

「が。あの御方は、本当にそんな甘いお考えを抱かかいておらるのでしょうか」

「おるやも知れぬ。何せい、氣のよいお公きん達だちの胸算用むなざんようでは」

「必ず、大坂表にも聞えておりましょうし、かくては、相互の御意志に、齟齬そごが増すばかりですが」

「いや。困こつたものよ」

勝入は、さらに、歎息した。

池田勝入も、蒲生氏郷も、秀吉の将として、秀吉とはとうに完全な主従關係に結ばれて來たかのように一般には見られていたが、大乘的陣營を離れて、勝入個人とか、氏郷個人とかの、個々の立場に返つてみると、今もつて、そう簡単にはゆかない事情きずなもあり絆きずなもあるのであつた。

第一に、氏郷は、信長の君くん寵ちゆう浅あからぬ頃ころにおいて、信長の末のむすめを娶めとつて妻めととしてゐる。

また、勝入池田信輝は、信長の乳母の子であり、信長とは乳兄弟にあたるという非常に

ふかい関係がある。

従つて、清洲會議きよすにも、このふたりは、単なる遺臣資格でなく、織田家の外戚がいせきとして列していたし、その折の誓約にも、連帯の責任を負っているわけである。——かたがた織田家の将来という問題には、当然、冷淡ではあり得ないし、幼少な三法師を除いては、今はただ一人となつた信長の血の直系者——北畠中将信雄とも、切つても切れない親族というつながりにある。

しかし。——その信雄が、もう少し、どうにか取柄とりえのある人物だと、この二人の人知れぬ苦勞も少ないだろうが、いかにせん凡庸ほんようはもう定かだ。清洲會議前後からすでに、十目指、この人に信長のあとを襲う素質はないものと埒らちが外がいに措おかれていたといつてよい。けれど、名門の子の不幸なる所以ゆえんは、信雄の前で、そういう者の一人としていないことだつた。お氣のよい公達きんたちは、依然、何事も拝伏うなずして肯く衆臣と、巧言令色の訪問者と、また、利用すべく彼を操あやつる者の力にうごかされつつ——この大變動期をそれとも自覺せず
に過しているのである。

勝入や、氏郷のごとく、時代の大波が、身にもこたえ、眼にも見えている者には、信雄のしていること、考えていることの甘さ加減が、はた目にも、はらはらされて、時には、

(ああ。危うし)

と、歎を発せずにはいられないような場合が、幾らあるかわからない。

たとえば、去年のような複雑な情勢下に、こつそり三河まで出かけて、家康と密会したり、柳ヶ瀬の戦後には、いかに秀吉に愆しやうよう 憑たもされたからとて、兄弟の神戸信孝を自刃せしめたり——近くは、戦せん捷しょうの功賞として、伊勢、伊賀、尾張全州の所領百七万石をうけて、大得意になったかと思えば、忽ち、次には秀吉が、中央の権をも当然に自分へ移譲するであろう——などと、すぐ出所の知れるようなまずい策を風説に託して、秀吉の肚をさぐってみたり。——挙げて数えれば限りもない。

「……が。この状を、成り行きまかせに、われらが傍観してもおれませう。勝入どのに、何ぞ、御分別はお持ち合わせありますまいか」

「いや、その智慧は、御辺にこそ借ろうと存じたのじゃ。忠三郎どのよ。何とか、思案をかせ」

「氏郷の存ずるには、いちど信雄卿に長島から出てもらうて、筑前様と会わせ、お胸をひらいて、じゅつくり語るるが、何よりではないかと思ひますが」

「良策だが。……さて、あのお公達の、近頃の権式張りでは、どうあろうかな」

「お誘いは、氏郷がよきに計^{はか}らいまする」

名門禍^{めいもんか}

きのうは、おもしろく、きようは、おもしろくなく、信雄の心は、常に、平らかでなかつた。

また、それが、何に起因するかを、反省してみるような人でもない。

昨秋、伊勢長島城に移つて、伊賀、伊勢、尾張三州で百七万石の封^{ほう}を持ち、位官は従四位下右近衛中将。出づれば群臣伏し、退けば管^{かんげん}絃^{げん}迎え、欲して行われぬことなく、しかも年齒はこの春をもつて、未だわずか二十七歳。名門の子の不幸は、名門の子が好みそうな、そういう諸条件の揃つている中であつたが、信雄としては、なお意に満たぬものがある。

「伊勢は田舎じゃ」——と。

そして、去年から、おもしろくなさそうなことは、

「筑前は、何で大坂に、あのような途方もない大城を築くのか。己れが住むつもりか、或

いは、天下の世嗣よつぎを迎えるつもりか」

であった。

その口吻くちぶりのうちには、今もつて、この人のあたまには、亡父信長がものを云っていた。——その精神はなく、形だけがあった。父の衣鉢いはつはうけず、勢威だけを受ける気でいた。

その眼で、大坂を見る、秀吉を眺める。そして身辺を考える。

「筑州こそ、不遜ふそんなれ。いつのまにか、父の臣たる分を忘れ、父の遺臣に、賦課ふかを申しつけ、未曾有みぞうの築城を急ぐ上に、この身を邪魔あつかいにして、近頃は、何ひとつ諮はからうて来ぬ」

相互の音信が絶え出したのは、去年十一月頃からである。——近頃、秀吉が信雄を除く計画をしておるとか、信雄はすでに殺されたとか、彼の猜疑さいぎを募つらすに充分な流言がしきりに取沙汰された頃からの現象である。

同時に、信雄が側臣の間で、不要意に洩らしたことばが、これまた、世間に伝わって、自身の底意が、多少、秀吉を刺戟したらしくも思われていたので——ついにこの正月となつても、互いにまだ新春の賀すら交わされずに過ぎていたのである。

「日野の若殿がお越し遊ばしましたが」

正月、子の日だった。

信雄が、城内の後庭で、婦女子や小姓をあいてに、蹴鞠けまりしているところへ、表の侍がこ
う告げて来た。

近江蒲生郡日野の若殿といえは、氏郷のほかにはいない。年は信雄より二つ上だが、
姻戚いんせき関係からいえば妹婿むこだ。——信雄は、あざやかに鞠まりを蹴りながら、取次の者をふり
返つて云つた。

「飛驒ひだが来たか。——いい相手が見えた。ちょうどいい。すぐ庭の方へつれて来い。ひと
つ、彼と鞠きそを競おう」

取次は走り去つた。

程なく、また来て告げた。

「お急ぎとあつて、はや御書院でお待ちでございます」

「鞠まりは」

「——そのような芸能は、氏郷、わきまえぬと、御挨拶で」

「田舎者よの」

信雄は、笑つた。

齒はつやつやと鉄漿を染めている。

装束を解いて、書院へ上がった。やがて室をかえてから昼餐が運ばれ、主客の

歡語は、さすがに親睦であった。

信雄と氏郷とは、年齢も似たほどだし、対比してみても、興が深い。

一は、信長という名門の子。

一は、その信長に征せられた蒲生賢秀という降将の子。

幼少氏郷が、信長の手許で養われ出したのは、まだ十三歳の頃だったという。

信長侍坐の諸将が、常に、兵を談ずる側において、この少年は、それがいかに深更に及

ぶとも、かつて倦怠を見せたことなく、一心不乱に、語る人の口元を見ていたと。

稲葉貞通が、云ったことがある。

(蒲生の子は、尋常でない。この童が、一かどの武將にならなければ、成る者はない)

また、信長もいった。

(蒲生の子を觀るに、眼睛がまこと美しい。いい若者になるだろう)

当時信長は、弾正忠と名乗っていたので、ついにその忠の一字を与え、忠三郎と

名づけ、やがて、わがむすめをも娶らせた。

初陣は、十四歳のとき、信長が河内城を攻めたときで、この年少が、敵の首を取って帰ったので、

(それみろ、ただの童であるまい)

と、信長は自身で打鮑うちあわびを取って彼に与えたという。

こういうこともあった。

織田金左衛門が、名馬を持っていた。讓ゆずれ讓ゆずれの懇望者がたえない。そこで金左衛門は、厩うまやの前に立て札して書いた。

こはこれ、一朝御陣の節、敵前へ一番駈けのため、養う所の名馬也。飼主の心にも劣らず、名馬にも恥なきほどの乗人とあらば、天地神明に誓約の上、譲りてもよい。

為に、所望者の足が絶えた。ところが、当年十六歳の蒲生のせがれが、いつの間にか出かけて、この名馬を貰っていた。人々、怪しみ合っている程に、やがて武田晴信はるのぶの甲軍が、東美濃へ焼き働きやばたら(放火攪乱戦こうらんせん)に出たとき、弱冠じやくかんの忠三郎氏郷、かの馬に乗って、敵中へ駈け入り、敵の物頭ものがしらたる豪の者と引ツ組み、首を鞍わきにくくって駈けもどった。

こうして、信長の愛、家中の衆望、共に篤あつかつたにかかわらず、氏郷は十七歳のとき、

われから信長へ、こう申し出ている。

(御君側を離れて、またもの又者(陪臣)になるわけですが、私を柴田殿の組下へお付け下さい。下級の士と立ち交じつて、武士の態をよく見習いとうございます)

勿論、ゆるされた。故に、氏郷はその若年時代には、柴田勝家の配下にあつて、兵たちと、馬糞ばふんの中の陣生活をしていたこともあるのである。

いま、二十九歳。すでに彼の重器たる質は、秀吉も世間も、認めている。

柳ヶ瀬の後、秀吉が、戦功として、亀山を、氏郷へ与えようとしたが、彼は享うけなかつた。

(亀山は、関せき一政かずまさが、祖々るいだい累代所領の地。あわれ、私に下さるおつもりで、一政に返し賜われれば、彼も私も、いかに欣うれしいかわかりませぬ)

関氏と蒲生家とは、遠縁にはあたるが、それにしても、できないことである。信長に深く愛されていた氏郷は、今、秀吉からも、心から惚れ込まれていること、疑うべくもない。

——が、思うに。

いかに信長が、彼を愛していたにせよ、その実子、信孝、信雄の愛に比すれば、当然、同日の談ではなかつたろう。しかも、信孝をあのような悲命に終らせ、信雄を今日のごと

き者にしたのは、またその盲愛であつたといえないこともない。

難い哉、名門の父も。

うじさと

氏郷の訪問後、数日経て、再び氏郷と池田勝入の名で、書状があつた。

信雄は、数日来、甚だ機嫌がよく、浮いている色さえ見えたが、

「明日大津へ出向くぞ。園城寺で筑州が待つという。……会いたいというのじゃよ。秀吉の方から」

と、急に四名の老職を招いて、供を云い渡した。

——だいじょうぶですか？

と云いたげに色をなす者も中にあつた。信雄はきれいに鉄漿かねを染めた歯を笑みに見せて云つた。

「弱っておるらしいぞ、筑州は。——何というても、この身と不仲のような態ていは、世上へ困るらしいのじゃ。そうもあるわさ。主筋にたいして、名分が悪いからの」

「……が、園城寺での御会見とは、いかなるお運びから」

四家老のひとりが訊ねた。それへの答えも、信雄は、至極得意そうで、いささかの不安

も感じていないらしい。

「こうじゃ。先頃、飛騨守が来てわしと筑州との中が、何か、おもしろからぬように世間でいうが、筑前の腹は、決してそんな水くさいものではない。為にする者の策謀とは知れておれど、さりとして、筑前からこれへ来るも異なるもの、初春の御対面を兼ね大津の園城寺までお運びなされませ。必ず、筑前も大坂を出て、それまで罷り越えましよう——というた。——そういわれてみれば、この身とて、何も筑州にふくみ恨みはあるわけでなし、よかろう、行こうと、約束したのじゃ。……決して、身にまちがいなどはないように仕ると、兩名のてがみにも書いてあろうが」

書翰しよかんでも、人の言でも、正直に受け取つて、すぐ信じこむ傾向がつよいのは、おうよ
うな育ちのよさともいえるものだったが、老職たちの任としては、それだけに小心にもな
り、一事あるごとに、危惧きぐから離れ得ないのである。

で、鳩首きゆうしゆ、氏郷の書翰を、廻覧しながら、

「なるほど……」

と、頷うなずき、

「相違なく、御直筆のようで」

と、つぶやき合い、

「ほかならぬ、勝入様や氏郷様のお肝煎きもいりで、かくまでのお扱いとあれば、万間ばん違いもございますまい」

と、ようやく、同意を示した。

「しかし、御要心には如くしなしで」

と、供も厳しく、四家老もみな扈從こじゆうしてゆくことになった。岡田長門守、浅井田宮丸、津川玄蕃げんぼ、滝川三郎兵衛の四名である。

次の日、北畠信雄は、こういう経緯いきさつから大津へ出向いた。指定地の園城寺というのは、三井寺のことである。彼は、北院総門の奥、二町ほど西の、蓮華谷れんげだにの法明院を宿とした。さつそく、氏郷が訪ねて来、池田勝入も後から見えた。そして、

「筑前様には、前日御到着あつて、お待ちしておられます」と、いった。

会見の場所は、秀吉の宿所、中院の金堂こんどうに準備されてあるが、日時は、いつがおよろしいか、御都合は——と訊かれて、信雄は、

「道にも疲れたから、明日一日は身を休めたいが」

と、ちよつと、わがまを出してみたくなくなって云つた。

「では、明後日のことと、取り極めましょうか」

と、二人は、その旨を秀吉へ答えに歸つた。

今時、誰ひとりとして、一日たりと、無為むゐに送つていられる閑人などはないが、信雄の希望で、

(あす一日は休養したい)

というままだに、翌日は、園城寺中の宿泊人ことごと悉くが、益なき退屈の中に置かれていた。

この園城寺全域では、何といつても、中院の金堂は建築の主閣である。そこへ、秀吉主従が泊りこみ、信雄の旅舎には、蓮華谷れんげだにの法明院が宛あてがわれていた。——これへ着いたとたんに、信雄が愉快でなかつたことはいうまでもない。

会见日の取り極めに、小さい我意を通してみたくなつたりしたのも、そんな気まぐれのわがままからであつたらしいが、さて、翌一日は、当人の信雄自身からして、退屈こうつに困こ果てたかの如くで、

「家老どもも、顔を見せぬ」

などと啣かつていた。

寺宝の歌書を見せられたり、老僧の長たらしい話などに倦み果て、ようやく一日を過ぎ得た黄昏れ近く、

「きようは、ごゆるりと、煩いなく御休息がとられましたろう」

と、四名の老職が、顔を揃えて、その室に見えた。

——ばかな、と信雄は腹が立った。所在なくて仕方がなかった程だ、と呶鳴りたかったけれど、いかに主君たりと、彼らの善意な考え方までいちいち是正することもできない。

「ム、ム。のびのびしたよ。お汝らも各の宿所でくつろいだから」

「くつろぐ間もございませぬ」

「なんで？」

「各家から、御音問のお使いが絶えませぬで」

「そんなに訪客があつたのか。なぜわしに通じて来ぬ」

「せっかく、御休息の一日を、お客にお邪げ遊ばされてはと……」

信雄は、指で輪をこしらえては、膝がしらを弾きながら、上品で無感興な顔を、鳩のようじつと持っていた。

「ま、よいわ。……夜食はお汝らもここでせい。一盞酌もう」

老職たちは、顔を見合わせた。やや困ったような容子が見える。そういう心理を看取ることにかけては、信雄は敏感であった。

「何か、障さわりがあるのか」

「ござりまして——」

と、四名のうちの岡田長門ながとが、詫わびるように云い出した。

「実は、先ほど、筑前守様からのお使いで、今夕、四名とも揃そろうて、宿所まで来い、とお招きでございますゆえ、おゆるしを仰おほいだ上でと、このように、伺うかがい出たわけでござりまする」

「なに。筑前からお前たちに来いと云つて参つたと。——また、茶事か」

いやな顔つきである。おもしろくないらしい。

「いや、そのようなことではないように存じます。わが殿も措おき、また、お連れ遊あそばしている諸侯方もおわすのに、又またもの者のわれらを、特に、お茶に招かるわけはないと考えます。……何やら、折入おれいつて、われら四名に、談だんじょう合ごうな申ましたいというおことばでもござりますれば」

「ふうム。……はてな」

信雄は、小首をかしげ、

「すると、その方どもを招いて、やがてこの信雄に、織田家からの一切を受け継いでくれ
いというような相談でもあるのかな？ ……。そうかも知れぬ。儂みを措いて、秀吉が天下
人などに坐つたらおかしい。第一、世間がゆるさぬわさ」

小牧こまきの序じよ

中院金堂こんどうの一室には、人なく、燭のみが夜を待っていた。

やがて客が通された。

津川玄蕃、滝川三郎兵衛、浅井田宮丸、岡田長門守の四名である。

茶菓。それだけが出た。

正月半ばである。きびしく寒い。

程なく、咳せきの聲が近づいて来る。扈從こじゆうの足音もひとつなので、秀吉とすぐ察しられた。
何か高声でいいつけながら来るようだ。風邪声だと思ふ。間もなく入って来た。

「おう」

という。

「待たせて気のどく——」

という。そして、拳こぶしの中へ咳をしぬく。

仰ぐと、ただ一人なのだ。小姓すら後ろにいない。

四名は、容易に気楽になりきれなかった。こもごも、挨拶する間、秀吉の方は、鼻汗はなばかりかんでいた。

「おかげ気味のように拝されますが」

ようやくにして、三郎兵衛がくだけていう。秀吉もくだけて答えた。

「ごときの風邪はぬけ難にくうてこまる」

あいそのない招きである。酒肴しゅこも顔を見せない。雑談もさして出ない。秀吉はやがて云った。

「三介様（信雄）にも、近頃のような御行状では、困ったものでないか」

四名は、ぎくとした。さてはその叱責しつせきかと胸へこたえたのである。老職にある責めをみな思った。

「みなも、骨が折れるだろう」

次のことばは、こうだった。四家老の面には、生色が甦えつた。

「……………」

「一かどの者揃いよ。が、三介様の下では、どうにもなるまい。察し入る。……筑前とても、同様、御為おんために相成るようと、心はくだけど、却つて、逆に逆にとり行く態てい、心外に思う」

語尾に激気があつた。四名は、身の竦すくみを覚えた。秀吉はなお縷々るると衷情ちゆうじようを洩らし、具体的にも例を挙げて、信雄に対する不満の意を明かし、帰するところ、

「いまは、思い断きつた」

と、いうのであつた。

「誠を尽して、多年隨身のその方どもには、気のどくではある。が、是非もないぞや。ただし、秀吉と意思を一つにするなれば、老職たるお汝ことらが相結んで、三介様に迫り、お腹を召さすなり、髪を剃おろさせ申すなれば、事は小さくすむ。兵も動かさずにすむ。——また、左様に首尾よく調ととのい終らば、お汝ことらには、伊勢伊賀などの内で、関所の地を、それぞれ功として頒わけ遣つかわすであろう。……招いたのは、こういう内談じゃ、よく分別して答えい」

「……………」

寒気だけではない。身のうちにそそけ立つものを四名はどうしようもない。

四壁はすべて声なき刀とう槍そうに感じられた。秀吉の眼は、光る穴みたいに見すえている。いやともいえ、おうともいえ、と促うながしている眼まなざしだ。

こういう大事を語られた以上、座も去らさせまい、時もまつまい。絶体絶命だ。四名は歎息の中に首を垂れた。――が、ついに承諾した。すぐ誓書を認しためて差し出した。

「身内の者どもが、柳の間で酒もりしておる。お汝ことらも、打ち交じって、遊んでゆけ。筑前も相手になって遣わしたいが、風邪ゆえ早やすう寝やすむ」

誓書を収めると、彼はすぐ奥へ立ってしまった。

その夜、信雄は落着かない気持ちしかつた。夜食には、侍臣、御伽衆おとぎしゆうの者、僧、日吉神社みこの巫女みこなどまで交えて、賑やかに、はしゃいでいる声もしていたが、座も散って、独りに返ると、

「いま何なん刻ときか」とか、

「老臣どもは、まだ金堂から戻らぬか」などと幾度も小姓から詰つめ侍ざむらいへ問わせていた。そのうちに、四名のうちの、滝川三郎兵衛雄利たけとしだけが帰って来た。

「ひとりか？」

と、信雄は怪しんで目の前の三郎兵衛を見もった。

「はい、ひとり戻りました」

そういう顔いろがただの容子ようすでない。信雄までが動悸どうきをうけた。三郎兵衛は両手をつかえたまま顔を上げない。涙の音がした。

「ど、どうした、三郎兵衛。……筑州の用談とは、何であつたのか」

「辛いお招きでござりました」

「何、おまえらを呼んで、折檻せつかんでもしたというか」

「そのような儀なれば、辛いとは申しませぬ。心外にござりまする。刃の中に坐せしめられ、心ならずも、誓書を取られました。……殿にも、お覚悟なくてはなりません」

彼は、秀吉が自分たちへ計った企謀きぼうを、余すなく、信雄の前で吐いてしまった。

「いやと申せば座を外さず、その場で殺害をうくるは知れきっておりますゆえ、ぜひなく、四名連れんしよ署の誓紙に名をつらね、後——家中同座の御酒席から、隙すきを見て、ひとり密かに走り帰って来たような次第です。……後で、三郎兵衛ひとりが見えぬと躁さわぎ立てれば、はや、ここのお座所さえ、安全ではございません。疾とく、お立ち退きの御用意を」

信雄は唇の色まで変えてしまった。三郎兵衛のいう半分も耳に入らないような眸ひとみのうごきである。恟々きようきようと早鐘はやがねをつくような胸が、じつと、黙っていられないように、

「そ、そして。……長門や、玄蕃などは、如何いたした。そちの他の者は」

「てまえは、てまえの料簡りょうけんを以て、かく遁のがれて参りましたが、余人の心は分りませぬ」
「あれらも、誓書に名を書いたのじやな」

「長門どの以下、残らず」

「そして、筑前の家の中の者と、なお酒もりしておるのじやな。見損みそこうた。あれらは、犬畜生にも劣る奴らよ」

罵ののりつつ、彼は不意に、つと立って、後ろにいる小姓の手からわが太刀を引ツたくった。そして、あたふたと、法明院の外廊へ出て行くので、三郎兵衛もあわてて後を追いなながら、殿々、どこへ渡らせらるるかと問うと、信雄は振り向いて声をひそめ、馬を馬をと頻りに急ぐ。

意を読んで――

「お待ちあれ」

と、三郎兵衛は、厩うまやへ走つた。

馬は名馬を持つている。「金槌」と名のある有名な鹿毛だ。信雄は、それに跨がるや、「あとは頼むぞ」

と、三郎兵衛に云い残したまま、法明院の裏門から夜にまぎれて奔り去った。厩武士一名、韋駄天のごとく追いかけて、途中から口輪を取ったが、伊勢に入るまで、とうとう供といつてはこの侍一人だったという。

夜のうちに影の失せた金槌は、かくの如く迅速だったので、翌日まで、誰知る者もなかった。当然、秀吉との会見は、信雄の発病という理由で流会となった。秀吉は、予期していたことのように、平然と大坂へ帰った。

長島へ帰った信雄は、城中ふかく隠れたきり、以来、病と称えて表の家臣にさえ、一切顔を見せなかった。

が、この籠居は、あながち仮病でもないらしい。彼としては充分に病みつくだけの理由はある。典医だけは奥へ出入りしていたし、城後の梅花は、日々綻びそめて来るのに、その後、管楽の音は絶えて、春園も閨たり——であった。

それに反して城下は、いや伊勢、伊賀一円は、みだれ飛ぶ浮説が、日と共に蔓延していった。さきに園城寺で置き去りにあつて、信雄の後からのこのこ帰って来た供侍の空列も、

諸人の怪訝けげんのたねとなつて、

「何があつたのか？」

と、専らな噂である。また、その折扨こじゆう従の老職輩が、云い合わせたように、各郷里へ引き籠こもつてしまい、近頃、長島への出仕がないことなども、

「只事ただごとには非ず」

とする巷説こうせつを裏書して、いやが上にも領下の不安を募つらせていた。

真相は伝わり難いものだが、またぞろ、信雄秀吉間の不和が、濃密な複雑さをつつんで、再燃さいねんして来たことは確かだつた。それも今度は、去年の情勢以上、極めて険悪なものを孕はらみ、しかも事態はもう逼迫ひつぱくしている——となす人心の底気流は早や全国的ですらあつた。

当然、信雄の位置は、颯風さつぷうの中心にあつた。かくなれば、彼にも大いに恃たのむものがあるようだつた。由来、保守的な彼が常に秘策と信じているのは、両天賭がけの二面主義だつた。あつちがいけなければこつちへつく。また、一致したと見せても、俺にはまちがえれば別べつに他の後ろ楯だてはあるぞ、という虚勢をその一致者へ仄ほのめかしておく。それは彼自身が、始終、そういう万一のときの黒幕を持たなければ安心していられないためでもある。

信雄の胸には、今その黒幕の者が大きく呼び起されていた。東海浜松の臥龍がりゆう、従三位参議徳川家康こそ、恃たのみとしていた者だった。

家康は、明けてこの二月、権中将から再び昇官していた。旧来の位置も、近来の実力も、その存在は大坂の秀吉といよいよ対蹠たいしよてき的な重さを加えている。信雄が、秀吉と協同しつつ、裏面、家康との密交を温めていたなどは、小策といえ、この公達きんだち、なかなか隅すみにいけない悪戯いたずらをする者といつていい。

しかし、弄策ろうさくも相手によりけりである。信雄が、家康を用いて、秀吉を牽制けんせいし、万一の持ち駒として家康を使おうなどという考えは、そもそも、相手を知らぬ骨頂こつちようというほかはない。けれどまた、迂眼うがん者の強味は、相手を知らぬところにある。鹿を追う獵りよう師しの山を見ずだ。信雄もその例に洩しれない。

この上は、家康を押し出して、秀吉の擡頭たいとうを抑えようと図はかったのは、彼として、当然に考え至る帰着点であった。

信雄の密使は、一夜こつそり長島を出て、岡崎へ急いだ。

二月に入ってからである。

家康腹心の臣、酒井与四郎重忠は、伊勢地方への旅行を名として、ひそかに長島を訪い

信雄と会つて、何か、密議するところがあつた。

極秘裡のことだつたが、その日時から推して、信雄の密使が岡崎へ行つた直後なので、それが信雄に対する家康の「答え」であつたことは、詮索するまでもない。

同時に、信雄と家康との軍事同盟が秘中に結ばれ、或る時を期して、秀吉を討つべきこと

に、両者の合意成立を見たことも、恐らく間違いないであろう。かたがた、諸般の手筈を謀し終つて、酒井与四郎が帰つたであろうことも、およそ想像に難くない。

信雄は、以後、病室を出て家臣にも接し、また頻りに、股肱の者と、密議めいた夜を更かしたり、遠国へ使いを派すことなども多かつた。

そのうちに、三月六日のこと、園城寺の一夜から久しく登城の姿をここに見せなかつた四老臣のうち——滝川三郎兵衛を除くのほか、三老職そろつて、この日、長島に顔を見せた。

勢州松ヶ島城の津川玄蕃。

尾州星崎城主、岡田長門守。

同、苅安賀城主、浅井田宮丸。

などである。

響応を名として、信雄から特に招いたものだった。——が、あれ以来、
(秀吉に通じて、われを廃はいさんと謀はかる逆臣ども)

と、ふかく思い込んでいた信雄には、この三名の顔を見るのも、憎悪に胸がむかつく程だった。——もとよりきょうの招きというのも、決してただの響応であろうはずはない。

が、さりげなく、三老をもてなした後、信雄は、ふと思いついたように、

「そうそう、堺の鍛治かじから、新たな鉄砲が出来てきた。長門、見てくれい」

と、彼ひとりを、別室へ連れ去った。

そこで、岡田長門が、示された鉄砲を見ていると、土方ひじかた勘兵衛という一家臣が、ふいに、

「上意っ」

とおめいて、後ろから引つ組んだ。長門は、

「こは、お情けなし」

と、脇差を七、八寸抜きかけたが、大力の勘兵衛に組み伏せられて、もがくのがやつとであった。信雄も、座を立って、

「勘兵衛、放せ放せ」

と云いながら、壁の周りを走り歩いた。激しい格闘がなお続いた。信雄は、手に白刃を提げながら狼狽して、

「放さねば、そ奴を、斬ることができぬぞ。勘兵衛、放してしまえ」

と、なおも云っていた。

勘兵衛は、長門の喉を、拇指で圧してから、機を計つて、突っ放した。——放したと思うと、勘兵衛の脇差が、信雄の太刀もまたず、長門の脾腹を突きとおしていた。

室内いちめんの鮮血を見ても、信雄は案外、平然としていた。気の弱いくせにして、一面、残忍酷薄な性質もこの人のどこかには持たれているらしい。

その時、他の家臣たちが、室外にひざまずいた。そして口々に告げた。

「玄蕃が身は、ただ今、飯田半兵衛があちらにおいて、刺しとめました」

「田宮丸は、森源三郎が、誅を加えました」

信雄は、血臭い顔もせず、そうか、と軽く頷いた。しかしさすがに、ホツと大きな息を肩でついていた。いかにとはいえ、多年、側近に仕えて来た輔佐の老職三名を、一時に誅殺してしまうなどは何といつても、無残である。その手段も、酷薄極まる。

この兇暴ともいえる血液は、信長にもあつたものである。けれど、信長のそれは、天下の士を領うなすかしめるだけの大きな意義と情熱と、さらに、その犠牲も後には大きく活いきうる理想を離れては行なっていない。

だから、時による兇も暴も、信長のは、英断といわれたのが、信雄のは、小策と感情による暴断でしかない。

すべて、大岐路にのぞんでは、一指を世にさす者の「断」こそ大事といわれている。しかし、活眼なき者の「断」ほど怖ろしいものもまたあるまい。過あやまつた一指はついに一世を過つ。

「すわ、大乱が起ろうも知れぬぞ」

長島城中一場の惨劇は、忽ち、この家中の足もとから、その夜からでも、四面の国境がみな戦乱と化するような、狂きょうらん瀾の心理を捲き起した。

三家老の殺害は、秘密裡に行われたものの、その日、時を移さず、長島の兵は、老職各々の居城を攻め潰つぶすべく、伊勢の松ヶ島、尾州の荻安賀、星崎などの各地へ急派されたので、人みなが、

「こうなつては、秀吉との手切れも、お覚悟の上に相違ない」

と、とたんに次の大戦を予想したのもむりはない。そして、昨年来、何か世の底流に、
 燻りに燻っていたものが、ここに火を噴いて、やがて満天滿地を焦がす戦炎となろうとす
 るのを——今は巷の声でなく臆測でなく、早や、眼に見たという感じだった。

このとき、四家老のひとり、滝川三郎兵衛雄利だけは、伊賀の上野にいた。

彼は初めから、他の三家老とはべつに、独自の行動をとり、信雄に向つては、逸早く、
 秀吉と会合の折の真相を告げていたので、信雄から猜疑されることはなかった。

従つて、三家老が長島へ召された折も、彼のみは、名が洩れていたわけである。そして
 間もなく、伊賀の上野にも、三老職が殺されて、各居城は、信雄の派兵が、直ちに奪り上
 げてしまったという沙汰が、疾風のように聞えていた。

「——こうしてはおられぬ」

三郎兵衛はすぐ旅支度して、大坂へ立つて行つた。

これは彼として、一見、奇異な行動のようであるが、主人信雄と秀吉との開戦が、目
 睫に迫つたと知るとたんに、彼が、はたと当惑したのは、羽柴家へ人質として取られて
 あるひとりの老母の身であった。

——が、幸いなことに、その老母は、秀吉の家臣で、近ごろ世に評判されている賤ヶ嶽

七本槍の勇士の一名、脇坂甚内安治やすはるの家に預けられていると人伝ひとつうてに聞いている。

そこで彼は、

「開戦の前に、何とか、母者人ははじゃひとのお身をこつちへ——」

と、一ト思案きめて、急に旅立ったものらしかった。

大坂の殷賑いんしんは、三郎兵衛の眼を驚かした。この新都市の一月か半月の変化は、他地方の十年二十年にも勝る発展ぶりである。破壊も一夜になされるが、さて、建設となれば、建設もまたなせば一日にしてなるものよ——という驚歎を抱かずに、そこは歩けない。

仰ぐと、黄金の薨ぼう、白碧はくへきの楼台ろうだい、大坂城の大天守閣は、市のどこから見える。

三郎兵衛は田舎者のように、大路小路を迷って、ようやく、脇坂甚内の邸をたずねあてた。

泣虫なきむしじんない甚内

塀土は真白く、木の香も高い新邸である。しかも主はまだ三十がらみ。以ていま、新興の都府大坂と、秀吉勢力の推進力が、どの辺の年配の人物にあるかがわかる。

「拙者が、脇坂ですが」

「甚じんない内ないのでおわすか。それがしは、北畠家の老職、滝川三郎兵衛で」

「お名は伺うかがつていました。信雄卿のお老職が、不意のお訪ねは、何御用ですか」

「武人の煩ほんのう悩う。——語るもお恥はかしいが」

「煩悩といわるるは」

「恥をしのんで申しあげる。……実はてまえの老母のことでおざるが」

「ああ、御老母の身か。……ならば、決して、お案じあるな。主人筑前様から申しつかつて、質人たる御辺の母堂を、拙者のやしきにお預りいたしてあるが、及ばずながら、御面倒は見てあげておる。——それに、おからだも至極すこやかだ。近頃、紅毛人の外科医に命じ、入れ歯などおさせ申しておる」

「お情かたじけのけ、忝かたじけのう存ぞずる」

三郎兵衛は、情に打たれて、さし俯うつむ向むいた。——が、思い切ったていでまた云った。

「さまで、お手厚あつうして戴おきながら、この上のお縋すがりは申しあげ難がいが。……実は、あの老母が、幼少いづくしから慈あつんでいた末娘むすめが、近頃やまい病びょうのため、母のこのみ申し、うわ言にも、母よ母よと恋こい、起きても、会あいたや、一卜目会あいたやと、泣なき慕しとうてやまぬのでおざる」

「ほ。それはそれは」

「嬰兒あかじでもない。年もはや、十八という娘、聞きわけのない愚痴をと、叱りはするもの、ゆうべも母の夢を見た……と余命の迫る身と知りつつ、訴うるのを聞けば、人間、誰にもある母子の情——。つい、あわれでおぎつてのう」

「ごもつともじゃ」

「弱りました。……おたがい戦場でなら、骨肉の屍かばねもふむが」

「む、む」

甚内は、相手の涙ぐむのを見て、われとわが心の揺れを、抑えつけていた。情に脆もろい生来かえりを省みる警戒だった。

けれど、その娘はすでに命旦たんせき夕にあるというし、日常、見ている人質の孤独な老母の心情も思い遣やると、彼は、泣くまいとしても、ぼろぼろ貫い泣きせすにいられなかった。

「……では、病中の御息女に、ひと目、御老母を会わせてやりたいとて、わざわざこれへお越しか」

ついに、彼は先の云いかねているところを、自分の方からいつてしまった。

三郎兵衛は、身をふるわした。

「御推察のとおりでおざる。——滝川三郎兵衛が生涯のおねがい、おかなえ下さるまいか」

幾度も頭をすりつけた。哀願あらゆる言を尽した。

「よろしい、お連れなさい。——主君にお伺い申さねば計れぬことだが、お伺い申せば、ゆるされぬことにきまつておる。拙者一存で、七日の間、そつと、御老母の身をおかし申そう。かならず、再び連れ戻られよ」

三郎兵衛は、狂喜して、母を連れて帰った。もちろん極く内密のうちにある。ところがその夜明けるとすぐ甚内は大きな悔いに打ちのめされた。

——昨日はよいことをした。

と、独り清々すがすがしく思つていた翌朝だけに、甚内のうけた衝動はつよかった。

長島における三老職の刺殺事件や、勢州尾州にわたる三城の兵革へいかくなどが、この日の朝になつて、初めて大坂にも知れて来たのである。またその一波濤はとうのあとにはすぐ、

(長島表では、大軍備に着手した。背後には三河殿(家康)がある)

という声も、大坂城中の然るべき者の口から、明らかに云われ出していた。

甚内は、愕然がくぜんと、耳を疑つた。

「ほんただろうか？」——と。

彼はその朝、登城の途中でそれを聞いたのである。慥しかと、明言したのは、池田勝入の家

士竹村小平太だ。——まちがないことかと、念を押すと、小平太はなお云った。

「昨夜深更しんこう、主人の許へ、伊勢の衆二名、駈け込み、かくかくと事の顛末てんまつを告げおりました。津川玄蕃の家来とか聞きました。いずれにせよ、信雄卿と三河殿のあいだに、何事か由々しい準備が始められていることだけは、もう何人なんびとも疑っている者はありません」

大坂城は、今なお旺さかんなる工事中である。城濠、外廓、諸侯の邸第ていだいなどには、相変らず数万の人夫と工匠が昼夜なく働いている。

彼は、本丸に遠い一門に馬を捨て、それらの巨石や木材の間を、額ひたいに汗あせして駈けていた。

「甚内、何を急ぐか」

同僚の片桐助作が、彼を見かけて声をかけた。振り向いただけで、答えもしなかったが、ふと駈け戻つて、

「助作、助作」

「おい、なんじゃあ」

「長島あたりに、何か、由々しい変がありそうだと申すは、本当か」

助作は、笑つて答えた。

「それよ。次の七本槍の場所は何処かの。——伊勢路か、三河か。追ツつけ知れよう」

寸時の後。

甚内は秀吉の前にいた。秀吉の座下に平伏したきり、頭も上げないでいた。

命ぜられて、わが家に預かっていた北畠家の質人を、無断で、質人の子の滝川三郎兵衛に渡してしまった次第を――

「彼奴きやつのそら涙にほだされて、つい、てまえ一存にて、三郎兵衛めに、貸しました。然るところ、今朝に及び、北畠殿には、はや御当家と、お手切れの覚悟あると聞き、さてはど、臍ほぞを噛みましたものの、もはやどうもなりません。……実に、拙者ぼかもは、莫迦者ぼかもでござりまする」

と、慚愧ざんきして、詫わびぬいた。

赫怒かくどして、叱ると思いのほか、秀吉は笑い出していた。

「莫迦者ぼかもとか。よう申した。まことにそちは、幼少からよく泣く泣き虫であったからの。……で、どうするつもりか」

「さきに頂戴いたしました七本槍の御賞辞、御加増、みなお取り上げくださいまし」

「そんなことではすむまい」

「決して、すみません。けれどかかる不始末で、腹は切りとうございませぬ。御成敗ごせいばいと

あらば、首さしのべますが」

「そう急がずともよいわ」

「てまえ一存で致した失策。なお、てまえ一存の始末をおゆるし下されば、その後においては、いかなる罪を賜わるも、おうらみには存じませぬ」

「面倒な。……ま、気のすむようにして来い」

秀吉は横を向いて、大村由己ゆっこと何かべつなはなしをしていた。

秀吉の前を退がると、彼は、飛ぶが如く、やしきへ帰った。

母の室へ、帰りを告げて、坐ったときは、もう心も静かだった。

「甚内どの、きようは、常より早い御退出の」

「はい」

と、間まを措おいて、

「にわかに、さる方面へ、出陣と相成りましたので」

「おう、そうか。今というても、お支度にさしつかえはないはず。心おきなく行って来るがよい」

「……はい」

と、またしばし、ことばの間を措いて、

「ただこのたびの合戦は、いつもの如く、御麾下ごきかに従うて参るのと違うて、脇坂甚内の一家の兵をもつて戦わねばなりません」

「どうあろうと、戦は戦、武門の名にかけて、存分に働きめされよ」

「もとよりです。……が、この一戦においては、必定ひつじょう、わが脇坂の家は、勝つも滅び、負くればなおのこと、滅ぶものと、かように覚悟いたされます」

「ぜひもあるまい」

「昨日、滝川三郎兵衛めに、お預かりの人質を、主人にも無断で、そつと渡してやりましたこと——はや、お聞き及びでございましょう」

「聞きました。……お許もとにも、わしという老母がある。滝川三郎兵衛が、お許をだましたのは、憎い仕方じゃが、それも老母の身を思うての余りである。……お許が情にほだされて、義をもつてなしたこと。大きな科とがではあろうが、この母は、何とも悔いてはおりませぬぞ」

「思慮なき子、祖先以来の家名を今日、ついに滅ぼすに至りました。大不孝、おゆるし下さいます」

「何の何の、御先祖さまには、まことに相すまぬが、義において、情において、いささかお慰め申しうる道は立つ。義といえ、情といえ、これもさむらいの美しさじやもの。……不義無道で家を滅ぼすのとはわけがちがう」

「そう仰せ下さいまして、甚内もどれほど快く死ぬるかも知れませぬ。ついては、郎党どもは元より連れて参りますが、不愍ふびんな女わらべや老僕どもは、ただ今みな、暇をつかわして、それぞれ郷里へ帰しとうございますが」

「それがよかる。母の身は、お案じめさるなよ」

「母上には、妻ひとりをお側において立ちまする。やがて、戦場にて、甚内死せりとお聞き遊ばしましたら、筑前様にお伺いをたてて、御余生に入らるるとも、罪をおまち遊ばすとも、御主君の思し召しどおりになされて下さいまし」

「才才、おお、そなたのいうように致しましょう。さらば、時を移さず、すぐ召使たちへ、暇を申しわたしたがい」

動ずる色もない老母である。

甚内はすぐ邸内の召使をのこらず庭へ呼び集めた。

つい昨日まで、小姓組二百五十石の小身であったのが、賤ヶ嶽の後、七本槍に加えられ、

功によつて、三千石の知行と一邸の主となつたものの、まだ家の子郎党も少なく、馬の数さえ多くはない。——が、集まつた召使たちは、その脇坂甚内が、まだ微禄びろくな時代から、水を担にない、薪を割つて、貧苦の中を仕え通して来た者が、大部分だつた。彼らはすでに今朝から主人の苦境を知つていた。みなわがことのように、憂いを共にし、固唾かたずをのんで、主人の面をみまもるのであつた。

甚内は口を開いた。

「多年、至らぬわしを主人と立て忠実に仕えてくれたお前方を、にわかには離すのは忍びぬことだが、仔細あつて、きよう限り暇を出す。——各、故郷へ歸つて、余生、倅せに送れよ。また、わが物は何なりと、欲しくば、仲よく分け合うて持ち去るがよい」

「……………」

忽ち、すすり泣きが流れた。慟どうこく哭する者もあつた。

と、ひとりの老僕が、一同の中から叫んだ。

「旦那様。お情けないおことばです。深いわけは存じませぬが、旦那様が、お肚はらをきめてござらっしゃることは、わしらといえ、お台所の女どもまで、みなお察し申しております。なぜ、共に覚悟をしろと仰っしゃつては下さいませぬか」

「ありがとう、ありがとう」

甚内は、何度も頷きつつ、その面から涙をはふり落して、

「——では申すが、さても愚かなこの主人は、御主君筑前様に対して、腹を切つても償い得ぬ大しくじりをしてしもうたのじゃ。そこで、死ぬまでも、せめて命のある前に、お詫びのあかしも立て、汚名的一端もすすがずば、死にきれぬと」

「わかつておりますだ。おこころもちは」

「まあ、聴け」

と、一同の嗚咽を抑えて、

「——よつて今より、滝川三郎兵衛の居城、伊賀上野へ押し襲せる所存。しかし、さむらいどもと事ちがい、お前方、老いたる者や、常々拙者の母の世話や、炊ぎのことまでしていてくれた女ども、わらべなどは、連れ参るわけにはゆかず、また、邸へのこしておいても、脇坂の家も、きよう限り絶えるのじゃ。いや、みずから断絶を示して最後の家の門を立つのじゃ。……聞きわけてくれ、皆よ、どうか泣かずに、別れてくれい」

「な、なぜでござります。どうして、お家を見捨て遊ばすのでございますか」

綿々めんめんというのは、甚内を小さい時から育てて来た婆あやであった。彼女はなお、

「ご、ご先祖様にたいしても、そ、そのような、大不孝なことが、ござりまするものか」
と、脇坂家の先祖に代つて、自分が叱るように、たもと袂をかんで歎いた。

一同の涙を見ながら、甚内も負けずにぼろぼろ泣いていた。声を揚げないばかりである。
「婆あやよ。まったく、わしほど大不孝者はない。——が、既にしてしもうたしくじりじや、きのうを責めるな。また、今日これから甚内の向う戦いくさも、主命を俟またぬ勝手の振舞いじや。あわれや、この大不孝者の立場は——行ゆいて勝つも滅び、戦つて負ければ滅び、いずれにしても、家名は到底保ち難いことになりおつた。それゆえに、おまえたち、何の科とがもない者は、各、郷里に帰つて、いのちを守れと申すのじや。……わかつたか。わしの心が」

「わかりませぬ」

おはしたの若い女がいった。

「そう仰つしやつて下されば下さるほど、何で、旦那様がたばかりを、お見送りできません。よう。わらべや、お年よりは残しても、わたくしたちは、おつれ下さいます」

「いや、わしの母上、また妻や子も、のこして行くのじや。郎党のほか、供はならぬ。——皆が、それまでいうてくれるなら、あれにある甚内のひと粒だね——あの子の後々だけ

を、お前方にたのむぞ」

彼の妻は、ことし二ツの乳のみを抱いて、人の気づかぬ縁の端にさし俯向うつむいていたのだ
った。

生れたばかりの一子と妻と、そして母の身とを、多年甚内に仕えて来た老僕や下僕たちに頼んで甚内は、直ちに、家を捨てて出た。

常に厩うまやにおく馬も、まだ二、三頭しか持たない身分である。門前には、邸内の男たる者はひとり残らず、打物うちもの把とつて集まったが、総人数、わずか三十余名。これが、家の子郎党の全員なのだ。

この小勢をもつて、我らの主人はこれから何処へ何を働きに行こうとするのか？——
そういう疑念はみな持ったろうが、

（合戦をなされますか。相手はこの人数で破れるほどの勢でございましょうか）
などと理をもつて主人に問うような者はない。ただ主人の駈け向う後につづき、主人の戦えというものに対して、戦いを尽すというほかに何の考えも持っていない。

こういう簡単な生命の合致がっちは、もとよりその場ですぐできるものではない。さむらい奉公のしきたりがある。武家やしきに住み、さむらいの飯をたべ始めてから数年、或いは何

十年のしつけのうちに出てくるものだった。厩の小者から、草履取ぞうりとりの端まで、

(さあ、御奉公のしどころが来たぞ)

と思うだけなのだ。

こういう主従関係は、武家社会の定則で、どこの家にはあり、どこの邸にはないというものではない。もとより主人の日頃の人づかい如何にもあるが、さむらいを志して、武家を主人に持つ以上、それと同時に、無言の奉公証文を主人に入れている気持は、足軽小者の末にもみなあつたことなのである。

いまは、大坂城という大きな家の主あるじになつてゐるが、その秀吉が、弱冠じやっかん十八、名も

まだ日吉といつていた頃、数年放浪の果て、郷里の庄内川の畔ほとりで、当時の若い城主織田三郎信長に近づき、いきなり馬前にとび出して、

(さむらいになりたいのです、わたくしをつかつて下さい)

と、哀願したとき、信長が、日吉にたずねた一言は、

(汝は、何の能があるか)

ということだった。そのとき、日吉が答えたには、

(何の能もございませぬが、ただ、事ある時には、死ぬことだけを、習い覚えております)

る)

というたという。

信長は、そのただ一言を聞いただけで、日吉をその場から列に加えて、清洲きよすのお小人の端に使ったのであったが——これを見ても、さむらい奉公の眼目とするところは、使う主人も、仕つかわれる者も、ただ一朝の「事ある日」にあったことが充分うかが窺い知られよう。

さて、余事はともあれ。

脇坂甚内安治は、家をすてて上野へ向ったが、決して自暴や無策の窮余に出たのではない。

(小勢いせいたりと雖も、われと一体の奉公人三十余名あるからには)

と、かたく期していたこと勿論だった。何をか期す？　いうまでもない。欺だますに事を欠いて、涙をもって男の情をほだし、義をかりて武士の心胆しんたんをあざむき去った滝川三郎兵衛を討つてその首を見ることである。

「いかに、母を奪うために、子のなした情の上のことたりといえ、その奸策かんさく、その卑劣、やわか生かしておくべき」

というのが甚内の誓ったことだった。

白昼、甲冑かっちゆうの騎馬二、三、兵三十余り、大坂の新市街を東へ一散に駈けつづいて行ったので、市人はみな眼をそばだてたが、余りの小人数でもある。たれもそれが死をきめた合戦に急ぐ人々とは見ていなかった。

甚内の率いる小勢は、平野街道から龍田たつたへ出、その夜は、郡山こおりやまで夜営した。

郡山の国主、筒井順慶の家臣は、彼らが夜営している処へ来て、こう咎とがめた。

「野武士とも見うけられぬが、物々しいでたちで、何処へ行かれるか。他国へ来て、無断、営を結ぶは、いずこの領内でも、不法なことぐらいは、ご存じであろうが」

甚内が、挨拶に立った。

「ごもつともなお叱り。しかし、その違いとまなき非常の途次でござれば、悪しからず、ゆるさ
れたい」

「非常の途次とは」

「非常と申すからには、合戦でござる。それへ参る途中でござる」

「はて、いずこに？」

「秀吉公の御命をうけて、伊賀上野城を攻め潰つぶしに参る」

「物見衆か」

「何の、ここは本陣。これは総人数でござる。御主人、筒井どのには、右の如く、お伝えおきあればよい。拙者は、大坂城小姓組の脇坂甚内でござれば」

「オ。七本槍の」

そう聞くと筒井の家臣は、倉皇そうこうと帰つてしまった。

一飯一睡を摂ると、夜はまだ暗かったが、甚内主従は野陣を畳たたんで、また伊賀路へ急ぎ出した。その日の道は、奈良、柳生やぎゅう、相楽さがらと駈けた。

柳生、相楽のあたりへ来ると、甚内は道々、こう触れて行つた。

「これは、羽柴殿の御内みうち、脇坂甚内安治なり。秀吉公の御命をうけ、伊賀の滝川三郎兵衛を仕置に参るにてあるぞ。上野城を分捕り、三郎兵衛の首を得るときは、何びとにもあれ、その功を上じょうたつ達し、存分ぞほうび、御褒美を取らずであろうぞ。——時を得ずして僻村へきそんにある勇者は出でよ。われこそと思う草土の猛者は得物えものを持ってついて来い。この機を逸しては、ふたたび世に会うときはないぞ」

一軒の茅ら屋あばやを見ても吠鳴り、一つの部落を通つても呼ばわつた。

声を聞き伝えて、忽ち、

「いで、道案内を」

「いで、お供を」

と、甚内の人数に合する者、見るまに、数を加えて行つた。しかも誰ひとり、これが上野攻めの全軍とは思つていない。先鋒隊のほんの一部だと思つて参加したのである。

滝川三郎兵衛雄利たけとしは、受封じゆほう数万石、信雄の老職として、伊賀上野の城に、尠なくも二千余の兵力はもっている。素肌に近い甚内の奉公人三十余名ぐらいな小勢で、これが攻め破れるはずはなく、また誰も、これが総軍力とは、そういわれてもそう思えまい。

しかし甚内は、その三十余名に、途々みちみちで得た二百余名の野武士と農兵をもつて、上野城の濠際ほりぎわへ迫つた。

そして、堂々と、

「滝川三郎兵衛出でよ。恥を知らば、矢倉に出て、おれの言を聴け」

と呼びかけ、彼の不義と、卑劣なる仕方とを、痛烈に面罵めんばした。

三郎兵衛は、笑つて、

「甚内どのか、よくぞ来た。さむらいの礼儀なれば、まず一矢、挨拶申すぞ」

瞬間、矢玉がばらばらと答えて来た。小勢ながら甚内方は、石垣へ取ツついて、夕方まで奮戦した。

夜に入った。どうも手応えが薄いが——と怪しんでいると、やがて、城主滝川三郎兵衛以下、城兵はみな、搦め手から逃げ去つたという報らせが入つた。

甚内は、却つて、茫然としてしまつた。

試みに、城門へ近づいてみた。撃つて来る銃声もなく、一すじの矢も飛んで来なかつた。

「やはり虚伝きよでんでもないらしい」

甚内は、城門を越えた。さらに外曲輪そとぐるわをふみこえ、本丸まで入つてみた。

「空き城だ。……まるで」

「城将滝川三郎兵衛始め、ひとりの城兵も出で合わぬが」

「いったい、これはどうしたことぞ？」

甚内に続いて来た決死の郎党たちも、意外な事実にあたりを見廻し、こういぶかり合うのみだつた。

この伊賀上野は、筒井の持ち城として以来、ここの地勢と相俟あいまつて、世上有名な堅城のひとつである。しかも豪勇の名ある滝川三郎兵衛が、三千に近い兵を擁し、これに拠よつて防守するとなれば、いかに脇坂甚内が、一死をもつて当つたところで、たかだか手飼てがいの郎党の三、四十名や、遽にわかに糾合きゆうごうした地侍の百や二百で、踏みやぶれるわけは絶対にな

い。

明白なその相違は、三郎兵衛も知らぬはずはなからうに、何で、その優勢な兵をひいて、この一城を振り捨てて、夜のうちに、伊勢へ退却してしまったか？——甚内を始め、城へ入った者どもが、無血占領の歓びを歡ぶことも措おいて、

「ふしぎだ？」

「解げせぬことよ」

と、ただ疑いの中にあつたのは無理もないことだった。

すると、甚内の家来の一名が、あわただしく何か告げて来た。甚内は、

「なに、天守の壁に？」

と、すぐそこへ駈け登って行つた。

見ると、天守三層目の白壁に、滝川三郎兵衛の筆で、墨くろぐると、一文が書き遺のこされてあつた。

一つ、此城預け申す証文の事

母ハ我ガ胎ノヲナリ、胎ハ我ガ身命ノ基モトナリ。一命元ヨリ君家ニ託タケセド、君家未ダ兵馬ノ命ヲ発セズ、猶一日ノ無事アルヲ窺ウカガヒ、即チ、質シテノ母ヲ偷ヌスミ、御辺ノ義ヲ欺アザムク。罪

大ナレド、非義ヲ咎ム勿レ。人間誰カ母ノ子ナラザル者アランヤ。而アレ、御辺ノ情ニ対シテ、弾ク弓ナク、御辺ノ恩ニ向ツテ刃ヌル刃ナシ。為ニ、御辺ガ主家ニ得タル罪ト同坐シテ、我モ一旦、敢テ不忠ノ名ヲ蒙リ、此一城ヲ御辺ニ預ケ、敗者ノ辱ヲ忍ンデ伊勢ニ退ク。

御辺、是ヲ受ケヨ。他日、我レ是ヲ再ビ敗ラン。将来ノ風雲、未ダ云フニ早シ。唯茲ニ過日ノ御辺ガ温情ノ一片ヲ謝シ、愈御弓ノ誉レヲ祈ル

三郎兵衛雄利

脇坂甚内どの

「……………」

読み去り読み来り、また凝視しているうちに、甚内の眼からは湯のごときものが流れ下っていた。

すぐ大坂の秀吉へこれを報じ、慎んで、罪を待っていた。

使節山岡隆景が、すぐ大坂から来て、事実を見聞して帰った。また折返して、増田右衛門尉長盛が、秀吉の旨をおびて使いに来た。

「甚内の武士は立った。見苦しからぬ仕方よ、さきの落度は取り返し、辱に勝る功をなしたぞ——と、秀吉公には、ひと方ならぬお褒めである。このまま、伊賀城に在つて、堅固に守れとの御意でもあつた」

さきの罪も問われず、甚内は、大面目をほどこしたのであつた。

構想こうそう

伊賀上野の一城が、その持主を換えたことは、起りは、私事に発していたが、直ちにこれは、秀吉と織田、徳川聯合軍との、公式な開戦布告に移る端緒たんしよとなつた。

伊勢へ退いた滝川三郎兵衛は、すぐ長島へ早馬を打つて、

「敢えて、辱はじをしのび守將の任にそむき、一旦、城を敵手に委まかしてござる。いかようとも御処罰まを俟まつ」

と書中して、仔細に事情を訴え、罪の下るのを待った。

すでに、三老臣ちゆうを誅して、信雄の胸にも、やや悔いのあつたところである。それとまた、三郎兵衛には園城寺でも、秀吉に組せず、真を自分に告げた功もある。

信雄は、こう返辞をした。

「罪を俟つには及ばない。そちの軍兵は直ちに、伊勢一志郡松ヶ島村の城へ向え。——松ヶ島城は、逆臣津川玄蕃の居城だが、玄蕃その者は、すでに長島で誅殺した。そして、長島表より木造長政を討伐にさし向けてあるが、いまなお落城の報がない。よつてそちは長政の手勢と合して、津川の家臣を追い、そのまま松ヶ島城を堅めておれ」

信雄の命に接して、滝川三郎兵衛は、直ちに、松ヶ島へ馳せつけ、木造長政と協力して、そこを攻めた。

彼が、津川の遺臣を討つて、松ヶ島へ入城した頃、信雄から二度目の書状がとどいた。書中には、

——秀吉はついに、年来の野望をあらわにして、公然、われへの戦書を発した。われまた決して策なきにあらず、すでに徳川殿の援軍は、続々、増派されつつあり、西国、四国、紀州根来衆、北越の佐々、関東一円も当方に加担呼応あるべく、織田有縁の諸侯、池田、蒲生などの参加も疑いない。序戦、秀吉はかならず、その先鋒をもつて、伊勢へ進攻するものと思われる。主力我れと、所は隔つとはいえ、一心堅塁に拠つて、その地の善防奮戦を祈る。

とある。

信雄は、この書を発すると共に、麾下きかの佐久間甚九郎正勝に兵五千余を付して、

「急速に、峰の城を修築し、秀吉の来襲に備えおけ」

と、伊勢の鈴鹿口すずかへ向けて、急行させた。なおまた、一宮城主の関成政しげまさ、竹鼻城主の不破広綱ふわひろつな、黒田城主の沢井雄重たけしげ、岩崎城主の丹羽氏次うじつぐ、加賀ノ井城主の加賀野井重宗、小折城主の生駒家長などの諸臣の人質を一せいに長島へ収めて、自身は、

「清洲へ」

と、移る地を指さして、ここに初めて、彼の旗馬は、公々然と、軍事的うごきを明らかにし出した。

長島城のあとには、生駒家長を入れ、信雄の旗本と主兵力は、ほとんど、清洲へ移った。それが、三月十三日のことであった。

この行動は、もとより彼が単独の意に出たものではない。徳川家康との間に、

(十三日には、清洲において、会見申さん)

という緊密な聯絡れんらくがあつたものに相違なく、同日、徳川家康も、その精鋭をひきいて、自身、清洲まで馬をすすめて来た。

帷中、槍影の守りきびしき処、両者の懇談は、数刻にわたっていた。

花・ふた色

美濃の養老と伊吹の山のくびれには、万葉や古今に、古くからわび歌われた幾つかの古駅があり、関ヶ原から湖南へ往来する旅人たちは、この峡谷の街道をあゆむごとに、かならずそれらの遠い時代の人々の歌ごころや旅ゆく姿を今にしのんでみるのだった。

その東海道筋から横へまがる。それも不破から二里、垂井から一里余りでしかない。すると、伊吹の曳く山すそが西南へながれてゆく半山地に拠って、人の住むらしい屋根が点々と望まれてくる。里の名を岩手郷といい、背後の一丘を、菩提山という。

世の往還からへだたることわずかであるが、冬は気温がひくく土地は痩せているために、かえって山水は清美であり、人は素朴で、言語や風俗のさまにも、室町期以前の古態がなおどこかに残っていた。

いま、三月初め。尾張地方からみると、半月以上もおそいといわれる梅の花が、おちこちに、ま盛りであり、空の水も鳥の音も、澄みとおって、春というには、まだ寒すぎる肌

「ごちである。」

「おじさん、絵をくれよ」

「おじさん、その絵、くれよ」

「くれよ、おじさん」

子どもたちは、彼のあとについてきた。

あきらかに絵とわかるひと巻の紙を彼が手に持っていたせいである。子どもらは、この絵描きのおじさんに、こうセビリつけばきつと絵をくれるということをし、これまでの経験でも知っていた。

「これはいけないよ」

ゆうしやう
友松は立ちどまって、うしろの子どもらを、追いつ返した。

「——また描いてやるからな。きようはゆるせ。これは、おまえらには、やれないのだよ」
「どうして。どうしてさ」

「子どもには、つまらない絵だからさ」

「つまらなくツてもいいよ。くんなよ、おじさん」

「やれん、やれん。帰る子は、いい子だぞ。おとなしく帰る子には、また好きな絵を描い

てやろう」

「じゃあ、その絵、たれにやるの」

「あそこのお人へ」

と、友松はあなたの柴折門しおりを、手にある紙の巻いたのでさした。

「なアんだ、禪尼ぜんにさんにやるのか。……」

と、子どもらは一せいいっせいに云った。すこし嘲ちやうろう弄ろうめいた笑えクボをそろえ、

「おじさんは、尼さんにはかり描いてやるんだぜ。ちえツ、つまんねえや」

あきらめて、子どもたちは、もとの道へ散っていった。友松のあかるい笑い顔が見送っていた。組しやすい風貌ふうぼうの持ち主と見えるせい、子どもたちによくからかわれるので、すさまじい世の中に、家もなく、身を守る何ものもない彼ではあったが、漂ひょう泊はくの行く先々にも、何か、知己はあるという心だけは失われずにある。

知己は、あなたの柴折門の内にもあった。彼がこの里に足をとめてから、ふと知りおうた若い禪尼ぜんにだった。

「おいですか」

友松はやがて庵いおの戸を押していた。この尼院を訪うごとにいつも感じるのは、常に箒ほうき

目のたててある平らかな庭土と、竹の葉ごしに屋のうちまで、清潔なひかりの映してゐることだった。

「尼どのには、お留守ですか」

返辞がない。

気さくな尼は、留守を小鳥の音にまかせて近所へでも出かけたのであろうか。——友松はたたずみ黙した。すると、尼ではない人声がどこかでした。話し声ではない、読書の声だ。物語り物でも素読しているらしい抑揚である。声のぬしは、主の禪尼より若い女性らしくおもえた。

障子明りの冷ややかな小部屋の中ほどに脚のひくい小机をおき、それを挟んで年のころ十六、七とみえる小娘が、松琴尼とむかい合いに坐っていた。

源氏の帖が何冊も、かたわらに重ねてある。小机にひらかれてあるのは、その中の「空蟬の巻」で、

——昼より西の御方の渡らせたまひて、碁打たせ給ふといふ。さて対ひ居たらんを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて、すだれの間隙に入り給ひぬ。この入りつる格子はまだ鎖さねば、間見ゆるによりて西ざまに見通し給へば、この際にたてたる屏風も、

端のかたおし畳まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにや打掛けて、いとよく見入られける。火近うともしたり、「母屋の中柱にそばめる人や我が心懸くる」と、まづ目とめ給へば、こき綾のひとへ襲ねなめり、なにかあらん上に着て、かしらつき細やかに、小さき人の物げ無き姿ぞしたる……

淀みもなく小娘は読みすすんでいた。源氏物語もこの「空蟬」や「箒木」や「夕顔」の帖などは、たれも好くところなので、もう何十遍も読みかえしているらしく、暗誦じているほどだった。

——母屋の几帳のかたびらひきあげて、いとやをら入り給ふとすれど、みな静まれる夜の御衣のけはひ、柔らかなるしもいと著かりけり。女は、さこそ忘れ給ふをうれしきに思ひなせど、怪しく夢のやうなることを、心に離るる折なき頃にて、心解けたる睡だに寝られずなん。昼はながめ夜は寢覚めがちなれば、春ならぬ此目も、いとなく歎かしきに、碁打ちつる君、「今宵はこなた」と今めかしく打語らひて寝にけり。若き人は何心なく、いとよくまどろみたるべし。かかるけはひの、いと香ばしくうち匂ふに、顔もたげたるに、単衣うち掛けたる几帳のすきまに、暗けれど、うち身じろぎ寄る気はひ、いと著し。あさましく覚えて、ともかくも、思ひわかれず、やをら起き

出でて、生絹すずしなる単衣ひとへ一つ着て、すべり出にけり。君は入りたまひて、ただ一人臥ふしたるを、心やすく思おぼす。床のしもに二人ばかりぞ臥したる。衣きぬを押しやりて寄り給へるに、有りし気はひより物々しく覚ゆれど……

「あらつ。……いけない」

小娘は、にわか顔に顔を紅くし、本をふせてしまった。銀杏ぎんなんのようなつぶらな眼は、いとど大きく、ため息さえついた。

日課として、源氏の訓よみと解ときを教えている松琴尼は、文学には熱心なこの少女が、勉強の途中でこんな声を出したのは初めて見ることであったので、

「おや？ 於通おつうは、どうしたことですか」

と、笑つた。そして於通の眼とともに、濡れ縁の障子明りをふり向いて見まもつた。

「いやですわ、禅尼さま。……たれかそこで、聞いているのですもの」

「そんなことはないでしょう。たれも人のいるはずはありませんもの」

「いいえ、います。さつきから、きき耳たてていたにちがいない」

「たれがです」

「たれだかわからないから、なお……」

「きつと、いつもの子猫でも来ているのである」

気休めとおもいながら、松琴尼は立つてそこをあげてみた。すると、思いがけない者が、いつの間にかそのぬれ縁の端へ来て、ちゃんと腰かけていた。内から障子があいたので、何か、恍惚こうこうとしていたその客も、

「やあ、これは」

と、ふいを打たれたたいで、尼の姿へふり向いた。

「まあ、おひとが悪い。友松ゆうしよう様ではありませんか」

松琴尼がいうと、内から於通も云つて誇った。

「それごらんなさい。いたでしょう、よそのお人が」

親しい間とみえ、友松は、尼の招き入るるまま、内へ通つて、

「いや、ごめんなさい。失礼しました。何もべつに、源氏の君みために、女御にようごたちの密ひそかな世界を隙間すきま見たりなどしたわけではありませんが、お門かどへの静けさ、お留守か、否かとおもいまい、つい庭へはいました。すると久しぶり、空うつせみ蟬せみのくだりを美しいお声で読まれるのを伺い、聞いているうちに、うっとりとして」

坐るなり、まず云い訳から頼りにし出した。

於通は、あわてて小机や源氏の帖を、部屋のすみへ片寄せてしまった。そしてわざと、ぷんと、少し怒った顔つきをこの客へして見せた。

彼女の気性のわかつている尼には、おかしくてならないように、くすくす笑いこぼれながら、

「いえ、お氣にかけて下さいますな。この娘はすこし変っているほうなんですから」
すると於通は、いよいよ、ぷんと、怒り澄まして、

「ようございますよ禪尼さま。わたくしはどうせ、変り者ですから」

といった。けれどその仏頂ぶつちよう顔は、心からのものとは見えない。むしろその中には非常な愛嬌すらふくんでいた。せつかくの勉強を客に邪魔された不平はあるが、その不平と客へのあいそとを、巧みに、軽いかし味として、しかも、あどけなく、表現しているものに見える。

「ははは。何しろ手前が悪かった。於通どの、堪忍してくれい」

「いえ、しません」

「なに、堪忍せぬ。これは困った。あやまる」

「そんなにあやまるならゆるしてあげましょう。女性にょしやうの所とて、これからそのような失礼はなさらぬように遊ばせや。もしこれが男と男とのいる席でしたら、あなたは無礼打ちにされてもしかたがないところでしょ」

「おそれ入った。いや、なるほど、変っている御息女ではあるなあ。……ふうん」

と、友松はその姿へながめ入った。前からもこの辺の山家娘やまがむすめとはおもっていなかった。しかし今ふと、清麗せいれいたとえようもなく友松には見えた。源氏の君をめぐるあまたの女性の中にも類るいけい型のない新鮮な感覚と知性をこの乙女に見て、彼は、

（これは、すぐれた造化の花だ。しかしあどけないどころかよ、花にしても、叡智えいちの結晶のような花——）

と、心のうちでおどろいた。彼が五十余年のきょうまでの生涯に、若くしてはたくさんな女性にもあい、けわしい世を、滅亡の武人から貧しい漂泊の一絵師へと生を求め、さまざまな人間と世路の経験を経へつつ、自然の中に養みってきた物を観る眼との——その画家的な眼をもつて、彼は正直に驚いたのである。

「禅尼さま。わたくしがいたします」

彼女は、松琴尼が立ちかけるのを見て、あわてて自分が代って奥へかくれた。お客への

茶と気がついてである。

友松はなお、その姿を見送りながら、

「禅尼どの。あのひとはあなたのお妹か、身寄りの御息女でもあるのですか」

「よく、そう訊ねられますが、妹でも姪めいでもありません。もつとも、わたくしどもの親の代から、亡くなった兄も親しゅうしていた家の御息女ではありませんが」

「そうですか。あの年頃のおとめにしては、よほど頭脳もすぐれていますな。源氏の訓よみを聞いていても、句点のきりめ、ことばと地の文章との読みわけかたなど、感心しました。そこはかとなく、源氏の香気や情景をあのように、聞く者に感じさせるには、それが充分に、読み手自身に分っているのだから、読めばできないことだ。……いずれ、由よしある家からに生れ、よい環境のもとに、都で教養なされたのでござろう」

「いえいえ」

と、尼はホホ笑んで、彼のひとりのみこみを、訂正した。

「田舎生れです。やはり美濃みのの内ので、これから東へ、八里ほどの在所、北方きたかた郷ごうの小野の里ので、小野政秀おのまさひでともうすのが、於通おつうの父親でございました。……が、政秀どののはあのひとが幼い時に、合戦で亡くなられ、身寄りや郎党たちもちり失うせて、ひと頃、わたくしの兄

の身近な者が養つておりましたが、十三歳の折、手づるがあつて、安土のお城へ御奉公に
あがりました。あの俐発りはつな子のことですから、お局つぼねがた方にも愛され、信長公からも、ま
たなく可愛がられていたそうですが、天正十年、信長公も本能寺で御最期となり、安土も
あんなことになつて、あわれやそのときまだ十五歳のおとめも、途々、さんざんな苦勞を
して、もとの美濃へさまよい歸つてまいりました。——合戦というと、敗れた武者方のみ
が、みじめらしゆう思われますが、どうしてあんな何知らぬおとめまでが、それはそれは
怖ろしい目やら辛い思いをしたらしゆうございます。……けれどまたあのひとのすぐれた
素質は、芽生えにうけたその憂かんなん難を、自分にとつて、よい試煉として身に生かして
いるようなので、それだけでも、すこしいまの乙女たちとはちがつているなと思われま
す。……ですから、あんなあどけない容ようす子もありながら、折にふれては、男も及ばない剛ご
毅うきなところがあつたりして、私なども、ままびつくりさせられることがあるのでございま
す

尼のことばが切れたのは、そのとき当の於通が、ふくさに茶碗をのせ、楚々そそと、友松の
まえにそれをささげて来たからであつた。

茶礼をして、のみほした茶碗を、友松が返すと、於通は、次に尼のために、また炉へ茶

をたてにかくれた。

「そうでしたか。いや、そうでしょう。あの教養も、安土の大家で、身につけたものでしょう。——そして今は、あなたのお手許で、ゆく末、よい禪ぜん尼ににでもなるために、勉強中というわけですかな」

「とんでもない、あの子は、田舎ざらいです。ひと頃の安土の御城下やお城うちの、すばらしい繁栄やら、海外からいつさんに流れこんだ異国の文化にも、すっかり馴なじんでおりますから、尼院生活など、夢にも思ってはおりませんまい」

「なるほど、それも無理ならぬことですね」

「いまの世には、無数な尼僧がおりますが、たれとて、われから好んで尼院へ入った者などありません。わたくし達はみな乱国のあらしに吹き落された梢こずえのない花々です。まして人いちばい才はじけた於通ですから、折さえあれば、私のそばを去って、都へ出たがっております。……それを、わるいとは私も申してははず、ただ、まだほんとの平和の世とおもえぬほどに、時を待つがよいと、若い心をなだめてはおりますもの、さて、あの賢さかしさで、いつまでこの退屈な山里に、私と一しよに、水仕事をしたり、読書したり、鳥の声のみ聞いていましょうか……」

尼は、自信なげに、云いむすんで、ふとまた、自分のその年頃を、思いめぐらしているような眉であった。

この尼とて、年のころは、まだ三十七、八でしかあるまい。若いといえば、いたいたしいともいえる若さの禪尼なのである。殊には、精進しているためにか、皮膚にしのびよる初老のかげもなく、人をして、妙齡の頃にはさぞやと思わせるものがある。

「オ。そうでした、友松様。いつぞやは御好意に狎なれて、とんだ御無心をし、さぞ御迷惑でございましたらう」

尼は、自分の前に、於通が茶をおいたのをしおに、さりげなく話をかえた。友松も、それと共に、うしろの紙巻の物へ手をのばして、

「そうそう、伺ったのも、そのことでした。あれからです、さつそく画稿がこうにとりかかり、いくたびか描きあらためて、ようやく、下絵が成ったので、ここへ持つてまいりました。……ともあれ、ごらん下さい。そして、あれこれ、お心にそわぬ点は、忌憚きたんなく指摘していただきたい。それをまた参考に、下絵を練たずつてみますから」

いううちに、彼は、尼の方へ向けて、携たずえて来たというその下絵を展ひろげはじめた。そして静かに依頼者の感想をまつた。

それは、若い武人の、肖像画であつた。

もとより細かい模様や傳彩ふさいはまだほどこされていらない。しかし描き直し描き直し、幾重にもかさねられてある描線には、筆者の苦心が、生々なまなまとあらわれていた。未完成画とはいえ、全体を通じての構成にも、一線一劃の筆力にも、このまますでに觀賞にたえるだけの力と精神は充分に見られる。

「いかがでしょう」

三つの顔が、ひとつ焦点を見つめあつた。三人おもいおもいな沈黙のうちに。

「……ああ。よう似ておられまする」

松琴尼の眼には、涙がわいてきた。

彼女は、画を見て画を見ない。亡き兄の姿を、それに観みた。

「ほんに。そのお方らしゅうございますこと」

於通も、一緒になつて、感歎をもらし、

「わたくし、このお方がたれか、すぐわかりました。きっと、私の胸にうかんだお人がいありません」

と、いった。

尼は、涙をまぎらわずに、よい話題として、

「この似絵を、於通はたれと思いましたか」

「禅尼さまの、お兄君でございましょう」

「まあ、よく……」

と、尼はおもわずなつかしさを顔いッぱいに――

「その通りですの。して、そなたにそれがどうしてお分りかの」

「だって、武人の似絵は、どれを見ても、みんな強そうにか、でなければ、威権を誇示しているのが普通でございましょう。ところがこの似絵のお人は、甲冑もつけず、床

几にかかって采配を持たず、衣冠束帯というのでもありません。……そこらの山の

中にもいそうな、ただのおさむらいが、袖なし胴着に、ふだん穿きの袴をつけ、ちよこねんと、あぐらをくんでいるだけのお姿です。ただ違っているのは、書物をたくさんそばにおいて、読みかけのその一冊を、膝にひらいているところだけが、山家さむらいにはないことです」

「それだけですぐこの尼の兄と覚れましたか」

「いえ。もつと、はつきりしていることは、武人にして武人らしくない面ざしです。蒲

柳のお質というよりも、御病身であつたでしょう。学問におふかく、叡智にあふれ、お若くして逝かれたお方のそれらしき御容貌が、この絵にもありあり出ているではございませんか」

「そう……。ほんにそうです。この身も、そぞろ生きている兄に会うような心地がして」

「なお、小袖の御紋をごらんなされませ。丸に蔦の葉でしょ。丸に蔦の葉の御紋は、この庵のうしろから登れる菩提山のお城の古い屋根瓦にも見られます。もう申すまでもなく、そのむかし、菩提山の城の主として住み、のちに、栗原山に身を隠され、羽柴秀吉さまの幾度とないおせがみに、よんどころなく秀吉さまの麾下に加わり、中国攻めのせつ、平井山の長陣に、おん病を重うさせられ、ついにお亡くなり遊ばしたと聞いております……。あの、竹中半兵衛重治さまこそ、この似絵のおひとにちがいありません。……ね、禅尼さま、中つたでしよう」

「……………」

尼はもうとどめ得ない思い出に、まぶたを抑えたまま、横向きにうなじを折って、何と
 という答えもなかった。

その竹中半兵衛が妹とあるからには、この松琴尼こそ、病身の兄にかしずいて、栗原山

の山居にもいたあの山百合やまゆりにも似ていた可憐な——名を、おゆうとといった女性であることは、もうあらためて問うまでもない。

山を降りて、時の潮と、権力の中に住めば、あの節操、竹のごとき兄ですら、ついには秀吉の一軍師として仕えるつかの生涯を、どうにものがれ得なかつた。

ましてや乙女、おゆうが、秀吉の眼にとまって、秀吉的な情炎の誘惑に、ついに剋かてないでその側室そくしつとなつたのもぜひがない。

が、このことは、兄の半兵衛にとり、生涯、人知れぬ不快と苦痛だつたにちがいない。おゆうも、もとよりそれを察し、いつかはと、秀吉の寵ちように別れる日を期しているうちに、平井山の陣における兄の死だつた。

おゆうは、それをしおに暇をねがつた。秀吉は、半兵衛の死に会つて、まったく純な悲嘆にくれていた折なので、迷いなく、彼女の乞いをゆるした。そこで、彼女は兄の遺骨をいだいて美濃のふるさとに立帰り、髪をおろして、名も松琴尼とかえ、新たな尼院生活に余生を清めていたのだつた。

「ありがとうございました」

と、尼は友松へむかい、心から礼をのべて、

「まるで生き写しのようにおもわれます。このようなお絵を描き上げていただいたら、きつと妙心寺へお納めするのは惜しゅうなつて、いつまでも、自分と一しよに、この草庵へ置きたくなるかもしれません」

と、かぎりない歓びをこぼした。

半兵衛重治の死は、天正七年の六月であつたから、おもうに尼は、ちようどことし七年の回忌かいぎを機として、一画像ひやうぐを表具ひょうぐさせ、それをこの夏、妙心寺に納めて供養くようをいとなもうという考えのもとに、折よくこの地方へ旅して来た海かいほう北友松ゆうしように素懐そかいをのべて、揮毫きごうを依頼したものであろう。

「いや、寺院へ納められるより、それはもうあなたの側において、朝夕に、偲しのんでいただいた方が、どんなに故人もうれしいかわかりますまい。画者にとつても、そのほうがありがたいことです」

友松はさらにいった。画稿です。訂正できます。何かお望みなり御不満があつたら遠慮

なくいつて下さい、と。——それを何度も質ただしたのち、ではこれを基本に描きあげましょうと、はや図を巻いて、帰りかけた。

「もう、たそがれですのに」

と尼も於通もひきとめた。

「何もありませんが……」

と、ひとりには急いで厨くりやへ立ち、ひとりは灯をともし、強しいて辞すひまもなく、たちまち夜食の膳は運ばれた。

もらい物の手づくりですがと、酒まですすめ、馳走らしい物とてないがと、心いッばいもてなすのであった。友松が一片の依頼画にかくまで良心をもつてするに對して、これくらいな心入れはなお足りないとしている尼の氣もちもよく酌くみとれる。

酒は好むところであり、宿とする草深い百姓家へもどつてみても、語るあいてもない毎夜なので、ではと、友松も腰をすえ、

「尼院で御酒をいただくなどは、里人の口もいかがかとおもわれるが、せつかくのおこころざし、遠慮なく」

と、受けた杯をふくみ、季節もよし、梅のにおう宵、久しぶり微酔の快を味わった。

「里人の口の端くちなど、お気づかいは、御無用です」

と、尼は、銚子をすすめて云った。

「わたくしたち、禅家の者は、世間の口の端などには、いつこう頓とん着じゃくしておりません。あなたも、権勢に仕えず、白雲を友とする境界の画家でありながら、なぜそのようなこと仰せられますか」

「ははは。切りこんできましたな、禅尼どの。身の迷惑はかまわぬが、あなたの迷惑をふと思うたので」

「いえいえ。なんの迷惑も感じませぬ」

「しかし、この友松は、お尋ね者なのですぞ。御存じか」

「お尋ね者とは」

「おとし、山崎合戦のあとで、京の三条河原で、二度も首盗人があらわれました。一敗地にまみれた明智方の人々の首が、次々と、京都の河原にさらされましたろう」

「血ぐさい世の中は、久しく知りませぬ。風のたよりに、聞いていましたか」

「初めに、小栗栖おぐるすの里で百姓たちに討たれた光秀どののさらし首が、一夜、何者かに盗み去られました。また幾日かおいて、明智衆の老将、斎藤内蔵助利としみつ三どののさらし首がま

た失なくなくなった。京の騒ぎはえらかつたですよ。ははははは」

「その下げしゆにん手人は、友松さまだったのですか」

「——と、当時、もつばらな評判でしたな」

否定もせず、肯定もせず、友松はただ笑つてのみいた。無住の山水に籍をおいて、武将生活を見きつてからの彼もすでに久しいものだが、浩こうぜん然と笑えば、なおその笑いの底にさびたる戦場声のおもかげはどこやらにある。

生い立ちを洗えば、友松もまた、竹中半兵衛や於通の父小野政秀などと同列のいわゆる美濃衆といわれた稲葉山の齋藤義よし龍たつの家中であり、霸府はふ齋藤が、信長に亡えいぼされた永いろ禄六年を転機として、竹中一族も、於通の父も、海北友松も、それぞれ、ちりぢりに異なる次への運命にわかれ去つていたものであった。

だから、いいかえれば、こよいの燈下の三人は、同じふるさとで、ひとつ元木のこぼれ芽が、年経としへてここに会したものといつてもよい。いやその気もちは、いわずとも、各々の胸にはあるものと思われる。

かかる縁もあればこそ、竹中半兵衛が死して七年の忌年きねんに、偶然、その血縁から画像をたのまれしたのであろうと、友松もその筆には一ひとしお精を入れたにちがいない。半兵衛

が栗原山にかくれ、また秀吉に招かれてからは、ついに会わずじまいであったが、弱冠時代には、幾度かその人に親しく会つてもいたのである。はからずもその記憶が役だつて、画稿がこうの線のひとつひとつにならうとは。

(何しても、惜しい人ではあつた)

と、彼が回顧される以上に、尼もこよいは、その兄にかしずいていた栗原山の春の夜をおもい出しているのであらう。それがあらぬか、尼はめずらしく、

「お客まろうど人に、何の御馳走もなさすきますから、せめて尼の琴なりおきかせしましょうか」と、めずらしくも云い出したので、於通も、

「え。ほんとに」

と、興がつて、さつそく一面の琴をかかえてきた。そして、
「禅尼さまのお琴は、それはそれはお上手なんです。秘曲ひきよくを極めておられますから。――けれど、たれがせがんでも、めつたにお弾ひきになつたためしはありません。今夜はよほど、どうかしていらつしやるんですよ」

と、友松に紹介した。そして彼女自身も、おもわぬ倅せに会つたように、座をすべらせ、奏かなで出づる秘曲をこころ澄まして待ちもうけた。

琴を前に、絃いとの調べをしつつ、そのあいだに、

「わたくしよりも、亡くなった兄のほうが、琴は上手でございました。栗原山の山住居に、わたくしが弾き、また兄が弾き、月の夜の更ふけるのも忘れたことがありました」

彼女のまぶたには、その兄が、その頃のまま、もう見える心地がしているらしい。

友松は、大きくうなずいた。手の杯を置きわすれて。

絃は鳴りはじめた。秘妙な音階が十三の絃からかぎりない変化を織り、またひとつの正しい響音に統一され、突とつとして崩れ、みだれ、相寄り、相離れ、ときには、坐しているま、波濤のそこへでも沈んで行くかのようなものにつつまれるかとおもうと、明るいこと、かがやきみつること、天界のようなところへ、心をもってゆかれもする——

（長く、極まらない文化の変転、また興亡の幾かわりや、人それぞれの運命の、ときには盛り、ときには沈み、悲嘆し、歓喜し、遊戯し、争闘する、その相すがたを音階にしたようなものではある。雨の音、風の声、鳥の鳴く音、虫のすだき。自然の声あるものの声もみんなこの中にはある。さてさて、不可思議な……）

何の秘曲やら友松にはわからない。音楽的な知識はない。しかし眼をとじていると、そう感じてくるものの万象が、まぼろしのように脳裡を去来するのだった。

そのとき、夢みる人々を、たたき起すように、庵いおりの柴垣の外で、何やら人声がし出した。あきらかに、馬蹄の止まった物音もした。それからつづいて、

「もの申す。もの申す。松琴尼どののお住居は、こなたでござるか」

と、入口の方にあたって、武辺らしい者のおとずれも聞えた。

「外に、お客らしいが……」

と、友松は尼の注意をひくように呟いたが、尼は、意にかけるふうもなく、依然、曲をつづけて、ついに終りまで弾き終つてから、やおら於通の方へ云つた。

「こんな夜中に、たれである、出てごらんなさい」

「はい」

於通は、やがてもどつて来て、

「たれか余人がおるらしいから、名はいえぬ、禅尼どのに、お目にかかれればわかる——と
いうて、上方の武家らしきお人、従者三名ほどをつれ、馬二頭ひいて立っております」
と告げた。

尼は、存外きつく首をふつて、

「夜中、名もつげぬお方にお会いはできぬ。ここは尼院、宿ならほかへお求め下さいと仰

つしやい」

「ハイ」

と、また於通は立つてゆき、こんどはなかなかまでどつて、何か押し問答に会っているらしい。

友松は、膳の前を離れた。

「思わず長座しました。上方の武辺と聞いては、事面倒、お尋ね者は、逃げ出すとしまし
よう。……ああよい半日を過ごさせていただいた」

「まあ、よいではございませぬか」

「いやいや、ほろりと、よい頃、夜梅を見ながら寝に帰ります」

「そうですか」

と、尼は自身、送って出た。

入口に立ちほだかつて、取次げ、取次がぬと、於通と押し問答の最中だった四十がらみの、^{たびよそお}旅装い物々しげな武者は、^{びくん}微醺をおびて奥から出てきた男を、うさくさい^{まな}眼ざしでじつと見、また尼の顔を見、これは怪^けしからぬといわぬばかりな顔つきを示し、出て行く友松のうしろ姿を、露骨な眼でじろじろ見送った。

その影が、柴垣の外へ消え去るのを待つて、彼は、尼のすがたへ辞儀をした。

「お忘れかもしれぬが、羽柴家の臣、武藤清左衛門でござる。また、これにおけるは……」
と、うしろに佇むたたず一僧をさして、

「妙心寺の塔頭たつちゆう 大心院の御僧、漸蔵主ぜんぞうすでおざる」

「そうですか。ま、お上がりなさるがよい」

と、尼はさして珍客あつかいもせず、といつて、わるびれもせず、奥へ通した。

琴、膳など、まだ片づけるいとまもなく、室の隅に寄せられてある。禅僧の漸蔵主は、あだかも自分の恥辱のごとく、さげすみを面おもてにみなぎらして、つれの者へ、眼でものをいった。

「なに御用ですか」

と、尼はいった。

問われたのを幸いに、武藤清左衛門は、なすべき礼儀を忘れ顔してすぐ答えに移った。

「されば実申すと、この方どもは、木曾川近くの黒田ノ城まで、大事の秘命をうけたまわつて、大坂表から下つてまいつた。そこで主人秀吉様の思し召しであるが、さしたる寄り道にもならぬ菩提山のふもとゆえ、おとずれて、近ごろの消息を問うてつかわせとのおこ

とばでおぎつた。——で、わざわざ不^ふ破^わより横道して来たわけで」

「それはそれは御大儀な」

と、尼は、人^{ひと}事^{ごと}みたいにいいう。

武藤は、馬の背から従者におろさせた品々を、尼のまえに披露した。すべて秀吉からの贈り物とある。何^{なん}疋^{びき}かの絹、二重箱の茶器らしき物、その他、金銀につもっても、少なからぬ程のもの。

松琴尼は物を見ず秀吉の情を見た。年^{とし}経^へても忘れておられないということは、髪をおろした身にも、やはりうれしいにちがいがなかった。

男女の愛慾としてでなくても、人間と人間とが歎^{なげ}び合^あう情愛はなお純粹である。おそらくは、いや、はつきりと、秀吉の心もそうであろう。いまの身には、用なき物質ではあるが、そのお心はありがたく戴^{たか}いておこう。彼女はそう思いつつ厚く礼をのべて、

「大坂表へお帰りの上は、かように、何も事なく暮しておりますと、よろしくおつたえくださいませ」

と、使いのふたりへ、ことばを託した。

「その通り申しあげておこう」

と、清左衛門は、ぎツと云った。本来、かつては、主人のおもい者だった婦人。もつと、いんぎんにあるべきだが、門口で変な男と感ぜられる者を見てしまい、尼の住居というのに、世間もはばからず音曲をかき鳴らしたり、酒杯のあとなど見るに至っては、つい尊敬を欠くのもしかたがないと、自身へいいわけを持ちながら意識してぞんざいな態度をとるのだった。

日頃も、好まない客には、好まない顔をしてみせる尼なので、清左衛門が非礼であろうと、何であろうと、尼としても問うところではない。

あたりを取片づけている於通にむかい、笑いばなしなどしかけていた。清左衛門も、つれの漸蔵主と、何やら私語していたが、やがて蔵主から尼へ、

「ちと重要なおはなしがあるので、その若い女子を遠ざけて給わるまいかと、云い出した。

お安いこととして、尼は於通に旨をふくめた。於通は退がる。清左衛門はかたく改まって口をきり出した。

密談とは、こうである。

いよいよまた避けがたいものが始まる形勢が濃い。今までののは、こんどの戦争にいたる

前提戦にすぎず、こんどこそ天下わけ目の争いとなろう。いや、それはもう眼前に始まっている。——伊勢その他の各地において。

各地の有力な武門にたいする北畠信雄の呼びかけ策は、とみに活潑になっている。なかならずく東海の徳川家康とは、全幅的な攻守同盟をむすび、家康もまたようやく、彼本来のうごきを明らかにしかけている。

また、ちようほう諜報によれば、この三月なかばまでには、信雄は清洲に移り、家康は岡崎を発し、両者は清洲に会同して、作戦をねり、かつ大々的に秀吉の非を鳴らして、自己の名分を天下に訴え、堂々と、両者の聯合軍を押しすすめ出すものと観察される。

——とすれば、この大戦の決戦場となる地域は、どうしても、伊勢、美濃、三河を外廓として、木曾川を中心とする尾濃びのうの山野たることはいうまでもない。

秀吉方においても、それらの考慮には、おさおさぬかりはない。

大坂城はすでに竣しゅん工こうした。京都の治民組織もまずできたところである。この新しん版はんと、この新勢力の府へ、おめおめかれらの馬や旗をまつものではない。

大挙、東下して、徳川北畠の聯合軍とたたかうであろう。——さて、それについてはである。

ここに、木曾川近くの、戦略的要地に、沢井左衛門雄重たけしげというのがあり、尾張領への間道を扼やくす黒田ノ城をあずかっているが、それだけに北畠中將たの（信雄）が恃たのみとしていることはいうまでもない。

ちと、むりだが、これを何とか説きふせて、味方に加えるときは、木曾川渡りの便はいうまでもなく、戦略地全般にたいして七分の利を占め、尾張三河へ入るにはやすく、聯合軍の進出には絶対的なさまたげになる。

（どうしても、沢井を口説くどき落さねばならぬ、利を喰わすに物惜しみすな。条件は望み次第とし、何でもかでも、説きつけてこい）

秀吉の命はこうだった。武藤清左衛門ひとりの使者ではなおお心もとないとして、大心院の漸蔵主ぜんざうす、弁舌のさかなな禅僧なので、これをも付けて、大坂を立たせたのである。

立つに際して、秀吉はまたふと、

（わかれて七年になる、半兵衛が妹のおゆうは息災そくさいかどうか、途中、立ちよって、消息を問うてみてくれい）

と、ことづけた。

情ふかく、わけて女には親切であくまで甘い主人である。清左衛門は、仰せかしこまつ

て出立したが、敵地へ反間の計をいだいて入りこむ命がけの使者として、ただ立ち寄るのも道楽に考えられた。で、漸蔵主とも、途中ではなしあい、

（これは却つて、もつつけの倅せだ。おゆう殿のいる地から、目的の沢井左衛門の城地までは、わずか十二、三里の近さ。いきなり、先の黒田城へ向うには、危険も多く、万一の失敗も考えられる。ひとまず菩提山のふもとを足場として、策もねり、旅装も変え、内々の聯絡もととり、万全を期して、黒田へ乗り込もう。それに如くはなく、それには願つてもない足がかりというもの）

漸蔵主も、それは名案とした。おたがいにやり損なえば生きて還れない仕事である。智慧はしぼらねばならない。功名に危険はつきものといえ、死んでは何もならないと考えた二人だった。

しかし武藤清左衛門が、これらのことを、すべてありのまま松琴尼へ打明けたわけではない。松琴尼にたいしては、もとよりその一端のみをかたり、自分たちの考えは、秀吉からのいいつけであるとなして、

「ご迷惑ではあるうが、当分の間、ここをわれらの宿に拝借したい。そして、明日にでもあれ、ひとつおん許に御足労をねがい、黒田ノ城まで、お出向きねがわねばならぬ」

と、持ちかけたのであった。

声を落したりつよめたり、長々と、清左衛門がかたるのを、松琴尼は、だまって聞き終つたが、やがて、ひと事のように、

「ほ。わたくしが、なぜ黒田へ行かねばなりませんかねかの」

と、まるで無反応な顔してたずねた。

清左衛門は、ジリつく気もちを、あいての冷静さへ、押しかぶせて、

「御主君のおさしずなのじや。まずおん許を、そつと黒田ノ城へやつて、沢井の内意をうかがわせ、尼どのの手引きで会うのが、人目にも立たず、良策であろうと」

「迷惑いたします」

「なぜな？」

と、清左衛門は尖とがつた。

「なぜというて、この身は、ごらんの通りな無用人です。仏の弟子です。戦の役になどたつ者ではありませんせぬ」

「いやいや、尼御前ごぜのお身なればこそ、かえつて都合がよいのだ。大坂表の御命令とあれ

ば、いやとも仰せられまい」

「どなたの仰せつけでも、そのようなことに、関かかわりあうなどは、亡き兄が悲しみまする。——兄は武門に生れながら武門の宿命をよく見通していた人でした。その兄を、否いなみ難くさせ、御自身の軍中のものとなされた秀吉様は、やはりよほどお偉くて、兄以上のお人であつたからでしょう。……兄は、栗原山を下りるときから、平井山の長陣で病死するまで、よく自分を嘲わらつて申しました。かく行けばかくなるものと知りながら、やはりこう来てしもうた、おろかなわれよ。妹よ、そなたは、つよく生きてゆけよと。——さればこそ髪をおろして、お暇をいただいたわたくしです。お使者方、よく御分別くださいませ」

「……………」

清左衛門には、返すことばが見出せなかつた。が、弁舌家の漸ぜんぞうす蔵主は、あざ笑つた。

「口ぎれいなこといわるる。尼どの。それはほんとか」

漸蔵主は、罵ばと倒し出した。

「今ほど、こそこそ出てうせた男は何じや。尼寺で琴はまアよいとしても、男をひき入れて、酒もりなどは、どんなものか。近頃、世のみだれをよいことにし、坊主どもの行状は、ひどくなるばかりじゃが、とりわけ尼というメスどもがよろしくない。都でも、物好きな男たちが、比び丘く尼に買いを知らずに色事はかたれぬなどと申すをよく耳にするが、まさかこ

んな山里にまで、みだらな悪風が行われていようとは思わなんだ。いかに落ちぶれ召されたとはいえ、以前を思うたら、恥かしいと思われぬものか。秀吉公の面よごしじや。こんな尼に、大事はたのめぬ。武藤どの、長居は無用だ。さ、帰ろう帰ろう」

禅坊主というものは、いったいに口ぎたないものだが、漸蔵主はことに舌がよくうごくので、聞くにたえないばかりである。

が、松琴尼は、ちらと、ほほ笑んだのみで、

「お帰りか。それは、さつそくな」

と、止めもせず、ただ二人をながめている。

清左衛門は、まずい顔をした。ここを出て、どこへ行くかだ。蔵主はちと云い過ぎた。従者を入れれば五人づれ、旅籠はたごもない山村をうろうろしていたら人の噂のたねになろう。

大事の前の小事ということもある。そう考えて彼は急に、

「いや尼どの。お気をわるくされな。蔵主は有名な毒舌家じゃ。それも、肚はらからいうたわけではおざらぬ。平に」

と、あやまり入って、決して怒りもしていない尼をなだめぬいた。

おかしくてならないように、松琴尼は笑い出した。清左衛門は従者をよび、泊るときめ

て、馬のつなぎ場を、於通へたずね、自身も旅装など解きはじめる。

「夜中に、追い立てるも無慈悲である。よいようにお使いなされ」

細い渡り廊下をこえて、尼はあなたの小部屋へかくれた。武藤の従者たちは、於通に厨^{くりや}房の案内をさせて、それから夜食の炊^{かし}ぎにかかるという騒ぎだ。行糧は馬の背に持つていて、地酒はのめぬ、都の酒をと、それまで携^{たずさ}えているのである。

「いや、負けたな。今夜は、負けたわ」

漸^{ぜん}蔵^{ぞう}主は舌打ちならした。したたかな酒豪らしく、旅の途次も飲まねば眠れぬたちらしくみえる。真つ赤な顔を振り振り云った。

「なにが負けたといわるるか」

清左衛門が怪しんで問うと、彼は、

「イヤ、最前の雑^{ぞうごん}言は、あれや禅坊主の奥の手でな、機^き鋒^{ほう}を奪^とるというやつだが、あの尼はビクともせん」

「よくやる手か。これや心得ておく必要がある」

「さすがは、半兵衛重治の妹、できている。あれなら黒田ノ城へやっても、うまく手引をつけてくるだろう」

「が。行かぬといっておる」

「明朝、あらためてもう一度頼んでみるのだな。それでもきかねば諦めるとして」

「あの口吻くちふりでは、きくまい」

「ウム。きくまいな。何せい、近ごろ出色の比丘尼びくにを見た。尼の偉いになると男僧も及ばぬのがある」

「ひどく感服されたの」

「はなしに聞いていた慧春尼えしゆんにのごとき者だ」

「慧春尼えしゆんにというのは」

「鎌倉の世の頃に、相模さがみの糟谷かすやに生れ、容姿花のごとき美人だったが、年三十を過ぐるや、尼となつて、無数の恋人を唾然あげんとさせてしまった。ところが、禪門に入つても、若僧や老僧や、つきまとつてやまない」

「鎌倉時代にも、貴僧のようなのが、たくさんいたとみえるな」

「あはははは。まず、そうなんじや。するとここに熱烈な一僧があり、いのちがけで尼に恋し、ある夜、腕力にもかけまじき血相けつそうで、わが情慾を遂げさせて炎の苦患くげんを救えと追つた。すると慧春尼が云つたという。おやすいことです。しかしおん身も僧、わらわも僧

である以上、交会はよろしく俗ならざる所をえらんで相樂しみましょう。けれど御僧はまさかその場に臨んでおいやとは云いますまいねと、念を押しした」

「なるほど、そして」

「火のごとき恋の若僧、なんのと答えた。もし尼がわが願いをかなえてくれるならば、湯火を辞せずと約束した。——数日の後、了庵の上堂に、一山の衆が雲集した。と、ひとりの尼、真白い全身に尺布もまとわず、赤裸の觀世音かと思ゆるばかり、凜として階の上に立ち、微妙の靈音ともひびく声を張つて大衆の中へ云つた。先の夜、尼の室に忍んできた御僧、お約束のごとく、今日ここで交会しましょう。はやく来て、おん身の慾情をほしいままに遂げ給えや——と」

「おどろいたろうな。一山の禅坊主も」

「当の若僧は逃げ出したそうだ」

「やれ、あわれ。それや若僧の方に同情される」

「する値打はない。禅坊主などにならねばよかつたのだ」

「そもいえるな。慧春尼とは、それでいて、そんな美人だったのか。聞くだに、惜しいところがある」

「慧春尼には、もつとおもしろい話もあるが……。ま、やめておこう」

「なぜ。なぜの」

「いかにわしでも、美しいおとめの前では、ちとしかねる話だから」

いわれて、清左衛門は気がついた。

いつのまにか、於通が来て、坐っていたのである。ほの白い顔に、燈火のまたたきをうけながら、漸蔵主の露骨なはなしにも、とんと無風の花の枝のような静けさで――。

「や。ここにも、慧春尼がひとりいた」

清左衛門は、ほんとに、びつくりしたような声でいった。

さすらい人びと

――鳥瞰ちようかんして、視界のかぎりを、ここから見渡すと。

尾濃一円の平地には、網の目のような交通路と、静脈動脈にも似た大小の河川かせんと、周囲の山岳地方からちぎれて飛びわかれているかのごとき丘陵と、無数の村落と、それから基石きの利きどころにも似た要所要所に町があり、また城がある。

郷、郡、国の境界は、それらの小都會の城地を中心に、複雑な勢力の入りくみかたをして、その分布をたしかに見分けるのはむずかしい。

朝に移り、夕べに変じ、どこはなにがしの何領といつても、忽ち領有権のかわること、四季の移りより早いからである。それをふつうとし、住む者も、異いとしていない地上だった。

天正十二年三月初め頃におけるこの一帯は、まさにそうした分布變動の直前にあつた。それもこんどは劃かつ期的な大變化を予測された——たとえば地震の震源地帯のような——無気味な様相におおわれていた。

この無気味の因をなすものは、前にいったような、複雑極まる勢力と勢力の交錯こうさくにあるのであつて、これは戦争が行われているときよりも、人間の心を悪くし、また疲らせた。小手こてをかざせば望めるような——或いは川をへだてて相對しているような——または、丘と丘とで睨み合えるような——郡を隣りしているそれらの城と城とのあいだには、まったく一刻の安心をももち合えなかつた。

あなたの城は、こなたの城を。こなたの城は、あなたの城を。——いつ敵になるやもしれぬと、警戒しあい、人や物質の出入りにも、すぐ猜疑さいぎをつのらせた。夜もおちおち心ま

では眠らず、

(いったい彼は、東軍へつく者か、西軍へゆく者か)

と、諜報交戦に猜疑しあっているその者自身、実はまだ、自分の肚は決めてもいないの
が多いのである。

とはいえ、帰するところ、かれらの抛り場は、西につくか東かの、二つ以上にはなかつ
た。

いわばいつのまにか、はりよく 覇力の日本は、二つに割れ、その二つの対峙が、いまや表面化
してきたものといえる。

歴史をかえりみると、或る到達の階梯かいていには、いつも二つの対峙という過渡期がある。
二つの相対は、過去の例でみると、かえって、多くの複数よりも、対立が尖鋭せんえい化され、
なぜか、両者の吻ふんこう、合的平和にはあまんじない。あくまで一つにまでなろう、一つにまで
ならねばやまないとする本能がある。

なぜかを、人は考えもし、その理由なき成りゆきに追いこまれる愚を知らないではない
が、地上に人間集団の歴史が描かれ始めてから、二つのものの勢力が二つにとどまって平
和の長きを得た例をほとんど見ない。

もともと人間の集団社会は、原始部落の鬭争から発足して、次第に大をなし、郷を称え、郡をなし、やがて国を形成し、さらに国と国との複数が戦い戦い単位に近づき、ついにその最大なるものが二つとなり一つにまでなつて、ここに帝王や將軍の一世が擁立され、或る期間の最盛時代が現出する。

しかしその統一本能が実現されても、ひとつなるものは極めて文化の爛熟から廢頽への過程が早く、また忽ち、分裂を起しかかる。しかも、その再分裂作用もまた本能的に不可避なのである。世紀以来、これは近東や地中海に発足した西洋史に觀ても、東洋大陸の長い興亡史にみても、ほとんど、例外がないといつていい。かんたんにいえば、宇宙の意は奈辺にあるやを知らないが、人類のしてきたことは、何千年も同じことを繰り返して来たようなものだった。古くから哲人は何度も云つた。なんと、人間は、愚かであることか——と。

「愚かなるもの、人間」と、人間の中でも多少思慮あるものは、考えつかないではない。けれどそんな一部の思慮分別などは無視し去つてぐんぐん行くべき方向へ行つてしまうなにか狂猛な本能が人のすむ地上には所在するらしい。それはあながち一箇の風雲児や一箇の梟雄のみが作り出すものでもないようである。

この愚をもつとも広汎こうはんに演じ、また、最も深刻に経験し、同時に早くから悟り、たれよりも深く考えていたのは、古い歴史をもつ中華の禅僧たちであった。その禅家がこれに下した断案として、人間にある三つの本能をあげている。

おんじきそくぜじどう
飲食即是道

いんよく
淫慾即是道

鬪争即是道

つまり人間が人間として生きつづけたための要素をこう三つに大別して、この絶対必要でまた厄介きわまる身のなかのものを、まず個人のうちに解決しようとかかったのが、かれらが面壁めんぺきや公案こうあんのねらいであった。そして初祖以来、世々の群禅の末孫たちのうちには、解明のかぎをつかんだものも少なくはあるまいが、それはみな彼らの山房林室のうちにとどまり終って、ついに衆生しゆじやうのうちには、やはりさしたる影響ももたらさなかつた。いや、かえって禅の生死超脱ちやうだつの工夫を、修羅しゆらの中で、鬪争のために用うる者の方が殖ふえてしまった。

いまや、天正の世は、応仁の乱麻らんまから、割拠かつきよしていた群雄のおびただしい複数が、徐々に単位に近づき、信長によつて、飛躍的にそれが一ひとつに達しようとしたとき、忽然こつぜんと彼

は世を去り、彼の死は加速度に、一のてまえの——^{ふた}二つの世代”を眼前にして来た。

そうした人の世を、これまた、まったく無感覚のように、

「オ……。ここまで来ると、もう梅も散っている。岩手の里よりよほど陽気は早いな。水のすがたも春らしく、桜のこずえも、あと一雨でほころび初めよう」

わらじに踏む草萌え^{くさも}を楽しみながら、おちこち眺めては、ひとり自然の草木と語ってゆく一旅人がある。

赤坂の宿場から南平野へ出、やがて神戸^{かんべ}の町はずれへ来たその旅人は、相川堤の桜並木に立つと、ふと思ひ出した山家集^{さんかしゅう}の一首を、小声でひとりごちに歌っていた。

「……春となるさくらの枝は何となく花なけれどもむつまじきかな。——花なけれどもむつまじきかな」

その時どこかで「友松さま」と、よぶ者があった。旅人は堤から川のみぎわを見まわしたが、耳のせいかと思ひ出したらしく、また、花なき桜の梢^{こずえ}を見あげていた。

友松は、前の夜、尼の庵から帰ると、ただちに筆をとって、あの下絵を基本に、隠士竹^{いんし}中半兵衛像を一気に描きあげてしまい、なに思ったか、それを早暁、松琴尼の許へとどけると、すぐその足で、ひと月余り客遊していた菩提山のふもとを辞し、例によって、あて

なく先の旅路へむかい出して来たのであった。

(どうして、そんな急に……)

と、松琴尼にも今朝あやしまれたが、彼は笑つて答えなかつた。御機嫌よう、と一言のこして、霞の中へ消え去つた。尼と於通は、見送つていた。そして前の晩、友松が冗談のようによつたことばを思ひだしていた。

(お尋ね者です、てまえは。——明智あけちの首を盗んでどこかへそつと埋葬したと噂されてい
る……下手人で)

当人の口からそういつても、なお聞く者をして、嘘まことか真か、迷わすような風であつた。

しかし、秀吉の家士武藤清左衛門の一行が、尼院へ着いたとたんに、彼は、風のごとく帰つてしまい、またすぐ翌未明に岩手の里を立て来たなど、不審にすれば充分な不審である。『明智どのの首盗人』とひと頃、市井しせいの話題だつた犯人は、案外、噂どおりのものかもしれない。

主家齋藤家の亡滅後から、彼はいまの境涯にあまんじて来たのであるが、その齋藤家を亡ぼした織田家のためには、かつて信長が安土城の大普請ふしんに、あまねく天下の画匠に障壁画さいかんの彩管をふるわせた時でも、彼のみはそれに参与しなかつたのみならず、かえつて彼

は明智光秀やまたその老臣の齋藤利三などと風交の深いものがあつた。特に光秀は、晩年閑を得る身となつたら、友松について、画などを習つて悠々自適したいなどともいつていた。

火のない所に煙は立たぬというが、思いあわせれば、それやこれ、彼と明智との縁故はふかい。山崎一戦の後、三条河原から、暗夜、心の友の首を抱いて、人知れぬ所へそれを埋けてやった犯人が、事実、友松であつたにしろ、かれの芸術家としての名をけがすものでは決してない。世間もまた、同じ盗人でも、この首盗人には、ひそかな同情と理解をもつてゐるのだつた。

けれど、当時の秀吉の名による逮捕令はまだ解かれていない。三年ごし、犯人は分らないでゐるが、詮議せんぎはつづいてゐるかたちだ。それも友松にはなんの苦痛でもあるまい。日蔭の道こそ、彼の画生活ひょうくわくと漂ひょう泊はくの旅にはむしろ好ましかろう。

「友松さま。いつまで何を見ていらつしやるんです」

二度目の声でした。あきらかに今度は彼のすぐ背に聞えた。

堤の蔭にさつきから腰をおろしてぼつねんとしていた小娘であつた。友松はふりかえり

「友松さま、

「オヤ」

と、眼をみはった。

「於通おつうどのではないか。何しに来たのか」

「あれ。友松さまこそ、私とのお約束を忘れたのですか」

「約束？」

「あなたが岩手の里を立つときは、きつと私を、京都へ連れて行ってやる。さもなければ、都の知人を、紹介してあげると、あんなに仰つしやっていたでしょう」

「ああ、あのことが」

友松は、おもわず頭を搔いて、にが笑いした。いや、当惑にみちた顔をした。

「忘れてはいない。こんど……この秋、岩手へまた来たときに、きつと、約束を果す。それまではおとなしく、松琴尼のそばに仕つかえて、学問をいそしみなさい」

「それくらいなら友松さまに、あんなに何度もおねがいはしませぬ。尼院の生活は、とてもわたくしには心にそまないのです」

「若い女は、都へ都へと、みな夢みているが、いま時、この乱れた世に、都へなど出たつて、自分を悪くするだけのものですぞ」

「お説教は、お卑怯ひぎょうでしょう。それも耳に飽くほど伺いました。けれどわたくしの気もちも、それ以上、おはなししたつもりです。……それ程にまで望むならと、ついにあなたも御同意の上、岩手を去る時はと、お約束して下さったものではございませんか」

「そうだ。そうではあつたが」

「うそだったのでございますか」

「弱つたのう」

「いけません。たとえ嘘で仰つしやつたにしても、私はもう尼院へは帰りません。正直にあなたのお後について、禅尼さまにも黙つて出て来てしまったのですから、……きつと、そんなことだろうとおもい、わたくしは近道して、ちゃんと、友松さまの来るのをここに待つていたのでございますよ、——お困りになりました」

「冗談ではない。ほんとに、禅尼どのにも黙つて、出て来てしまわれたのか」

「あなたとちがい、於通は嘘はつきませぬ。この通り、常から旅支度もとのえて、いつでもと心がけていたのです」

「やれやれ。だましもすかしも利きかぬ女子おなごだ、まあ、そこへ坐ろう。そしてもう一ぺん友松のことばを聞いてくれい。わるいことは、決していわぬ」

友松は、さきに腰をおろして、思案の膝をかかえこんだ。

「なんですか」

於通も素直に、彼に倣^{なら}つて、草の上に坐つた。

すがた、ことばは、素直であるが、これほど素直でない娘を友松は余り知らない。

ひと月あまり、同じ里にいる間、彼の借りている宿へ、於通もよくやって来た。それには、彼女としての目的があつた。

田舎暮らしはたえられない。尼院の日々はかなし過ぎる。都へ出たい。新しい知識にふれ、文化に浴し、希望ある生活の中へ立ち交じりたい。

——こう訴えてやまないのだ。

友松は、よい程にあしらい、また、幾度となく、その非を論^{さと}した。

（それはとんでもない野望だ。われわれ武門の端^{はし}くれだつた者さえ、弱肉強食の巷^{ちまた}には剋^かてず、落魄^{らくはく}、愍^{びんぜん}然たる境界に追いやられ、いまは争鬪^{ういてんべん}の世に、まったく思い断^たつてゐるのに。——若い女性の身そらで、あんな乱世の中心、有為^{ういてんべん}轉變^{てんぺん}のるつぽへ、何で好んで飛びこんで行こうとなさるか。友松には気が知れん。わしは反対だ。それよりは、草ふかくとも、平和な田舎に住み、月明りに源氏を読み、秋日に画筆をとり、雪の夜に、歌など

作つていられたら、至樂、これに越すものはあるまい。そしてよく働く男を夫にもち、すこやかな子をもうけ、母の愛の中に、女性の安住と満足を求めようとするなら、おそらくかなわぬことはなく、失望、傷魂のいたみをうけることもあるまい。

友松のいうことはいつもこれに尽きていた。ふつうの若い女性へなら、多少、聞かれるふしもあるかもしれないが、於通にたいしては、寸効もなかつた。

彼女は、友松などの考えを、すでに古い人の固定した觀念としか聞いていない。彼女は幼少すでに安土文化の新鮮な空気に、ものごころを揺り醒まされていた。当時の信長の華美な生活ぶりも見ていたし、城下の南蛮寺では、海外の知識をそそぎこまれもした。

そこでは、馬太伝マタイでんやヨハネ伝も読んだ。伊勢や竹取たけとりや源氏などの古典に親しんだのは、もつと早くからだだった。安土あづちの大奥では、まだ十三、四歳の彼女をさして、早くも、将来の才媛さいえんのようにたたえた。信長の耳にはいつて、信長の前で、小色紙に即興の和歌をしたためて見せ、美しい菓子と手筈てはこを褒美にもらつたこともある。

すぐれた天性にちがひなかつた。しかし短い期間の急進的な安土文化は、あまりにこの鋭感な少女の発芽期には強烈な太陽でありすぎたかもしれない。また、本能寺変による権き花一朝んかのみじめな敗戦亡流のうき苦勞も、彼女の年齢としては、余りに深刻な経験であり

すぎた。

一時、生れ故郷の小野の里へ帰つてから、彼女の幼少をむかしから知っている者は、人がちがつたようになつたとみないつた。事実、彼女の天性の才と天質の容姿のうちには、前に述べたような影響がかなり濃く——後天的なものとして加えられていた。

だから、姿に似ず、云い出したらきかない、また、思いこんだら果さずにはおかない——といったような性格が折々に行動や言語に出た。小野の里の老人たちは「いよいよおきれいにはなつたが、女らしゆうなくなつた」といつて、孤独な彼女をうとんじるようになった。乳母の良人が縁故をたどつて、松琴尼の許へ彼女をつれて行つたのは、彼女に冷たい故郷の風からそつと温かい陽なたへ根を移そうとした育ての思いやりであつたろう。

小野の里の老人のみでなく、友松もこの小娘を心から好きにはなれなかつた。が、その才気には、正直、舌を巻いて、田舎におくのは惜しいとも思つた。本来、居るべき所を得ないために、田舎人も彼女をうとんじ、彼女も田舎をきらうのであろう。時と所を得しめれば、この名木は、時代の文化の中に、咲き匂うにおかもしれない。

ふと、そう思つたのと。——また、どう論さしてみても彼女が初志をひるがえさないので、とうとう或る時、約束してしまつたのである。——承知した、尼にはなして、都へつれて

行つてやる。そして、どこかよいお邸へ紹介の労もとろうと。

それはもう十日も前のことだった。友松は、絵のためにすっかり忘れていたのである。今朝立つとき、ちよつと、思い出しはしたが、おそらく、彼女も忘れていたのではないか。昨夜の容子をながめても、けろりと忘れはてているような風でもあつた。——ならば幸いである。彼女のためにも。自分のためにも。

松琴尼とともに、尼院の裏に立つて、自分の立つ姿を見送つてくれた彼女なので、友松はもうすっかり安心し、そのことについては、いささかの顧慮もなく、この相川堤まできて、ひとり久しぶりの旅心地にわれともなく佇んでいたところを、不意に、その於通に面とむかつて違約をなじられたのであるから、五十をこえた男の彼が、まだ十七の小娘に顔をあからめてどぎまぎしたのも、あながち故なきことではない。

「春も、春さきは、一しおよい、平和だなあ」

友松は、相川の大きくゆるやかにゆく水の曲線にむかつて、ひとりごちに云つてから――

「こんな平和な自然も、あと幾日、無事でいるやら。おそらくこの堤の桜が咲きそろふ頃

には、この辺りも、軍馬に荒れ、弾たまけむりや血泥にまみれ終るだろうよ」

「ゆうべのお客たちのはなしでは、また大きな合戦になりそうな……」

「なるな、いやでも。きつとこんどのは世をあげての大戦乱になる。……と感じたから、わしはさつそく、人里を遠くはなれ、これから飛驒ひだの奥へでも行つて、静かに、絵を描く場所を見つけようと思うて来たのだ。しかるにお許もとは反対に、これから都のまツ只中へ出たがっている。何としたことか」

「お分りにならないでしょう。けれど私には私がよくわかっております。無分別ではございませぬ」

「聡明なお許もとのことだ。考えなしとはいわぬが、ちと功利心に燃えすぎる。虚栄も夢を手つだつていよう。せつかくの天性をもつて、かえつてそれを不幸のもとにせねばよいが」

「わたくし。……ここでお別れしましょう」

於通は不意に立つた。眉をひらいた友松の顔が瞬間に見られた。思い直してくれたか——と、うれしく、ほつとしたらしい。

「や。覺さとられたか。思いとまって、帰つてくれるか。帰ったら禅尼どのにも安心させてあげたがいい。……そして二人とも、くれぐれこのすさまじい世に捲き込まれぬよう、分ぶんを

守つて、無事にお暮しなされよ」

「いいえ、友松さま。わたくしは、そこへ帰るのではございませぬ。一度出て来た尼院へまた戻る気はありません」

「えつ。では、どこへ」

「小野の里へ行きます。そしてそこから自分の好きな所へ行きます。もう人を待たのみにはしないつもりです」

彼女はその堤づたいに、さつさと上流の方へ歩み去つてしまった。すぐ彼方かなたの加納かのうの渡しを越えると、わずか一里にして北方郷となり、彼女のふるさとの小野の里は長良街道ながらの山ぞいにあつた。

渡し舟を見出すと、於通は足をとめてふりむいた。友松の影が遠くに小さく、まだ佇ちより立つしたまま自分の方を見ていた。唾然あぜんとした友松の顔つきがおもい出され、彼女はなんとなくおかしくてならなかつた。笑いながら、笠を振つた。彼方の友松は手も振らない。棹さおを立てたようにいつまでもじつとしている姿だつた。

渡しの中には四、五人の旅行者や里人が先に乗つていた。於通もその中に交じり、もういちど下流の堤をふり向いた。どこへ立ち去つたか。友松の影はもう見あたらない。

彼女にとつては、それも過去へよぎった鳥の一影でしかない。一年余り養われた菩提ぼだいぎ山下の草庵も、きのうまでかきずいていた松琴尼も、過去すべて彼女の今のこころを振りかえらすには何の魅力もないものばかりだった。ゆくての夢のみが彼女の胸には春の野のように匂い拡がっている。舟べりを洗う水の音も、空にかすむ雲雀ひばりのねも、自分の勇気と希望の門出を祝福するためにあるもののような心地だった。自己のために存在しないものはすべてちようどこの渡し舟の中にある乗合客のようなもので、岸につけばすぐ忘れ去る人々だった。

「おい、お前ら、何も知らず暢のんき気な顔をしておるのう」

舟が川の中ほどへ出た頃、乗合いのうちにいたひとりの侍が、小商人や百姓たちを、無智ぼんげの凡下とあわれむように見くだして云った。

「近いうちには、またこの辺も戦いくさになるぞ。お前らあ、今のうちに、山の方へ逃げおらんと、火攻め鉄砲攻めになつてから、じじ婆や子どもを抱え、吠ほえ面づらかいてまた路頭に迷うのだ。いつもその日まで、金儲けや畑打ちなどして、暢のんき気づらしておるから泣きを見るんじゃない」

百姓の女房も、旅商人らしい男も、あきらかに顔色を失ったが、さりとして問う言葉も、

答える言葉も知らないのである。

対岸は、加納の宿だ。ちようどこで日いっぱい暮れ、軒傾いた屋並びに夕煙がこめ
ている。於通は、雇い馬を求め、荷鞍の上へ横乗りになった。小野の里へはそこからまだ
一里半はある。

「お前さまは、小野のお館のお姫さんではござらっしゃらぬか」

馬子は彼女をうすら覚えてる者だった。於通が、そうだと答えると、馬子は、春の宵
をゆたりゆたり手綱をひきながら、

「やっぱりそうでござらっしゃったか。お館のお姫さんは、一年の余もどこへ隠れておし
まいなすつたずらと、里の衆がよう折々お噂しておりますだに」

ふるさとの人々には、この地方の豪族として古かった小野政秀の在りし時代が、なお根
づよく記憶にあるらしかった。けれど彼女は、その父を知らない。母のおもかげもいと淡
かった。憶えているのは、むかし自分が生れたという所の、城づくりのような石垣と焼け
亡んでいる屋敷址の濠だけだった。ふるさとといつても、彼女には、さして深いなつかし
さも執着もない。

ただ預けられた松琴尼の許から離れては、さしずめ帰る所もないので帰って来たにすぎ

ない。そしてそのあとは、むかしの乳母の家しかなかった。

去就きよしゆう

木曾川の上流は、犬山城の根を洗つて、長流の下ること十里、また一つの城を南岸に見てながれる。

尾張領葉栗郡はぐりの黒田ノ城である。

城の内に起居している人々はすべて先月以来、非常態勢につき、戦時生活をしていた。

城主の沢井左衛門雄重たけしげのまわりは、つねに甲冑の人々でつつまれていた。

「会うて四の五を聞くのもうるさい。説客というやつは、どこの使いでも、弁舌の土ときまつていて、かならずうまいことをいう。——追い返せ、追い返せ」

左衛門雄重は、特に、語尾をにごさぬように、云いきつていた。

十数名の股肱ここつが、つめあつていた。彼らの容子には「会つておやりなされてもよいではないか」とする色があきらかに漂ただよっている。左衛門は、取次の者への返辞としてよりも、それらの者たちへ自分の意志を明確にしておくため、今のごとき語気を用いたものだった。

「あ。……いや、殿」

果たして、柵橋たなはし甚兵衛という物頭ものがしらが、一部の家臣の意を代表して云い出した。

「ともあれ、一度ならず二度までの、羽柴殿からのお使い。さように、追い返さるるも、

御狭量びきよつりよつにとられて、おもしろくないでしょう。諾否だくひは、もちろん御意にあること。一

応、使者なるものを、おん前にお引かせなされても、よろしかろうと愚考されますが」

矢頭主膳という老臣もつづいて述べた。

「説客のことばには、まます思わぬ示唆しそを得るものでおぎる。存分、申し分を吐かせ、その上の御賢慮なり、或いはまた御評議に附されても、決して、殿の清節にかかわることはございませぬ」

久保勘次郎、その他四、五の家臣も、もつとも——と領うなずくような面持おももちを示した。左衛門は、彼らがなお、首尾両端を持しし、秀吉方へつこうか、家康方へ組そうか、一城の方向としてよりも、自分自分の方途として、心のうちで迷っているらしいものを見のがせなかつた。

「うむ……それ程にいうならば」

と、左衛門もいやいやながら承知した。

「——会うだけは、会ってみよう。では、羽柴の密使とやらを、すぐここへ通して来い」
 すぐといつても、それから小半刻こはんときはかかった。

ふたりの禅僧と、ひとりの山伏ていの男が、やがて客室に案内されてきた。室には、平服の左衛門のほか、たれもいなかった。しかし、武者隠しの小ぶすまの内には、屈強なる侍が、万一に備えていることは、どこの城内においてであろうと、普通なこととされていた。

「羽柴どのお使いとはお身たちか」

「左様で——」

と、三名は礼儀をとつた。山伏ていの男が正使、禅僧のひとりが副使。羽柴秀吉の臣、武藤清左衛門と大心院の漸蔵ぜんざうす主ですと告げた。

ここへ、秀吉からの派使は、これで二回目だった。第一回は、秀吉方として、明らかに失敗し、沢井左衛門のその折の返辞としては、

(たとえ、どういう好条件でも、羽柴方に味方する意志はない。自分はいくまで主恩のある北畠信雄様と行動を共にする。もし信雄様を離れるほどなら、秀吉ずれの乱臣らんしんぞくし賊子の仲間入りするより、将来の大器と尊敬している徳川家康どのへ従うだろう)

と、いつてやった。

秀吉方をさして、乱臣賊子といったということは、かなり秀吉を刺激したにちがいないが、ひとり沢井左衛門の言ばかりでなく、近頃、こういう非難は、世上に聞くところである。大戦前夜の空気をまえにし、早くも、徳川あたりから、戦争名分がとなえ出されている。同時に、秀吉方の旗幟きしにたいし、理由なく野望の乱をかもす天下の賊——という悪印象を一般に植えつけようとする策謀がすでにひろ拡く行われていた。

宣伝戦なら、より以上、秀吉方もやっていることだ。秀吉の怒る理由はない。彼は数日をおいて、ふたたび第二の派使を決行した。これが武藤と漸蔵主であった。その人選において、これも重ねての失敗だったということは後には分ったが、いまや秀吉の周囲は猫の手も借りたほど四方八面に事端と劇務をひかえている。おそらくは、無難平凡な点において武藤が選ばれ、弁舌の雄として、漸蔵主が添えられて来たものであろう。

「もう一名の御僧は、いかなるお人か」

左衛門のたずねに、それまでさし控えていた漸蔵主のそばの禅僧は、

「御城下にある雲林院うんじいの和尚にござります」

と、初めて答えた。

「雲林院の和上わじょうが、何の御用ごようばしあつて、御同行ごどうぎょうなされたのじゃ」

「実は、岩手の松琴院とは、同系の友でございまして、その松琴尼より聞いて参られたと
のことに、お宿の世話を申しあげ、また御城内へのお使いにも、拙僧せつそうが労とを執とりましたよ
うな仔細しじゆにございます」

「そうか。それは大儀たいぎといたたいが僧侶そうりよなどが、要らざる密使みつしの手引などはせぬがよろし
かろう。——これからの用談ようだんにも、御僧ごそうには関かかわりあるまい。先に歸かへられたらどうだ」

「はッ、願ねがうてもないことで」

と、雲林院は、赤面せつめんと狼狽ろうばいをもつて、そこそこに室外そくがいへ退さがって行つた。

沢井左衛門は——これがすでに自分の返辞へんじである——として緘黙かんもくしていた。この強硬
なものへ、武藤清左衛門には、ちよつと、取りつき得えなかつた。

が、漸蔵主ぜんざうは、あいてが金銅仏きんどうぶつであろうと、うごかして見せるといわぬばかりな自負じふを
もつて、滔々とうとうと、弁わじ出した。迫せまりつつある天下分け目の形勢けいせいである。また、羽柴徳
川のいずれに次代つぎよが幸あいするやである。さらにはまた、秀吉ひでゆきを支持しじする諸雄しよゆうのいかに緊
密ひそかにして勇武比類ゆうぶひるいなきかである。——ひいては今、工成くぢつて、浪華ななわの壯觀さうくわんとなりつつあ
る大坂城おおいさかの規模きぼの雄大ゆうだいなことや、その主城しゅじやうをめぐつて、はやくも新しい浪華ななわの市街しちがひが、新

興的な賑わいを呈し、かつての安土文化にもまさる浪華文化が婦女子の服装から居室きよたくの様式、歌舞音曲にまであらわれて、それはそれは盛んなものであるなどと、世間ばなしまで織り交ぜて語りつづけた。そして、その言裡げんりには、

（家康どのが、近頃いかに人物らしくいわれていても、要するに、地方的人物にすぎまい）
というところを、暗にほめかして、ついては——と、また要点を秀吉からの内意へもどした。

「秀吉様には、是が非でも一度、あなた様にお会いしたいと仰せておらるる。と申しても、物情ぶつじょう騒然そうぜん、すぐとは望みも得まいが、やがてにおいては、秀吉様御自身、この方面へ御馬をすすめられる日のあるは見えておる。そのとき、木曾川渡しの前に、もし沢井どのの迎えに出会うならば、いかにうれしかろうぞ——などとも仰せられた。まったく、左衛門どのに、打ち込んでおらるのでござる。先頃、われらの以前に当御城内へ参り、いたくお叱りうけて立帰った使者どもの報告を聞かれても、秀吉様には、さらにお怒りないのみか、かえつて貴殿の節義を愛され、なお御執心を高められたようでおぎつた」

ここまで漕ぎつけてもらったので、武藤清左衛門も、潮に乗って、説き始めた。

「いま、蔵主が申しあげたことばに、何の誇張もありませぬ。もしお味方の御内諾を得る

においては、後日のため、当方よりも何かのお証しるしを——とて、実は、秀吉様より御朱印をおあずかりいたして来たような次第で」

と、彼は、肌着の襟えりの糸を解いて、秘めたる一書を取り出し左衛門に見せた。尾州領のうち四郡、望む所を与えるという封国の印だった。

沢井左衛門は、一べつして、それを破りすててしまった。返辞はない、この通り秀吉へ伝えれば足りる。すぐ去れ——とのみで席を蹴きつてしまった。

漸蔵主は、あつかましく、なおでんと坐まつて、舌をふるいかけたが、左衛門は睨にらみすえて、

「夜に入る前に、木曾川向うまで引きあげぬと、いかなる災さい害がいが身に及ぶやもしれぬぞ。それを承知なら、ゆるりとおれ」

とたんに、どやどやと家臣たちが入つて来て、両使を追い立て、城門の外へつまみ出してしまった。これら家中は、主人と共に、反秀吉の意志を初めから一貫してうごかさぬ者どもだった。

しかし、この日をもって、多少城内にもあつた去きよしゆう就しゆう静観組の空気も一掃されてしまひ、黒田ノ城だけは、信雄、家康へ二心なきものと、明朗な態度を示すに至つた。

西か、東か、いずれへ加担かたんするかの去就二途の迷いは、おそらく全国的なものであろう。ただ美濃尾張は、その縮図にすぎない。

信雄が三老臣を誅殺ちゆうざつした事件に端を発した伊勢の戦火は、すでに一日ましに拡大している。もう地方的事件でも限られた地域戦争でもない。天下分け目の大戦たる様相はいつのまにか充分すぎるほど準備されつくしている。

のこる問題は、ただ秀吉対家康、信雄の二大勢力の鋭角が、どこを会戦地とし、どこまでが作戦地域として、両雄の胸に算定されているか——それであつた。

ここ黒田ノ城へも、諜報ちようほうは刻々、東西から入つていた。

が、伊勢から南尾張方面の形勢は、三月初め頃からとんと分らなくなつた。秀吉の西軍が、蒲生がもう、滝川、堀、その他の諸將にひきいられ、ひとたび信雄の麾下きかに取られた峰の城、星崎城、松ヶ島城などに、猛攻をしかけ、急速な奪回戦だつかいせんにかかり出したことは聞えている。

また信雄が、伊勢の守りを、叔父の織田信照のぶてるや佐久間甚九郎正勝などにまかせ、にわかに清洲きよすへ移つたことも沙汰され、同時に、徳川方の援將えんしょうとして、水野忠重とか酒井

重忠などの手勢が、疾風、伊勢へ馳せ向ったこともかくれない風聞ではあつた。

どこの城は、西軍の手におちた。いや再び奪い返した。否、なお対峙たいじのまま、朝夕に、城外戦をくりかえしているなど——紛々ふんぶん々と、情報そのものにも、雑音が入り、臆測おくそくが加わり、そして戦火が次第に、身近に寄つて来つつあるという感覚だけが、慥たしかなもののように思われた。

「申しあげ難い使いですが、主君の仰せどおりにお伝えする。——御嫡子おひと方を質ちとして、直ちに、徳川家へお渡しあるようにとのことでござつた」

長島伊豆いず、安井将監しょうげんと名のる徳川家の使者が、今朝、前ぶれもなく、黒田ノ城へ臨んで云つた。

きのう秀吉の使いを追い返した沢井左衛門は、きようは家康の使者に接し、急に、人質を求められたのである。使者は、彼の感情のうごきを怖れ、気をつかいながら云つたが、左衛門は、

「武門のならわし、あらかじめ用意申しておつた」

と、さつそく一子文吾安雄やすたけに、家士二人を添えて、使者に託した。

伊豆と将監の二使は、その潔白けつぱくにむしろ驚いて、

「先頃から徳川殿の内意により、諸家にむかつて、御当家へなした同じ要請ようせいをして廻つたが、貴殿のようにあツさり質ちをさし出した者はほとんどない。何のかのと、例外なく支障をならべたり、日延べを策したり。……それをもつてみるも、なお首鼠しゅそ両端の日和見ひよりみがいかにもいかがわかりますて」

と、一般的な実相じつそうを打ち明けて歸つて行つた。

ところが同日、家中へ伝わつた風評によると、大垣城の池田勝入しょうにゅうのところへは、同家から信雄への質として、伊勢の長島へやつておいた質人の紀伊守之助ゆきすけ（勝入の長嫡子、二十六歳）が、突然、歸されて来たということだった。

「徳川どのは御当家のような潔白な家からも、仮借かしゃくなく、質人を召されて行つた。北畠どのは、反対に、二心なき者へは、取つておかれた質人も、お歸しなさる」

家中の一部は、この対照に、不平をもらした。けれど左衛門は、

「苦情をいう筋目はない。要は、おたがいお味方のむすびが強固になれば共によいのだ。大垣と岐阜の二城は、この黒田と、木曾、長良の両川をへだてて、ちようど三角対峙たいじをなし、彼ら父子の向背こうはいは、油断ならず思われていたが、信雄様が、この際、池田父子を信じて、その質人をお返しになつたのは、まことに御賢明なといわねばならぬ。またそれだ

けの信頼を見極めて、わざとお返しになったものであろう。——さすれば、当城にとつても、大きな不安が去つたというもの。お味方全体にとつても、よろこぶべきだ」

と、あくまで彼は善意に解した。というよりも、彼の性格どおりに解した。

ところが、詭謀反覆きぼうはんぷくは今の世のならい、こういう一方的な見解ほど危ないものはない。十三日のことだった。

——その十三日は、家康と信雄とが、清洲に落ち会つて、重大な密議をしていた日でもある。真夜半まよなかちかい頃。

「諜報ちようほうの者です。諜報方です——開けてくれい。開門、開門」

と、黒田ノ城の門を打ち叩く者があつた。

合言葉をたしかめ、鉄扉てつびをひらいた。諜報の者らしい影がツイと消え込む。

それから明け方にかけてである。城中の空気にただならぬ動きが見えた。重臣から武者溜りだまへ、それから下部の軽士たちへ——やがて洩れて来た内聞ないぶんによると、

「犬山城の城主中川勘右衛門が、昨夜、何者かの手に襲撃され、途上で討ち果された」と、いうのである。

事実とすれば、これはこの城中を驚愕きようがくさせるに充分な悲報である。中川は正しく味

方の一人であるのみならず、時あれば、秀吉の大軍をむかえ、この木曾川の一線を、上流犬山と、下流黒田の二塁に拠つて、共に助け、共に守らねばならぬ約束にある姉妹城である。かれは上歯、ここは下歯だ。

その犬山の中川は、先ごろから伊勢へ出向いていた。徳川家の酒井、水野などの伊勢急援隊についてである。

遭難は、その伊勢から帰る途中だったとある。信雄の清洲移動にともない、戦雲の拡大にただならぬところもあり、にわかには犬山へ引き揚げを命ぜられ、左右わずかな人数をつけて、夜をかけて急ぎに急いできた途上の災禍であつたという。

宵闇の樹上から鉄砲で狙撃されたのである。馬上の影が、ただ一発の弾音に、地上へころげ落ちると共に、土民や野武士の入りまじつたのが、十数名、もろ声あわせて突ツ込み、また瞬時に、風のごとく消え去つた。

虚をつかれ、狼狽して、なすを知らなかつた従者たちが、主人勘右衛門を抱き起してみると、佩いていた陣刀がなくなつていた。

日頃から、中川こそわが仇なりと広言していた池尻平左衛門という牢人者がある。下手人はそれと、みないつた。

——これだけの情報が、十四日朝までには綜そうごう合された。黒田ノ城の者は、主将の沢井左衛門をはじめ、いちじるしく殺気をそよがせ、

「いつ清洲から、いかなる軍令があるやもしれぬぞ。馬には飼かい、物の具とのえ、荷にだ駄の用意も変に応じて、ぬかりなきように」

と、いい合わせていた。

しかしその緊張した鋭角を、南尾張や伊勢方面の戦場へのみ向けていたのは不覚だった。また、きのうきよう、家康と信雄の在城する清洲本陣のみへそそいでいたのも間違まちがいだつた。

戦火は彼らのもつとも身近な、しかも致命ちめいな所に、飛び火していた。

ついにここ濃尾のうびの太平野にも、その最初さいしょのものが、すでに昨夜からいぶり出していたのだった。

青あおささぎ

小男——豪胆——槍やり踊おどり——の三特色をもつて、若い時から名物男視めいしされていた池田

信輝のぶてる入道しやうにゆうざい勝入しょうにゆうざい齋さいも、はやよい年配になった。秀吉と同年の四十九歳。五十の坂まで、もう九カ月しかない。

秀吉には、実子がない。彼には、よい子と自慢のできるのが男だけでも三人もいる。

それぞれもう一人前だ。嫡男、紀伊守之助ゆきすけは二十六、岐阜の城主である。次男三左衛門輝政てるまさは、年二十一、安八郡池尻あはちの城主。

次の、藤三郎長吉は、ことし十五になる。そして父のそばにあった。先頃、秀吉からそつと、

(どうだ、長吉をおれの養子にもらおうじゃないか)

といつてよこしている。

秀吉と彼との仲は、秀吉がまだ藤吉郎といつていたむかしから、馬鹿な遊びもやりつくした間である。これくらいなことをいつて来てもふしぎはない。

けれど今の秀吉と勝入とでは、大きなひらきができてしまった。人間的な心情では、竹馬くまの友だが、公人的には、重さもちがう、官位もちがう、声望もちがう。

が、勝入とても、凡々として、無為にこの時勢を送つては来ない。信長の死後は、たとえ一時でも、柴田、丹羽、羽柴、池田の四人して、京都の庶政しよせいも分担したほどだった。

また、今日とて美濃にこそあれ、大垣、岐阜、池尻の三城を父子で持ち、むすめむこ賀の森武蔵守長ながよし可かにも可かに見郡兼かねやま山の城主である。めぐまれていないとはいえない。不平もあろうはずはない。——がただ、秀吉に比すればちがいがすぎる。

如じよせい才さいない秀吉は、それでも折々、むかし友達には気をつかい、甥おいの秀次に、勝入のむすめを娶めとり、会えば、ことばの端にも、

(おれとおぬしとは、むかしは悪友、いまは姻いんせき戚せき。よくよく切つても切れぬ仲ではあるよ)

などと、平常から万一の時のため、抜け目なく紐ひもをつけはしていたが、いよいよ今年このたびこそは、必然、並び立たぬ大物相手に、天下分け目の一戦やむなしとなると同時に、逸早く、この大垣へも使いを派し、

(水臭いことを云い遣やるようだが、おぬしが、秀吉に加担をちかってくるなら、いつか申したように、長吉を羽柴家の義子とし、それに尾濃参の三カ国を与えようではないか。気前よく、ウンといえ。返事が待ち遠いぞ)

と、二度まで、彼一流の仮名文字で、直筆の書面まであった。

すぐ返辞のやれなかつたのは、勝入に、そねみや卑屈があつたわけではない。秀吉と共

に働くことは、誰と仕事するよりも、愉快なことはよく知っている。また、秀吉も大慾だが、自分も大利を占めうることもわかっている。

——が、ただここに、勝入として、立ちにくい一理由は、いまや世上にいい触らされている東西抗争の戦争名分だ。徳川方の宣伝は、はやくも秀吉をさして、

「強^しいて事をかまえ、旧主の遺子をのぞいて、信長公のあとを襲わんとする乱臣」

という非難を極力世上へばら撒いている。そしてそれが、かなり強く人心をとらえていることも事実だ。

道義や節操が、必ずしも大きくものをいう世でもないが、さりとして人間の善美の性や真実の姿がまったく枯れはてた世ともおもわれない。

往々、世間の大衆は、美しい犠牲心、高い良心、香りゆかしき愛情、一^{いちだく}諾をゆがめぬ

節義など——人道的光彩の発露をその実践者に見るたびに、わが事のように、絶讃し感涙し、その善行をたたえてやまない底のものを持っている。ところがまた、現世の半面には、野盗の横行やら、姦^{かん}淫^{いん}売^{ばい}色^{しよく}のみだらな風儀やら、良家の閨^{けい}門^{もん}のみだれやら、僧門の墮落やら、嘘つき上手と腕力のある者勝ちな人間のわが世の春をゆるすような暗黒面も持つのである。

庶民のうちにある矛盾は、武門のあいだにもある矛盾であり、一箇の人間、池田勝入のころの中にも、そっくり持つているものだった。

(秀吉につけば、名分のうえて歩ぶが悪いし、信雄を援たすければ、名分は立つが、将来の望みはまず薄い)

勝入の悩みは、もう一つある。

故信長と、勝入とが、乳兄弟であったことは、世上にかくれなしである。そうした深い関係から、信長の亡きのちも、信雄にたいしては、主従の礼節をすてるわけにゆかず、嫡男の紀伊守之助ゆきすけは、昨年以來、質ちとして、信雄のいる伊勢の長島へ遣やつてある。

(あれを、捨て殺しにもならぬし……)

というのが、秀吉の誘いに接するたびに、すぐ勝入の胸にのぼってくる惑まどいだった。

これを、家臣の評議にはかると、義は重し、名分は捨つべからず、という一部と、家門の繁栄と大利を占むるはこの時なり、と主張する老臣の伊木忠次いきただつぐらの意見と、ふたいろあった。

やはり勝入の胸のうちを、そのまま二つに現わしたような結果でしかない。

ここでも、日和見ひよりみがつづいた。が、秀吉の催促、濃尾近界の戦雲の推移は、もうそれを

ゆるさなくなつた。

(いかにせん?)

と迷いもいよいよ深刻になるところへ、はからずも、実にはからずも——長島へ質人として行つていた長子の紀伊守之助ゆきすけが、突然、帰されて来たのであつた。

(北畠どのの寛大な思し召によつて、特に……)

という之助のことばである。

北畠信雄は、事態の急に、こうでもしたら池田父子が、情に感じて、よもや寝返つて秀吉方へ走ることはしまい——と、恩をきせて、敢えて、之助を国へ返してよこしたのである。

しかし、こういう甘手は、余人には効きくかもしれないが、世情の表裏から、戦争のかけひきまで、あらゆる人間の機微を、舐なめつくしている池田入道勝入には、ちと子どもツぽい好意の押売り——見えすいた現金主義としかうけとれなかつた。

人間としても信雄が、本来どんな愛情の持ち主か、真実に富む性か、勝入は、信雄がまだむつきにくるまれてパイパイ夜泣きしていた頃から、知りつくしているのである。

(肚はらは、きまつた。日ごろ信仰する妙見の夢告によれば、西に味方して大吉なりとある)

家臣へはそんなふうには決意を云い渡した。さらに、その日のうちに西軍の秀吉へむかつて「一味承諾」の返書を送った。

もとより妙見の夢告はうそであるが、勝入が肚をきめた直後に、嫡子の紀伊守が何気なく父に語ったことばの端には、百戦の巧者たる彼をして、

(耳よりなこと。それこそ天の与えるものだ)

と直感的に、生来の功名心を、むらと、燃えたさせた一事がある。

犬山の城主中川勘右衛門が、にわかに関き揚げを命じられ、自分らのすぐ後から犬山へ歸つて来るはずです——と紀伊守のはなしなのだ。

きのうまでの犬山城は、やがての味方か、やがての敵か、この日までには、勝入にも定めつかないものだったが、すでに秀吉方へ加担かたんを申し送った以上、その犬山は、眼前の敵城だ。しかも天てん嶮けんの要地、また、信雄や家康が、本領守備の第一線を託すに足る中川勘右衛門として、いることも確実である。——なればこそ、にわかに関勢陣はすから外して、その持ち場へもどるべきことを命じたものにちがいない。

勝入は、秘策をねった。そして、

「青鷲あおさぎの者を呼べ。頭かしらの三蔵がよい」

と、どこかへ近侍を走らせた。

城外の搦め手にあたる黒沢の裏谷に、黒沢衆とも青鷲衆ともよばれている外者（藩外の雇傭人）の小屋溜りがある。近侍は、その屯から二十五、六歳の小がらで固肥りな男を呼び出した。

青鷲の者の頭という三蔵はそれだった。旨をうけて、搦め手門内から奥庭へ入った。城主の勝入が木蔭にたたずんでいる。頤で招く……。そして勝入の足もとに平伏する三蔵の耳へ、直々、勝入が何事かを命じた。

青鷲衆という組の名は、その服色からきたものらしい。つつ袖の上着も膝行袴も青黒い木綿の一色で、刀はつる巻の一本差し、みな敏捷な者ばかりである。そして事あるたびに、何処へでも飛んでゆく。さながら空へ立つ青鷲にも似ている。

これが九日のこと。中二日ほどおいて——十二日の夜明け方、三蔵はどこからともなく帰ってきた。すぐ搦め手門内に入り、前と同じ奥庭の疎林の蔭でまた勝入の前に平伏していた。勝入は、彼が桐油紙づつみから解いてさし出した血痕生々しい陣刀を受け取って、とつこうつ検めたうえ、

「たしかだ」

と、うなずき、

「よくいたした」

と、褒めた。そして黄金数枚を、賞として三蔵に与えた。

その陣刀は、犬山城の中川勘右衛門の持ち物にちがいがなかった。まぎれなき定紋が鞆には蒔絵されている。

「ありがたく頂戴いたしまする」

三蔵が退がりかけると、勝入は、待てと押しとどめ、さらに近臣をよんで、馬の背にでも積まなければ持てないほどな金銀をそこに置かせた。蔵役人と近侍は、彼が啞然と見ている前で、それを数箇の菰包みに荷作りした。

「三蔵。もう一役働け」

「へい。働けと仰っしゃるのは」

「委細は、勝入が腹心の者三名に篤と申しふくめてある。そちは馬子に扮して、この金を馬の背に積み、その者たちにただ尾いてゆけばよい」

「いったい、行く先は」

「訊くな」

「へ。へい」

「仕果したら、そちほどな奴、そともの外者にすてておくも惜しい。藩士に取り立て、目をかけてやろう」

「ありがとう存じまする」

不敵者だが、血を浴びたよりは、この大金を見たことのほうが、彼には無気味なふるえを覚えたらしい。やたらに地へ額をすりつけた。そしてふと面を上げてみると、いつのまにか田舎の老郷士といったような老人一名と、見るからに強げな供の若党がふたり、馬を曳いて来て、そのの菰包みを重そうに鞍へ積んでいた。

すきや数寄屋で朝茶を一ぷく。久しく別れていた父子が水入らずの朝飯と見せて、勝入と嫡子の之助は、ゆきすけ密談に他念なかった。

「では、すぐ岐阜へ参ります」

「才、そうせい」

そこを出ると、紀伊守之助はすぐ自身の家来に、供や馬の用意を命じた。

岐阜は、彼の持ち城、帰国と同時にすぐ移るべき予定を、勝入に何か都合があったらし

く、二、三日延びていたものである。

(ぬかるなよ。あすの夜の謀しめし合わせを)

勝入は、之助が居室へいとまを告げに來た帰りの間際まぎわまで、何度も小声で念を押しした。

紀伊守之助は、充分、心得顔にうなずいてみせたが、その燃えやすい眸の若さは、父親の眼に、まだまだ心もとない乳臭兒を思わせるものとみえ、

(ゆめ、怠るなよ。しかも密にだぞ。……その時にいたるまでは、たとえ家中の者たりと、密かな上にも密かにせいよ)

くれぐれも、その耳もとへ、いいきかせて、遠くもない岐阜城へ、何事なのか、あわただしく出立させた。

が——翌十三日のたそがれには、勝入の考えが何であったか、紀伊守がなぜ前日岐阜へ急いだか、すべてはかくれなく知れた。大垣の城内だけには知れ渡っていた。

突如。

陣触ぶれが出たのである。

家中には、寝耳に水であった。

令は「犬山へ——」とある。

ごつた返している中に、武者ぶるいをわめいている若者ばらの多い武者溜りへ、籠手の革紐かわひもを結び結び姿を見せた一部将は、

「今夜のうちに、犬山を乗っ取るのだ」

と、土気つちけいろを帯びた顔して云った。

強度な緊張は、顔色を異様にする。強がりをいつている者ほどそうである。そしてかかる火急かきゆうの出陣令の場合には、身につけまとう物の具さえ、常に似ず、間違いをやりやすい。

静かなのは、さすがに、主将勝入の居室だった。

次男三左衛門輝政をそばにおいて、いま土杯かわらけの祝い酒を酌みかわし、父子共に、よい姿を、床しやうぎ几よに倚せて、出門の時刻を待っていた。

ところへ、留守をいつかつた老臣の伊木忠次が、

「殿。お門出の間際にはごぎいますが、とんだお忘れものがごぎいましょう。……あの者たちの処置は、いかが致しておきましようか」

と、たずねに出た。

勝入は、はてと、思い出せぬ面おもてで、

「あの者たちとは……」

と問い返した。

「数日前、木曾川口の木戸で、大坂表から黒田ノ城へ使いに來た歸りの途の者とは承知のうえで、わざと捕えておいた禅坊主と山伏ていの男ですが」

「ア。あれか……」

と、勝入は、おかしげに呟いて――

「そうよな。あのまま牢に忘れておいては事だわえ。過日はまだ、われらの去きよしゆう就も定ぢゆうまらぬうちゆえ、後の推移次第で、利用の道もある人間とおもい、牢へ投げこんでおけいと命じおいたのだが……両三日の忙しさに、つい失念しておつた。さつそく放してやらねばなるまい」

「秀吉様へお味方と決した以上は」

「もとよりその当家が、羽柴家から他国へ説客に参つた使いの者を、故なく抑よくりゆう留りゆうしておくのは辻つじ棲まも合あわぬ。……が、あの兩名、姓は何とといったかの」

「一名は、漸ぜん蔵ぞう主す。もう一名の者は、武藤清左衛門とか」

「そうそう、そういつたかな。特に、他国の説客にまで選ばれたくらいな人間。いずれ小

智慧や舌巧者なやつどもであろう。上方表へ立ち帰り、これを意趣いしゆに、当家のことを悪しざまにぞん訴そされても困る。伊木、何とかしておけやい」

「かしこまりました。御出陣のあとで、牢より出して充分に馳走し、木戸を守る者の間違ごけねんい事と詫びて、あとの祟たりのないように、歡たばせて放しますゆえ、御懸念ごけねんなく」

「うむ」

と、軽くうなずき捨てて、床しやうぎ几ぎから立ち上がったとき、発足の時刻もちょうど、勢揃せいぞろいもとのいましてと、表から告げて来た。

堂々、出陣を宣して立つ場合ならば、貝を用い、旗鼓きこをさかんにして、城下をくり出すところだが、わざと三々さんさん五々ごご、騎馬を散らし、歩兵を前後し、旗を巻き火器をしのばせつつ発したのである。春三月の宵はおぼろおぼろ、何が起ったのかと、町の者がふりむいても、さだかに出陣とは思えなかった。

大垣を去ること三里ばかり、岐阜城下の茜部あかねべノ原で、

「やすめ——」

と令して、前後になった手勢をここに集結した。そして夜半よなかの空腹にそなえて早兵糧をつかい、なお、明朝の一食分を、腰兵糧に持てとふれ廻した。

「合戦は暁のつかの間にもすもう。帰陣はその日のうちである。できるだけ軽装がよく、腰兵糧なども、多分には持つな」

馬にも水飼い、槍鉄砲の調べなどもすます間に、勝入の注意は、細かに行きわたった。やがて、隊伍は前進した。

「青鷲あおさぎの者の三蔵は、まだ駈けつけて来ぬか。——姿は見えぬか」

勝入は二、三度それを左右にたずねた。何かしきりと待ち顔であった。隊伍のあと先について行動している大物見、小物見の者も、ただにその一事のみでなく、全軍の触角として、野をよぎる夜の鳥影も見落すまじき眼をくばりながら、木曾川上流をさして急ぎに急ぐ騎馬歩兵について進んで行った。

のら息子むすこ

彼女の乳人めのとは、生れながらの小野の里を別れかね、以前の生活などはあとかたもない夢とは知りながらも、なお草深い小野の片隅に、春は麦をまき、秋は蚕かいこの糸などつむいで、侘わびしく老後をすごしていた。

「お姫さま。ゆうべも乳母は、お亡くなり遊ばしたお館さまの夢をありありみましたよ。……さも、御心配そうなお顔色して」

乳人のお沢は、かすかに手元だけを照らしている灯皿のそばで、夜なべ仕事に、たれの肌着か、男物のぼろに針を運んでいた。

「また、あんなことをいって——」

於通の声は舌打ちに似ていた。

いとけない頃から、駄々をこね、慕いもし、困らせもした人なので、いまでも於通のこぼつきは、余人に対する時とはまったく違っていた。容子から口振りまで、自然に幼いままになるのだった。

「いやなばあや……。何かというと、死んだ人のことばかりいうんですもの。自分の口でいえないことを、みんな死んだ人のせいにして、於通に、もういちど禪尼さんの所へ帰れというんでしよう。そんなこと、わかりきっている」

於通は、つつみなく、機嫌をわるくして見せた。——ほのかにしか明りのとどかぬ破れ窓のそばへ倚って、わざとツンと、軒端のおぼろ月を、頬杖して、見上げながら。

乳母の眼は、涙になった。針の手を止めている。

於通がふいに、しかも真夜中、ここの草屋の戸を叩いてから、もう幾日たったろう。かぞえれば六、七日でしかないが、長い気がする。於通も、乳母のお沢も。

なぜならば毎日が、こんなふうな同じことばのやり取りだからである。

お沢は、彼女が岩手の尼院を無断で出て来たということに、

「滅相もないお振舞い」

とか、

「あれもないお迷いごと」

とばかりいつて、決して、仕方がないとは諦め^{あきら}ない。この数日のあいだにも、ニコともしてくれないのである。

(こんな強情で冷たいばあやだつたかしら)

と、於通にすらあやしまれた。が彼女は、お沢の乳ぶさの甘さを覚えている。恐くも何ともないのである。

乳母のお沢にはすでに良人がない。於通を岩手へつれて行って、遠いむかしの縁にすぎり、松琴尼に薫陶^{くんとう}を頼んだのはその良人だった。——が、まもなく一昨年、病で亡くなつた。

(以前のわたしではいけない)

と、お沢は、於通のすがたを見たとき、自分の胸へいきかせた。良人の意志を思えば——いや、於通の父小野政秀が日ごろから良人や自分たちの夫婦へ、

「たのむぞ、万一のときには頼みおくぞ」

と口ぐせに遺孤を案じていつていた遺託を思えば——心を鬼にもしなければいけないとお沢はかたく笑顔を閉じているのだ。

「ばあや、いくら帰れ帰れといつても、尼院はわたくしの性には合わない。於通は、都へ出たいんです。いけないと止めても、きつと行ってしまふからいい」

「おひいさまは、いつの間に、そんな悪性わるしょうにおなり遊ばしたんですか。乳母うばは……いえ、あなた様のお父君も、わたくしの良人も、草葉の蔭でさだめし嘆いておいでられましょう」

「ほ、ほ、ほ。ばあや、草葉の蔭なんて、そんな世界は、どこにもあるものじゃありませんよ。だから尼院はつまらない」

「ま、あんなお口を。仏罰がおそろしいとは思ひになりませぬか」

「おそろしいのは、無智で生きることです。こんな世の中に、無智で漂ただよっているほど

恐いことはない。於通は、田舎もいや、田舎人もきらい、なぜといえば、余りな愚鈍を、見ていられないからです。わたしは都へ出て、さむらいどもにまけないような女になる。画の道でも、歌の道でも、そのほかの学問でも、女子でもすぐれた者になってみせる道はいくらもあるうに」

於通のことばに勝ち気が出ていた。武門の息女の血としてはそれのあるのは怪しむにたらない。けれどこの場合には、お沢にいとど悲しくひびいた。乳母の信じている女の道——乳母の願っている女らしき幸福の道——それとは余りちがいます。

小野家の滅亡以来、変りはてたと思うこの姫の今のような口吻くちぶりを聞くと、お沢はすぐ、於通は不良になったと悲しまれた。この土地ばかりでなくひとたび戦禍せんかに見舞われたあとには、村にも町にもたくさん家なき子が出来、それが忽ち、野盗の手先や、寺荒しや、火放ひつとんびけ鳶とんびや、戦後の死骸剥はがしなどになって、残暑はえの蠅はえみために殖ふえるばかりだといわれている。——現に、この姫さえそうなりかけている。

これも戦争のせいだと呪のろわしかつた。そうした怖ろしい戦災に、小さい姫は、一度ならず二度までも出合っている。主家斎藤一族の滅後は、この小野の館やかたは信長方に接收され、小野政秀はそれから数年信長に従っていたが、浅井攻めに出て戦死し、その留守のまに、

日ごろ織田方に根づよい宿怨しゆくえんをもっている本願寺末派の長島門徒もんとに襲撃されて、この地方の織田被官はたいてい殺戮さつりくや焼亡の難に遭つたのであった。

そのとき姫はまだ五歳の幼さで、お沢がいまも耳にのこっているのは、戦火に焼けさかる館の炎を、逃げ落ちた暗夜の山中から望みながら、幼い姫が、父の名をよび、夜すがら泣きやまぬその時の声であつた。

お沢の良人の日置大炊へきおおいは、血路をひらいて姫をさがし求め、それ以後、父なく家なく身寄りも絶えた姫を、乳母夫婦の手でわが子のように育てて来たが、姫が十二のとき、小野政秀の遺孤ときこえて信長ふびんに不愍ふびんがられ、安土あつちの大奥へ女童めわらへとして奉公に上げたことは、さらに姫を不幸にしたものとお沢はいまだに悔いている。

さしもの安土城もいくばくもなくまたあのような業火ごうかにくるまれ、信長一門のさいごこそ地獄絵巻の一図にもありそうだった。女童めわらへたちの逃げ惑まどうたさまも思いやられる。十五の姫もその中のひとりであつた。それが年端としはもゆかぬおとめの身で、どう落ちのびて来られたのだろうか、ともかく姫は或る夜この小野の里まで乳母の家を求めて帰つて来た。何を訊いても泣きじやくつてばかりいる。数日はこんこんと寝てばかり居、折々、うわ言のように、悲鳴に似た声をもらした。

戦後の山野には、かならず出没する野武士だの悪い里人などにつかまって、途中どんな目に遭われたことやらと、お沢は寝顔を見ては泣いた。そう思えば、ここへ帰って来たときの姫の玉のような真白の肌には、痣や打ち傷が紫いろに腫れあがっていた。召していた衣服もすべて剥ぎとられたか、おとめの羞恥をわずかにつつま得る布一枚に細紐一ツのすがたでもあった。

が、勝気な姫は、その途中で出遭った生涯のおそろしい目を、決して人に語ることはなかった。お沢にもはなしたことはないのである。しかし、気をつけてみると、それからの姫には、どこやら変ったふしがみえる。性情に一変を来している。末おそろしい萌しさもある。お沢の良人、日置大炊は、獵師のような仕事をして、細い煙をたてていたが、

「いまのうちに尼院へもお入れ申した方が、御生涯のためである。亡き殿さまも御安心遊ばそう。このまま野育ちにしておいたら、どんな悪性の女子におなりなさるやら行く末のほどが案じられる」

と、知縁を求めて、松琴尼の許へあずけたのであった。
が、松琴尼も、大炊の生前、手紙をよこして、

「この子については、わたくしにも未始終の保証はできない。わたくし自身に師として導

く資格もない。おあずかりはしておくが、ただ知人のおむすめがしばらく来ているという程度でありたい。それでよろしければ」

と、あきらかに於通が到底長く尼院にとどまる質でないことを断つて来ていた。

でも、どうやら落着いたようであり、いつか二年近くもたつた。この分ならと近頃はお沢も安心していたところだった。蔓草つるくさの芽はやはり蔓となって伸びてきた。良人の大炊が生きていたら——とおもい出され、また、姫にとって自分がほんとに血を分けた母であつたらこうもわがままはいわせまいに——などとも悲しまれるのであつた。

「ひいさま……」

と、彼女は思い直して、すこし機嫌をとり、

「ま、こん夜は、おやすみ遊ばせ、あしたになればまたお考えも變つて参りましょう」

と、いつまでも窓に拗すねている姿をなだめた。

「……………」

於通はもう返辞をしない。

春の月は、軒ばを離れ、どこかの山桜がほの匂におう。彼女は若い血のなかに、この春の夜をむなしく過すごしている身を口惜しげにもだえた。

いぶせき老婆、煤すすだらけな壁、埋うずめ火のような夜の燈火。ああ耐えられない穴ぐらだと思ふ。これが自分に与えられた宿命の穴ぐらなのか。そんなはずはない。人はいのちの自由な生き方を求めて、悪いというはずはないものと思う。自分にはよい血液の両親をもつて生れた由緒ゆいしよもある。人より立ちすぐれた才能もあると思う。また何よりは、自分は美しい容貌をもっている。なんで花も見ぬ蕾つぼみのまま冷たい尼院にいななければならないか。そこを出ればまたもこんな草深いあばら家に寝なければならぬのか。——人のせいではない。運命は拓ひらいてこそ行け。こうして臙おぼろの窓辺まじへに不平ばかり思いつづけていたとて、たれが外から幸運の車をもつて迎えに来よう。

「おいつ、おふくろ。……おふくろ。早いなあ。もう寝たのか」

その時、誰やらガタガタと、土間の雨戸をこじ動かして、わめく者があつた。

「開けてください。おいつ、起きねえかよ、おふくろ。——三蔵御曹子おんぞうしが御帰館おんきかんあらせられて候ぞ。……あはははは。入れねえツたつて、おれの家だからはいらずにあおかねえ」
 だいぶ酔っているものらしい。上機嫌だが勝手なタワ言を云いちらし、その雨戸を破りもしかねない物音であつた。

のら息子が帰つて来たのだ。お沢の顔にはまた別な苦悩が重なつた。男親が世にいたじ

ぶんから家にもろくに落着いていず、世間で何をやっていつも飲み歩いているか、親さえその職業もよく知らない野良息子。

それは青鷺あおさぎの三蔵だった。

「なあんだ、起きていやがるくせに」

三蔵は炉のそばへぶツ坐つて、酒くさい息で、しなびた母の腕くびを抑えた。

「よしなせえ、おふくろ、腐つたような眼をしながら、針のメドなど突ツついたつてどうなるんだ。本能寺のたツた一夜で、この世の中はもんどり打ってしまったじゃあねえか。どいつも、こいつも、大浪に揉もまれながら、あツぶあツぶで泳ぎツこだ。正直正兵衛じゃ生きてもゆかれねえ。何でも上手に立ち廻るに限らあ。肚は太く機転は細かく、握つたツルは離さねえこツた。……おふくろ、のら息子でも、たまにやあ孝行してみせるから、また眼にかどたてて強意こわいけん見など云いなさんなよ」

母親の膝もとへ、三蔵は黄金を一枚、ぼんと抛ほうつてやった。が、お沢は見もしなかった。かえつて眼に涙をため、ひたすら針の眼に、現実の苦勞を忘れようとしているように手も休めない。

「取ツときねえつてことよ。え、おふくろ。その代り、酒があるだろう。……どこだい、

酒は」

片膝を立てかけると、お沢はきびしい眼を初めて息子に向けて、

「おまえ、お仏壇が見えないのか」

といった。

三蔵はセセラ笑って、

「死んだ親父を持ち出す手はねえだろう。親父と来ちやア、生きているうちだけでも沢山だった。おふくろもばか正直だが、親父も世渡り下手の随一さ。どうにも融通ゆうずうのきかねえ人間だった。——それにひきかえ、この三蔵は、親に似に気げなき天晴あつぱれ者と、きのうも直々、池田入道勝入さまから、お褒めのことばを頂戴し……さ。しかも、今夜のことがうまく行つたら、土分の列に加えてやろうとも仰ごつしやつた」

何か、大得意であるらしい。他人には極秘ごくひだが、おふくろへなら話してもかまうまい。問わず語りに、そういつて自慢じまんばなしに喋しゃべ舌べるのだった。

「世間の奴あ、大垣の青鷲者ツてえと、お城の掃除人夫か、土方人足ひやとみたいにはかにするが、同じ青鷲仲間にも、一本差している組と、何も知らねえ日傭ひやとい稼かせぎのふた色ある。おれなんざ、こう見えても、御城内から格別なお手当をいただいて、乱波らんぱ（敵国に潜入する

第五列)もやれば、おんみつ隠密もやる。しかもそのお頭かしらだ。この間、伊勢路でやられた犬山の中川勘右衛門を手にかけたのも、何をかくそう、この三蔵様だ。……それにつづいて、きのうから昨夜にかけては、小荷駄こにだに千両余りの金箱を積んで、お蔵役人くらふたりと、池田家の御老臣と、かくいう俺と四人して、その黄金をみんな犬山城の城下の奴らへ、バラ撒まきに行つたんだから、豪勢なものだろう。それもたつた、一日半夜に撒き散らしたのだ」

と、まるで自分の金でもあるように、鼻うごめかして――

「犬山城の侍どもは、主人が変死したので、後の始末と、葬式の揉め事にばかり気をとられていやがる。その隙に、池田の御老臣やおれ達は、城下の町人、町に住む野武士、それからお城の番士とか足軽なんぞの気のきいたやつらを選すくつて――どうだと、黄金をにぎらせて歩いたのだ。もとよりタダ遣やるわけのものじゃあねえ。こつちの方策をのみ込ませた上にだがね……」

さすがの酔っぱらいも、少し喉のどが渴かわいてきたらしい。不意に台所へ立つて、竹柄杓たけびしやくからガブガブ音をさせて水を呑んで戻つて来た。

「おや? ……」

と、そのとき初めて、三蔵は、うす暗い窓際に、ひじ肱をもたせてこつちを見ていた於通おつうの

姿に気がついたらしく、

「たれか、そんな所にいたのかい。たれだい、おめえは……？」

と、近づいて行つた。

酔いどれの万一の悪戯わるさをおそれて、彼女はすばやく坐り直した。三蔵の眼は、じつと、月洩もる竹窓のおぼろ明りに彼女を見すえて、おもわず酒気をさましたらしい。

「ううむ……。これやあ驚いた。お美しくおんななすつたなあ。於通さまでしよう、あんたはね」

「ええ。三蔵も、覚えていましたのか」

「忘れッこはねえが、見ちがえた。あんまりお変りなすつたので」

「どう変りました？ わたくしが」

「さて、なんといつたらいいか。……水もたれそうなお年ばえに」

「だって、わたくしでも、育ちますもの」

「なるほど、育たねえのは、うちのおふくろだけだツたか。はははは。……ところで於通さま、何しにこんな所へ来ているんですえ」

「都へ出たいと考えてね」

「都へ。……造作アねえじゃございせんか。おふくろは何と云いましたえ」

「尼院へ帰れとばかりいって、わたしの心なぞは少しも分つてくれません」

「勿体ねえ、勿体ねえ」

ぶるる、と強く首を振つて、瞬間、真面目なひとみを耀かがやかした。そして、一どに醒めたような酒気の名残の底でひそかに思う。——こんな天女を野末のすえに迷わせておかないでも、おれの女房に持つことはできないものか。持つて不思議はないではないかと。

そこで彼は彼女の希望を釣り糸に仕掛けた。おふくろがいては口うるさい。ちよつと話があるから外へ出て欲しい。なアに、あなたは旧主のおひい様だ。ばあやに気がねなんかいるもんか。外はおぼろ月、夜桜の下で、とつくり相談を聞こう——といったふうにある。

於通が、その口車にのせられて、のら息子と一緒に戸口へ出たので、お沢は、はだしになつて土間へとび降り、その袖をとらえて引きとめたが、

「うるせえなあ。籠かごの鳥とりじやアあるめえし、こんなに大きくなつたおひい様を、自分の思う通りにしておこうたツて、やきもきするおふくろが無理というもんだ。——年寄は先に寝ていねえ。すぐ帰つて来るからな」

無理に、お沢の手を彼女の袖からもぎ離して、三蔵は、外から戸を閉めてしまった。

「……あ。追ッて来やがった。於通さま、駈け出そう」

どこへとも訊くひまもなく、ただ三蔵が走るために、彼女も走った。

小野の里は、夜霞よがすみのあとになって行く。急に、彼女の理性がうごいた。あまり人里遠くなくてもいけないと。

「三蔵。もういいでしょう」

「あ。もう大丈夫だ。……が、事のついでに、もう十町ばかり急いでしまおう」

「……すると。何処」

「すぐそこは、長良ながらの川原じゃねえか。稲葉山が見えてらあ」

「そうそう、小さい時に、三蔵と、よく遊びに来たことがありますね」

三蔵は、ゾクとしてすぐ体じゆうが火照ほてってくるような経験のない昂奮につつまれて、これはものになる、とうぬ惚ほれた。

長良川の中川原へ出た。於通は休むところを見まわした。するともう三蔵は、船橋を渡っていた。追いかけて、

「三蔵。どこまで行くのです」

「渡りましょうよ。こんな晩、歩くのもうれしいじゃございませんか」

「けれど……歩いてばかりいても」

「わかつております。京都へお出でになりたいんでしよう。——ですからさ、黙ってついておいでなさい。世の中がおもしろくねえんで、グレた真似をしていますが、三蔵だつて、^{へきおおい}日置大炊のせがれです。旧主のおひい様におたのみをうけて、^{そりやく}粗略にやいたしません。……こう歩きながらも、自分でお供して京都へのぼりたいが——と、いろいろ思案しているんで」

「おまえが付いて行つてくれますか。於通には、途中の路用^{ろよう}も、知る辺^へもないし、それには不破から先の山道や、長い江州路には、野武士や悪者がたくさんいて、先おとし、安土が攻め落されたとき、そこを迷うて怖ろしい目におうているので、今もひとりでは京都まで行けぬ心地が先立つて……」

「何の、幾夜の泊りではなし、てまえがお付き申して行きやあ造作ありません。——が、弱つたことにや三蔵めには、あすの朝の卯^うの刻（午前六時）までは、首を質に入れて乗がかかっている大役がある。そいつを見事果さねえうちは、この体を、どこへ動かすこともできねえので」

「だっておまえは、暢のんき気にお酒をのんだりして、こんなにぶらぶらしているではありませんか」

「どういたしまして」

と、三蔵は大げさに反そりかえって――

「一杯ひツかけたなあ、まず最初の犬山乗りこみと、ふんだんな黄金の力で、早いところ間の買占めをやり歩く大仕事が、まずまず思った通り運んだので、あとは今夜の亥いの刻（午後十時）に、その御報告を池田勝入様のお耳へ確しか乎とお達しするという役目だけが一ツ残ってるんで……。それにやあまだだいぶ時刻のいとまがあると思つて、居酒屋でちよびツとひツかけ、ひとつ、おふくろを驚かしてやろうと家へ寄つてみたわけなんです」

いつかうかうか船橋も渡り、道は稲葉山の裏にあたる日野から古市場への峠とうげ路みちをのぼっていた。

ここまで来る途々の話に、きのうきよう、三蔵が池田家の密命をおびた武士たちと共に犬山に入って、何を暗躍あんやくしていたかが、於通の想像にも、明瞭になっていた。

いや、三蔵は彼女につつもうとはしていない。むしろ知ってもらって、いかに自分が働ける末頼もしい男であるかを認めさせようとしている程なのだ。

その犬山潜行の策動は、勝入の予測以上、万事うまく運んでいた。三蔵のもう一役は、こよい大垣から犬山への道を急行軍してくる池田勝入の馬前に、その事の成功を、（御計略は凶に中つて、うまく運び、万端、内応の手筈はできております。てまえと同行した御老臣ほか二名は、なお城下に潜伏して、御手勢の到着を待ちかまえておられますれば、御懸念なく、犬山へおかかりなされますように）

と報告し終れば、こんどの大役はすむのであった。

「それもわずか、朝までの御辛抱ですよ。ねえ、おひい様、ここで待っていておくんなさい。もうお膳立ては出来てるんだから、犬山が陥ちるのは、夜明け前さ。そして、勝入様がお引き揚げになるのを迎えして、でかした三蔵と、約束の褒美をいただいたら、すぐその足で京都へお供しようじゃありませんか。……てまえも大働きをヤツた後、ゆくりと、都見物のひとつもしたいし……」

峠の上の程よい地点に腰をおろして、三蔵はしきりに於通の意をむかえた。自分はあともう一役果すために、これから麓の街道に出て、池田勢の来るのを待つ。——そして明朝卯の刻までには、必ずここへ引返して来るから、その御堂の縁にでも寝て待っていてくれというものである。

於通の眉は惑^{まど}っていない。と行って、彼のことは通りを正味にうけて、自分の夢に酔っているふうでもない。やや冷たいがいつも理性と賢い判断を伴のうている美しい眼、それが彼女の心のさざ波を映じている。

「ええ……。待つています」

と、うなずいた。そのしおに、三蔵はすぐ立つて、山神堂か何かの古い廂^{ひさし}の下へ彼女を伴い、またくれぐれもここから居場所を変えないようにと念を押しした。

「や、だいぶ更^ふけて来たようだ。こいつあおもわず少し時刻を過ぎたかも知れねえ。じやあ、よござんすか於通さま。約束をたがえると三蔵は一生お恨みますぜ。きつとお待ちなすつて下さいよ、あしたの朝まで」

そこを離れると、三蔵の脚は、まるで宙を飛ぶようだった。

ふもとの野^の一色^のから各務^{かがみ}ヶ原へ出、西から東へまっ直^{すぐ}に貫いている犬山街道を、とつこうつ、眺め渡した。

「はてな。もうここを通つたものか。——まだなのか？」

彼方に農家の灯が見える。背戸^{せど}へ近づき、三蔵は訊ねてみた。

「おっさん。今し方、何かここを通らなかつたかね。——たくさんな馬や武者が」

牛小屋で牛の鳴き声でした。人影が振り向いている。牛が返辞をするように聞えた。

「そうよな。通ったようでもあるわい。なんじやったやら。えらい迅いことじゃあつたし、よう知らんが、東の方へ、たくさんに、駈けおつたには、駈けおつたようじゃ」

その百姓の女房でもあるか、べつな女の声で、また云つた。

「それよか、もつとめえだがよ。まだ明るうちなのに、鮎舟あゆふねを二十艘そつも三十艘も牛車に乗せて、東さ向いて行つたがの。鵜飼衆うかいが川へ寄るには、まだ早すぎるが、犬山に祭りでもあんのかよ」

三蔵は、返辞とも自分への叱咤ともつかず、しまつたと、身を刎ね返して、

「ウム、祭りだ。犬山は血祭りだ。下手アすれやあ、おれの方も後の祭りだ」

と、足のかぎり犬山街道をさらに東へ向つて走つた。月もおぼろ、道も夜がすみ、初しよこ更うはすぎていた。

いぬやま
犬山・陥つ

犬山の町、犬山の城は、すぐ対岸であつた。隔つへだ一川いっせんはいうまでもなく木曾の上流。

岩に鳴る水や瀬にしぶく水の響きはするが、ふかい水蒸気につつまれて、月も山も水も雲き母らの中のもののようなだ。ただ幾つかの濡れた灯が、対岸の高きあたりに、また、低い所に、にじんで望まれるだけである。

「みな、馬を捨て、馬を一所につながせておけよ」

勝入自身も、馬を降りて、川を前に、床しょうぎ几へへかかった。

旗本三、四十騎は、すぐ主人に倣ならつて、徒士かちとなり、また、後から後からここへ駈かけつづいて来た者も、野へ馬をあずけて、みな軽身で川の水際に立った。

「才、時刻たがえず、紀伊守さまの御手勢が、あれへ——」

と、その中の人々が指さした。

勝入は、のび上がって、上流の河原のほうへ眸ひとみをこらしながら、

「物見、物見」

と、早口にいった。

すぐ走り戻って来た小物見の一名が、相違ありませぬ、と報告してから程なく、総人数四、五百の一手が、池田勝入の引率いんそつする約六百と合して、およそ千余の人影が、魚紋のように乱れうごいていた。

青鷺あおさぎの三蔵は、ようやくここで人数に追いついた。背後の目として見張っていた哨兵へいは、三蔵を槍囲みにしたまま、池田勝入の床しょうぎ凡しやうぎの前へつれて来た。

勝入は、三蔵に何のムダ口も開かせず、要点を訊きとるとすぐ眼ざわりな者でも追うように、去れ、と頤あごを振った。

その時もう、おちこちの水際から底の平たい鮎舟が河流を横ぎりはじめていた。それには山もりになった軽装の甲兵が、身を伏せ、次々に対岸へとび上がり、またすぐ舟は棹さおを返して、新たな組を運んでゆく。

迅はやかった。またたくうちだ。残された影は三蔵ひとりだった。やがて対岸から犬山城の下あたりで、いちどに夜をゆるがす武者声がわあつと揚った。——とたんに水分の多い夜空の一角がぼつと赤らみ、城下町の上をチラチラと光り舞う火の粉だった。

城内からも立ち騒ぐ声があふれた。が、それは狼ろう狼ばいと混乱のどよめきでしかない。また、逃げまどう味方を味方が怒り罵る叫のしびでしかなかった。ひとり城主中川勘右衛門の叔父にあたる者だけは、騒さわがず愕おどろかず、

「この城の喪もちゆう中ちゆうをうかがい、嘆きの虚をついて、夜半来れる卑怯な敵は何なに奴やつか」と、城壁の上に立って、りゅうりゅうと槍をふるい、当るを仆たおし、自身も満身に創痕そういを

あび、のちの記憶にとどまるような死に方をした。

勝入の奇策は、適中した。犬山城は、手に唾つばするほどもなく、わずか半刻はんときのまに墜おちた。

城内からも、城下からも、裏切りが出て、不意をつかれた城兵方を、いやが上にも混乱させたことが、この天嶮てんけんをかく短時間に落城させた原因の一つだが、もっと大きな理由はもともとの犬山はそれ以前に、池田勝入が城主となっていたことがあり、町の人々や近郷きんきょうの長おさ、百姓にいたるまでが、今も、前の領主を慕っていたことが何よりの大きな要素だったのである。

そうした以前の縁故と心のつながりがあつたために、勝入がこの奇襲直前に人を派して行つた買取策も、黄金の力以上に、功を奏したものだつた。

いずれにせよ、池田入道勝入は、秀吉へ味方を約した手始めに——まだ何ら秀吉から、催促もないうちに、加担かたん第一歩しるしの証を、あツさり犬山攻略という手みやげで西軍へ示した。また、これをもつて、信雄と家康への答とした。

夜明け頃には、城中の人間は、ひとり残らず、池田方の家臣にかわり、あとの守備は、稲葉入道一鉄に託して、勝入父子は、はやくも、旗本数十騎をつれ、ゆうべとは道をかえ

て、岐阜へ、引つ返していた。

襲せるも返すも、まるで一過の高波のように疾かった。退軍には、城中から四散した中川の残兵たちが潜伏して万一の変あることも思い、途々の小口、楽田などの部落を焼き立て焼き立て駆け通った。

没落の過程にある名門の身边には、とかく複雑な人物が寄りたかるものだ。

先に見える者、軽薄な者、直言忠告が容れられない慷慨者、などは、さつさとこの周圀から去つて行く。——また自分に頹勢挽回の才力はないとして、時勢に敏なる者もまたいつか離れ去つて行く。

残る者は、ここを離れては、他に生活の拠るところも自立の能もない者か、さもなければ、栄枯、生死、喜憂もともに、あくまで主従の道に生きようとする真の忠臣か——だけである。

ところが、たれがその誠実の士か、たれが方便家か、たれが利用のためにだけついている者か。それが容易にわからない。各、それぞれ、こういう群の中では、偽態を買いかぶらせることに虚実の巧妙をつくすからだ。その中に主人としていて、それを正しく識

別し得るような中心者だったら、たとえ二代目三代目でも、短時日に没落から消滅へ、人為的な運命を、みずから早めることはしないであろう。

だが、同じそういう取りまきでも、徳川家康のような「付き者」となると、これはまた大いに趣のちがったものだ。世間の何かもろくに知らない乳臭児にゆうしゆうじ、信雄とは、とても同日の論ではない。信雄に有形無形の名門的遺産があり、それをぜび必要とするも、われから近づくのではなく、彼をして、継すがらせ、頼ませ、掌てのうえにおいて、自己の持駒もちごまの一つとしてしまう。それくらいな人間の相違はある。

「さてさて、稀有けうなお心入れではある。中将（北畠信雄）どの。もう、あとは湯漬でも頂戴しよう。由来……貧乏そだちの家康とて、こよいの豪華な馳走には、ただただ舌も胃の腑ふもおどろくばかり。おもわずいこう喰べふくれておぎる」

いうとおり、家康は、馳走攻めにあっていた。

十三日の——この清洲についた当夜である。

ひる、清洲につくとすぐ、城外の寺院で、信雄の迎えをうけ、ただちに密談に移って数刻。たそがれ、城内の客殿にくつろいでからの、もてなしだった。

かつて中ちゆうげん原にむかつては、信長の変にすら、今日まで容易に動くことのなかった家

康が、自分のために、いよいよ岡崎を出て、しかも多年、蓄積された徳川家の全力を賭して、自身、清洲まで馬をすすめて来たのである。信雄として、この人を、敬慕けいぼと感激の眼で仰がずにいられない。亡父はいい知己をのこしておいてくれた。そう思わずにいられない。この人こそほんとうの義を重んじ情誼じょうぎにあつく、弱きをあわれみ強きに屈せぬ正義仁にんきよう 侠の武門というべきだろう。あらゆる歓待の労も、饗膳の美も、信雄は、精いツぱいを傾けた。

しかし家康の眼からみると、まことにみなこれ乳臭の児戯じぎ。ただ気の毒なおもわれるのみだった。かつて家康がこの息子の父信長の——甲州凱旋の帰路を富士見物にことよせて、道中七日の馳走歓待をつづけたときの規模などをおもいあわせると、こよいの貧しさをあわれまずにはいられなかった。

それは、物質の贅ぜいそのものではない。物質の活用にあるのである。物すらよく生かして用いられない信雄を考えると、あたりに世辞追従せじつししゆうのみいつて、酒杯しゆはいのあいだに、うよよしている彼の家臣どもが、人としてよく用いこなされていないのは明瞭だった。

その信雄が、たとえば先の誘いにせよ、相手もあろうに、秀吉にむかって、端たんをかまえ、秀吉に一口実を与えて、戦をはじめ出したのであるから、それだけでも、信孝のぶたか亡きあと、

この名血族の断絶も、はや遠くない気がされるのだった。

——あわれと見るしか、見ようはない。家康は、同情をおぼえる。しかし彼は、当然亡ぶべき素質のものが亡び去るのは、人間皆が死ぬべきときには必ず死んでしまう作用と同一視することができる男だった。自分だからとて、例外な考え方はもってはいない。自分もその通り、不徳短才にして、この乱国に多くを擁ようして立ち得ない質ならば、直ちに、亡び去るべしと、つねに自身へいつている程なのである。

だから彼は、こんな歓宴の中でも、あわれを覚え、同情はいだいても、この一箇名門の脆弱児ぜいじやくじを、自己の薬籠中やくろうちゆうにして、完全に利用しきろうとする底意には、何らの矛盾むじゆも良心のまどいも覚えはしない。

なぜならば、名門の余望と遺産を持つ遺族の暗愚なる者ほど、禍乱かりんの火だねとなりやすい存在はないからである。利用価値が高ければ高いほど、それは危険な存在だといえるのだ。それはたえず周囲に何らかの犠牲者を生み、四隣しりんの揉め事もめごとをかもし、庶民の惨害をひき起してやまない。

おそらく秀吉も、それを思うにちがいない。が秀吉はそれを自己の目的にさまたげとして信雄の処置を考え、家康はより遠大な野望への一步を基礎づけるために信雄の活用を考

えていた。こう相反する二つの信雄観は、秀吉も家康も、目的の根柢こんていは一つだが、策において、対立のかたちをここに現わして来たものだった。

故に、もしこれが反対に、家康が信雄を除こうとする策に出していたら、秀吉は、敢然、信雄を助けて立つ方へ廻ったであろう。

いずれにしても信雄は一箇の傀儡かいらいにすぎない。どっちにころんでも、われは信長の肉親なりとする過去のものを、みずから捨てて凡人正味のただの人間であまんじない限り、彼の悲運は宿命的というものになるほかなかった。それを覚さとらぬのも、家康の感じている気の毒さのひとつであるが、もつと一般的な見方でいえば、家康のごとき、また、秀吉のごとき人物の時をひとしゅうして東西にならび立った時代に彼が置かれたことそれ自体が、すでに約された不幸児の運命といえる。——しかも彼はその家康なるものを、無二の同情者、理解者、絶対な味方と信じて疑わないのであった。

「なんの、馳走はこれからです。おつかれもおわそうが、信雄が心からな献立こんだてです。徳川どのへよする敬意と信頼を盛ったものと、召し上がられなくば、眺めてだけでも、お酌くみください。……春の夜、まだまだ寢所に別れるのは、名残惜なごりしい」

信雄として接待の最善を尽くそうとするつもりである。が、ここでなくとも、家康はあ

まり宴えんらく楽に興味が無い。日頃、彼が主催して、客や家中にする酒宴も、彼には実はおつとめだった。

「いや、中将さま、殿はもう御酒はまいれませぬ。あの通りなお顔……お杯はひとつわれらの方へ」

侍坐の酒井、奥平、本多などの輩ともがらは、主人が生欠伸なまあくびをこらえているていを察し、信雄の度どの過ぎた好意をこう防ぎにかかった。

が、信雄はまだ主賓の有難迷惑に気がつかない。主賓の眠たげな様子はなお彼の見当ちがいな努力と気づかいになって行つた。彼が、家臣に何かささやくと、忽ち、正面の大おおぶ襖すまが除かれ、二次の馳走として用意されていた猿さる楽がく役者が、樂器とどのを調べ、扮装ふんそうをこらし、待ち控えていて、すぐ狂言舞を演じはじめた。

家康には毎度の趣向である。が、彼は辛抱づよい面持おももちで折には興じ入つてる風をみせ、折には笑い、終ると一緒に手をたたいたりした。

彼の側臣たちは、それをしおに家康の袖そでを引いて、寢所へ入られては——とソツと合図をしたが、そのいとまもなく、次の瞬間には、大がかりな鳴物と共に、ひとりのひょうげた男が出てきて、

「これからこよいの貴賓まろうどのために、近ごろ都はいうもおろか鄙ひなにまで聞え渡つた於国歌おくに舞伎かぶきをごらんにいれます。そもそもこの於国歌舞伎おくにとなん申しはべる歌舞の由来は……」
と、頗る饒舌じょうぜつにしやべり出した。出雲いずもの巫女みこが神社舞じんしゃまいに世の嗜好しこうと時粧ときぢょうを加味し、それに従来ことうの猿若さるわかしや幸若舞こうわかまいを織りまぜておもしろおかしく仕組んで諸国しよこくを打つて廻つたのが、はからずも各地で大受けをとり、都には先年の天正十一年初めて四条の河原で興行し、連日の大当りをつづけ——などとこの新興歌劇しんきゅうかげきの紹介しょうかい一くさりをやつて、その男がひらりと几帳きちょうの蔭かげにかくれると、数人の美人めいじんが出て、舞い唄まいうたい、歌劇かげきの恋の筋すぢが高調こうてうしたところへ、評判へいばんの於国おくにという主役しゅやくがあらわれた。

この血なまぐさい世の一面に、こんな糜爛びらんした官能的な肉慾主義おんてきしゆぎを謳歌おうかする一群の花畑はなばたがどうして咲かれたのかと怪しまれるほど、主役しゅやくのうごきは、悩ましい空気を醸かして、日ごろの荒武者あらいしやどもを、恍惚くわうことさせた。

そしてこの一座の中の作者さくしやには、かなり知性ちせいのある才人さいじんがいますとみえ、近年、西国大名のうちに行われているというキリシタンの聖歌隊コーラスの一節いちせつやミサの唱歌しやうかなども巧みに取り入れてあり、楽器がくぎにも、教会きやうかいでつかわれているバイオラバイオリンに似たのがあったり、衣裳いさうの模様もやうにも、頗るすこぶ目新しい西歐風の凶案きゆうあんがモールモールや刺繡ししゅうとなつて、けんらんに、在来ざいらいの日本衣裳にっぽんいさう

に調和を試みられているのだった。

(なるほど、これは洛内らくないでも諸国の町でも、いちど見たら見た者が皆、もて囃すわけだ) たれも感心し、たれも陶醉とうすいした。凡俗のよろこぶものは、大将や士階級さむらいでも楽しいものにちがいがなかった。しかもこの歌劇の骨子には、今の時勢にもっとも圧塞あつそくされている人間本能の肉慾の世界が演舞の主題になっていた。また室町以前からの長いあいだの無常観あきらやら諦めあきらの生活やら来世主義からいッペンに脱して、極端にまで、人間的な現世主義を歌つたり舞い展ひろげて見せるところにも、今日の庶民の気もちを捉とらえた大きな素因そいんがあるものと観みられた。

(これは、秀吉の人がらが、おのずと作り出したものの一つだ)

家康はそう思った。秀吉的政治は、前の信長的な強圧主義を一変し、室町時代のつねに暗い感じをも急速に明るくしてきた。敏感な庶民の本能は、強圧や暗いものがのしかかっているうちは、陰性にそれを出しても、こう陽性には決してあらわさないものだ。——この新しい歌劇が西国から興おこつて京に流行し東海方面にまで波及してきたのは、これは形をかえた一つの秀吉攻勢の浸透しんとつとも見ないわけにゆかない——とも家康は考えていた。

「——中将どの。殿にはもうお眠いと仰おほつしやっておられるが」

於国に見とれてゐる信雄へ、徳川の奥平九八郎がわざと露骨に云つた。

「え。お眠い？」

と、信雄はにわかには恐縮し、倉皇として自身案内に立つて家康を寢殿の渡り廊下まで見送つた。於国歌舞伎はまだ終つてない中途であつたので、それからまだ音曲のバイオリンや笛太鼓が遠くに聞えていた。

あくる朝——十四日、信雄としては例外な早起きをして、客殿へ行つてみると、家康はもうとくに朝の新鮮な顔つきをもつて、侍臣たちと雑談していた。

「御朝食は？」

と、わが家の者にきくと、もうとくにおすみです、と聞いて、信雄はちよつと恥かしい顔をした。

そのとき、庭番の士と物見やぐらの上の者が、彼方かなたで何か大声でものを云いかわしているふうだつた。家康も信雄もそれに気づき、ちよつと黙しあつてるところへ、家中の名が、一異変を告げてきた。

「ただ今、御やぐらの物見どもから申しまいりましたが、西北方の遠くの空にあつて、先ほどから黒煙くろけむりが見え、初めは、山火事かとおもわれましたが、次第に所をかえて、

それが幾すじにもなつて立ち昇る様子、ただ事ならずとの報らせにございますが」

「なに、西北の遠くに？」

信雄は、首をかしげた。東南と聞けば、伊勢その他の戦場が想起されたであろうが、心得ぬといったような顔つきなのである。

家康は前々日、中川勘右衛門の変死の報を耳にし、それが何となく報告通りには解しかねていたところなので、すぐ、

「それは、犬山の方に望まれるか」

と、たずね、返辞も待たず、また、

「九八郎、見てまいれ」

と、自身の左右へいつけた。

さかきばら 榊原 小平太、大須賀五郎左衛門、奥平九八郎などが、信雄の家来たちと共に、大廊

下を駈け、やぐらへ登つて行つた。

「才、あの煙は、まさに羽黒か、がくてん 楽田か、犬山か、いずれにしても、その辺りにちがいない」

そこから駈け降りてくる人々のあしおと 蹠音は、もう異変の突発をかたっていた。もとの客殿

へ来てみると、家康の姿はすでにそこにはない。べつな一室で、彼はすでに甲冑を着こんでいた。

あわただしい城中の物音が一しきり釜かまの湯鳴りみたいだった。城外の馬出しの広場で貝が聞え、取る物もとりあえず駈け集まる武者たちの大半が、もうそこでも家康の姿を見なかった。

家康は、火の手の方角を犬山と的確に知ると、ひと言、

「ぬかつたわ」

と、さげんで常の彼にもない急ぎ方だった。

人数の先頭にたち、馬へ鞍をあてて、西北の煙へ向って駈けていた。

本多康重、榊さかきばら原小平太、松平又七、奥平九八郎なども、われおくれじと、彼に前後した。

清洲から小牧へ一里半——小牧から楽がく田でんへ三十町——楽田から羽黒へ同じ距離、さらに羽黒から犬山までは三十町。

小牧へ来ると、もう全貌がわかった。今暁、つかの間に奪ま取だつしゆされた犬山落城の事実だった。家康は、小牧と楽田のあいだに馬をたて、羽黒、犬山附近にわたる幾カ所もの煙を

凝視しながら、

「おそかった。家康として、このぬかりはあるまじきこと」と、痛嘆をもらした。

立ちのぼる黒煙のなかに、家康は、池田勝入の得意顔をおもい泛^{うか}べた。さきに池田の人質を長島から放して帰したという噂のときも、信雄のお人好しが功を奏^{そう}するやいなと、危うんでいたことだったが、かくも現実主義に、こうも迅速に、それまで態度を保留していた勝入入道が、空巢^{あきすばたら}働きをやりに出ようと考えられずにいたのである。

が、その不覚を、あくまで不覚として、彼は自責せずにはいられなかった。

(勝入という男が、どんな曲^{くせもの}者かを、知らぬでもなかつたに)——と。

犬山の要害が、戦略的にいかに適切な地にあるかも、あらためて思うまでもない。近く、秀吉の大軍とまみゆる場合、それはさらに重大さを加えるものだ。——美濃、尾張を境する木曾の大川をその上流に監視し、まづかに鵜沼^{うぬま}の渡しを扼^{やく}して、一城よく百壘^{けん}の嶮^{けん}にあるものを、あたら敵へ加えてしまった。

幸いにも、木曾下流の黒田ノ城の沢井左衛門からは、二心なしと、極めて態度をあきらかに、人質を送つて来たが、それも犬山を敵手にゆだねてしまつては——甚だ価値もすく

なくなる。

「もどろう。引り返せ。あの煙の立ちようでは、すでに勝入父子は風のごとく、岐阜へひき揚げおつたに相違ない」

家康は、卒然と、馬をめぐらした。そのとき彼の眉にはもう日頃に見る気色しかなかった。ゆつたりとした腹中にその損失を償^{つぐの}うて余りある或る成算^{せいさん}がすでにできたかのような感を周囲の旗本にもいだかせた。旗本たちは激越な口調で、勝入父子の忘恩をいったり、その奇襲戦法の卑劣^{のろし}を罵^{ののし}つたりして、あすの戦場において思い知らすべきことを口々に云いやまなかつたが、家康は、それらの声をも、大きな耳たぶの外に聞き流しながらいまはべつなことでも考えているらしく、ひとりニヤニヤ笑顔をたたえながら、もとの清洲へ馬を向けていた。

だいぶおかれて、清洲を出て来た信雄と、直属の軍隊とには、その途中でぶつかった。信雄は、引り返してきた家康の姿を、さも、意外そうにながめて、

「犬山には、別条もなかつたのですかと、たずねた。」

家康が答える前に、家康のうしろの旗本たちの間で笑い声が聞えた。が、家康は、信雄

にたいして、その理由を説明するのに、実に、懇切と鄭重を極めた。

真相を知って、信雄は梢げ返つた。家康は、馬をならべて、その肩をたたき、

「中将どの。何も御心配はありません。こちらに一失あれば、秀吉にも、より大きな一失がある。——彼方を御覽ぜよ」

と、彼の眼を導いて、小牧の丘を指さした。

かつて信長はあのですぐれた戦略的な着眼から、清洲の城を、この小牧へ移そうとさえした所である。標高わずか二百八十余尺という円い一丘陵にすぎないが、尾張の東春日井と丹羽郡の平野に孤立して、四方を俯瞰し、八方へ殺出し得る便があり、尾濃にわたる平野戦ともなれば、ここに一步の先を取り、中心の一旗を立て、塁をその周囲の要所に配しておけば、西軍の東下にたいして、抜き難い攻防両策の用をなすことはいうまでもない。そこまでの説明のいとまはなかつたが、家康は、指さし、また顧みて、こんどは旗本たちの方へ云つた。

「小平太（榊原康政）は、ここより直ちに、人数を分けて、あの小牧一帯の築塁にかかれ。——さしずめ附近の、蟹清水、北外山、宇田津のあたり、途、崖、流れを構えて、柵をもうけ、塹壕を掘ること。——また家忠（松平）や、家信、家員らも、助力して、

工は昼夜をわかつたず、起き番、寝番、四組にわかれて、できるかぎり早くしておけ」と、即座に命じて、それからの帰途は、駒の脚さばきも爽やかに、信雄と馬上の談笑を交わしながら清洲へもどつた。

二つの世

ひとは皆、秀吉はいま、大坂城にいるものとのみ思っていた。
が、彼は、江州ごうしゅうの坂本にいた。

家康が信雄と清洲で会見していた三月の十三日も、秀吉の身は——その坂本にあったのである。秀吉らしくもない立ちおくれ——という形がないでもない。

家康は、すでに立つて、万端、後図こうとの策も終り、浜松——岡崎——清洲と、着々、予定の進出を捗はかどつてきているのに、従来、疾風しつふう迅雷じんらいの早仕事ではしばしば世におどろかされてきた秀吉たるものが、なぜか、こんどは出脚であしがにぶい。——いやにぶく見える。

「たれか来いっ。おおい子ども。おらぬか。鍋丸なべまるも、於六もおらぬのか」
主人の声である。例によつて大きい。

わざと、遠くひかえていた小姓部屋の面々は、ソラ起きたと顔見あわせ、こつそりやっていた双六すじろくをあわてて片づけた。そのまに、十四歳の鍋丸が、しきりと手が鳴りぬく主人の部屋へ素ばやく走り出して行つた。

この小姓部屋もいつのまにかみな顔がちがつてきた。かつての加藤於虎おとら、福島於市おいち、脇坂甚内きざかじんない、片桐助作すけさく、平野権平ごんぺい、大谷平馬へいま、石田佐吉などのいわゆる子飼こがいの子どもたちも、いまは悉くことごとく二十四、五から三十近い若者となり、殊に賤ヶ嶽しずたけこのかたは、各おのおの、二千石三千石を加増され、馬をもち土地をもち家来を持って、それぞれここを巢立ちしていた。

いまいるのは、第二期生組であつた。一期生の山出しや貧乏ツ子の腕白ぞろいとちがつて、二期生はみな相当な家の子弟であつた。大名の子で質として来ている者もあつた。上品で行儀よく、知性に富んだ子は、南蛮寺の附属耶穌やそ学校でならつたミサの歌や讚美歌も知つていた。第一期生のような乱暴者や野性の横溢おういつはいまの小姓部屋には見られなかつた。

「殿さまは、お目ざめになつてるぞ。わしでない者に来いと仰つしやつた」
最年少の鍋丸は、何の命もうけず帰つて来て、ほかの仲間へそう告げた。

ひとりが、訊ねた。

「ごきげんが悪いのか」

鍋丸は、首をふり、

「ウウン。そんなことはない」

聞いて安心したように、菅六之丞が秀吉の部屋へ行つた。ここは一昨年焼けた坂本城を改築して出来た仮城で、松原越しに、潮が見え、裏窓から叡山の山桜がかすんで見えた。

「おや、おいでがない？」

部屋には、山風が通つていた。どんなに忙しくても、わずかな時間をぬすんでも、昼寝は薬と、怠りない秀吉だったが、起きるとたんに、爽快な気をあたまにも面上にも満たした彼の活動が始まり、周囲をあわてふためかせるのが常だった。

「あれや、佐吉だろう。大坂表からもどつて来た佐吉とみゆるぞ。……すぐここへ呼べ」

秀吉は、欄へ出ていた。城下から大手の坂下へ馬をとばして来る小さい人影をそこから見つけ、うしろのあしおと躰音へ、顔も見ずにいつつけた。

何か、ほかの用事を命じるつもりでいたにちがいないが、それは忘れ顔に、かわや厠から出てくると、かけひ箆の音のするてあらいがこ手洗囲いで、ガボガボうがいをし、ついでに、辺りへ水をは匆ねか

しながら顔を洗った。

侍部屋からひとりが出て来て、小姓衆はたれもないのかと彼方へ叱り、いそいで秀吉の袂たもとをうしろから持ちながら、

「殿。ここはお便所のお手洗場ですのに」

と、注意した。

「かまわぬ。水はきれいだ」

さつさと、一室に入り、

「茶をくれない」

と、どなつて、

「——これこれ、おまえたちでも、ガシャガシャ掻き廻せるだろう。茶道へ命じるに及ばん。坊主にしてもらおうと手間どる」

小姓のひとりが、その茶ちやわん盃をささげて来ないうちに、石田佐吉の汗ばんだ顔が、鬢びんをぬらしたまま彼の前に平伏した。

「どう運んでおる？ 大坂表の留守居どもは？」

「おさしず通り、猶ゆっよ予なく、手当ていたしております」

「そうか。西国表は、備前びぜん、美作みまさか、因幡いなばの三方国とも、毛利への万一の備えに、一兵もうごかすなと申しつけたことも、手ちがいなく達しておるか」

「その儀は、わけて御念を入れられてのおさしずとて、充分に触れを達し、また使いも立て、毛利への固めは万ぬかりございませぬ」

「泉せんしゅう州しゅう岸和田きしわだの孫兵次かづらじ（中村一氏）へ、これも念のため、黒田官兵衛、生駒甚助、

明石与四郎などの手勢六、七千を加勢として送りつけておくことも」

「は。てまえのおる間に、即日、加勢衆、岸和田へ向いました」

「よしよし」

と、秀吉はそこで、薄茶を一わん、うまそうにのんで、

「母上も、ごきげんか……」

と、ひとみを静かにした。

老母はすでに七十四である。妻の寧子ねねも四十に近い。一日家をあけても、妻はともあれ、老母は年が年なので、心にかかるものらしい。

「はい。おかわりなくいらせられました。御母堂さまには、かえって、戦の忙しさに、殿が不養生はしておらぬやと、殿のお身の方をお案じなされておいででした」

「また、あの子は灸をすえおるか、と訊かれたことである」

佐吉は笑つて、その通りです、と答えた。

他を遠ざけて、ふたりだけの対座に、こう笑い声の出たはずみに、秀吉はまた、ふと、
「茶々は？ ……。茶々たちも、元気ようしていたか」

と、たずねた。

「は、あの、お三方の姫さまたちで」

佐吉はちよつと思ひ出せぬような顔してみせた。待つていましたという風に答えては、
佐吉め、嗅ぎつけておるナと、かえつてこの主人にはおもしろくない氣持が後日にやつて
くるにちがいない。ぼやつとして見せるに限ると、考えたからである。

その証拠には今、茶々は？ と、ぎごちなく訊ねたとたん、主人は、家臣にたいする
主人顔もくずして、何ともつかぬごま化し顔に、羞恥らいみみたいな色をふくみ、ひどくテ
レてお在すではないか。

佐吉は、敏くもそう見てとり、心のうちでは、おかしくてならなかつた。

三人の姫たちとは、いうまでもなく、おとし北ノ庄落城のみぎり、城将柴田勝家と夫
人のお市の方が、幼き子らには罪なきものと、その養育を、秀吉に託してきたあとき

の可憐かれんな息女三名のことである。

その後、秀吉は、わが子のように、この姫たちを家に養い、大坂城普請ふしんのときも、特に、彼女たちのために明るい一小曲輪くるわを設計せつけいさせ、黄金の籠かごに名鳥を飼っているように、折々そこをのぞいては、共によるこんでいたのだった。

が、この名鳥とこの飼主のあいだには、将来、それだけの関係ではすまないものが約束されそうなことは、たれにも予測できることだった。とりわけ三人の姫のうちでも、長女の茶々の君は、年ばえもちょうどとし妙齡十八、世にはあるまじき麗人よと、そろそろ城内のうわさにもなりかけている。北ノ庄の業火ごうかが世に生みのこした名花だという人もあり、織田どのの由来美人系の血をひかれて、母君のお市の御方にも増してお美しいとほめ称たえる者もある。何しても、大坂新城の竣しゅんこう工と、茶々の君のめつきり人目立ってきたことが、何か、時を同じゅうして、羽柴家の家運の季節を象徴しているようでもあった。十八の茶々の君のそうした佳麗かれいさが、秀吉の眼をひかないわけではない。この道にかけても、六韜りくとうの奥の手、三略りやくの妙に通じている主人である。或いは、そろそろ暮夜ぼやひそかなる花盗人を真似て、一度や二度ぐらいは、茶々の君に声をたてられて、逃げ帰っておられるやもしれない。——そんな匂いを石田佐吉は前からうすうす嗅かいでいたところである。

おかしきをつつもうとするがつつみ得ない。

「佐吉。なにを笑う」

秀吉は見とがめた。が、自分も少し、おかしげである。やはり佐吉の気持はもう見ていた。

「いや、何という儀でもございませぬが、軍務にまぎれ、このたびは、お三方の御起居までは、ついお伺いもせで戻りましたので」

「そうか。ふム……まあ、よい」

と、秀吉の方から急にその話を逃げて——「途上、淀川よどがわや京都あたりの風聞ふうぶんは、どうじゃな」

と、世間ばなしへ転じた。

遠くへ、使いをやると、秀吉はかならず、これを訊ねた。世上の機微、人心の動向を、以つて、つねに打診しているらしかった。

「いずこにあつても、きのうきようは、戦のこともちきりです。淀川よどがわは舟で上りましたが」

「淀と申せば、淀、枚方ひらかた、伏見などの葭よしや葦あしは、よく刈かれておるか。運上も収とれておる

か」

「おかげをもって、だいぶ佐吉の身入りはよいようにございます」

「それはよかつた」

と、秀吉はよろこんでくれた。佐吉も、同僚なみに、近ごろは相当な侍どもを抱えているのに、くれてやる禄にも困っておりはしないかということ、主人が案じてくれていることが、佐吉には、よく分っており、またありがたかつた。

賤ヶ嶽の後、同僚の加藤福島を始め、七本槍とうたわれた若者はみな千石、二千石の加増をもらったが、佐吉は、実戦の武功といつては、首一つ取っていないので、彼にも加増の恩命があつたとき、固くそれを辞退していた。——そしてそれに代るに、淀川すじの枚ひ方らかた、伏見、淀などの不用地に枯れ捨てになつている葭や葦を自由に刈りとること、附近の運上権（河川税）の支配を願つた。与える方にとっては、無価値たのものであつた。が、佐吉のこと、それをどう利用し、どのくらいな収入としているか、秀吉は興味をもつて見ていたのである。

佐吉がそれを乞うとき、もし私にその不用地を賜わるならば、事あるとき、一万石取りに匹敵する侍を出して、軍務のお役にたててみせます、と大言していた。——これも秀吉

が、おもしろいことをいうやつだと思つたことのひとつだつた。

その佐吉から京都大坂の世情を徴ちようしてみると、信雄に端を発したこんどの戦争は、たれも秀吉対信雄とは考えていない。秀吉対家康と見ているのだ。信長なき後、秀吉にとつて、せつかく平和になるかと思われたものが、またぞろ、天下を二つにわかち、諸州にわたる大戦争が眼前に來たものとして、人心は極度な不安にくるまれているという。

たとえば、堂上のうちにも、大いにこれを悲しむ者があり、多たもんいん聞院日記の筆者のごときは、天正十三年三月の日記の一項に、

——天下動乱ノ色アラハル。如何ニ成リユク可キヤラン。心細キ者ナリ。神慮ニ任セ、闇アンアン々トシテ明ケ暮スマデ也。端ハシナキ事端ナキ事。

と、その痛嘆を書きつけているがごときものが、一般の世態にも、もつと濃のうこう厚に露骨に見られていたであろう。

(人間はなぜこう戦争のない世には生きてゆけないのか?)

これがこの節、世上の疑問だつた。

応仁以来、戦争の惨はなめつくし、生きるべくあらゆる試煉にも辛抱づよくされて來た庶民だが、この頃はすこし懷疑的になりかけてきた。

いつたい、こんどの戦こそ、天下分け目というが、二つの天下なら二つのまま、何とか折合いはつかぬものか。つきそうなものではないか。世間はそう考える。

口に平和を約さない指導者はなく、戦の酸鼻さんびを知らない士人もなく、生まれればすぐ生命をおびやかされるを怖れない庶民はない。人間という人間ことごとくが平和を希ねがつていない者はないのだ。戦を呪のろっていることは確かなのだ。それでいて熄やまない。熄やんだとおもうと直ちに次の戦争へ準備する。勢力の分布がたつた二つの世になつてもなお停止しないばかりか、かえつてそれは、従来の恐怖よりも、最大な険悪さを帯び、天下総がかりの規模と犠牲とおもわせる。

これは人間のせいではない。人間がやるとすれば、人間ほど愚かな動物はないということになる。

では、何が、何ものが、それをやるのか。

個人ではない。人間の結合したものがやるのだといえる。

正しい人間性というものは、必ず、一箇のものでなければ、人間性として見ることはできない。

人間と人間とが群をなし、万、億と結合したものは、もう人間ではなく、奇態なる地上

の群生動物にすぎない。これを人間と観^み、人間的解釈に抛^よろうとするから、わけが分らなくなるのである。

だから庶民はいつている。

(天下を二つに持ち分けければ、どんな理想も栄華もできそうなものじゃないか。何だつて、分け目の勝負を賭^かけてまで、それを独り占めにしたがるのだろうか?)

凡下の俗言だが、これは個人の通念的正しさをいつているものだ。時の秀吉にせよ、家康にせよ、それくらいなことは分つているにちがいない。一箇の人間としてはである。しかし、過去、現在を通観してみると、世の中が人間意志だけでうごいて来たとおもうのは人間の錯^{さつ}覚^{かく}で、実は、人間以外の宇宙の意志といったようなものも多分にある。宇宙意志というのが当たらなければ、人間もまた、太陽、月、星のごとき宇宙循^{じゆん}環^{かん}に約された運命に、どうしても動かされているといつてもいい。

いずれにせよ、時の代表者となつた者は、もう純粹なる一人間とはよべない。秀吉にしても家康にしてもである。一箇の中に、無数の人間意志や宇宙意志を融^{ゆう}合^{ごう}しており、彼自身は、それを“われ”だとしている者である。また周囲も、庶民も、それを“彼”だとしている者である。そしてその“我なり彼なる者”に、物々しい位階官職や姓名や特種な

風貌があるために、これを人間同士で「何のなにがし殿」とつよく印象しあうが、実は、姓名官職はすべてみなこれ単なる仮の符牒ふちようでしかない。その正体は、たくさんな人間の中の、やはり一つの生命体にすぎないのである。

こう観みてくると、あわれ庶民の望んでいる平和はいつも遠いようだ。しかし、時の代表者として、平和を望んでいないのではない。いや誰よりもその到達を熱望しまた実現をいそいでいる者だ。が、彼には、条件がある。彼はその目的の権化ごんげでもあった。だから相反する者に会えば、両者は忽ち戦争に入る。いかなる外交の秘策も敢然として行いきる。——そして、この代表者の意志とうごきの間を縫って、無数の人間——あるがままな人間のすがたが、譎詐きつさ、鬭争どうそう、貪欲どんよくの本能に躍り、また犠牲、責任、仁愛の善美な精神をも飛躍させる。これが人間みずから人間の住む時の地上を作りもし、彩りいろどりもし、また副産物として、ときには、文化の飛躍をも示すという——解き難いふしぎを天正の世にも見せているのであった。

ちずびようぶ
地図屏風

佐吉が退がる。

入れ代りに、金森金五、蜂屋頼隆はちやよりたかのふたりが見える。

「あちらへ移ろう」

秀吉は、席を換え、橋廊下をこえた一棟ひとむねへ入った。

その口も、庭まわりにも、小姓を番にたてて、長いこと、密談だった。

金森、蜂屋のふたりは、今、北陸にある丹羽長秀の麾下きかの将だ。秀吉は、長秀を味方にするべく、先頃から、肺腑はいふをくだいでいる容子ようすだった。

もし長秀をして、敵方へ走らしめんか、これは彼として由々しい不利とおもう。戦力の上ばかりでなく、戦争名分の上に、信雄や家康の云い分を、世上に信じさせる力が大きい。——なぜならば、丹羽長秀という者は、柴田に次ぐ信長の重臣であったのみでなく、この乱世にめずらしい、温厚篤実おんこうとくじつな人物という信用をもっているからだ。

それだけに名分では歩の悪いことを承知の秀吉は、是が非でも、彼を味方に加えねばと、きょうまでも、長秀の歡心を買うためには、百方手をつくしていたのである。

もちろん家康や信雄からも、あらゆる誘引策ゆういんさくが長秀へ向けられていることも確実だ。

しかし秀吉の熱意にはついに彼もうごかされたか、数日前、まず助勢として、金森、蜂屋

の二将を北陸からさし向けて来た。秀吉はよろこんだが、さりとしてまだ安心はしていなかった。

「御祐筆ごゆうひつに、すぐこれへ参るようにとの仰せですぞ」

金森金五が、ひとり出て来て、番の小姓へいつけた。

大村由己ゆうこがすぐやって来た。

中では、秀吉のことばに従って、彼が筆をとり、長文な書状が書かれ始めていた。——
丹羽長秀宛にである。

簡条簡条のうちの、重おもなるところをいってみれば。

一 去る十一日、美濃守秀長へ下された御書面を拝見し、涙がこぼれ申した。

一 五畿内の固めはもちろん、西国表まで、丈夫に申しかため申した。勢州表の戦況は、ここ坂本において、さしずいたし、甲賀、伊勢の間にも、城三カ所も、新たに築き、味方は毎日の勝報に士氣いよいよふるい申しておる。

一 美濃方面は、御存じの池田勝入、稲葉伊予、森武蔵など、慥しつ乎かと構えており、別条なく、江州永原に、孫七郎秀次、高山右近、中川秀政、そのほか一万四、五千もの人数を、陣取らせ申した。

一秀長をば守山に。於次（秀勝）をば草津に。長岡越中（細川忠興）をば勢多に陣取らせ申した。また、加藤作内、堀尾茂助をば、甲賀のまん中にすえおき、筒井は大和に、こちらの人数を副え、さしおき申した。

一備前、美作、因幡など、西国表は、一人もうごかさず、大磐石。紀州、泉州へも、昨日、蜂須賀、黒田、生駒、赤松などの人数六、七千も増してやり申した。

このほか、秀吉は、このたび大戦にのぞむ兵力配備を、微に入り細にわたり、しかも具體的に、一切ぶちまけて長秀への書面に書かせた。そしてまた、

一右のように、こちらは万々御懸念は御無用であるが、御身の御用心と、御城の御用心こそ、肝要たるべきこと。

と、かえつて、長秀の健康に注意を云い添え、さらに、前田又左衛門利家こそ、北陸では無二の同心の者だし、北陸の一の木戸でもあるゆえ、せつかく充分に意志の疎通を計られて、唇齒のお交わりあるようにとも云い添えている。さらに終りには、

一もしそちらに人数がお入用なら、蜂屋、金森はお返しする。そのほか五千や一万の軍勢はいつでも加勢に向ける余裕があり申す。

一このところ、世上一般は、物狂いのていで、人心恟々としており申すが、筑前

は覚悟をもつて、ここ十四、五日のうちには、きつと世をしずめて見せ申すべくに付、くれぐれお案じなきように。

として、かくひつ 摺筆させた。

使者はこれを持つて、この数寄屋からすぐ北陸へいそいだ。

伊勢方面からの戦況報告の使いだけでも、夕刻までに、三回も着いた。

その書状を見、使いを引いて、直接、情勢を聞き、またことづてを託し、返書をかかせたりしながら、夕飯はたべた。夕飯はほかの侍臣も交えて大書院でたべた。

大書院の一隅に、びょうぶ 屏風がある。一双全面にわたり、日本全国の地図がきんてい 金泥のうえに描かれてあつた。秀吉は、それへ眼をやるとふと、

「越後へやつた使いは、まだ何の沙汰もないか。——上杉かげかつ景勝へやつた使者どもじやよ」と、あたりへ訊ねた。

「まだ、日数にいたしましても」

と、指を繰くつて、遠国の不便を語ると、秀吉も指を繰くつて、

「そうか。きようは十三日だつたな」

と、あらためて日をつぶや呟いた。

木曾の木曾義昌よしまさへも、使いが出してある。常陸の佐竹義重よししげへも数度の密使が通つていた。そのほか地図屏風に見える細長い国の端から端まで、彼の外交網はゆきとどいていた。

秀吉は由来、戦は最後の手段なりとしていた。外交こそ戦であるという信条なのである。故主信長の弔い合戦とむらという名分をかかげ、山崎の一戦に光秀を討ったとき以外はみなそうだった。

だが彼のは、外交のための外交ではない。また、外交あつての軍力でもない。——常に、軍力あつての外交なのだ。軍威軍容を万全にそなえてからいつものをいうのである。丹羽長秀に送つた手紙の内容にも、その独参湯れいじんとう的な味がつつまれている。

が、家康には、この手もきかない。

たれにも黙っているが、実は秀吉は、事態のこうなる前に、密ひそかに人を浜松へやって、(筑前が其許そのもとに好意をもつていことは、前年、其許そのもとの官位昇進のために、この方から朝廷へ奏請そうせいしたことを思い合わされてもお分りであろうと思う。御辺とこの方とが、何故、戦わねばならぬ理由があるうか。信雄どのというお方は、元来ああした御性格だと、暗愚は天下の定評になつている。愚昧ぐまいな遺族を擁して、御辺がいくら名分をふり廻しても、

世間は其許の拳を仁人の義軍とは申すまい。結局、つまらないことではないか。ふたりが喧嘩するなどは。——もし賢明な御辺がそこに氣づいて、この方と将来の共栄を約すならば、御辺の所領へ、美濃尾張の二州をさらに加えようではないか。以つて、尊意は如何となすか)

と、云い送つた。

相手による。これは明らかに秀吉の失敗に歸した。が秀吉は、信雄と手切れになつた後までも、なお使いを立てて前にもまさる好条件を附して、家康を口説くどこうと試みた。

使いは、家康の激怒を買つて、ほうほうのていで戻つて来た。その報告に、

(筑前は、家康を知らぬ)

といわれました、と使者は秀吉に語つた。すると秀吉は、苦笑して、

(家康も筑前の真は分らぬのだ)

と、いった。が、このことはあまり彼の上出来とはいえない。彼もそれきり触れなかつた。で、側臣でも裏面でこんな交こうしやう渉が行われていたとは誰も知らなかつた。

なにしても、ここ坂本におけるかれの起居は、日々繁はんぼう忙をきわめていた。伊勢南尾張方面の軍司令部と、北陸東奥から南紀西国にわたる全土の外交諜報本部をかねていた。こ

ういう機密な中^{ちゆうすう}枢部としては、大坂表よりも、坂本のほうが地理的にも時間的にも便であり、使者の往来も、人目立たず、四道八通の利があつた。

大坂、京都は、第五列の活動がさかんである。表面、家康は東海から東北。秀吉は近畿から西国と、その勢力範囲は劃^{かく}然^{ぜん}としているように見えるが、彼の本拠地たる大坂表のうちですら、徳川方へ気脈を通じているものは無数であろう。公卿^{くうげ}堂^{どうじやう}上^{じやう}のうちですら、暗に家康へ意をよせ、秀吉の蹉^さ跌^{てつ}を待つているものが絶無ではない。

また一般人士のうちには、父母は関西に主取りしているが、子は東軍の將に仕えているものもあり、兄は義をもつて、家康方に与^{くみ}しているが弟は大坂城と切れない縁故をもつているものもある。思想的にも、一方は秀吉の理想に賛し、一方は家康の名分に共鳴し、同じ一族のうちでも、血みどろな葛^{かつ}藤^{とう}を起して、骨肉がわかれて相闘うの悲劇をかもしている。

戦の惨は、戦場の血しおより、事前と事後の、こういう生々しい人間苦に、より以上深刻である。――が、そんな悩みは、ものともせず、人間の大多数が、混乱と自失に墜ちている間に、時こそ来れど、平常の社会状態では遂げ得ない望みをとげようとする悪侍の一部もたち交じつて、経済も道義も秩序もみだれ始め、戦の外に、戦以上の生活苦やら闘争

も渦まき始める。

秀吉は、よくその苦味を知っている。彼が、尾張中村のあばら屋に育ったときから多年の放浪時代の世がすでにそうだったから。——以来、信長の出現により、一時はなお社会苦は苛烈かれつだったが、半面に、庶民生活の明るみと歓びも伴ってきた。この人によつて、真の平和がくるかとおもわれた。その中道にして、本能寺の変である。秀吉は、信長の死によつて頓挫とんざしたそれを、おれがやると、誓い出した。ここ二年余にわたる不眠不休の努力は、それへの一步まえまで、近づいてきた。——いまは彼の、わが望みならんとするまさに最終の段階に近い。千里の道を九百里まで来たものといえる。が、あとの百里に最大難関はあつた。この難関にはいつか当然正面から抜くか破るか直面しなければならぬものと予測はしていたが、さしかかってみると、これは想像以上手ごわいものらしい。

家康——

この名ほど今日まで、彼のあたまへ重量を感じさせるものはない。『家康』——近ごろは、眠りのまも、この二字だけは、眠っていない。

刻々の謀報ちようほうは、その家康の行動を、いながら彼に明らかに知らせている。家康もまたわれに劣らぬ覚悟と悪意と全力とを傾けつつあることが手に取るように彼には見える。

自分が、ここ旬日を、坂本に送っている間に、家康は今や清洲まで大軍をすすめてきたとある。おもうにこれは、伊勢伊賀紀州の戦を蜂の巣をついたような状態において、みずからは西上を策し、一挙、京都に入つて大坂へ迫ろうという颱風路を示すものであるは明らかである。

が、家康とて、その道が易々たる坦道たんどうとはおもっていない。西上までに一大会戦を期しているであろう。秀吉もそれを期す。——その地はどこか。いうまでもなく、この曠こうせ世いの東西両大軍の乾坤けんこん一擲いつてきに自由なる平原は、木曾川を境する尾濃大平原のほかにない。

一歩先んずれば、その戦備に構築に、地の利を占め、要意に欠くなき利をうるであろう。家康はすでにそこに臨んで満を持しているのだ。秀吉は、その意味で、立ちおけている。この十三日が暮れんとしても、なお、坂本からうごく様子は見えない。

これは相手を知らぬからではなく、家康の何者たるかを、知りぬいているからである。この相手は、明智、柴田の比ではない。要意のためには、立ちおくれもやむを得まい。彼は万全を期すのだった。丹羽長秀を抱きこむために。毛利をして西国に変を起させないために。上杉、佐竹に関東の背後をおびやかさせるために。四国、紀州の根来ねごろや雑賀党さいがなど

の危険分子にまず潰滅かいめつを与えておくために。さらに手近な、美濃や尾張の信雄おんじ恩顧の諸將にたいし、利をもってそれを切り崩すために。

「殿。また、早馬です」

と、食事中にも、あわただしい取次が絶えない。

ちようど、飯をたべ終つたところだつた。秀吉は、箸はしをおくなり、

「どこから」

と、書状ばこ筒へ、手をのぼした。

「使いは、尾藤甚右衛門どのの御家来です」

「や。来たか」

待ちかねていたものの一つである。

大垣の池田勝入の城へ旨をふくませて、再度の説客としてやった尾藤甚右の返辞。――

吉と出るか、凶と出るか。

さきに黒田ノ城主、沢井左衛門を説かせにやった武藤清左衛門、漸蔵主ぜんぞうすの二使は、その後、杳ようとして消息がない。密偵は九分九厘までの不成功と知らせてきている。尾張春日井郡の丹羽勘助を抱きこみにやった今井けんぎよう校ぎょうもついきのう、恥辱を与えられてむなし

く帰ってきたばかりだ。——秀吉は、尾藤甚右からのてがみを、神籤みくじの封を切るような心地でひらいた。

「よしっ」

それしかいわなかった。

「使いを、いたわってやれ」

その夜の深更、彼も眠りについてからのことだ。なに思ったか、ムクと起き、例の声で、宿直とのいをよびたてた。

「甚右の使いは、明朝帰るか」

「いえ、かかる折と申して、ひと休みの後、夜道をかけて美濃へ帰りました」

「はや帰ったか。……では、祐筆ゆうひつをよべ」

「はっ、御祐筆には、どなたを」

「由己ゆうじがよい」

と、いったが、すぐ思い直し——「いや、料紙りょうし、硯すずりをもって来い。祐筆も眠たかろう」

と、思いやった。だが実は、その祐筆が髪をなで衣服を着かえて来るのがもどかしいふうであった。

寢床の上で筆をとり、彼は一書をしたためた。尾藤甚右衛門宛てにである。

——骨折りによって、勝入父子、われへ同心一味の誓約、大祝この上もない。

だが、にわかにならぬにわざわざ申しやる一事は、勝入秀吉へ加担かたんと知らば、かならず信雄、家康が手をかえ品をかえ合戦を挑いどみ来るは必ひつじょう定なれど、決してその手にのつて応ずるな。逸はやまるな。池田勝入、森武蔵は、前々から敵を侮あなどりがちな武勇自慢の者どもである。その方、軍監ぐんかんとして、よくよく心得おくように。機あやまを過あやまらず諫いさめよ。その段、肝要かんようのこと也なり。謹言。

筆をおくと、すぐ、

「使番の者に、今からこれを大垣の甚右のところへ持たせてやれ。いそぐぞ」と、いいつけた。

ところが、翌々日の夕、十五日にはもうその大垣からべつな情報がまた届いていた。

犬山落城。——すなわち勝入父子が、去きよしゆう就一決と同時に、木曾川第一の要地を占領して、秀吉へ加担かたんの引出物ひきでものとした快報であった。

「やりおツたわ」

秀吉はよろこんだ。しかし、憂えた。

こまきやま
小牧山

あくる日は、十六日。

秀吉はもう坂本にいなかった。

彼の杞憂きゆうは、果たして単なる杞憂ではすまなかった。この十六、七日のあいだに、早くも憂うべき破綻はたんの兆きざしが事実となつてあらわれた。

犬山快捷かいしやうのあと、勝入の智むこの森武蔵守が、われも一功名をと、徳川方の本營こまき小牧を奇襲するつもりで、羽黒へ潜行し、かえつて大敗を喫したのみか、鬼武蔵とよばれた森長な可がよしは、討死したということが聞えたのである。

「あたらよ、氣負きおい者。その愚おろや、言語道断ごんごどうだん」

秀吉の痛嘆は、自分への罵ののしりだった。家康に出鼻てばなをくじかれた恥に燃えた。そして、

「今は——」

と、趾あしを挙あげて、十九日、いよいよ大坂を出発せんと、意を決した前夜、またも火のつくような凶報きようほうが、紀州方面から入った。

紀州の畠山貞政が、根来、雑賀党などの一揆をかたらい、海陸から大坂へ迫ろうとしている。勢い猛烈、油断ならずとある。

信雄、家康の手がそこへまわっていることはいうまでもない。さなくとも紀泉の各地には、本願寺と類の不平の徒が、淡路、四国の諸豪と呼応して、つねに機会を狙っている。もつと危険なことは、それらの仲間が一般庶民にすがたを変えて、新府大坂城下には、たくさんに住んでいるという事実である。

「おれの世帯は大きい。かろがると、にわかになてぬもしかたがない」
秀吉は、発向の日を延ばした。

そしてほぼ二日間に、万事をすました。留守のかため、市街の戦備も、遺漏なく手配した。また前に蜂須賀勢、黒田勢などを助けにやつてある各出先へ、指揮、激励を送つて、その状況を聞いた。そしてまず一安心と見たか、

「たのむぞ」

と、留守を蜂須賀正勝にまかせ、いよいよ大坂を立ち出でた。

天正十二年三月二十一日の、早朝のことだ。

難波の葎に、行々子の音が高い。花はちり、行く春の巷に、埃りが舞つて、長い長い甲

胄の武者や馬の出陣列に、花つむじが幾つもの小さいつむじを捲き、それが自然の餞別はなむけのように見えた。

沿道には、それを見物する庶民の男女が、果てなく垣を作っていた。

この日、秀吉に従う将士、総軍三万余と称された。

たれも、その中のただひとり、秀吉のすがたを見ようとした。

「見えなかつた」という者と「見た」という者と、まちまちであつた。

おそらく気がつかぬ者が多かつたのであろう。小男の秀吉が逞たくましい騎馬の諸将にかこまれると、よけいに小さくみえ、風采ふうさいもあがらないので、眼に見ても、それと教えられなければ、ちよつと気づかぬ程である。

が、秀吉はこの群衆を見、

「浪華ななわは繁はん昌しょうしよう。いまや興りつつあるようだ。まずまず大丈夫」

と、ひそかな笑みに確信していた。

秀吉の六感は、群衆の色彩を見てそう思った。彼らの好みは明るくて大どかな色と模様をえらちんでいた。亡運をたどる城下にこの光景はない。男女の皮膚の色には進しん取しゅな気が耀かがやいている。市民の生活はうまくいつているらしい。彼らは健康で勤勉でそれぞれ生活を工

夫し、この新府の地に希望をつないで住んでいるにちがいない。それはここの中心をなす新しい城への信頼と支持でなくて何であろう。——勝てる。こんども勝てる。秀吉は将来をそう卜した。

当夜は、枚方に宿営。——翌早暁から三万の兵馬はまた淀の河流にそつて蜿蜒と東下した。

そして伏見近辺までくると、淀川の渡しに、およそ四百ほどな人数が迎えに出ていた。

「あれや、たれの旗か？」

諸将はあやしんで眼をこらした。

たれとも知れず、赤地に黒く大一、大万、大吉と書いた大のぼりを立て、五本金のふきぬき、馬じるし、金の団扇に九曜の小馬じるしをかがげ、騎馬武者三十、長槍三十本、鉄砲三十挺、弓二十張、そのほか徒士武者一団、華やかに、川風に戦がれながら、まんまるに、かたまっていた。

秀吉も見て、使番の平塚太郎兵衛に、

「行つて、質して来い」

と、走らせた。

太郎兵衛はすぐ駈け戻つて来て、

「石田佐吉でした」

と、報じた。

秀吉はかろく鞞くらつぽをたたいて、

「佐吉か。さてきて。佐吉のはずだわ」

と、何か思い当つたらしく、機嫌のいい感声を放った。

近づくほどに、石田佐吉が、やがて馬前へあいさつに来た。佐吉は云った。

「かねてのお約束は今日の事と、このあたりの不用地をかく刈りか拓ひらき、日ごろ蓄えおきま

した運上金をもつて、一万石の御軍用を備えおきました。何なりと、明日のお勤めに相か

なわば、かたじけのう存じまする」

「おお、ついて来い。佐吉は、うしろにいて働け。うしろの兵ひょうろう糧方や大荷駄のやり繰

りなど、しかとやれよ」

一万石の兵馬そのものよりも、ひとりの佐吉の頭脳の方が、秀吉には拾い物の気がされた。先駈けを争う武功一徹の武者ばらは雲のごとくいるが、当節、経済的にすぐれた頭脳などは、この三万の甲冑のなかにも見当らない。長浜以来の小姓部屋が生んだ一異才とし

て、佐吉のあたまは、秀吉にとり、まさに珍重に足りるものだった。

その日、大半は京都を通過し、近江路に入り、翌二十三日の午前は早くも不破、赤坂の古駅を通っていた。このあたりは秀吉にとり、青年逆境の頃の追憶が路傍の一木一草にもあつた。

(おお、菩提山ぼだいざんも見ゆる……)

菩提山を望めば、菩提山ノ城もおもい出され、その主あるじにして栗原山に隠棲いんせいした若き竹中半兵衛のすがたも彼のまぶたにうかんでくる。その栗原山へ膝まを屈まげ礼を低うして、何度となく登った頃のあの熱意と謙けんきよ虚けんきよと希望の高さとを胸にあらたにするとき、秀吉はわれながら青年の血の純情さを尊くおもった。かえりみて、その短き青春を、一日とて、徒食たかに送らなかつた多艱たかんに謝した。年少の逆境、青春の苦闘、それが今日の自分を作つてくれたとおもう。暗黒の世と濁流の巷がわれに与えてくれた恩恵であつたとおもう。

主とよばれたが、心の友、竹中半兵衛も、彼の半生には忘れがたい人だった。半兵衛亡きのちも、困難に会うと、半兵衛あらばと、おもい出された。それを何ら酬むくゆることもなく逝ゆかせてしまった。ふと、痛涙を刺すようなものが秀吉の眼を熱くした。——菩提山上、一片の雲は、無心だったが。

「あ。……おゆう」

彼はそのとき路傍の松影に、ひとりの清楚な尼法師の白い頭巾ずきんをしてたたずむのを見た。尼のひとみは、ちらと秀吉の眼と合った。それは行く人の行くてへの祈りと、つい先ごろの施物せものの恩謝とを語っていた。秀吉は、馬をとめた。うしろを振り向き、何ごとかをいいつけようとしたらしかった。——が、松影の白鳥はもう見えなかった。

その夜、彼の泊った宿営に、一盆のよもぎ餅が届けられていた。ひとりの若い尼が名もつげずに、さしあげて賜たまわれ——と、おいて行ったものという。

「これは、うまい。……なんと蓬よもぎの香のよさよ」

食後ながら秀吉は二つも喰べた。ただおかしいことには、美味うまい美味いといいながら、眼には涙に似たものがあつた。

眼ばやい小姓は、怪けしいこととございます——と、それを扨こじゆう従の将たちにあとで話した。はて？ ……と一同も解げせぬ顔して、

「なんのおん涙やら」

と、疑い、

「あすは尾濃平原びのうに馬を立て、徳川どのという大敵にまみゆるに、つねの殿ともおもわれ

ぬ」

と、主人の愚痴ぐちを案じあつたが、枕につくや、秀吉の高いびきに変りはなく、憂うるをやめよ、といわぬばかりに、快かいすい睡すいわずか二夕刻ふとぎ、天もまだほの暗い早曉にここを立ち、その日のうちに、第一梯団ていだん、第二梯団とも、続々、岐阜に着いていた。

勝入父子の迎えをうけ、城内城外、この大軍にあふれた。

夜空をこがす松たいまつ明あかりやかかりは、遠く長良ながらの大河をよぎり、なお第三、第四の後続部隊が、この平原も狭しとまで、夜どおし東へ東へと流れつづくかに見えた。

「やあ、久しや」

これが秀吉と勝入との、会つたとたんの、どつちからともない声だった。

「御父子、このたびの同心は、筑前、真実うれしゆう思う。あまつさえ、犬山一城、引出物の御殊勲ごしゆくんは、さすがというもおろか。——いや筑前すら、その迅はやき、機に敏なるには、胆をつぶし申した」

秀吉は、口を極めて、その功をほめたが、勝入の智むちが、その以後にやった岩崎の大敗について、何もいわなかつた。

いわれぬだけなお勝入は面目なかつた。智むちの森武蔵守がやった失敗と損害は、犬山の功

をもつても償つぐないきれぬものと深く恥じているふうに見えた。——殊に、秀吉から十三日付けの坂本発の書状が、尾藤甚右衛門の手にとどいたのが十七日の夕方であり、それには、家康の挑戦にのるな、功に逸はやるなとかたく戒いましめてあつたが——時すでにおそしであつた。勝入がそれを示されたときは、すでに聳たかが軽々しい行動をやって、惨敗、また主将森の討死という大傷おおいたで手を味方に見てしまった後なのであつた。

それについて、勝入が、

「いや、そう曠はれがましゆう仰おほされては、勝入は、穴にでもはいりたい。聳たかの短慮からお味方の出鼻をくじき、何と、お詫び申そうやら、実は、お目にかかるのが辛つろうおぎつた」

「やれ、よけいな氣づかいをするものかな。ははは、池田勝三郎らしくもないぞよ」

秀吉はわざと、彼の青年時代に呼びなれた名をもつて彼の精氣へ呼びかけたが、共に笑つても、勝入の笑いにはどこか明るさがなかつた。ふとしたらこんどの大戦には勝入は死ぬのではないかというような氣もちが秀吉のどこかでしていた。

むずかしい。叱るべきか、叱らないでおくべきか。秀吉は、次の朝の寝ざめにも、ふと考かんがえた。

しかし、何はあつても、犬山一城が、来るべき大会戦のまえに、味方の手にある利は非

常なものだ。単なるなくさめでなく、秀吉はそれを繰返し繰返し勝入にいつてその功を賞した。

二十五日の一日をもつて、秀吉は、身の休息をかねて、諸兵の集中を終了した。その後、なお集まった諸軍を合して、総兵力、ここに八万余と号された。

次の二十六日は、出陣でなく、すでに出戦だった。朝、岐阜城を発して、ひる鵜沼うぬまにつき、ただちに木曾川に船橋を架かけさせて、夜営した。

そして翌二十七日の朝、野陣を払って犬山に向った。秀吉が犬山城に入ったのは、ちょうどその日の正午であった。

脚下に、木曾上流の涼そうそう々たるをのぞみ、若みどりの燃ゆる四月に近い青空の下にたつと、彼は、寸刻も惜しまれた。彼の血はなお若かった。

「脚の丈夫な馬を——」

と、いいつけ、ひるの兵糧をつかうとすぐ、軽騎軽装して、城門からとび出したのである。

「あつ、いずれへお越し？」

と、駈けつづいて来る諸將をふりむいて、

「あまり来るな。たくさんは敵の目につく」

勝入の聲、森武蔵守が、つい数日前に戦死したという羽黒村を駈け通って、敵本営にまぢかな二宮山へ登って行つた。

ここに立てば、小牧山は眼のまえにあり、尾濃の平原は、草の海にも似る。

北畠、徳川の聯合軍は、およそ六万一千余と聞いていた。秀吉は、遠くへ、眼をほそめた。真昼の陽がまぶしげであつた。何もいわず、小手をかざし、おツとりと、眼にあまる敵営団々たる小牧山をながめていた。

この日、家康はなお、清洲にあつた。

いや、小牧へ出ては、布陣のさしずをし、またすぐ清洲へ帰っていたのだつた。

進退、いやしくもしない。その要心ぶかき、名人が一世一代として打つ一石の重さにも似ている。

「筑前守が、昨夜、岐阜へ入りました」

という確実な諜報を彼が得たのは、二十六日の夕方だつた。

ちようど、榊原や本多、その他の側臣たちと、一室にあつて、諸塞の構築が終つた

のを聞きながら、脇息きょうそくを胸に抱かせて、絵図を見ていた家康は、

「……筑前、出でたるか」

と、ひくい声でつぶやき、左右の者と、面おもてを見あわせて、にやと、亀のような眼元しんげに皺しわをよせて笑った。

（ほぼ予見は中あたつた——）

と思うのである。

つねに出脚はやの速い秀吉が、容易に立ち上がりを見せないのは、その主力を、伊勢へさし向けるか、この濃尾のうびへ東下してくるか、それが大きな懸念けんねんであったところだ。

が、なお、岐阜まででは、いつその颱風路を急角度に変えないものでもない。家康は、次の諜報ちようほうを待った。

「筑前。木曾川に船橋を架かけ、犬山へ入城したもようです」

二十七日のたそがれ、それを確かめ得た。さらば、という家康の面持ちだった。夜をかけて出戦の準備は成った。留守となる清洲には、その本丸に内藤信成のぶしげを。二の丸に、三宅康貞やすただ、大沢基宿、中安長安の諸将をとどめ、二十八日、旗鼓きこさわやかに、小牧山へ進出した。

信雄も、いちど長島へ帰っていたが、報をうけて、即日、小牧山へいそぎ、徳川軍と会か同いどうした。

家康は、出迎えるつもりでいた。

なにかの手ちがいで、それがなかった。

姿が見えなければ、来いといって、呼べばよいのに、人のよい信雄は、着くやいな、みずから家康の営所へ行つて、取るものも取りあえず駈けつけて来たことなど語つて、

「筑前の兵力は、ここだけでも八万余。各所の軍勢をあわせると、十五万を超えるであろうと聞きました。この大戦は、どうなりましょう」

と、たずねたりした。

彼は、自分のことから、かくも大規模な天下分け目の大いくさになろうなどとは思って
いなかっただらしく、蔽おおい得ない胸のものを、おどおどとその高貴な両の眼にあらわして
た。

こまぎ
小牧の蝶々
ちようちよう

——春の空の下だが。

美濃、尾張のさかい、木曾川のながれも、ひろい曠野も、あらしの前の静けさに似て、耕す人の影も、旅人のすがたも、人ツ子ひとり、見えなかつた。

妙な平和である。

蝶や小鳥には、ありのままな天地の春だったが、人間たちには、この真昼も、何か、不気味なものがあるにちがいない。

平和の偽もの、偽の平和——と、まったく影をひそめてしまった庶民たちの猜疑心が、らんらんたる太陽一つを、空におきのこして、なおさら、この地上を、わびしいものにしていった。

「……どうしよう?」

かの女は、当惑した。

この白昼なのに、行きくれていた。

川原の漁師小屋をのぞいても、農家の母屋をたたいても、まるで夜半のように声一つ聞かれない。

「町へ」

と、おもつて、これはおとといから、道をかえてみたのだが、町へ近づくと、かならず軍の柵門さくもんがあり、兵馬がいて、

「通るべからず」

の制札せいさつがいかめしい。

村にも、人はいず、ただ野良犬のらいぬの声ばかりだ。

遠くに霞んでいる山の方へゆけば、たくさんな人民が疎開そかいしているにちがいないとは考えるものの——さて、かの女の性格では、それまでにして、生命いのちの無事をはかるのも、嫌いやだった。

「戦いくさをこわがつて、穴にかくれていても、死ぬときに死ぬ。いつそ、戦のあるまん中へ行って、本陣をたずねてゆけば、ものの分る人がいるであろう」

——そこでのかの女は、犬山城いぬやまじょうの白壁を目あてに、曠野の道を、ここまでは来たが、川原を歩いて、小舟はなし、木曾きその奔流ほんりゅうは、瀬や岩々に、白いしぶきを激げきし、いくら大胆なかの女でも、渡りも得ず、たださまよいつづけていた。

「……晩には」

と考えると、さすがに気の勝っているかの女も、まだ十七歳の処女おとめらしく、どこに寝よ

う、どうして喰べよう、さまざまな脅えが、胸にせまってくる。

疎開したあとの農家には、何かしら喰べ物もあり、夜のむしろも、そこを借りては過ごして来たが——このあたりには、そんな小屋もあるかどうか。

つかれも出て、かの女は、やがて川原の石に腰をおろした。そしてぼんやり、夕雲を仰ぎながら、越し方行く末を、夢のように、えがいていた。

「あッ？　女が」

そのとき、かの女のうしろで、男どもの声があった。

男どもこそ、驚いたふうだったが、かの女とて、やはり、びっくりしたらしく、うしろの蘆間あしまの土手をふりむいた。

物見隊ものみたいの兵らしく、みな槍をもち、銃をもち、甲かぶとむし虫むしみたいに武装したのが、ひと

しく、かの女のもつ処女のうつくしさに眼を奪とられて、しばらくは、ただ見まもっていた。やがて。

七、八人の物見の小隊は、かの女をとりかこんで、口々に、質問しだした。

「おまえは、どこの者だ。——たれのむすめか」

「こんな所で、何をしておったか」

かの女は、悪びれもせず、素直すなおに答えた。

「はい。……もう四日も迷いあるいたので、くたびれ果てて休んでおりました」

「どこから、どこへ行くつもりで？」

「家は、岐阜ぎふと大垣おおがきのあいだの、小野おのの里さとでございます。その小野を出て、稲葉山いなばやまの

裏道で、連れの者と、待ちあわせる約束をしたのに、どうしたのか、その男がもどって来ませぬ……」

「男？ なんだい、それは」

「乳母うばの息子です」

「その息子どのと、いったい、どこへ行く約束をしたのだ」

「京都へ」

「——京都へ？」

「ええ」

「ふう……ん」

と、みな感心したり、クスクス笑い出したりした。

中でも、若い雑ぞうひよう兵ひょうのひとりには、大げさな表情を、そのことばと共にして、

「これやあ、おどろき入ったもんだ。この大戦争をよそに、都へ、駈け落ちなどは、まあいいとしても、見ればまだ、ほんの小娘でしかないのに、おれたちの前でも怖れ気なく、男ののろけを申すとは。……これが、おどろかずにはいられるか」

今さらのように、ほかの連中も、かの女の髪、目鼻、身なりまでを、あらためて、見直したあげく、

「だが、ことばつきといい、髪粧かみよそおいい、土民のむすめとは思われない」

「いまのは、ウソかもしれんぞ。——嘘でもなければ、こうおちついて、男のことなどいえるものじゃない」

疑惑ぎわくをもつて見れば、いくらでも疑わしい点が出てくる。

「おまえの親は、武士か。姓は、なんとするか」

「父は、小野政秀おのまさひでと申し、もとは斎藤義龍さいとうよしたつさまの家臣であつたと聞いていますが、幼い時に、戦死しました」

「そして、おまえは」

「乳母のお沢さわに育てられ、小野の於通おつうとよばれております。十三のころ、手づるを求めて、安土あづちのお城へ御奉公にあげりましたが、天正十年、信長さまが本能寺ほんのうじで、あえない御最

期をおとげ遊ばしてから、安土も亡ほろんでしまったので、田舎へ帰っておりました」

「え。信長公のお城へ仕えていたことがあるのか」

「つい先頃までは、松琴しょうきん尼にの許もとで、勉強しておりました。乳母は、わたくしを、どうしても尼あまにしようとするのです。……けれど私は、尼僧にそうになるのはいやです。都へ出て、もっと勉強もし、生きがいのある一生をおくりたいのです。……お沢のら息子などと、駈かけ落ちする気ではありません」

気品があり、ことばは爽さわやかである。偵察隊の雑兵たちは、質問しているまに、何か、この少女のおちつきに、気押けおされるようなものを感じて来た。——しかし、たれもなお、疑いは解とけなかつた。

兵たちは、仲間のあいだで、

(どうしよう?)

と、いう相談になつたらしい。

かれらは、何か、ヒソヒソいいあつていたが、いまや大戦の火ぶたを目前にはらむ日ではあるものの、この端麗たんれいな、しかも、もと安土城あつちじょうにもいたという曰いわくつきの美少女を、不問ふもんに捨て去るのは、何やら惜しい気がしてならない。

「ともあれ、陣所まで曳いてゆこう。——万が一、敵の密偵でもあつたら、悔いてもおよばぬ」

話がきまると、於通は、ただちに引つたてられた。

そこからすこし上流の方へゆくと、この物見隊が乗つて来たらしい筏があつた。

槍ぶすまに囲まれたまま、かの女は、筏の上に立った。

木曾川のしぶきを棹さして、筏は、激流を横ぎり、犬山城の下についた。

「あぶないぞ」

かの女の降りるとき、ひとりの兵は、その手へ槍の柄をのばしてやった。

そのの岸から、断崖をのぼつてゆく。すると俄然、地上の相貌は、まるで變つていた。

家康の本陣、小牧にたいして、秀吉の大軍八万余が、東春日井郡の数里にわたつて、

みちみちていた。

つい二日ほど前。

大挙して上方から下つて来た秀吉は、敵の小牧山と呼び交わせるほどの近距離——楽

田村に本陣をすすめ、犬山の城には、岐阜大垣から前進した池田勝入と、嫡子の

紀伊守之助がはいつていた。

物見組は、その池田家のうちの一小隊だった。

夕がたの兵糧ひょうろうの炊かしぎに、城外の陣場は、どこも煙まぐそっていた。馬糞まぐそや汗のにおいに、人馬ともごつた返している中を、かの女は、おそれもなく、物見組と一しよに通つた。

「おや、たいしたものだぞ」

「おいつ、どこから拾つて来た——そんな美いいのを」

ふり向いては、何とか、騒さわぎ立てない兵はない。

物見頭ものみがしらの千田主水せんだもんども、

「ほう？ ……」

と、連れて来た部下の報告を聞きとりながら、目をみはつた。

「小野おのの里の、於通おつうと申すものか」

「はい……」

「うまいこといって、実は、徳川家の知るべの者か何か、頼まれておるのだろう。正直に
いえばよし、かくして、あとから知れると、怖ろしい目にあうぞよ」

「お疑いあそばすなら、わたくしを、おん大将の秀吉様に会わせてください」

「なに、羽柴はしばどのに、お目にかかれればわかるとか」

「ええ。先頃まで、わたくしの師として、お仕え申していた善提山ぼだいさんの松琴尼しょうきんにさまは、秀吉さまもよく御存知の……いまは亡き竹中半兵衛重治しげはるさまの、お妹君でいらつしやいますから」

「……はてな」

主水もんどは、半信半疑だった。

「おい」

と、部下をかえりみて――

「ともかく、兵糧でも分けてやって、すこし仮屋かりやで休ませておけ。ひよつとしたら、あわれな気狂い娘きちがかもしれん。どうも、いうことが、いちいち腑ふにおちんわい」

池田勝入は、この日も、わずか四、五騎をつれたのみで、城外へ出ていた。

前日も、出て、どこかを一巡して、帰ってきた。

そのまえの日も、ふた組の、将校偵察を放ち、しきりと、犬山、小牧の地方から、東海
道方面へぬける山街道の地勢をしらばせていた。

「ひどい煙だな」

兵糧炊ぎの夕けむりに、勝入は、顔をしかめながら、城門を、馬上のまま通った。

その眉を見てさえ、池田家の将士は、

「まだ、ご機嫌がお悪いようだ……」

と、かれの気色をおそれた。

勝入の不きげんは、聶の森長可の失敗にあることは、たれも知っている。

その長可が、功にはやって、小牧の敵墨へ、奇襲をしかけたのが、過ちの因で、まだ総帥の秀吉が、この大決戦場へ、着陣もしないうちに、おびたしい序戦の傷手を、味方へ負わせてしまったのである。

数日前。

秀吉は、犬山につき、すぐ布陣にかかって、いまは楽田村に陣しているが、出迎えた

勝入父子にも、

(よく犬山を早く陥した)

と、功はほめたが、その功をもつても償いきれぬ、聶の森武蔵守長可の大ク口屋について、なにもいわなかった。

云われただけに、なお、つらいのである。のみならず、味方のうちでは、紛々たる

悪評が立っている。池田勝三郎信輝しやうぎぶろうのぶてるのむかしから、人にうしろ指はさされぬじぶ自負をもつて、四十九歳までの武人生活をつらぬいて来た彼として、すくなくも、こんどの名折れは、心外でならないにちがいない。

「之助ゆきすけも来い。三左もここへ来い。老臣どもも、みな寄つてくれい」

本丸の居室に、あぐらを組むとすぐ、かれは、息子の紀伊守之助きいのかみゆきすけ（二十六歳）や、三左衛門輝政んざえもんてるまさ（二十一歳）や、また重臣たちをよびあつめて、

「みな、忌憚きたんのない、意見をききたい」

と、通路に番人をおいて、密議にかかった。

「まず、これを見い」

勝入は、陣羽織の襟裏えりうらから、一片の山地図を出して披ひらげた。

「徳川、北畠の両兵力は、小牧山へあつめられ、あとは清洲にすこし後詰ごつめしておるのみだ。

——思うに、家康の本国、三河の岡崎には、わずかな留守居しか残されておるまい」

山絵図やまえずを、席順に、廻覧していた人々は、そのあいだの勝入の言に、自然、ハツと思

あたるものがあった。

地図面には——

この犬山から、山間や渡河を冒して、三州岡崎へ抜ける道が、朱筆で点々と引いてある。

「……さては？」

と思いつつも、見終った人々は、黙然と、勝入のくちもとを見つめていた。

勝入は、一同へ諮った。

「敵の小牧や清洲を打ツちやって、一路、徳川の本城地——三河の岡崎へ、味方をすすめたなら、さしもの家康とて、うろたえるにちがいない。……ただ、心すべきは、行軍の途中、小牧山の敵の目を、いかに密かに忍んで、兵馬をやるかという点だけが……」

たれも、急には、口をあく者もない。

これは、兵の奇道だ。

しかもまちがえば、味方の全体に、致命的な破綻をきたす禍いとならない限りもない。

「……わしは、この一策を、羽柴どのへ、献策してみようと思う。のるか、そるかの、奇計だが、首尾よくゆけば、徳川家康も、北畠信雄（信長の遺子）も、この手にツバして、捕虜としてみせることができよう」

勝入は、やりたいのだ。

何か、大功をたてて、智むちのク口星をつぐない、自分のカゲ口をいう者たちを、見返してやりたいのだ。

その意中が、よく分つてゐるだけに、だれも、

(いや、奇計は、めつたに、功を奏するものではありません。危険です)

と、かれの私わたくしの感情を、いましめる者はなかつた。

いつたい、武人と武人の会かいするときは、得てして、壮そうきよ拳とか決死とか、威勢のよい案

に、決まりやすいものである。肚はらでは、危ういと思つても、弱音よわねに似た意見をのべることは、たれも好まない。それをあえていえる者は、よほどな信念家か、忠臣といつてよい。

勝入の策も、その夜の密議では、帰するところ、

(それこそ、必勝の奇計)

(中入なかいりの先陣には、ぜひ、それがしを)

と、同じあつて、知らず知らず、気負きおい立つた一決を見たにちがいない。

中入なかいりとは、敵地ふかく潜行せんこうして、敵国の腹ふくちゆう中から敵をやぶる戦術語である。

かつて、賤しずヶ嶽たけのたたかいかにも、柴田勝家の甥おいの玄蕃げんぱが、この手をやって、大敗北をまねいた先例もあつたが——勝入はなんとしても、これを、秀吉に説とこうとした。

「あすにも、がくでん楽田の本陣へまいって」

と、眠りの間まも、秘策に、想をこらして、一夜をすごしたが、朝になると、

「きよう、御陣廻りの途中、筑前守さまが、午ひるごろ、犬山へも、お立ちよりに成られましよう」

と、楽田から伝令があつた。

勝入は、待ちもうけた。

四月初めの微風を駒のうえに味わいながら、この日、秀吉は、楽田を出て、家康の小牧本陣と、附近の敵壘をつぶさに望見しながら、小姓、きんじゆ近習など十数騎をつれ、犬山のほうへ道をかえて来た。

「ほ。……あれへ、きれいな蝶が、野を舞つておる。たれぞ、つか捕まえて来い」

ふと、馬をとめて、秀吉が指さしていることばを、人々は、何のことか？ ……と、疑つた。

秀吉は、眼ばやい。

いや、かれに続いてゆく将士はみな、大将の警固に、緊張していたのに、かれ自身の眼だけが、晩春四月の野を、ゆざん遊山でもしてゆくように、遊んでいたため、見つけたものとい

つたほうが、ほんとだろう。

「見えぬのか。お汝こらには、あの蝶が」

秀吉は、左右の者が、いぶかしげに、遠くを見ている眼を——さらに、指さし教えながら、

「あれじゃよ、あれじゃよ」

と、すこし笑い出した。

福島市松が、その顔つきを、読みとつて、

「ア。あれですか」

「うむ、あれよ」

「あの蝶々を、捕つかまえて来いと、仰せられますか」

「そうだ」

さすが、子飼こがいからそばにおいて来たやつは、下手へたな宿の女房よりは、ひとの気もちを讀みとるわい、といったような秀吉のうなずき方であった。

市松は、もう馬を、その方へ飛ばしていた。

「——何をしに？」

まだ気づかない人々は、市松の行方を、視線の焦点にしていた。

野末^{のぞえ}へ、影が、小さくなつてゆく――。

やがて、市松は、ぽんと馬の背からとび降りた。

チラと、紅^{あか}いものが、かれの立ちどまった所に、見える。

その紅いものが、女の帯か、小袖の模様の一部だとわかったのは、市松がその女性をつれて、片手に駒の手づなをひきつつ、だいぶこつちへ近づいて来てからのことだった。

「オオ、殿が、蝶々と仰つしやつたのは、あの小娘のことよな」

ようやく、すべての将士が、こうさすると、列は、にわか^{さわ}に騒めいた。

ここらは、敵にとつても味方にとつても、危険なる、やがての決戦場である。

どうして、かよわい小娘がこんな所を？ ……と、あやしみすら超^こえた好奇心に、たれも眼を燃やしたのもむりではない。

「捕^{つか}まえて参りました」

市松は、少女の片手をとらえながら、列の横に立った。

秀吉は、ま近に見て、かれが女性にたいして、物に何かを感じたときに見せる眼もとの表情を、チラとうごかした。

「どうだ、きれいな蝶々だろう」

かれは、ふと、甲かちゅう 冑ゆうの身と、甲冑の将士を思つて、云いまぎらした。

「……だが、毒の蝶かもしれない。何しても、乙女おとめで、かかる所を、うろつきおるなど、奇怪なことだ。市松、もそツと、馬のそばへつれて来い」

市松は、少女と共に、数歩すすんだ。

鞍くらのすぐそばまで、近づいた。

けれど、かの女は、ここでも、犬山城の将兵の中をすまして通つたときのように、いささかも、悪びれない、怖れない。世のつねの処女おとめのように、うつ向くこともないのである。

「そもじは、何者だ」

秀吉は馬の上から、わざと、あどけないほど無恐怖むきょうふでいる白い顔を、じつと見下ろした。

「小野の於通おつうといます」

於通も、じつと、秀吉を見かえした。

於通は、前の夜、城外の池田部隊のうちで、からくも、一夜を明かした。

部将の千田主水せんだもんじは、部下に、

(親切にしてやれ)

といつてくれたが、兵たちにとつては、この好餌こうじを見て、ただ親切だけをつくしてはいられない。

当然なはずだが、夜どおし、かの女をなやました。

やっと、夜が明けてから、仮屋かりやのすみで、すこし眠ったが、朝の兵ひょうろう糧りやうを分けてもらうと、逃げることに、心をきめた。

こんな雑ぞう兵ひょうの中でない、総軍の大將の陣所へゆき、その保護を求めようと考えたのである。

ところが、犬山を出てから道をまちがえ、どことも知れない野末をあるいていると、そこでも、三名の兵にゆき会い、いきなりまた、ゆうべのような悪さを挑いどみかかられたので、

(馬鹿ツ)

と、罵ののつて、足のかぎり、野を逃げ走つていたのであった。

小娘のけんまくに驚いたか、それとも、遠い並木道に、秀吉の行列が見えたせい、か、野良犬兵は、あつけにとられた顔していた。

秀吉が、遙かから、蝶と見たのは——かの女が、もう追つても来ないものを恐れて、な

お走っていた姿だったにちがいない。

「於通というか」

秀吉は、自身でいろいろ訊ね出した。

こんな所をなんの用があつて、さまよつてゐるか？

年はいくつ。生地しょうちはどこ。親の名はなんと申すか——など、かなり細こまかい。

於通は、きのうも木曾川べりで、池田の物見隊へ語つたとおり、つつまず、怯ひるまず、身の上を、はなした。

ゆうべ、難儀したことや、いまも野原で、あやうい目にあうところだったことも、何のはにかみなく告げた。

そして、ことばの終りに、

「わたくしは、十二、三歳のとき、よそながらですが、あなた様を、折々、お見かけ申しております」

と、白珠しらたまのような歯を、ちらと、笑みこぼして見せた。

「はてな？　そうか」

秀吉は、小首をかしげたが、於通のはなしに、以前、安土あづちの城に奥仕えたこともある

とのことを思い出して、

「安土のお城でか」

「ええ」

「この筑前も、亡き右大臣様（信長のこと）のお側へは、よく召されたことゆえ、そんな時でも、見かけたのである」

「信長さまが、宣教師の連れて来た黒色人を、安土のお庭へ通されて、局の女房どもも、見よとて、大勢で、御覽あそばしたことがありました」

「おおあったの。そんなことも……」

「その折、あなた様も、お側近くにおられましたでしょ。あなた様のお顔も、いちどお会いした者は、わすれることはない、たれもが申しておりました」

猿に似ていることは周知であり、自分でもよく知っている自分の顔であった。

それを、棚おろしされたような気がしたのであろう、秀吉は、大いにてれて、

（小さかしい女童め。なにをいうか）

と、於通の唇もとを、睨めすえたが、於通は、生まれつきな叡智に澄んでいる眼を、よけいに澄まして、

(ほんとに、似ていらつしやる)

と、いわぬばかりに、なお、じつと、秀吉の顔を見てばかりいた。

秀吉は、ひそかに、かれの体験にない、おそれを抱いた。

かれは、自分の視力というものに、由来、非常な自信をもっている。

いかなる現下の梟雄きょうゆうでも、手におえない豪傑ごうけつたちでも、かれと談笑のうちに、ふ

と、眼を力チ合わせるときは、十人が十人とも、その視線を、横にそらすか、伏せるかして、よく秀吉の正視たに耐えて、長く、ひとみを射返し得る者はすくない。

信長の亡きあと、かれの眸ひとみの威いは、清洲会議きよすでも、満座を押し、山崎、賤ヶ嶽しずの合戦で

も、柴田、滝川の輩はいをまったく射すくめて来たものだった。——そして、きよう、ここに

また——東海の惑星わくせいといわれ、天下の大器とも視みられて、秀吉にとつても、このさき第

一のやつかい者と考えられている徳川家康の大軍と、伊勢一円いちえんの北畠信雄の兵力、あわせ
て六万余の陣する小牧山こまきやまの敵壘ていりにたいしても、かれは、

(——家康、何かあらん)

と、心のうちは、どうあろうと、すくなくも、その眼は、敵を呑むの概がいをもつて、らん
らんたるかれの生命力、戦闘力を、たたえているものであった。

ところが。

それほどな自信と、自信にみちている眼を——名もなき一少女の眼が、恬てんとして、いっこう、何のおそるるふうもなく、かえつて秀吉の方が、さきにてれ惑まどうほど、澄まして、見つめ返してくるのであったから、秀吉が、

(これは?)

と、まごつき、

(これは、そも、何たる女童めわらべだろう)

と大いに、怖れたり、好奇心をおぼえたりしたのも、むりではない。

「おういつ。平馬へいまやある」

振り向いて、彼はふいに、うしろの小姓組こしやうぐみの騎馬群へ、どなった。

列の内から、大谷平馬おおたにへいま(後に刑部ぎやうぶ)が、はつと答え、馬首を主人のそばへすすめた。

「御用ですか」

「うム。そちの馬をかせ」

「馬を……ですか」

「降りて、この女童めわらべを、乗せてやれ。そして、犬山まで、口輪をとってやれ」

平馬は、顔を、ふくらました。

返辞をしなかった。

「平馬。なぜ答えぬ」

「嫌いやです」

「なに、嫌じゃ？」

「はい。戦場では、たとえ戦友のたのみでも、馬だけは、貸すはイヤだと断つても、友情には欠けぬものと、聞いております。……まして、女などに、馬をかして、自分が口輪をとつてゆくなんて……私には、お叱りをこうむつても、出来ません。お断りいたします」

嫌なことは嫌といい、うれしいことはうれしいといい、ともあれ、主従のあいだでも、形式にとらわれず、生命と生命の真実をもつて、ぶつかり合っていたのが、秀吉とその直じ参きざんたちの間からであった。

いや、当時の、先輩と後輩とのあいだ、老いと若きとのあいだ、すべて、こうした気風だった。

で——平馬が、嫌だと、だだをコネても、それが正しい云い分をもっているのも、秀吉も、

「はははは。しよむないやつじやな」

と、笑つて、敢えて、咎めず、

「戦場ゆえ、平馬めは、貸すのはイヤだという。おいつ、たれかほかに、於通に馬をかし、みずからは口輪をとつて、犬山まで歩いてやるような、優雅な男はおらんか。たれでもよいぞ」

秀吉のこのことばは、殺伐なる列のなかへ、かえつて、一場の和氣と、笑いとを、かもし出し、やがて、

「では、それがしの馬を貸しましょう」

みずから、鞍を下りて、馬をすすめた者がある。

たれかを見ると、蒲生忠三郎氏郷。——日野ノ城主の子、二十九歳の若者だった。

「や、氏郷か。恐縮恐縮」

かれの身分にたいし、秀吉は礼をいった。

氏郷は於通をたすけて、馬の背へ押し上げ、

「これも、風流です」

と、なんのこだわりもなく、口輪をとつて、秀吉のあとに従いた。

秀吉は、うなずいて、列を進め出した。たくさん若い人材のなかには、石田佐吉のような、經理の才もあり、智謀にとむ者もいるが、多くは、一番槍、一番首などを虎視こしたんたんと望むもので、

(さすが、忠三郎の望みはちがう)

と、秀吉は、振り向いて、氏郷のすがたを見、氏郷は、秀吉のその眼を仰いで、ニコと笑った。

犬山へ着いた。

城内には、池田勝入父子が、出て迎えた。

秀吉以下、すべて、本丸その他へ、わかれて入った。

午ひるすこし過ぎなので、すぐ中食。終ると、秀吉は、ごく少数の者と、茶をのみ、くつろぎながら、

「ときに、賀むしどのの、経過はどうじやな、長ながよし可よしの容体は」と、たずねた。

勝入と会ってはなすときは、秀吉は、いつでもすぐ、昔友達そのままになった。勝入が、まだ池田勝三郎のむかしから前田犬千代などと共によく清洲の町を、飲みあるいた悪友で

もあり、以後、おたがいに、生死のなかも、離反せずに来た善友でもあるからである。

「いや、聳の血気には、ミソをつけ申したが、おもいのほか、恢復がはやく、一日もはやく、陣前に出て、汚名をそそぎたいと、そののみ、口ぐせに申しおりますわい」

聳とは、いうまでもなく、森武蔵守長可のことで、羽黒の敗戦で、一時は、敵にも味方にも、長可戦死——と伝えられたが、実は、犬山城の奥でひそかに、満身の負傷を、一族の手で、必死に手当されていたのであった。

病める鬼

秀吉は、雑談好きだ。

雑談のうちに、衆智を、擽取しているらしい。今も、

「市松（福島）は、きよう見て来た小牧の敵壘のうち、どこの備えが、もつとも堅固に見えたか」

とか、

「与一郎（細川）は、もしそちが、敵の二重堀の陣形を攻めるとせば、榊原の陣へ

当つてゆくか、松平まつだいらの罫をくずしにかかるか」

とか、また、

「きよう一巡して来た間に、何ぞ、敵の弱点と見たところ、或いは、味方の弱味と考えられたことがあれば、何でも、遠慮なくいつて聞かせい。助作すけさく（片桐）はどうじゃ。虎之

助（加藤）も、意見あらば申せ」

などと、左右の者へよびかけて、若武者たちの率直な言を、よろこんで聞くのだった。

こんなとき、彼を中心とする一群の若い近習きんじゆたちは、決して、齒に衣きぬなどは着せていない。

かれらが熱すると、秀吉も熱し、主従だか友だちだか、わからない空気にもなるが、ひとたび、秀吉が、すこし儼げんとすれば、即座にみな、襟えりを正してしまう。

池田勝入は、そばにいて、いつ果てしないこの主従に、

「——時に、折入つて、きようは勝入からも、申し述べたいことがおぎるが」

と、人々のはなしの腰を折つて、秀吉へ、何か云つた。

秀吉は、耳を寄せて、ふムと、一つうなずいて見せ、近習たちへ、人払いを命じた。

「みな、ちよつと、座を退ひいておれ——座を」

「はい」

掃いたように、人々は、そこを立つて、休息にしりぞいた。

ひとり、於通だけが、片隅にのこっていた。

勝入は、見とがめて、

「筑前どの。うしろにおる女性はたれでおぎるの」

「お、これか」

忘れていたものを思い出したように、ふり向いて、

「途中で、拾うて来た、おんなじゃよ」

「ほ。……この戦場で？」

「さればよ。風変りな女子ではあるまいか。——於通、そもじも、ここを遠慮せい」

於通は、はいと立ちかけたが、ふと、

「どこに退^さがつていたらよろしゅうございましょう」

と、勝入の方へたずねた。

勝入は、二男の三左衛門輝^{てるまき}政をよんで、於通を、べつな部屋へ案内してやれと、いい

つけた。

「三左、三左」

秀吉は、うしろから、呼びかけて、

「なんぞ、この女子に似合いそうな、陣羽織と具足ぐそくがあつたら、貸し与えてやってください。……よいか、控——陣中に、その身なりでは、歩行にも不便、兵どもの眼にもよくない。……よいか、控えにおける間に、着せかえてやってくれよ」

女にあまいことは、いまさらつつむ必要もない勝入なので、人前もなく、秀吉はいつけた。

みな去つた。

勝入と、秀吉と、ふたりきりの室となつた。

室は、本丸の広間である。見とおしなので、見張りもいらぬ。

「折入つてとは……。勝入、何ごとじやの」

「実は、そのため、御本陣へおたずねせんと、思つていましたが」

「ここがいい。何など、うけたまわろう」

「ほかでもおざらぬが、今日、御巡視になられて、もはやお考えは、おきまりのことと存ずるが、家康の小牧の備えは、さすがでは、おざるまいか」

「いや、見事よ、あれほどな築墨ちくろいと布陣は、まず、家康ならではの、こう短時日に、出来でかしうるものはあるまい」

「てまえも、幾たびか、馬をめぐらし、小牧附近を、見まわりましたが、あれへ攻めかかるべき手だては、とんとありませんぬ」

「にらみ合いだの。型のとおりに——」

「家康も、相手が相手とおもうて、大事をとり、お味方も、名だたる徳川勢との初めての決戦なれば——と、自然、かくのごとき、ねめ合いの対局と相成りました」

「おもしろいの。連日、小銃一発の音もせず、寂せきとして、戦わざるうちの戦いじゃ。……妙みょうは、この機微きびにある」

「さ。そこです」

勝入は、膝をすすめ、先頃から彼が胸にえがいていた奇略を——例の、山道地図をもひろげて——熱心に、献策けんさくした。

秀吉も、熱心に、聞き入った。

いくたびも、

「うん。うむ……なるほど」

と、うなずきもした。

けれど、さいごの結論にいたると、難色をしめした。よかろうとも、やろうとも、容易に、策を容れる顔いろはない。

「もし、おゆるしあれば、勝入は、一族をあげ、率先して、かならず岡崎の城を衝いてごらんに入れる。ひとたび、徳川の、本国岡崎が、突として、お味方の馬蹄の下と聞こゆるならば——小牧の堅塁、いかに備えたりといえ、また、家康、いかに武門の大器なりといえ——攻めずして、かれの内より、総崩れを来すは必定とおもわれる」

勝入は、るるとして、説いてやまず、執拗にまで、かれの持つ「中入りの奇略」の採用を求めるのだった。

「……わかった。うム。考えておこう」

秀吉は、即答を避け、

「だが、おぬしも、そうわが事とおもわずに、ひと事として、もう一晚、考えてみい。奇略だし、壮拳ではある。それだけに、危うくもあるぞ」

と、たしなめた。

勝入の武勇も剛胆も、秀吉はよく知っている。しかし、それ以上には、秀吉は買って

いない。

ふたりの、小声が、しばらくとぎれた。——と、次部屋つぎのふすまを開け、勝入の嫡子ちやくし紀伊守が、遠くから、両手をついた。

「父上。……おさしつかえなくば、これまで、ちよつとお立ち越しを」

それより、すこし前。

城中の一室を、病間とし、先ごろから、満身の負傷てきずを治療していた勝入の聾むこの森武蔵守

長可ながよしは、

「仙千代せんちよ。三左をよんでこい。……三左を」

と、日夜、看護にあたっている弟の森仙千代——十六歳の若武者に、しきりに、だだをこねていた。

「兄上。そんなに、お体をうごかすと、また夜になってから、傷口に、熱をもって痛みますぞ」

「よけいなことをいうな。三左をよんで来いと申すのだ」

「だめです、今は」

「なぜ、貴様は、ツベコベ拒こぼむか」

「でも、ただ今は、御本丸へ、秀吉様がお越しになつて、紀伊どのも、三左どのも、御前ごぜんでお話し中だといつてゐるではありませんか」

「だから、筑前どのの帰らぬうちに、三左に、云つておきたいのだ。……よし、そちが取次がんなら、おれが行く」

長可は、起きかけた。

満身を、繻帯している。頭も顔も、片腕も、白い布で、巻いているので、さしも鬼といわれた彼も、ままにならない。

それが、鬼武蔵長可おにむさしながよしには、じれつたいのである。

しかも彼は、後月あとげつの十八日、功こうに逸はやつて、小牧山の敵の堅塁へいどみかかり、惨憺さんたんたる敗北をうけている。——部下八百余を失つたあげく、かれ自身も、重傷をおい、からくも、味方の戸板にひろわれて、逃げ帰つて来たほどなクロ星をとつた。自己のみならず、舅しゅうとの勝入の武名にまで、それは、ただでは拭ぬぐうことのできない、不名誉を、ぬりつけてしまつた。

〃鬼武蔵、死せり〃

と、敵は、凱歌がいかをあげ、味方のうちでも、信じている者がある。——と聞くにつけ、

(このまま死んでたまるか)

と、長可は、日夜、無念のまなじりをあげ、傷の痛みよりは、心のいたみに、五体ほのおを炎ほのおにしているのだった。

「だめですよ、兄上は」

仙千代は、兄の気もちに、泣きながら、背を抱きかかえて、怒ってみせた。

「御用がすめば、三左どのを、およびして来ますから、それまで、待つて下さいというのに、どうして兄上は、そんなに……」

「筑前どのが、お帰りのあとでは、間にあわんから、急せいておるのだ。それを貴様は」

「じゃあ、紀伊どのまで、お願いして来ますから、お動きになつてはいけませんよ」

兄を、そつと、もとの枕へ寝かせて、仙千代は、立つて行つた。

ほどなく、三左が来た。

顔を見るとすぐ、長可は、

「どうだ。舅しゅうとどのは、あのことを、羽柴どのへ、献策けんさくしたか」

「いま、人を遠ざけて。おふたりで、密談中だが」

「ではまだ、羽柴どのが、献策けんさくを容いれるか、どうかは、分らないな」

「ム。わからぬ」

「もし、容れぬようだったら、すぐ、知らせてくれ。……わしは、筑前どのの足もとへしがみついても、お頼みする気だ。いいか三左」

一方――

以前の広間のほうでは、まだ人払いのまま、秀吉と勝入だけが、黙然と、対坐していた。

いま。

次部屋の境から、子息の紀伊守が、ちよつとお顔……と父をよんで、何かささやいたが、聞き終ると勝入は、またすぐ、秀吉の前にもどつていた。そして、

「岡崎へ、中入り」のこと、やれと、この場にて、御命令ねがわれぬものでござろうか。

――病床の長可までが、御諾否のほど、心配いたして、ただ今も、紀伊を通じて、伺いに來ておるような熱心さ。何とぞ、御決断を」

と、さつきからの献策を、くり返して、やまないのであつた。

勝入の戦略は、たしかに、奇想天外である。要心ぶかいことでは、石橋を叩いて渡る主義の家康も、まさかと気づかずにいる間隙にはちがいない。

しかし秀吉の考えは、おのずからちがう。

秀吉の生来としては、奇略だの奇襲だのという手は、あまり好まないのだ。かれは戦術よりも外交、小局の快勝よりも、大局の制覇せいぱを——手のろくても、望んでいる。

「ま。急せくな」

秀吉は、気をほぐした。

「明日までに、肚はらをきめておく。——明朝、楽田がくでんの本陣まで来い。否やを聞かすであらう」

「では、明朝また」

「むむ。もどるぞ」

と、秀吉は、立った。

「御帰陣」

と、紀伊守が、諸たまたの溜り溜りへ触れる。

近習きんじゆたちは、大廊下おおろうかに待つて、秀吉の供についた。

そして、本丸の出口までかかると、駒つなぎのわきに、一名の異様な姿の武者が、下げさげ坐ざしていた。

頭も、片腕も、繃帯で巻き、具足の上の陣羽織も、白地きんらんといいでたち。

「や？ そちは」

秀吉の向ける眼に、その重傷者は、顔の半分まで、白布で巻いた面をあげて、

「勝入の聳、森長可めにござります。かような、醜いすがたを、お目にさらし、お不快を加えることとはぞんじまするが」

「才、武蔵守か。——臥せつておると聞いたが、負傷は、どうじゃ」

「きようから、起き出ること、きめました」

「無茶をするなよ。体さえなおせば、いつでも、汚名はとりかえせる」

汚名——といわれたので、多感多血な長可は、ぼろりと、涙をこぼした。

陣羽織の襟うらから、かれは一書をとり出して、うやうやしく秀吉の手へ渡し、また平伏して云った。

「御帰陣の後、御一読を得ますれば、ありがたい倅せにぞんじまする」

心根を、不愠と察したか、秀吉は、うなずいて、

「よしよし、読んでやる。——くれぐれも、大事にいたせよ」

いいすて、城門を出た。

陣中の一花

青鷺組の三蔵は、犬山から四里ほどの地、大留の城主、森川権右衛門のところへ、池田勝入の密書をもつて、使いに行つていた。

青鷺組というのは、池田家の秘密隊——つまり隠密組の異名である。

三蔵は、犬山攻めの前にも、一役たてて、その賞として、池田勢の犬山入りと同時に、金ももらい、お暇ももらい、かれの夢が、実行できるつもりだったが、

(戦は、これからだ)

との理由で、褒美の金は、ふんだんに拝領したが、軍を抜けることは、ゆるされなかつた。

三蔵の「夢」というのは。

於通と、都へ行つて、暮らすことである。

この、のら息子の母親というのは、小野政秀の旧臣の後家で、於通にとつても、育ての親——乳母のお沢なのである。

於通は、のら息子の三蔵を利用し——三蔵は於通をかどわかすつもりで——この二人が家出したのを、お沢は、あの小野の里のあばら屋で、後で、どんなに悲しんだことだろうか。

とまれ、若い者の夢は、よくも悪くも、いまのような草深い田舎にすみ、戦争にはのべつおびやかされ、貧しい衣食に耐えてはられないのが、ふつうだった。

けれど、於通の夢と、三蔵の夢とでは、月とすつぽんほどちがう。

同舟異夢の家出だった。

けれど三蔵は、色と慾のふた道を、盲目にあるいた。於通を、かねて約束の場所に待たせ、池田家から褒美の金と、お暇をもらったら、すぐ戻って、予定どおり、かの女と、手に手をとって、京都へ道行きするばかり——と、ひとり有頂天になっていたのだ。

ところが、その虫のよい考えは、この大戦の直前に、まかりならぬとされたのである。一時は、脱走しようかとおもったが、つかまれば、当然——首。

伊勢路、美濃路、いずこといえど、この大戦場の十里四方、柵門のないところはない。
(於通は、どうしたやら)

そののみ、思いながら、命も欲しきに、軍にとどまっているうちに——数日前、また、

勝入父子によび出され、

(この密書をもつて、徳川家の森川権右衛門の城まで行つて来い。返事は、わらじの緒おの中へないこんで戻るがいい。もし徳川勢の者に捕まった場合とて、死しても敵に見つけられまいぞ)

と、いいつけられた。

三蔵は、いまその大役を果たして来て、犬山城へ、帰つて来たところだった。

ちようど、秀吉の帰るところで、城門の前は、兵馬で、混みあっていた。三蔵は、道ばたに、土下座して、通過を待つていた。

先駆せんく——旗本——近習のなかに、秀吉の馬が通つた。

三蔵は、あつと、驚いて、とび上がった。

その中に、於通がいた。

しかしすぐ、人ちがいかが、とも疑つた。似てはいたが、華はなやかな具足に陣羽織を着、白い馬にのつて、秀吉のすぐあとから行つたものを——。

秀吉は、その日の、戦場視察を終つて、夕方、楽がく田でんの本陣へ帰つた。

楽田村のかれの本陣は、敵の小牧山のような高地ではない。

しかし、附近の森、耕地、小川までを、完全に利用して、方二里余にわたる塹壕せんごうや柵のうち、布陣は、鉄壁のまもりを誇っている。

そして村社の鳥居から内の、ひろい境内と本殿とが、かれのいる所のように、偽装されていたが、敵の夜襲にそなえて、秀吉の身は、神社のうちにはいなかった。——その林より東の方に離れている一群の仮屋に起居していたのである。

もつとも、敵の家康のほうから見た場合は、秀吉が、犬山にいるか、樂田にいるかも、疑問だった。——それほど、互いの陣形は、水ももらさぬ一線をへだてて、相互の偵察を、困難にしていた。

「おれの湯好きが、大坂を立つて以来、何度も風呂ふろに入っていないぞ。きようはひとつ、汗をながしたいものだ」

秀吉のために、仮屋の雑兵たちは、ただちに野戦風呂をわかした。

地上に穴を掘り、大きな油紙を、穴いっぱいるがねに敷くのである。それに、水をたたえ、古金の焼いたのを、投げこむと、いいあんばいに沸わいてくる。

流し場には、板をならべ、まわりにはまん幕を張ってしまう。

「ああ、よい湯だ……」

この簡素な野天風呂に、あまり立派でない肉体の持ち主は、肩まで、湯にひたして、飽かず、夕空の星を仰いでいた。

「……天下の奢りだ」

かれは、からだの垢をこすつたり、ヘソの下を、かろくたたいたりしながら、真実、そう思った。

去年から、浪華の地をきりひらいて、大坂築城の大工事にかからせ、その規模、その結構の雄大なること、前古にないと、天下の耳目をおどろかせているものの、かれ自身の、人間的な愉樂は、その金殿玉楼よりも、案外、こんなところにあつた。

小さい頃、叱られ叱られ、母に背なかを洗ってもらつた尾張中村の故郷の家が、ふとなつかしくなるのであろう。

「おい。たれかおるか」

幕の外へ、声をかけると、湯浴みの間も、槍をならべて、外を守っている武者のひとりが、答えて、顔だけ中へ見せた。

「何ぞ、御用ですか」

「うム、いくらこすつても、垢が出るぞい。於通をよべ、於通を。——背なかを洗わすの

じゃ」

小姓のする役であろうが、特に秀吉がいうので、於通は、やがて呼ばれて来た。

「おお、於通か。背なかを流してくれい、こつちへ、はいって」

いくらかの女がまだ何も知らない乙女おとめでも、四十九歳の秀吉は、男ざかりの男である。

——いいつけても、或いは、羞はじらいして、ためらうかと思っていると、於通は、

「はい」

と、すぐ赤裸の秀吉のうしろへ廻つて、かれの背をごしごしこすり始めた。秀吉は、体をまかせて、背といわず、腕といわず、足のさきまで洗わせた。

風呂を出る。体を拭ふかせる。腹巻、よろい下着、具足などを、すっかり着つけおわるまで、於通は、女らしく、かすずいた。

殺さつ伐ばつな陣中のせいにか、女武者の白い手は、よけいに美しく見えた。秀吉は、久しぶり、心までほぐれて、柔らかになつた五体を、飯屋のうちへ運んだ。

「やあ。もう揃うていたか」

座には、その夕、召しをうけた諸将が、居並んで、待つていた。

浅野長吉ながよし、杉原家次いえつぐ、黒田官兵衛、細川忠興ただおき、高山右近長房ながふさ、蒲生氏郷がもうじさと、筒つ

井順慶、羽柴秀長、堀尾茂助吉晴、蜂須賀小六家政、稻葉入道一鉄——など。

それぞれ、一陣の首将である。

「おう、お湯浴みで……」

諸将は、秀吉のてらてらした顔をながめて、まず、大きな安心をもった。

だが、かれに従いて、小姓の端に坐った於通を見ると、具足こそ着けているが、女と、すぐわかった。そして、

(これは少々、閑日月がありすぎる)

とも思うのだった。

「みな、飯はやって来たか」

と、秀吉。

「兵糧をしたためて伺いました」

と、返辞は、一致する。

「つかれたろう。長陣で」

「いや、殿こそ」

「なんの、大坂表にいるほうが、よほど忙しい。野天風呂にはいって、こうしておると、

まるで保養じやよ」

笑つて。——無造作に、

「これを見い」

と、陣羽織の襟えりうらから抓つまみ出した一通と、一面の地図とを、諸將のあいだへ、投げ出して、順に見せた。

書面は、病中の森武蔵守長可が、犬山の帰りがけに、直接、秀吉へさし出した血書の嘆願書。

地図は、池田勝入が、秘計を説いて献策けんさくした——例の、岡崎表を奇襲せんとする〃中な入り〃の山道さんどう図なのである。

「どうである？ 勝入と武蔵守の望み出た作戦は。……忌憚きたんなく、みな意見も、ききたいのだ」

しばらく、たれも無言。さあ？ ……と考え沈む顔ばかりである。

「妙計とぞんじます」

是ぜとなす者、半分。

「奇略は、奇功を恃たのむもの。運を賭かけるもの。——まだ一戦も交えぬうちに、お味方八万

余の運命を、一挙に、賭けるのは、いかがかと思われる」

非となす者も、また半数。

議論は、もめた。

秀吉は、その間、にやにや聞いているだけだった。余りに、問題が大きいので、衆議はまとまらず、ただ、

「御明断に、よるほかはございませぬ」

として、諸将は、夜に入つて、各、持ち場持ち場の、陣地へ帰つた。

「於通、木枕をかせ」

陣中の眠りには、彼も、具足を解かない。ごろりと、随時に、仮寝をとる。

小姓たちは、もちろん、武器を抱いて、交互に、寝ずの番に就いていた。於通は、備えつけの硯箱すずりばこを寄せ、次の室で、何やら筆を走らせていた。

勝入の献策を、容れるか、容れないか。

秀吉の肚はらとしては、実は、犬山から帰る途中で、すでに、きまっていたのである。

森長可の血書の献言書も、諸将に示すまえに、秀吉は帰り途の馬上でそれを読んでいた。いいかえれば。

肚をきめかねて、諸將をよんだわけではなく、肚をきめたので、諸將をまねき、

(どうだろう?)

と、一応、協議にかけてみたのである。そこにも、かれの肚芸はらげいがあり、諸將は、

(まず、行われまい)

と、見て帰ったのだった。

だが、秀吉の意中は、すでに決行を断じていた。

もし、勝入父子の策を容れてやらないと、かれらの立場は、武門上、非常にまずいものになる。

また、あれほど、思いこんでいる勝入父子の意気地は、ここで抑えても、ほかの場合で、何かの形をとって、あらわれるにちがいない。

それは、統軍上の、大きな危険だ。——いや、それ以上にも、秀吉がおそれたのは、勝入父子に、不平をいだかせておくと、老ろうかい獯な家康が、かならず手をまわして、寝返りの誘惑を、かれら父子に伸ばしてくるにちがいないと、思われることだった。

さなきだに、勝入父子は、もともと、北畠信雄とは、乳兄弟であり、その信雄は、家康が、小牧の陣営に奉じて、

(自分は、戦は好まぬが、故右大臣家(信長)の遺^{わすれ}子^{がたみ}たるこの御方^{おんかた}のため、義に依つて、戦うのである)

と、徳川方のたたかいを、義戦であり、正義戦であり、私慾の軍でないことを、天下に称^とえさせている、唯一の、生き証人となつて、この戦場に、臨んでいるのだ。

もし、その信雄なり、家康なりから、この戦争名分をおもてに、利益を裏に、そつと、犬山へ誘惑の密使でもはいつた場合——勝入父子に、不満、不平があるとすれば——彼とて、いつ寝返らないとも限らない。

(若いときから、情^{じょう}に激^{げき}しやすく、こうと思ひこむと、やまれぬ男だ)

秀吉は、寝入りばなにも、そんな回想を、めぐらしていた。

人いちばい、寝つきのいい秀吉だが、その夜は、木枕につむりを当てても、なかなか寝入られなかった。

若年時代、清洲の城下で、勝三郎(勝入)や犬千代(前田)などと、飲み廻つては、夜遊び^ふに更^ふかした頃などをおもい出して——

(当年の池田勝三郎が、いまでは自分の麾下^{きか}につき、しかも、不名誉な取沙汰に、とり巻かれて^{あせ}いる気もちを察しれば……かれの焦^{あせ}りも、むりではない)

こうも、考えられ、同時に、現在の状況は、まったく、千日手せんいちての対局たいきよくになってい
るので、なんらかの変化を誘う積極的な一手は、どうしても、今や、打たねばならぬとき
に來ている。

「そうだ、明朝、勝入がこれへ來るのを待つまでもなく、夜のうちに、黄母衣きほろ（使者）の
者をやっておこう」

秀吉は、むつくり起きて、寝ずの番へ、料紙と硯すずりをもつて來い——と、どなった。
小姓たちが、硯箱をさがしている間に、於通は、秀吉のまえに、料紙をそろえて、
「おことわりなく、お硯を拝借しておりました。おゆるし下さいませ」

と、詫びながら、さし置いた。

「そもじも、まだ寝ずにいたか」

「はい」

「何を書いていた？」

「つたない和歌を」

「そもじ、うたを詠むよのか」

「ほんの、古今こきんのまね詠よみにすぎませんが」

「長陣の間には、折りに、茶の会、歌の会など、やることもあるが、このたびの合戦では、まず、そんな日はありそうもない。そのうちにそつと、わしだけに見せい」

「でも、お目にかけるほどの歌は……」

於通は、はにかみながら、硯の水をあらためて、側そばで、墨をすっていた。

小姓たちは、片すみへ寄つたまま、余り愉快でない顔つきを揃えていた。

陣中に女性を置くことは、諸将のあいだにも、ないことではない。時代の風習としても、べつに異いとするにはたらない。

けれど、路傍みちばたから拾つて来た猫みたくないやしい女性を、かくのごとく、にわかにな、

秀吉が眼をほそめて重用するのを見ているのは、名だたる羽柴家の小姓部屋として——命がけの奉公をしている者として——甚だおもしろくないことは事実である。

「よし、よし。……」

と、秀吉はやさしく、於通の墨の手をとめて、筆をとりあげ、すでに心にできている文言を、ざつと、一筆に書いた。

ご献儀けんぎ、得心とくしんそろ。

さらに、だんがう、申すべく、未明みみやう、いとひ無し、即刻、

一むちあて、陣所へまゐらる可く候

ちくぜん

於通は、そばで見ていて、秀吉の文字のへ々なのに驚いた。

けれど、その文字の、天真てんしんらんまんで、なんの、見えも、小細工もなく、大らかな、気ままいっぱいな筆つきであることにも、何か、びつくりさせられた。

「おいつ」

と、小姓の中の顔を見て、

「大谷平馬おおたにへいま、丹羽鍋丸にわなべまる。ふたりして、これを黄母衣きほろ（使番）の加藤孫六かとうまごろうくへあずけ、三名、同道のうえ、すぐ犬山城の勝入へ手わたしてこい。——返書には、及ばぬ」

「はいっ」

ふたりは、あわただしく退さがった。

「もう用はない、於通も、余の者も。よく寝ておけよ」

秀吉は、ふたたび、横になった。——まもなく、かれのいびきが、次室まで、きこえて来た。

飛状をうけて、池田勝入が、自身、馬をとばして来たのは、まだ夜のうちといつてもよい、四更しこうであつた。

「勝入。きめたぞ」

「えッ。岡崎攻めの奇襲を、お命じくいただきますか」

夜明けまえに、万端の打合わせは、二人の間に、終つていた。勝入は、秀吉の朝飯をお相伴しよばんして、犬山へ歸つた。

虚実きよじつ

あくる日も、うわべは、無風帯の大戦場だったが、底流には、微妙なうごきが、兆きざしていた。

果然かぜん——

うす曇りの、午後の空に、大繩手おひなわて方面から、パチパチと、敵味方の銃声が、聞えだした。

宇田津うだつの軍道路にも、砂ほこりが、遠く望まれ、二、三千の西軍の兵が、敵の塁へ、い

よいよ攻勢をとり始めたという。

「はじまるぞ」

「——総攻撃が」

「こよいか。夜明け前か」

見わたすところ、諸將の陣気も、この日、ミリミリと、殺気を天にあげていた。

小牧山、対、楽田。

いま、その西軍側の旗旗を、一望すれば——

二重堀の塁 日根野弘就兄弟（兵、二千五百人）

田中ノ陣 堀秀政、蒲生氏郷、長谷川秀一、加藤光泰、細川忠興など。（総

数一万三千八百人）

小松寺山 三好秀次（兵、九千七百人）

外久保山 丹羽長秀（兵、三千五百人）

内久保山 蜂屋頼隆、金森長近（三千人）

そのほか、岩崎山、青塚、小口、曼陀羅寺などの陣々をあわせて、ぎつと総兵力約八万

八千と称えられている。

それにたいし、東軍の徳川、北畠の聯合軍は、井伊兵部、石川数正、本多平八郎、彦八郎などの一族、鳥居、大久保、松平、奥平などの譜代、酒井、榭原などの精銳、水野、近藤、長坂、坂部、などの旗本たち——。それに伊勢の北畠の諸將をあわせ、総数六万七千といわれる実動力が、小牧山を旗にうずめ、ふもと、道路、低地、高地、あらゆる地形の変を利用して、墨塚をつくり、柵をつらね、

(この鉄壁陣を破り得るものやある)

と、ほこっている。

まさにこれは、天下の壯觀であり、当代戦国の、世のわかれ目といえる。

秀吉が勝てば、秀吉の世代。家康が勝てば、家康の世代。大きな「時の分水嶺」だ。

家康は、秀吉を知る者だし、秀吉が、恐れた人間は、前には信長。いまでは、家康以外にはない。その家康の方でも、今朝からしきりに、偵察隊のうごきが見え、しかも、西軍の瀬ぶみ的な小攻撃には、

(めつたに、応じるな)

と、戒めているもののように、小牧山全陣、一旗のうごきも見えない。

すると、たそがれ頃だ。青塚方面の戦鬪からひき揚げて来た西軍の一支隊が、秀吉の本

陣へ、道で拾ったという数枚の檄文（げきぶん 宣伝ビラ）を、届けて出た。

秀吉が、その一枚を手にしてみると、自分の悪口が、全文に書いてある。

秀吉は天下横奪（おうだつ）の賊である。

秀吉は、大恩ある故主信長公の遺子、神戸（かんべ）どのを、自滅させ、今また、信雄（のぶお）どのへ弓をひき、常に、武門を騒がせ、庶民を禍乱（からん）に投じ、自己の野望をとぐるために、手段をえらばぬ元兇（げんきよう）である。

——まだ、簡条書に、いくつも並べてある。そして、徳川どのこそ、正しい戦争名分に起った、義軍であると、誇張してあつた。

秀吉は、激怒（げきど）した。かれとして、めずらしいほど怒色（どしよく）を、面（おもて）に出した。

「この檄文は、敵の、たれが書いたものか」

蜂屋五介（はちやごすけ）が答えた。

「家康の直臣、石川数正（かずまさ）の部下が、諸所へまきちらしたところから見て、数正がしたためたものと思われまします」

「祐筆（ゆうひつ）」

と、うしろを顧み（かえり）、

「各所に、同文の高札を掲げさせい。——石川数正の首を取りたる者には、一万石の重賞をとらすであらうと。——すぐ板にしたためて、陣々へ配れ」

こう命じた秀吉は、それでもまだ腹がいえないように、

「筒井伊賀、つついいが 滝川儀太夫たきがわぎだゆう」

と、居合わす将士をよびたてて、自身、出撃の令を出した。

「憎ツくき数正の振舞じや。汝らは、遊軍となつて、数正の陣の前面にある味方をたすけ、夜をとおして、攻めたてい。あすも攻めい。あすの夜も、攻めに攻めて、数正めに、息つかすな」

さらに、また、

「一ノ瀬仁右衛門。ゆうがむねじゆうろう 夕賀宗十郎、やまのうちのいえもん 山内猪右衛門」

などと、屈強の者を選びよんで、同じように、手勢六百、七百とさずけては、前線へ駆け向わせた。

こうした後で、

「湯漬。ゆづけ 湯漬を」

と、さいそくして、夕方の食事をいそがせた。どんな時も、かれは、飯をくうことを忘

れない。

於通おつうが、給仕につく。

飯のあいだにも、黄母衣きほろの武者が、犬山との聯絡れんらくに、ひんぱんな往復をつづけていた。

——そして、さいごの使者が、池田勝入の報告をつたえて来たとき、

「……よし」

と、ひとりつぶやいて、飯のあとの白湯さゆを、気長に飲み終った。

宵になると、小銃の音が、後方のこの本陣まで、豆をいるように遠く聞えてきた。

「怖くないか」

於通へ、いった。

於通は、笑って、

「安土あづちのお城でも、鉄砲の音は、つねに聞いておりましたから」

と、あたりまえに答えた。

「そうか、では……」

と、秀吉は眼で、近う——と彼女を膝近くへ招いて、一つの任務をさずけた。

「そもじならでは難しい使いがある。これから行ってくれぬか」

「お使いなら、いと、おやすいことです」

「いや、たやすくはない使者だ。なぜならば、ゆく先は、敵国の領地——岡崎への間道にあたる徳川方の森川権右衛門の城まで行つて、この墨^{すみつき}付を、届けてもらいたいものじゃ」

秀吉は、そのわけを、云いふくめた。

おおもめじょう

大留城の森川権右衛門には、すでに池田勝入が手をまわして、岡崎の間道を通るときは、寝返つて、味方につく密約ができています。

しかし、成功のあかつきに、賞として、五万石を与えろという条件は、まだ、勝入の口約だけで、秀吉の墨付は行っていない。——それを、秀吉は、ふと気がかりしたのであつた。

「参りましょう」

かの女は、秀吉のことばの下に、はつきり答えた。——それには、かえつて、秀吉のほうか、

「行けるか」

と、二度まで、念を押したほどである。於通は、微笑のもとに、

「はい。今からでも」

と決意を眉に示し、はや、身支度のことやら、途々の敵状などを、さすがに女らしい細心さで、訊ねたりした。

身なりは、百姓女に変装するのが、安全であること。道順は、山絵図に従って、なるべく、間道をえらぶこと。

そして、万一にも、敵兵に捕まったら、あくまで百姓女を装って、決して、秀吉の墨付を、見つからぬよう死守すること。

それらの注意をうけて、於通はやがて、ただ一人で、深夜の陣営から立って行った。

「見たか、皆の者」

秀吉は、そのあとで、近習や小姓たちへ云った。

「あれが男であつたら、そちたちは、やがて於通の前に、上將の礼をとらねばなるまい。女子であつて、倅せじやよ」

かれの左右の若者ばらは、これは心外なり——というような顔をした。そして、明日にてもあれ、徳川勢と相撃つ日には、獅子児の本性を武勇にあらわし、主人秀吉の今のごとき女尊男卑の失言を訂正させなければならん——と、ちかかって、みな、ふくれ面のまま黙っていた。

小ぜりあいの銃声は、明け方から、翌日も、前線の所々で、絶えまなく響いた。

——それを口火に、いまにも、西軍秀吉の大兵が、総攻撃に転じてくるように思われた。しかし、きのうからの、この手出しは、秀吉の「陽攻」であって、真実のうごきは、

犬山を中心とする池田勝入の、岡崎奇襲の準備にあった。

家康をして、虚相の「総攻撃」に心を向けさせ、そのまに、間道を下って、一挙、徳川の本国岡崎の手薄をつく作戦だった。

いまや、その打合わせと、準備は成り、犬山城を中心に、奇襲軍は、次のように編制されていた。

第一隊 池田勝入ノ兵六千

第二隊 森武蔵守ノ兵三千

第三隊 堀 秀政ノ兵三千

第四隊 三好秀次ノ兵八千

右のうち、先鋒せんぽうの第一第二がもちろん決死行の中心力だった。堀秀政は軍監、秀次は総帥の格である。

その夜は、四月六日（陽暦の五月十五日）——真夜半を期して、二万の将士は、犬山を

はなれた。

——極秘のうちに。

旗を伏せ、馬蹄ばていをしのばせ、二宮村、池内村をすぎ、物狂ものくるい坂ざかで、朝となった。

兵糧。小憩。

ふたたび行軍をつづけ、大草おおぐさ、柏井かしわい、篠木しのきを経て、上条村につき、ここに宿營を張つて、

「大留城の様子を見てこい」

と、偵察を放った。

かねて、大留城の森川権右衛門にたいしては、池田勝入から、青鷺あおさぎの三蔵をやつて、裏切りの約束をしめし合せてあるが、なお、念のために——と、その三蔵を頭として、一組の隠密おんみつを、瀬ぶみに向けたものだった。

三蔵たち、青鷺組の者は、そこから小一里さきの、庄内川しょうないがわの渡り口を扼やくしている大留城を、やがて宵空よいぞらの彼方に見る辺りまで、近づいて行つた。

すると、青鷺の一人が、

「やつ、今のは？」

と、道から林の中へ、脱兎だつとのように、駆けこんだ人影をみとめて、

「怪しいぞ」

と、ほかの者へ注意した。

「いや、ただの百姓が、おれたちを怖れて逃げたのだ」

という者があり、また、

「いや、女らしかった」

「いや、敵兵かもしれない」

など、まちまちだったが、三蔵は、

「捕まえてみれば分る。むだでも何でも、捕まえてみろ」

と、自分も、まっ先に、林の中へとびこんだ。

あなた、こなた、鹿を狩るように追いまわした。ついに、かの女は、捕えられた。

「この百姓女めが」

「なんで逃げまわったか」

「何か、おそれるわけがあるから逃げたにちがいない。つつまず申せ」

「いわねば、裸にするぞ」

青鷺組に取りかこまれて、この女は、ぺたんと大地に坐っていた。唾おしのように、白い顔を、振って見せるだけだ。

「おやつ……？」

三蔵が、ふいに、どなった。

星明りをすかして、じつと顔へ顔を近づけ、われを忘れて、また叫んだ。

「これや、於おつう通だ。……おめえは、於通じやねえか」

仲間の青鷺達は、意外な顔して、

「三蔵。おめえは、この女を、知っているのか」

「知ってるどころの沙汰じゃあねえ！ この女あ、おれのいいなずけなんだ」

「えッ、いいなずけだって」

「いや、ゆく末、夫婦の約束をしたんだから、内縁の女房といったほうが分るだろう」

「ほんとかい、なるほど、美いい女だが」

「だれが、嘘をいう！」

と、三蔵は、仲間へ、誇っていった。

「美しいのは当り前。おれのお母ふくろや親父の旧主、小野政秀さまのわすれがたみの姫ひいさまだ。

……おれのおふくろは、この姫さまの、乳母だったのさ」

「ふうむ。その姫さまが、よくおめえなどと、夫婦約束などしたもんだな」

「見下げない！　こう見えても、三蔵様は、さきにも、犬山攻めのととき、大功をたて、やがては、池田家随一の出世はきまつているんだが、戦さえすめば、おれはこの於通おつうとしよに、都へ出て、暮すつもりさ。……だが、於通、いったい、そんな身なりで、何しに、こんな所を歩いていたのだ」

三蔵は、仲間の者を見まわして、急に、間がわるそうな顔をした。

「……すまねえが、みんな、ちよつと、遠慮していてくれねえか。俺はいいが、お姫さま育ちの於通……おめえたちが、ずらりと、見物していちやあ、何も、口がきけねえらしい。たのむから、ほんのチョンの間ま、ここは二人だけにして、あっちへ行っていてくれねえか」

「あつかましい男だぞ」

顔見あわせて、仲間の者は笑ったが、

「三蔵、おこれよ」

と、そこを離れて、しばらく遠くへ影を沈めていた。

三蔵は、いきなり、於通を抱きしめた。

「おいっ……。会いたかったよ。於通、どんなに俺あ、おめえを、案じていたかしれねえぜ」

於通は、その手を、拒みもせず、自分の手を、さしのべもしなかった。

「……そうですか。そんなに」

「だって、そうだろうじゃねえか。おめえは、俺との約束なんか、忘れちゃったのか」

「忘れやしません、約束の場所へ、来なかったでしょう」

「それがよ。勝入さまから、また大役をいっつけられ、お暇のおゆるしが出なかったんだ。

——よっぽど、逃げ出しちまおうと思つたが、この戦場じゃ、ヘタをやると、首があぶねえ」

「だから、あなたのせいでしょう。私が約束をちがえたわけではありません」

「そ、そんなことを、云い争っているわけじゃねえ。俺は、こんなにも、胸いっぱい、おめえを忘れずにいたということをつつてくれればいいんだよ。——だが、いつぞや、犬山

城のお城外で、おめえが、秀吉様の近習方きんじゆがたにまじつて、澄まして、馬で通つたときは、

気絶するほど、びっくりした。一体、どういうわけで、秀吉様へ近づいたのかい」

「筑前様とは、安土の頃から知っています。——あちらは、御存知なかったでしょうが、

私には、初めてではない」

「なるほど、その縁故えんこをたよって、御本陣へ行つたのか。そして、今夜は」

「お使いの帰りです」

「たれの？　そして、どこへ行つて？」

「筑前様のお墨すみつき付つきをもつて、大留城おとめじょうの森川権右衛門もりかわごんえもんの所へ」

「あ。じゃあ、お墨付は、届いたね。——すると権右衛門から何か、秀吉様へ、誓紙せいじか、

返書でもことづかつたろうな」

「ええ。おあずかりして参りました」

「それを、ちよつと、見せてくれないか」

「お断りいたします」

「いやに水臭みずくせえな」

「でも、極秘の公用です。——三蔵さんも、そのための偵察ていさつでしょう。はやく戻つて、

大留城の裏切りは、確かめられましたから、安心して、軍をお進めあるがよいと、勝入さ

まへ、お伝えをお果しなさい」

「ありがとう」

三蔵は、安っぽく、頭を下げて、

「権右衛門の返書は見なくても、おめえがいうからには、そのことは安心した。……だが、於通、おれとおめえとの約束は、どうしてくれる」

「私との約束ですって」

「あ、あんな、白ぼつくれた顔をして。そう恥かしがることあないよ」

三蔵の眼が、けもの獣じみた光をおびると、いきなり白い顔へ、彼の顔が、重なりかけた。

「何するんですッ」

ぴしゃつと、やわらかい手が、つよく頬を打った。

そして、かの女の影は、もう星の下を走っていた。

どつと、仲間の青鷺が、木蔭で笑った。

——三蔵のしよげ悄気た姿が、腰を立てると、また笑った。

敵地潜行軍の池田隊、森隊、堀隊、三好隊の二万は、八日の明けがた、宿営を払って、また、前日のような南下を、極秘につづけていた。

もう徳川領だ。敵地である。

みかわ三河へ。三河の岡崎へ。

全軍の一步一步は、かくて家康のいない家康の本城、勇将強卒はことごとく小牧の前線へ出払って、空き家にひとしい「出殻でがら」となつてゐる徳川家本国の中核へ、一挙に、致命を与えるべく、刻々近づいていたのである。

しかも。

この間道のうちの一城である徳川方の大留城は、すでに勝入に誘われ、秀吉からも、五万石の墨付を見せつけられて、籠絡ろうらくされ、この朝——池田勝入以下の南下部隊を、朝霧のうちに見ると、

「さあ、通られよ」

と、ばかり城門をひらいて、無防備を示し、城主森川権右衛門が、自身、出迎えて、道案内をする始末。

道義のすたれ、武門の墮落だらくは、ひとり室町旧幕府の専売ではなかった。

主従とも、ひえ飯や、芋いもがゆをすすつて、人となり、出でては戦い、帰つては田に鋤くわをもつたり、手内職などして、ようやく、貧苦と艱難かんなんの一時代をのりこえ、ここに天下の大勢を二分して、秀吉と対峙たいじしうるほどな強大となつた新進国家康の下にも、やはり権右衛門のような侍もいたのである。

——が、これは潜行奇襲軍にとつて、最大な手引きであり、よいさい先であつた。

「やあ、権右どの。約束をたがえず、きようのお迎え、かたじけない。事成るあかつきにはかならず、羽柴どのへ進言して、五万石をまいらせろぞ」

勝入はよろこびを満面にして、彼に云つた。

「いや、昨夜すでに、お使いをもつて、羽柴どののお墨付はいただいた。この上は、われらも、二心なく御加担ごかたんいたすであろう」

権右衛門の返辞に、勝入は、秀吉の氣くばりと、その実行の確實さに、驚いた。

「して、御進路は？」

「山絵図によれば、これより岡崎への間道かんどうは、三ツあるようだが」

「さればです。一道は、三本木さんほんぎを経て伊保いほへ出るもの。また諸輪もろわをとおり拳母こころもへ出る道。

……それと、長久手ながくて、祐福寺ゆうふくじをこえ、明智あけち、堤つつみと出て、岡崎へいたる道との三つでござるが」

勝入は、聳むこの武蔵守と、協議の末、さいごの——祐福寺ゆうふくじ、明智あけちの線せんをえらんで、庄しやう内川ないがわを渡りはじめた。

軍団は、三縦隊にわかれ、諏訪ヶ原すわはら、平子山ひらこやまのふもと、印場いんばとすすんで、矢田川をこ

え、さらに、香流川かなれがわを渡つて、長久手の原へかかった。

ここにまた、一城がある。

徳川の麾下きか、加藤忠景かとうただかげ、丹羽氏重にわうじしげのふたりが、士卒わずか二百三十名ほどで守つてい
る、岩崎の城であつた。

「捨ててゆけ、捨ててゆけ。こんな、とるにも足らぬ小城に、道草すな」

勝入も武蔵守も、眼の中のゴミほどにもせず、横に見て、通りかけた。

しかし、城中からは、バリバリ撃ちあびせてきた。その一発の弾は、勝入の馬の横腹に
中あたつた。

馬は、いなないて、竿立ちさおだになり、勝入は、落馬しかけた。

「ちえツ、小癩こしやくな」

と、勝入は、怒りをこめたムチをあげて、第一隊の将士へ、大喝だいかつをかけた。

「あの小城、踏みつぶせ」

潜行軍せんこうぐん初めての戦闘がゆるされた。——犬山を出て以来、夜も日も、たえず密ひそかに密
かにとばかり腕をさすつて通つて来たともがらは、その号令に、わつと答えた。

鬱うつほつが、発したのである。

片桐半右衛門、伊木忠次。

ふたりの部将が、それぞれ約千人ほどの部下をひきいて、城へ突進した。こういう意力と、心理の兵のまえには、不落の堅城も、もののかずではない。

いわんや、城は寡兵。

またたくまに、石垣をよじられ、堀をやぶられ、瓦礫を抛りこまれ、火を放たれ、中天の太陽が、くろ煙にかくれ出すと、城将丹羽氏重は、斬って出て戦死し、城兵のあらかたも、無残、悉く斬り死した。

ただひとり……。

これは、この急を、小牧山の家康へ知らせるため、血路をひらいて、西方へ逃げた一将がある。

氏重の弟、茂次だった。

この短時間の戦闘中。

森武蔵守の第二隊は——第一隊との間に、かなりの距離をおいているので、生牛ヶ原に、兵馬を休め、兵糧をつかっていた。

兵たちは、飯をくいながら、

「何だろう？ あの煙は」

と、ながめていたが、すぐ前隊との伝令で、岩崎城の陥落かんらくがわかり、笑いどよめいて、馬にも草を飼つたりしていた。

それにならつて、第三隊もやはり一定の距離をおいて、金萩かなはぎヶ原はらに兵馬をやすめ、最後方の第四隊も、白山はくさん林ばやしという地点に馬をとどめて、静かに、前方の隊が、行進し出すのを、待っていた。

春は行き、夏は近い。山間の昼。空の碧あおはすみとおつて、海よりも深い。すこし駐とどまると、馬は眠げに落ち、山畑の麦には雲雀ひばり、木々には、ひよどりの声ばかりが、折々、高かった。

——それより二日前。

四月六日の、夕刻である。

篠木村しのきむらの百姓が二人、西軍の眼をさけながら、畑を這い、木かげから木かげを走り、「お訴えな申します。どえらいことなござりますで」

と、小牧山の本営へ、駆けこんで来た。

井伊直政が、聞きとり、一大事と、すぐ家康の将座たる屯營の深くまで、二人を引いてきた。

家康は、いまし方、幕のうちで、信雄とはなしこんでいたが、信雄が自陣へ帰つたあと、きょうもバチバチ遠くでする銃声を、そら耳に聞きながら、よろい櫃の上の、論語をとつて、黙読していた。

秀吉より六ツ年下の、ことし四十三歳という男ざかりの武将。こんな、やわらかそうな肥肉と色の小白い皮膚をもつた好人物が、胸に百計を蔵し、ひとみに大兵を収めて、戦争などするのかと、疑われる温和に見える。

「たれじゃ。なに、……直政か。はいれ、はいれ」

論語をとじて、家康は、ずしりと床几を向けかえた。

二人の百姓は、篠木村三十六人の代表だといった。そして、今夕、秀吉の軍隊が、犬山から間道を縫つて、おびただしく、三河方面へ南下したので、すわ大変と、お知らせに駈けつけて来たという。

「よく告げに来た」

家康は、ねぎらつて、

「当座の褒美ぞ」

と、銀錢若干を二人の百姓に与えて帰したが、にわかには、慌てるふうもない。——
いや、まだその真偽を疑っていたのである。

ところが、また、半刻もたつと、青塚方面から帰って来た諜者ちようじゃの服部平六が、
「異なうごきが見えます。森武蔵の兵が、潮のひく如く、いつのまにか、青塚を退き、
何処へか、陣替えしましたか、行く先がわかりませぬ」

と、報じた。

同じ諜者組の桑山久太、花田仁助、島源三なども、犬山その他から、立ちもどつて来、それぞれ、

「敵に、不審な移動あり」

として、篠木村の百姓代表の密告を、裏づけた。

「——今は」

と、家康も、眉を硬めた。

岡崎を衝かれたら、万事休すである。さすがの彼も、敵が、この小牧山において、三河の本国へ出て行こうとは、予測していなかった。

「忠勝ただかつやある。数正かずまさやある。酒井忠次さかいただつぐもすぐまいれ
かれは、あわてない。鈍重どんじゆうにさえ見える。」

すぐ呼ばれて来た、酒井、本多、石川の三将に、

「小牧の留守をせよ」

と、命令し、のこりの全軍をあげて、西軍の「追い撃ち」を決意した。

その頃また、如意村にょいむらの郷土で石黒善九郎という者が、信雄の営所へ、密告に来た。

善九郎をつれて、信雄が、家康をたずねて来た頃は、すでに家康は、夜を徹して、追撃の作成と、編制と、進路の協議などに、諸将と、首をあつめていたところだった。

「信雄どのも、参られよ。この追撃戦こそ、主力戦となり申そう。主力のある所、おん身がおわさでは、このたびの合戦の意義はなくなる」

家康のことばに、

「もとよりのこと」

と、信雄もすすんで、追跡隊ついせきたいに、加わった。

追跡隊は本隊と支隊にわかれ、総兵一万五千九百。水野忠重の四千余が、先駆せんくして、柏井村から小幡城おばたじょうへいそいだ。

その八日の夜。

すでに、家康、信雄の本隊は、もう小牧にいなかった。

南外山みなみとやま、勝川を通り、兵は、旗を伏せ、馬は、枚ばいをふくみ、庄内川を、そつと渡つた。

敵の潜行軍——森武蔵、堀秀政らの隊は、その夜、そこから約二里ほどの地点——上かみじ条ようむら村むらに宿営していたのだった。

あやういかな。潜行軍は、すでに潜行の意味を失っていた。奇計の功をいそぐの余り、徳川方に察知されて、あとを尾つけられていたことを、夢にも覺さとらなかつたのである。

夜半ごろ。——まだ八日のうちである。

家康は、龍源寺りゅうげんじにはいり、湯漬を喰べた。そして一睡後、

「あすは、必ひつじよう定じよう、敵に会おう」

と、ここで、初めて、甲冑を身に着けた。

土地の郷士、長谷川はせがわじんすけ甚助じんすけをよんで、地理をたずねたり、先発隊から頻ひん々びんと来る伝令に接したりしていた。

味方の小幡城は、もう程近い距離だった。

先鋒の水野隊は、ひと足さきに城へついて、夜どおし、斥せつこう候こうを放ち、西軍の進路と情

況を、手にとるように察していた。

まもなく、家康の主力も、ここに着き、すぐ軍議をひらいた。

水野忠重ただしげは、云った。

「敵は、二万余り、お味方は一万四千。かれの優勢に、正攻を取るの是不利とおもわれま
す。——一応、やり過ごして、敵の尾端びたんから撃破してかかるべきでしょう」

家康は、うなずいて、

「うしろから、逆攻めさかぜを食わすもよい。しかし、要は、敵を二つに分裂させてしまうこと
だ。汝らは、敵の後尾を打て。自分は、敵の先鋒せんぼうへ立ちむかわん」

と、決意を告げた。

たれにも、異議はない。迅速じんそくこそ、この場合、唯一の大事ということ、一兵卒にい
たるまで知っていた。

九日の寅とらの刻とら（午前四時ごろ）には、もう徳川勢の一半は、小幡城おばたじょうをくろぐると、忍
び出ていた。

刻々と、昼も夜も、三河路を南へさして、大きく、迅く、しかも強力な破壊力をもって
流れつつある——西軍潜行隊の尾端をとらえて——追跡するためであった。

追跡隊は、右翼、左翼にわかれ、右の千八百人は、大須賀康高が、指揮し、左の千五百五十人は、榊原康政、本多康重、穴山勝千代などが、部将として、急ぎにいそいだ。

田水や小川の灰白さは、夜明け近くも見えるが、四顧は、黒綿のようなもやにつつまれ、空は未明の雲がひくい。

「おつ、あれだつ……」

「伏せい。身を伏せい」

田に、草むらに、木かげに、地の窪に、追跡隊の影のすべてが、ばたばたと、身を折りががめて、じつと、耳をすましていると、彼方の防風林をつらぬく一すじの道を、まさに、西軍の長蛇が黒々とつづいて行く。

彼方の志向は、ここの志向を気づかない。

ただ、目ざす岡崎を、功名心にえがき、逸りに逸っているのみだ。

「ひそかに」

「静かに」

あらゆる行動と、意志の集中をも、目顔でしめしあいながら、追跡隊は、左右両翼にわ

かれて敵の最後尾隊——つまり池田勝入を先鋒とする潜行軍の第四隊——三好秀次のうしろから、ひそかに尾行していたのであった。

これが九日朝の、両軍の「運命のかたち」だった。しかも、秀吉から選ばれて、この大事に総目付そうめつけとして加わっていた秀吉の甥秀次ひでつぐは、夜が明けてもなお、まだ何も気づかずになっていたのである。

みだれ笹みだれささ

秀次ひでつぐは、秀吉の姉の子である。

秀吉は、伊勢の滝川攻めにも、賤ヶ嶽しずけたけにも、この甥おいをつれ、一方の將に立てた。そして功があると、

(よくやった)

と、眼をほそめて褒めてほやった。——それほど、三好一路みよしかずみちの子秀次は、叔父秀吉から愛されていた。

で、秀吉は、こんどの三河侵入軍にも、軍監ぐんかんとしては、堅実な堀秀政をつけたので、

総将格には、この秀次を向けた。

しかし、秀次は、年まだ十七の弱冠^{じやっかん}である。そこで秀吉は、自分の左右から、木下助右衛門と、同姓の勘解由^{かげゆ}のふたりを選抜して、

(孫七郎^{まごしちろう} (秀次のこと) を、よう見てやれい。孫七も、両名を力として、世話やかすな) と、旗本の内へ加えてやった。

九日の朝。

夜来の行軍のつかれもあり、陽もうらうらと朝を告げて、全軍、ようやく飢^ひもじさを覚えていたので、潜行軍の最後方の——この秀次隊は、

「生まれ——」

を令し、

「兵糧をとけ」

と命じて、将は將と、兵は兵と、思い思い、脚を休めながら、朝飯にかかっていた。

所は。——白山林。

小さな丘の上に、白山神社があり、附近には、疎林^{そりん}が多いので、そうよばれている。

秀次は、岡の小高い所に、床几^{しょうぎ}をすえ、

「助右。水はないか。わしの竹筒の水は、もうない。……よう喉のどがかわく」と、侍者の竹筒まで取って、ごくごく飲みほしていた。

「行軍中、あまり水を飲むのは、よくありません。すこし御辛抱ごしんぼうなさいませ」
木下勘解由かげゆは、たしなめた。

だが秀次は、顔を向けなかった。秀吉から特に付けられたこの二人は何となく目の上のごぶだった。十七歳の総大将は、当然、気負いぬいていたからである。

「ア、誰だつ。駈けて来るのは——」

「おう、穂富ほとみどのです。穂富山城ほとみやましろどのです」

「山城は、何しに来たか？」

秀次は、眉をひそめて伸び上がった。槍組の部将、穂富山城守は、そこへ来て、ひざまずいても、息を切っていた。

「孫七様。異変です」

「異変？ ……なんだ、異変とは」

「もすこし、岡の上まで、お登りください」

秀次は、彼について、駈け上った。そういうことには、敏捷びんしょうで、何のおつくうがる

風もない。

「あれ。あの土けむりを、ごらん遊ばせ。——まだ遠くではありませんが、彼方あなたの山蔭から、平地へかけての」

「ウム。……旋風つむじでもないな。……ほう、先の一ひとかたまり、また、あとからの一群ひとむれ。——何だろう、たしかに人数だ」

「お覚悟がいらいますぞ」

「敵か」

「そうとしか思えませぬ」

「……待て。敵だろうか。ほんとに」

秀次は、まだ、のん気だった。——よもや、とばかり考えるらしい。

だが木下勘解由、木下助右、山田平市郎、谷平助、芳野宮内などの旗本が、つづいて、駈け登って来るやいな、

「しまツた」

と、さけび合い、

「敵には、追いがかりの計があつたと覚ゆるぞ。おぼ用意、用意ッ」

と、秀次の命を待ちきれずに、どよめき合つた。

地鳴り、馬のいななき、将士の声々。

それが、草ほこりを立てて、一瞬に、兵糧時間の休息から戦うべき相に移るまでの間に

——一方、東軍徳川方の部将、おおすがやすたか大須賀康高、おかがわながもり岡川長盛などの追跡隊は、

「撃てツ、射よツ」

と、秀次隊のまん中へ、小銃と弓の一せい乱射を加え、

「よしつ、突つこめ」

敵の乱れをのぞんで、騎馬、槍隊が、どつと駆けこんだ。

これは右翼隊。——さらに左翼隊のさかきばらやすまさ榊原康政は、もつともつと敵部隊の末端にある

おおにだんたい大荷駄隊（しちりょう輜重）へ、不意打ちを加えた。

荷駄隊には、足軽、軍夫、そして厄介物の重荷をつけた馬ばかりが多い。

ほんば奔馬は、その荷を振り落し、自軍の列を、駆けみだした。小荷駄頭のあさのやたんご朝舎丹後は、よ

く指揮し、よく戦つたが、足手まといにわづら煩わされ、

「いまは」

と、まなじりをあ昂げて、榊原康政を目がけて、近づきかけたが、康政の士、ながいくらんど永井蔵人

がさえぎって槍をあわせ、

「丹後たんごを打ツたぞ」

と、この合戦第一のてがら名乗りを、蔵人にあげさせてしまった。

秀次の中堅隊に、部将はせがわひでかず長谷川秀一ひでかずがいる。

「うしろも、敵。前方にも敵——」

いずれへ、援軍したものと迷ったが、

「三好みやしの若殿こそ、あやうし……」

と、秀次の援護にいそいだが、徳川の水野隊みずの、丹羽隊にわが、猛然、これにぶつかって来て、

「やらじ！」

「蹴くちらせ」

の烈しい格闘かくとうが——それは戦闘というよりは死力の噛みあいとなって——ここにも、

ひと渦、巻き起つた。

しかし、どこよりも強く圧迫をうけたのは、当然、秀次の本隊と、殊に、かれを守るその旗本陣だった。

「御方おんかたを討たすな」

「ここ退くな」

秀次の身をつつむ叫びは、すでに、かれの一命を守れ守ろうとする狂声だけであった。そこ、ここの、林のあいだ、草原の起伏のあいだ。灌木帯かんぼくたいのあいだ、道のあなたこなたに、むらがり戦う鉄甲のかたまりのうち、眼に余る数は敵であり、血路をたたれている少数が、秀次の部下だった。

秀次も二、三カ所、かすり傷を負い、槍をもつて、働いていたが、

「まだ、おいでかつ」

「早く、お退きあれ、お落ちあれつ」

と、味方の旗本は、かれの姿を見ると、叱るように云つては、討死していた。

木下勘解由きのしたかげゆも、秀次が、馬を見失つて、徒歩かちだちになっているのを見、

「さ。これに召して、一鞭ひとむち、眼をつぶつて、ここをお立ち退きなされませ」

と、自分の馬を、かれに与え、そしてかれ自身は、旗さし物を地に立てて、敵勢の中へ斬りこんで死んだ。

秀次は馬に、手をかけたが、その馬も、秀次が乗らないうちに、弾たまに中あたつた。そのそばで、木下助右衛門すけえもんも、秀次を助けるために、斬り死してしまった。

「おういつ。その馬を貸せ」

秀次は、乱軍の中を、夢中で逃げのびながら、すぐわきを駈けてゆく味方の騎馬武者を見つけ、こう声をかけた。

呼びとめられた騎馬武者は——三好家の家臣、かにさいぞうよしなが可児才蔵吉長 だった。

がきつと、たづな手綱をしめて振り向きながら、歩いてくる主人の秀次を見、

「若殿。何事ですか？」

「才蔵。馬を貸せ」

「雨降りに傘。——貸せません。いかに主君のおことばでも」

「なぜ、貸さぬ」

「あなたは逃にげ人びと。てまえはなお、先へ駈け入る兵力ですから」

ニベもなく断つて、才蔵は駈け去ってしまった。その背に、一枚の笹が、風に鳴っていた。

ぎようぎよう

仰々ぎようぎよう しい旗さし物だの、家の紋だのを、背中にさして戦うのは、名譽慾しるしの印をかか

げているようなものだ。おとな大人げない飾り物だ——と日頃からいっていて、戦場に出ると、

つねに、路傍の笹の枝を切つて、無造作に、よろいの背に差し、悍馬かんばを馳ちく駆して働きまわ

るところから、人呼んで彼を「笹の才蔵」とも称している一風変わった男なのである。

「……ちえツ」

と、秀次は、才蔵の目に、路傍の笹ツ葉ほども見られなかった忌々しさを、舌打ちにもらして、見送った。

うしろを見る。敵の土けむりだ。――が、槍、銃、太刀、ごつちやにした潰走兵のかたまりが、秀次の姿をみとめ、

「殿、殿。そちらへ走つては、さらにべつな敵に会いますぞつ」

呼びとめて、近より、彼のからだを、引つかつぐように包んで、香流川の方へ逃げた。途中で、放れ馬をひろい、やつと秀次をそれに乗せ、細ヶ根という所で、ひと息ついてると、またも、敵の襲撃にあい、さんざんになって、稲葉方面へ落ちのびた。

こうして、池田勝入が作戦の侵入軍は、その本隊であり、主将のいる最後方の第四隊から、まっ先に、完全なる殲滅をうけてしまった。

第三隊は、軍監の堀久太郎秀政がひきいていた兵力、数は約三千。

第一から第四までの、隊と隊とのあいだは、およそ一里か一里半ぐらいな距離をもつていた。

その間、たえず使番が連絡しているので、一隊が休息すれば、当然、次々に、各隊も行軍を停止する。

久太郎秀政は、ふと、

「鉄砲だな？」

と、遠くへ、耳をすました。

ところへ、秀次の臣、田中久兵衛が、馬をとばして、休息中の陣へ、のめり込んで来た。「味方、総やぶれだツ。本軍はあとかたもなく、徳川勢に駆けちらされた。秀次様のお身もこころもとない。すぐ、取つて返されい」

と、血まなこで、わめいた。

久太郎は、愕がくとした。しかし重厚な眉がこういうときの意志を支えていた。

「久兵衛。おぬしは使番かの」

「この場合、何を問わるる」

「使番でもない御辺ごへんが、あわてふためいて、何しに駆けつけた。逃げて来たか」

「いや、知らせに来たのだ。卑怯ひきようか、卑怯でないかは知らぬが、何しろ、大変じゃ、こ

の一大事を、森どのへも、池田どのへも、一刻もはやく知らすのじゃ」

秀次の番頭田中久兵衛は、そう云い捨てて、さらに一里——また一里先の味方へ——ムチをあげて消え去った。

「使番が来るべきに、番頭の久兵衛が来るなど、察するところ、後方の味方は、はやらちもない総敗軍をとげたものとみえる。——ああ！」

堀久太郎は、こみあげる気ぜわしさと、心の動揺を、じつと抑えて、しばらくは、床几を立ちもしなかった。

「みな前へ来い」

もう事態を知って、面色を土のようにしている旗本、部将を、そこに集めて、

「やがて、いとまもなく、勝ちほこった徳川勢が、ここをも踏み潰しつぶに襲よせるであろう。

——かれの勝つたる勢いこそ、浮き足と見て、かれの弱点とおもえ。——その敵の、十間以内に近づくまでは、ムダ弾をうつな。立ち向うな。じつと、ツバをのんで、この方の合あ図ずを待て」

配置をいい渡し、そして、

「敵の騎馬武者ひとりたおを仆した者には、百石の加増をするぞ」
と、約した。

かれの予想は外れなかつた。秀次隊を一挙に木ツ葉みじんとした徳川勢の水野、大須賀、丹羽、榊原の諸隊は、騎虎の勢いをもつて殺到した。

水野忠重は、この破竹の気を、みずから惧れて、

「あやういぞ。逸るな逸るな」

戒めたが、それは先を争う他の友軍を、わぎわぎ前へ出してやることになり、かれの部下は、

「何とて、ひとに」

と、口惜しがった。そして忠重の号令も行われず、全部隊は、怒濤の相をなして、進んで来た。

泡をかむ馬の顔。硬ばった人間の顔。血とほこりになった甲冑の怒濤。——それが、地鳴りをたてて、近々と、射程距離にまで迫ったとき、見すましていた堀久太郎は、

「撃てッ」

と、下知した。とたんに、ドドドツと、銃弾のひびきがすさまじい音と煙の壁を作った。火縄銃には、弾こめ、点火のために、およそ呼吸の数で、熟練者でも、五ツ息か六息ぐらいな時間が空く。

そのため、交互射撃の方法をとるので、一斉射撃となると、やはり弾音はつるべ撃ちに敵へ浴びせかかる。

強襲の兵馬は、そのまえにバタバタ仆れた。弾けむりの間にも、その夥おびただしさが地に見える。

「備えがあつた」

「——退けや。とどまれつ」

と、味方は味方へわめいたが、怒濤は急にとどまるものではない。

久太郎秀政は、今ぞつと、ふたたび下知げちして、襲よせてきた者へ逆さかよせを喰くわせた。この場合の勝敗は、心理的にも、実体的にも、結果をまたず明らかである。

せつかく勝ちかがやいた本多、榊原、水野、大須賀などの諸隊も、たった今、秀次に加えたものを、自分たちの上に受けた。堀の槍隊といつては、羽柴家のうちでも、精銳をもつて鳴つたものだ。その槍さきにかげられた無慘むさんな屍かばねは、いたずらに逃げ返す部将たちの馬蹄ばていを妨さまたげた。

水野 総兵衛忠重そうべえただしげ、榊原小平太康政さかきばらこへいたやすまさなど、その追い槍の烈しさに、たえず手の長刀を、うしろざまになぎ払いながら、やつと退ひいたほどだった。

金扇来
きんせんらい

長久手ながくて一帯は、香流川かなれがわの水面もふくめて、うすい弾煙の膜まくの下に、屍かばねと血のにおいを
おいて、朝の陽も、虹色にけむっていた。

そこはすでに一場の大戯曲だいぎきよくのあのような静けさに返ったが、人馬は、夕立ち雲のよ
うに、次々の新たな地上を修羅場しゆらじょうにして、岩作方面やまじへ、一瞬に移動していた。

逃げ足は、逃げ足をさそい、果てしなく逃げくずれる。——この徳川勢を追いこすに追いま
くしつつ、堀秀政は、

「うしろの隊は、おれにつくな。猪子石いのこいしの方へ迂回して、両道から追いつつめ」

と、頭の働きも失わなかった。

一隊は、わかれて道をかえ、秀政は、麾下きか六百をひっさげて、さらに敗地の敵を、袋の
物とした。

途々みちみち、東軍徳川方の捨てて行つた死者負傷者は、五百人をくだっていない。秀政の部
下も、行くに従つて減へつた。——主隊は遠く先へ駆け去っているのに、屍かばねと屍のあいだに、

なお呼吸している敵味方の二人が残り、槍を合わせ、槍を捨て、面倒と、肉鬪をいどみあったものの、組んずほぐれつ、下になり上になり——勝負果てなく格闘している個々の武者もある。

ついに、一方が一方の首を挙げ、

「取ツたあツ」

狂気したような大口をあいて、主隊の戦友のあとを追いかけてゆき、ふたたび黒い血けむりの中に姿を没するもあれば、追いつかぬうちに、流弾に中^{あた}つて、仆^{たお}れ伏す影もある。

「やつ長追い無用ツ——。源左、源左、百右衛門^{ももえもん}。——止^とめろ。退^ひけといえ」

何思ったか、秀政は、にわか^{しん}かに声をからして叫ぶ。

侍頭の柴田源左^{しばたげんざ}、名村百右衛門^{なむらももえもん}、長瀬小三次^{ながせこさんじ}などが、

「退^ひけや」

「御馬じるしの下にあつまれつ」

「出るな。もどれツ」

馬を駈けまわして、からくも味方の兵を収めた。

秀政は、馬を下り、道から崖の鼻へ歩いていった。そこに立つと、視界をさえぎるものが

ない。

じつと、遠くを見、

「ああ。早くも来たか」

と、つぶやいた。満面の血色を、醒めたようにあらため、見よ、といわぬばかりに、長瀬小三次、名村百右衛門らをかえりみた。

ここから西——朝陽あさひと真反対な高地、ふじヶ根山の一端に、キラと、かがやくものがあった。

家康の陣標——金きん扇せんの馬じるしではないか。

堀久太郎秀政は、嘆声をあげた。

「残念ながら、あの大敵と出会っては、われら如きに策はない。もう、この場のことは終った」

かれは、さきの分遣隊ぶんけんたいも収めて、急に退却しだした。

そこへ、長久手の方から、味方の第一、第二隊の使番四、五騎が、一しよになつて秀政を探し求めて来た。いうまでもなく、第一隊の池田勝入、第二隊の森もり武蔵むさしの守、ふたりの口上伝令である。

「お引き返し下さい。そして、お味方の先鋒せんぼうと合体せよとの——仰せです。池田どのの御父子のおことばです」

「いやだ。もどらん」

堀秀政は、二べもなく、断わった。

池田、森の使番は、自分の耳を疑って、

「合戦はこれからですぞ。即刻、御加勢のため、お引っ返しねがいたい」

と、声を大にして、云い直してみた。

すると久太郎秀政も、なお大きな声をして、

「もどらんといったら、もどらんつ。——われらは、秀次様の御先途ごせんどうも見とどけねばならぬ。また、この方の軍兵も、大半は傷つき、この疲れをもつて、新手の敵にあたって、戦の結果はわかりきっておる。堀久太郎は、負けと知れきっている戦をするわけにはゆかん——と、勝入どのへも武蔵守どのへも云つてくれい」

云い払って、そのまま馬を急がせてしまった。

この堀隊は、稲葉附近で、さきに四散した秀次隊の残兵に会い、また秀次その人をも、隊のなかへ拾い取った。そして途々みちみち、民家へ放火しながら、徳川勢の追撃を防ぎ防ぎ、

その日のうちに、秀吉の本拠——ほんきよ 楽田がくてんの基地へ帰ってしまった。

怒ったのは、池田、森の二隊から、協力を求めに来た数騎の使番たちである。

「この期ごにいたつて、味方の苦境をかえりみず、基地へ逃げ帰るとは、何たる腰ぬけか」
「臆病風にふかれたにちがいない」

「堀久太郎も、きようはみずから、化けの皮をあらわしおつた。——生きて帰らば、きつと、笑つてやるぞ」

かれらは、使いの首尾が果せなかつた鬱憤うつぶんも加えて、罵りののしやまなかつた。——が、ぜひなく、今や長久手ながくてにとりのこされて、家康が金扇の馬じるしを迎えんとしつつかある——孤軍池田父子の自隊へむかつて、腹だちまぎれの鞭をビシビシ馬腹へ鳴らして駈けもどつた。

さて、池田勝入にゆうどう入道のぶてる信輝むこと、賀むこ、森武蔵守長ながよし可かの二隊こそ、いまは、家康の好こ餌うじであつた。

人のちがい、器うつわのちがい。

これは、どうにもならない。

秀吉と家康との、こんどの会戦は、まさに天下の横綱角力すもうであり、両者は、たがいに相

手の何者なるかを、知りつくしている。

事ここに到るまでも、家康と秀吉とは、いつかは、今日あることを知っていたし、今日になつては、なおさら容易に、けれん小手技で、伏しうる敵でないことを、相互に知つての自重だつた。

あわれむべし、武弁のほこりだけあつて、敵を知らず、おのれを覺らず、ただ意気のみ燃ゆる猛勇の人。

——池田勝入は、一路、三州岡崎をさして、敵地行を決して来ながら、その目的地からは横道の——岩崎城へ攻めかかり、朝めし前に、小城一つを踏みつぶした快にひたりきつて、

「かちどき！」

と、武者声を命じ、

「三州入りの、幸先よいぞ」

と、六坊山に床几をおかせ、かち獲つた敵の首級二百余を、実検していた。

それが、その朝の辰の上刻（七時）ごろ。

かれはまだ、後方の変を、夢にも知らなかつた。目前に、余燼の煙をあげている敵の城

骸ようがい だけを見て、武勇の人の陥おちいりやすい、小さな快味に酔っていた。

首実検や、軍功帳への記入を終つてから、ここでは朝めしの兵糧だった。

兵たちが、口をうごかしながら、時折、西北の空を見ているのが、ふと、勝入も気になつた。

「丹後、何じやろ、あの空いろは……」

池田いけだたんご丹後、池田きゆうぎ久左、伊木いきせい清兵衛いべえなど、かれをめぐる将星たちが、同じ角度に、みな

西北へ顔を向けた。

「一揆いっきどもではありませんかな」

「一揆。おかしいな」

「左様？」

——でもまだ、残りの弁当を、喰べていると、丘のふもとで、騒然と、何か、わめきが聞える。

はて。——と、いぶかるまもなく、森武蔵の使番、加賀かがみひ見兵庫みひょうごが、駈かけ上あがつて来て、
「不覚なござりますぞッ。——尾つけられましたッ」

と、どなつて、床凡とこのまえへ、仆たれるように、平伏した。

さツ——と、鉄かぶとも吹きぬけるような冷感が、勝入以下、周囲の武者たちの頭をかすめた。

「兵庫。尾けられたとは？」

「秀次様の第四隊へ、夜来、追いつたつて来たらしき敵勢が」

「や。うしろへか」

「ふいに、しかも両がかりの車輪陣をとつて」

「ちいッ。ぬかつたか」

勝入が、突ツ立つたときである。さらに、賀の武蔵守から、第二報の使番が来た。

「——御猶予はなりません。秀次様の御人数、総くずれと、聞えてまいりました」

物々しい動揺めきが、六坊山のいただきに沸き、つづいて、号令、叱咤、武具の音となつて、山下の道へながれ出した。

その渦が、陣列をなさないうちに、さきに堀久太郎へ伝令して、久太郎秀政から、使番でもない者が何しに来た——といわれて去った田中久兵衛吉政が、

「一大事一大事」

と、告げ渡つて、ここへも飛んで来た。

かれの報は、より詳細だ。しかもみじめにまで殲滅せんめつをうけた秀次隊の運命に、いまは疑う余地もない。

「武蔵守にも告げたか」

「もとよりです。森どのには、即座に、長久手ながくてへ向われました」

「むこ賀は、何と申した」

「にんまり、御一笑なされて——さらば家康にきようは見参げんさんの日か……と、すぐ馬上へ移られました」

久兵衛からこう聞くと、

「さもこそ」

と勝入も、にことして、はら肚をすえたようだった。

かれは、子息の紀伊守きいのかみゆきすけ之助や、その下の三左衛門輝政などの年若い者までつれて来ていた。すぐ、旗本の梶浦兵七郎かじうらへいしちろうに、その子らの組へ、何事かを、伝えさせた。

覚悟を——たしかめさせる以外のことではなかったろう。

やがて、りくぞく陸続と、かつちゆう甲冑の団々たる群れと群れとが、今朝までの方向とは逆に、は背進いしんしだした。

途中。かれもまた見た。

ふじヶ根山の山かげから、さんとして、ゆれ現われた徳川軍の上なる金扇きんせんの馬じるしを。

それは何か「ま的の象徴」みたいな魅力をもつて、曠野こうやの士魂を、おののかせた。

一途いちずに直進して来た軍と、身をめぐらして、もとへ背進する軍とでは、すでに兵氣において心理的な差がある。

回し備えかえぞなはくずれやすい。

馬上、それを鼓舞こぶしてゆく森武蔵守は——その姿は、すでに死を期していたかのようなものに見えた。

紺糸こんいとの黒皮くろかわのよろい、白地しろぢきんらんの陣羽織ぢんうゑ、かぶとは鹿の角つのの前立ち、それを背投げに負い、頭かしらは、なお癒えぬ戦傷を、まるで白頭巾しろずきんのように、頬へかけて、巻いていた。

かれは、徳川勢の追躡ついでを知ると、ただちに、生牛ヶ原おうしに休めていた第二隊を挙げて、家康ここにあり——と、さし招まねいている、ふじヶ根山の金扇きんせんをにらんで、堂々たる決戦の意志を、それへ返してゆく歩武ほぶに示していた。

「不足のないあいて」

かれは何度も云った。

「——羽黒の不覚、そそぐも今日、おれのみならず、舅しゅうとどのまでの名折れを、ぬぐうて見せるも、目前の一戦にある」

左右の旗本に、そんな述懐も、もらした。かれが抜け駆けの功を剋かちそこねた羽黒村はぐろむらの不覚な一戦は、そのとき五体にうけた手傷以上に、かれの心を、さいなんでいる。

きようを雪せつ辱じよくの日となす気が——白布しらぬのにつつまれた眉に見える。燐りんとなつて、白
い炎をたてているように見える。

美男であり、勝入の姫とのあいだには、ほのかな恋のうわさまで立つて夫婦ひとつになつた彼として——きようの死装束しにしようぞくは、あまりにも悽愴せいそうすぎる。

けれど、美男のかれを、鬼とよぶ、いわれは世間になく、かれ自身の性情のうちにあるにちがいない。

「おお、兵庫か。——先鋒せんぽうへ報らせはとどいたか」

六坊山からすぐ取つて返して来た使番の加賀見兵庫は、主人の鞍わきへ、馬をよせ、歩をそろえつつ、復命した。

「そうか。そうか」

と、武蔵守は、耳だけで聞きとりながら、手綱を打たせて、

「して、六坊山の御人数は」

「すぐ隊伍を立て直され、生牛ヶ原おうしはら、金萩ヶ原かなはぎはらと、あとに続いて参られまする」

「さらば。第三隊の堀久太郎どのへ、われらは、かくかくに軍勢をまとめ、家康のふじヶ根山へ立ち向えば、堀どのにも、引返して、助勢あれと、申して来い」

「はっ。ごめん——」

と、前を駆け抜けて、軍より先へ出たとき、池田隊の使番二騎も、勝入から同じむねをうけて、堀隊の所在へいそいだ。

だが、この要求が、堀秀政の容れるところとならず、使番たちが激怒げきどして帰ったことは、さきに記した通りである。

「秀政の云い分には……」

と、使番の復命を、森武蔵守がうけとつたのは、すでに彼の隊が、狭隘きょうあいな山あいの湿地しつちをふんで、岐阜ヶ嶽ぎふたけの上へ、陣場を求めようとして登りかけていた時だった。

金扇の馬じるし、また無数の旗さしもの。その敵は目の前の高地に近々とあった。武蔵

守は、他に何の感情もうごかしてはいられなかつた。

岐阜ヶ嶽——これへ三千の兵を上げて、森武蔵守長可は、ひとまず後続軍の、池田勝入が到着するのを、

「待とう」

と、きめた。

が、大敵は、わずかな低地をへだてて、目前の山に、布陣、しずかにこつちを見ている。武蔵守も、老臣の林道休や伊木清左衛門などはかって、たちどころに備えを終り、将座をえらんで、四方を眺めた。

複雑な地相である。

ここに立てば遠く、東春日井平野の一端を入口として、長久手の名のごとく、山と山とに狭められたり、小平野を抱いたり、屈曲したりしながら、やがて南のはるか、岡崎へつながらる三河間道が、望まれる。

だが、視野の半ば以上は、山である。嶮峻、高岳ではないが、丘とよび、小山とよび、低山という程度の起伏の波が、春を脱いで、ようやく、木々にほの紅い芽をもつていた。

「見えた」

「おつ。着いた」

兵のうえを、歓呼に似たどよめきが走る。武蔵守は、勝入の顔を心にえがいた。

かれも、その望まれる位置へ足をうつした。金^{かなはぎ}萩^{はら}ヶ原から山道をふみ、自分がこれ

へ来た通りの道を、池田軍六千の旗、馬じるし、武器の穂さきも、せいせいと進んでくる。

その幾だん、幾組にもわかれた縦隊は、やがて、こうべ狭間^{はざま}で、歩をとめ、すぐ前の岐

阜ヶ嶽へむかつて、

(われらは来たぞ)

と呼びかけるような、軍の表情を、ざわめかせていた。

使番と、使番とが、矢つぎばやに、行き交^ゆい^かされる。武蔵守の意中、勝入の意中、それ

も、いわずして、相通じた。

勝入の六千の兵は、ただちに二分された。

約四千は、そこを離れて、こおろぎ狭間^{はざま}の低地を北方へ出て行った。そして、田^たノ尻^{じり}と

よぶ高地の東南面に、陣をとった。

陣の主将を示す、旗、馬じるしなどを望めば、それは勝入の長男紀伊守之助と、次男輝^て

政るまきのいることを宣明している。

これを右翼に。森武蔵守の岐阜ヶ嶽三千の兵を左翼に。——そして勝入は、のこる二千人を擁ようして、予備隊のふくみを持ち、そのまま、こうべ狭間はざまに、陣どった。

鶴翼かくよくの中心——やや退さがったところの、尾の位置に、かれは将座をすえて、

「敵家康は、どう出るか」

と、大きな口をむすんでいた。

陽を仰ぐと、まだ辰たつの下刻げこく（午前九時）ごろだ。長い。またみじかい。どっちとっていいか、たれの頭にも、時間の観念が、もういつもの日ではない。

くちが渴かわく。しかし水を欲しない。いや、腰にある竹の水筒を思い出さないので。

ふと、山間の無気味なしじまが、肌をしめつける。ひよどりか何か、ただ一羽、けたたましく啼いて谷をよぎる。しかしそれきりだ。鳥類はみな地を人間にゆずって他の平和な山へことごとく移動していた。かれらには、この壮大豪華をきわめての人間の演舞が、何のためにやるのか、不可解にちがいない。

薫風陣くんふうじん

家康は、すこし猫背ぎみに見える。四十をすぎてからまた肥りかげんで、よろいをつけても、背がまろく、両肩をむつくりと、くわ形の兜かぶとの重さに、首がお押しこまれているようになあ**んばい**。

采配さいはいを持つている右手も、左手のこぶしも、膝において、ひらきまた股またに、床几へ腰うちかけた姿勢は、余りに前かがみで、何となく、威風にさわるように思われる。

いや、この体ぐせは、平常、客と対坐しても、歩くときでも、そうなのである。反そり身そになつていたことがない。

老臣が、何かの折、それとなく注意した。すると家康は、その時は、そうかそうかとうなずいていたが、べつな日、左右の人々との夜ばなしに、こんな述懐をもらしていた。

（何せい、わしは貧乏そだち。また、六歳の幼少より、他家へ人質にとられ、目に見るまわりの人間は、みな自分より威権いけんのある者ばかりじゃった。自然、子どもの中でも反そり身そに歩かぬくせがついてしまうた。——それと、もひとつの理由は、臨濟寺りんざいじの寒室かんしつで勉強するにも、低い経机一ツで、せむしのようにしがみついては書を読んだ。いつの日か、今川家の人質を解かれ、自分の体が自分のものになろうぞ——と、一心にこり固まつて、

子どもらしい遊戯も出来なんだ……)

かれの今川家時代。

家康は、みずから、その頃のことを忘れまいとしているらしく、かれの人質ばなしは、徳川家の側臣で、聞いていない者はない。

(じゃが、のう)

かれはなお語った。

(——臨濟寺の雪齋和尚せつさいおしょうにいわせると、禪家では、人相よりも、肩の相——肩相けんそうというものをたいへん尊ぶ。肩を見て、その人間が、正覚しょうがくを得ているやいなや、できているか、おらぬか、分るそうじゃ。威いありげに反そつても、肱ひじを張つても、肩相から観みると、だめらしい。……そこで和尚の肩相はいかにと、常々、見ておると、円光のごとく、まろい、やわらかいものじゃ。三千大世界をふところに容いれんとしても、反り身では、はいらのじゃな。対立し、突つっぱり合うてしまうらしい。——で、わしはわしのクセも悪うないなと思うようになった。しかし、汝ら、いざことある時、一番首でも争わんほどな若者ばらのことではないぞよ。わしには、わしのクセというだけのもんじゃ)

以来、たれもかれの姿勢について、いう者はなかつた。ところが、家康も四十をこえ、

また貧乏名物の三河がふくれて、次第に、東海の雄たる位置になるにつれて、かれの前かがみの姿が、何となく、大きく、偉なるものを抱擁しているように見え、この姿のあるところ、百難の城中でも、苦戦の戦場でも、つねに、不壊の太柱が、でんと坐っているような力強さを、たれにも感じさせるのだった。

今も。

ふじヶ根山の一端に、かれはその姿をおき、さつきから静かな目をして、見まわしていた。

「ほ。岐阜ヶ嶽というか。——あれへ、取りついた人数は、森武蔵じやの。さては、程なく勝入の軍勢も、どの山かに、備えるであろう。物見つ、物見の者。急いで見てこい」
かれの令に、敵前偵察の死地をさして、わらわらと、駈け争ってゆく勇士が、幾人となる眼の下の坂に見えた。

まもなく、物見の者は、次々と立ち帰つて来て、家康に復命した。

もとより、各個のもたらしってくる敵状は、部分部分の情況でしかない。
家康の耳ぶくろは、それを綜合して、あたまに、戦鬪をえがいていた。

「藤蔵は、まだ帰らぬか」

「いかがいたしたか、まだ戻りませぬ」

旗本の面々も、さつきからその菅沼藤蔵すがぬまとうぞうひとりが遅いのを、案じていた。

戦機は、熟しきつている。いつ敵から火ぶたを切るか、味方がうごくか、寸前がわからない。

当然——敵前偵察に行った者たちも、つばめ返しに、帰って来ているのに、若い菅沼藤蔵ひとりが、行つたきりだった。

「捕われたか。打たれたか」

かれを惜しむ思いが人々の眉をかすめる。

藤蔵は、日ごろ小姓組に籍をおいていたが、小牧出陣以来、物見組へはいつていた。

先ごろ、また小牧の対峙たいしちゆう中、かれは大胆にも、秀吉方の田中砦たなかとりでと二重堀の附近まで

入りこんで、白馬に乗った敵将一名を、部下六人で生捕りにし、重大な敵の機密を、家康のものとしたりして、家康も、しかと覚えている若者だった。

「……おや、あれは藤蔵ではないか。そうだ、菅沼藤蔵だ。あんなことをしておる」

山鼻に立った諸将が指さしあつて眺めている。家康も、遠くに、かれの影をみとめた。

かれは、騎馬だった。

その馬を、かれは降りている。

地点は、森武蔵勢ぜいの拠よつてゐる岐阜ヶ嶽の下——仏ヶ根池ねいけのなぎさである。馬に水を飼
い、馬の脚を、水に浸つけて冷やしてゐるのだ。

「悠長なやつ」

と、ふじヶ根の味方には、あきれ顔もあつたが、

「いや、馬の脚を冷やしてゐるところを見ると、よほど、あなたこなた、湿地、山坂をか
まわず、駈あげけ飛ばした揚句あげくにちがいない。——もう帰るのだろう」

と、その大胆さに、感嘆する者もある。

池は、敵の目の下だ。バシツ、バシツと、魚のはねるような白い飛沫が立つのは、その
敵が、かれを狙撃そげきしてゐる逸れ弾たまにちがいない。にもかかわらず、菅沼藤蔵は、やがて池
へむかつて、悠然と、放尿してゐた。

すむと、それで一息やすめたとみえ、すぐ馬の背に返つて、駈け出した。しかし味方の
ほうへではない。いよいよ深い敵地の中へ。

折ふし、勝入の子息紀伊守が、六千の兵をもつて、田ノ尻たじりへ移動したときなので、その
陣容が成るのを待ち、菅沼藤蔵は、そつちへ駈けて行つたのである。

偵察は密なるものときまっているが、この時のかれは、公々然と、敵の左翼陣の前を駈けぬけ、さらにまた、右翼の陣容をグルグル見てまわった。

もとより田ノ尻の池田勢も、気がついていたものの、

「オヤ、変なやつが通る」

「何だろ。あいつ」

「敵じゃないか」

「敵かしら。ただひとりで」

「何か、使いか？」

まさか物見とはたれも思わなかった。藤蔵が自軍のふじヶ根山へさして疾風しつぷうのごとく駈け出したとき、初めて、バチバチ撃ち浴びせたが、もう間にあわなかった。

やがて、菅沼藤蔵が、無事にふじヶ根山の味方の中へもどって来ると、全山の将士は、わーっと、歓呼して、かれを迎えた。

家康も、将座から立ち上がった、かれの復命を待っていた。

「しかと、敵の布陣のうらおもて、見さだめて参りました」

藤蔵はその前にひざまずいて、田ノ尻、岐阜ヶ嶽、こうべ狭間はざまの三高地にわたって、三

段備え鶴翼かくよくの陣をとつた池田軍のくばりを、てのひらを指すように、説明した。

その部将は、誰々。

鉄砲隊はどこに多く、槍隊はどこに潜ひそまっているか。

見えない遊軍の有り無し。また士気の如何。——そして、敵の脆弱ぜいじやくてん点はどこか。

藤蔵の復命は、微に入り、細にわたっていた。

「ウム、そうか。左様か」

家康も、いちいち得とく心しんのていで、うなずいた。ほかの物見と事ちがい、敵前敵中の十

七、八町にわたる低地高地を、悠々と、ただ一騎乗りわたして、ぬすみ眼たんにりよでなく、胆

力くで見とどけて来た藤蔵の報告である。家康も、信頼した。

「藤蔵の物見は、きょうの会戦のさい先に、一番首にも、まさる働きぞ。大儀大儀」

褒め惜しみのつよい家康が、こんなに褒めたことは、めつたにない。

藤蔵は、面目をほどこしたが、ほかの将士は、いささか嫉妬しつとをおぼえないでいられな

った。戦国の荒武者どもにも、男の嫉妬というものはある。かれらは、藤蔵が退さがるのを

見て、髀肉ひにくをうずかせ、

(なんの、あれしきの働き)

と、燃ゆるがごとき鬪志まなこしの眼をそろえていた。

時刻は、この頃、すでに巳みの刻こく（十時）——。敵の旗幟きしが目のまえの山々に見え出してから、はやくも二時間ちかく経過している。

けれど、家康は、なおおっとりしたもので、

「四郎左。半十郎。これへすすめ」

と、まだ床しやうぎ几にかまえたまま、四方を見まわして、うららかな顔していた。

軍奉行いくさびぎようの内藤四郎左衛門と渡辺半十郎はんじゅうろうまさつな政綱のふたりが、

「はっ」

と、よろいを響かせて、そばへ寄る。

家康は、手の地形図と、現場の附近とを、見くらべながら、

「思うに、こうべ狭間はざまの勝入の手勢が、曲者くせものじゃの。あの二千が、どう動くか、それに

よつては、このふじヶ根も、よい地の理とは申されぬ」

と、ふたりの意見を求めた。

四郎左衛門は、そこから東南の峰をさして、

「つば競せりの御決戦をお覚悟ならば、ここよりは、あれなる前山、仏ヶ根山ぶつねやまの方が、いち

だんとよい、御旗場所かとおもわれます」

と、答えた。

「ウム。移せ」

決断は、実に早い。

ただちに陣替えが、行われた。すなわち、北畠信雄の軍を仏ヶ根に。家康自身は、前山へと、移ったのである。

ここに立てば、敵の高地とは、まったく、眉を接した近距離にあり、あいだの仏ヶ根池、からす狭間の低地をへだてて、敵の顔も見え、はなし声まで、風に乗って、相互に聞えそ
うだった。

山つつじ

たれは、あの山鼻に。

たれの手勢は、崖下に。

また、誰々は、坂の両わきに、兵を潜ひそめよ。

沢には、なにがしが行け。

鉄砲隊は、やや高目の地に。槍隊は、駈け出しのよい地勢に着け——などと、持ち場持ち場の配置も、のこらず云い渡される。

家康も、見とおしのよい、前山の一角に、将座をすえた。

すると、軍奉行の渡辺半十郎が、

「お馬じるしが高い。——お馬じるしは、もつと木蔭に立てられい」

と、遠くから注意した。

高地と高地との近接戦に、あまりにも、れいれいと、総大将ここにありと、馬じるしをかかげては、鉄砲の集中をわれから求めることになる。

家康も、微笑して、

「しばし、伏せい」

と、小姓へいつた。

金扇きんせんの馬簾ばれんが、ゆらりゆらり、そこから少し山蔭へかくされた頃——仏ヶ根ぶつねの山腹か

ら裾にかけて、井伊兵部直政いひひょうぶなおまさの赤一色の旗さし物や人数が、岩間岩間を山つつじの花が

染めるように、展開していた。

「おう、きようは井伊が先鋒か」

「赤備あかそなえが、前へ出たぞ」

「眼にこそ、あぎやか。だが、働きはどうかだろう」

敵も、味方も、そういった。

部将の兵部直政。ことし二十四歳。家康が秘蔵の若者とはたれも知るところ。

つい、今朝までは、旗本のうちに、伍ごしていたのであるが、日ごろ、使える男と見ておいた家康が、

「きようこそ、思いのまま、そちの性根しょうねを出してみい」

といつて、手勢三千人をさづけ、きようの、最名誉であり、また最苦難でもある、先鋒に立たせたのであった。

しかし、何分、若いので、

「老巧の言も聞けよ」

と内藤四郎左ないとうしろうざと高木主人たかぎもんどの、ふたりをつけてやった。

田ノ尻にある池田紀伊守と三左衛門輝政の兄弟は、その南高地から、赤備えをながめて、
「あの強がッておる赤隊の出鼻をたたけ」

と、山あいの側面から二、三百の一群と、真正面から約一千の正攻隊を押し出して、まず、ドドドツと、鉄砲の火ぶたを切った。

仏ヶ根山も、前山も、それと同時に、迅雷じんらいのとどろきを発し、雲を吐くように、弾けむりを、白くひいた。

その硝煙が、うすい狭霧さぎりのようになって、低地の池、田の面、蘆あしの湿り地しめちなどへ降りてゆく下に——早くも、井伊の赤武者が、走っていた。それと先駆を争う黒具足の群れや、雑多な軽兵も——たちまち近づき、距離をつめあつて、槍隊と槍隊との、接戦になった。

およそ、武者合戦の、壮絶さは、槍と槍とのたたかいに尽きる。

また、これによつて、くずれ立つか、押しきるか、大勢の勝負もわかれる。

井伊隊はここで二、三百の敵を仆した。もちろん、赤武者たちも、無傷ではない。直政の身内の惜しい者も何人もなく、討死した。

池田勝入は、さつきから、一作戦を案じていた。

田ノ尻にあるわが子紀伊守と輝政の軍勢が、井伊の赤備えと接戦して、ようやくその戦況が激化してゆくのを見て、

「清兵衛、機会だぞ」

と、うしろへ、声を放った。

前もつて、約二百の決死組が、槍をそろえて、待機していた。行けつ——と清兵衛からいわれるや否やその一組は、長久手村の方へ降りて行った。

勝入の戦法は、こんなときにも、奇手をえらぶ、奇道をこのむ。

かれの性格といえよう。

この一群の奇兵は、かれの策をうけて、長久手を迂回し、徳川勢の最左翼——つまり赤備えが挙げて前に押し出したあとを狙つて、敵の中核を急襲し、全山の陣容がみだるるを見て——家康を捕捉しようと考えたのである。

ところが、それは、成功しなかつた。——途中、徳川勢に発見され、弾丸の集中をうけて、足もとのわるい湿地で立ち往生してしまい、退きもならず、進みもならず、惨たる損害を作ってしまった。

また一方。——森武蔵守は、岐阜ヶ嶽から、この戦況を見て、

「ああ、ちと早いぞ。なんと、常にも似げなく、舅どなの、あせり気味なことよ」

と、舌打ちならして、嘆じていた。

義父の勝入よりも、この日は、かえつて若いかれの方が、どこことなく、落ちついて

いた。

武蔵守は、きょうを死ぬ日と心中にきめていた。また、多くを見ず、思わず、ただ正面の前山にある金扇の将座だけを、じつと見ていた。

(家康だに打てば——)

という気なのである。

家康もまた、

(森武蔵の陣じん気こそただならない……)

と、岐阜ヶ嶽を、どこよりも、監視していた。

そして、物見の者から、森武蔵守のきょうのいでたち振りを聞いて、

(さては、死装束の用意とみゆる。死を決した敵ほどこわいものはない。あなどつて、死神につれ込まれるな)

と、左右の者へも、戒かい心しんを与えていた。

だから、この一点の対陣だけは、どっちからも、容易に手出しをしなかった。

武蔵守は、ここに、

(田ノ尻の戦況が烈しくなれば、かならず家康は、坐視していられまい。兵をさいて、加

勢を送るだろう。——その潮こそ、討ちこみどころ)

と、相手のうごきを見ているし、家康もまた、

(精悍無比せいこんむひのきこえある鬼武蔵が、じつと、鳴りをしずめておるには、何ぞ、劃策かくさくがあるにちがいない)

と、容易に、その手はくわないのである。

が——田ノ尻のもようは、武蔵守の期待をうら切つて、かえつて、池田兄弟たちの敗色が濃い。

(いまは)

と、かれも、待ちしびれを思い断ツた。ところが、そのとき家康のある前山の一端に、今まで、見えずにあつた金扇ぼせんの馬簾ばれんがさつと高く揺れあがり、全軍の半分は、田ノ尻へ駆け、のこる半ばの軍勢が、わーつと、声つなみをあげて、この岐阜せんヶ嶽へ、先を取つて、攻めてきた。

森隊も、どつと駆け合わせた。からす狭間はざまの低地は、駆けあう両軍の兵で、血の卍まんじになつた。

銃声は、たえまもない。

山と山とに狭められた地形の中の決戦なので、馬のいななきも、槍太刀のひびきも、吠えあい、名のりあう武者声も、木魂こだまにひびいて、天地の鳴るような、無気味さだった。すでに、この狭間せまいつたいの地は、戦わざる一陣なく、戦わざる一将も一兵もない。そして。

勝つと見えれば崩れ、敗れたかと思えば突出し、いずれの旗色がよいのやら、ややしばらくは晦冥かいめいの修羅しゆらだった。

この中に、ある者は討死し、ある者は勝ち名乗りなをあげ、また或る者は、傷を負い、卑怯の名をうけ、勇者のほまれを剋かちとり——そして、よく見れば、人間個々が、永世にかけての、奇異なる運命を作っているのもあった。

妻、親、子ども、愛人、まだ生れない腹の子までの——一個につながる無数の運命も——かかるあいだに、次へ約束づけられている。

ふしぎな、人間の行為。人間が、穴に相寄り、部落をつくり、社会のかたちを持つてから、ついに、その禍わざわいの大を、またおろかさも、知性にわかりきっていながら、なおやめるにやめられないでいるすさまじい宿業しゆくごうの修羅。

この中に、戦国の武者ばらは、いかに生き、いかによくこの宿業を果たさんや——とあ

われにも、生命を奪いあうのであった。名を美しく、いきぎよく、そして、犬死にならぬ人間の死を、せめては、忠とよび、義とよび、信とよぶ、当時の道義にむすびつけて、仆るも、頬に微笑を持つとうと、希^{ねが}うのでもあった。

若き鬼武蔵——白^{はく}哲^{せき}の美^び丈^{じょう}夫^ふ、森^{もり}長^{なが}可^かの気^きもちなどがそれである。

かれの若い生命こそ、戦国の苦悶の象徴だった。

恥^{はじ}!

この一つが、かれをして、ふたたび平常の世間へ、生きて還ることを、思わせないのである。

それと、男の中の嫉妬。これもかれに、きよ^しの^に死^し装^{しょう}束^{ぞく}を、よろわせた一因なのだ。

「家康に会わん」

かれは、誓っていた。

いよいよ乱軍となるや、武蔵守は、母^ほ衣^{むし}武^{むし}者^{じゃ}四、五十人ばかりを、両わきにひきい、金扇の馬じるしを目がけて、

「家康に会おう。家康、見^{げん}参^{さん}つ——」

と、向うの山へ、駈^かけ渡^{わた}そうとした。

「やるな、やるなッ」

「鬼武蔵を」

「あの白地陣羽織の駿馬を——」

と、かれをさえぎる、甲冑の浪が、そのそばへ、寄っては蹴ちらされ、寄っては、血けむりにつつまれ、せいそう 慄慄、ことばにも尽きる。

このとき、ひよめ 飛雨のように、白地きんらんの武者羽織を目標にあつまつた銃弾の一つが、かれの眉間に中つた。あた

おもて 面をつつんでいた武蔵守の白布が、ぱつと、紅になったせつな、

「ううむッ」

馬上、身を反らして、四月の空を、この谷あいから一目見て、二十七歳の生命は、たづな 手綱をもつたまま、地にまろび落ちた。

鬼武蔵の乗っていた日頃の愛馬——ひやくだん 百段——と名のある駒は、かなしげに、さおだ 竿立ちになつていないた。

わつと、泣き声に似た味方のおどろきが、すぐ、武蔵守のそばへ駈けより、死骸を肩や手に担つて、にな 岐阜ヶ嶽の上へ、引き退いた。

徳川家の本多八蔵、柏原与兵衛などが、軍功のしるしを争つて、

「首をツ」

と、追いつたつて来たが、

「くそツ」

主を失つて、泣きベソを掻いている母衣武者たちは、おそろしい形相で、うしろへ槍を向け直し、からくも、武蔵守の屍を、どこかへ隠した。

けれど、鬼武蔵討たれたり——という声は、全戦場に、一陣の冷風をつたえ、ほかの戦局の不利とともに、たちまち、池田勢のうえに、急転直下の変化をおこした。

ちようど、蟻の群れに、熱湯をそそいだように、峰、山道、低地の窪、あらゆる所に、方向のない武者の影が、支離滅裂に逃げみだれた。

「いいがいのなき味方どもよ」

勝入は、徒歩だちになつて、小高い所へ立ち上がり、寂として、人影まばらな周囲にたし、憤然と、怒号していた。

「勝入は、これにあるぞ。みにくい退きかたをするなツ。日頃をわすれたか。返せツ返せツ」

しかし、かれの左右にいた黒母衣くろほろ五十人組も、老臣や諸しよがしち頭たちも、ひとたび崩れ立つては、逃げ足が止まらなかつた。かえつて、まだ年ごろも十五、六の、いじらしげな小姓などが、おろおろ、かれの腰について、

「お馬を召しませ。大殿、お馬を召しませ」

と、迷い馬を、曳いて来て、懸命に主人にすすめていた。

勝入は、坂下のたたかいに、馬を鉄砲で撃たれ、いちど落馬して、敵兵にかこまれたが、必死に、斬りひらいて、ここまで登つて来たのである。

「もう、馬はいらぬ。——床しょうぎ几をかせい。床几はないか」

「はいッ、これへ」

小姓は、かれのうしろへ、床几をすえた。勝入は、腰をおろして、

「四十九年の事、いま終る……」

と、ひとりつぶやき、まだ年少の小姓をながめて、

「そちは、白井丹後しらいたんごのせがれであつたな。父も母も待つておろう、はやく犬山へ逃げたけ。……それつ、弾たまがとんでくるぞ。はやく去れ、はやく去れ」

と、泣き顔になるのを、追いやつて、いまはかえつて、ただ一人こそ、心やすしと、悠

然、最後のこの世の景色を、うち眺めていた。

と、すぐ崖下に、咬かみあう猛獣のようなうめきと木の揺ゆれが聞えた。まだ、味方の黒母くろ衣ほろか誰かが残のこっていて、死闘をふるっているものとみえる。

勝入の面おもては、無感覚にみえる。すでに、勝敗もない。功利もない。現世との淡あわい離愁りしゆうが、母の乳の香のする遠い過去までを、ふと、思いかえさしているだけだった。がさつと、眼のまえの、灌木がゆれた。

「だれだツ」

と、勝入の眼が、くわつと射て――。

「それへ参つたは、敵ではないか」

と、よびかけた。

余りに、落着き払った声と、その姿に、近づきかけた徳川方の一武者は、思わず、ギクとして後ずさった。

勝入は、なお叫んで、

「――敵ではないか。敵ならば、わが首を取って、功名にするがいい。かくいう者は、池田勝入であるぞ」

と、催促さいそくした。

灌木の茂みの中に身を伏せた武者は勝入の姿をふり仰いで、身ぶるいした。そして、昂たかぶりきつた声と共に身を起して、

「おうツ、よいお人と出会い申したり。徳川家の永井ながいでん伝八郎ばんちろうツ。見参ツ」
と、槍をつけた。

当然、それと共に、音に聞く猛将の陣刀が、さつ然と、反撥を見せるものとばかり思っていたところ、伝八郎の槍は、そのまま、何の苦もなく、相手のわき腹へ深く通つたので、
「あツ」

と、刺された勝入よりは、かえつて、伝八郎の方が、力を余して、前へよろけた。

床しょうぎ几は仆れ、勝入のからだも槍の穂さきを背に貫かせたまま、ころがった。

「首を打て」

もいちど、彼はどなった。

しかもついに、そうなるまで、かれは太刀に手をかけずにいた。

みずから死を迎え、みずから首をさずけたのである。

伝八郎は、昂たかぶりきつて、夢中だったが、ふと敵将の最期のすがたに、その心もちを覚さと

ると、なにか、人間同士のこうした相剋そうこくに、泣きたいような激情をつきあげられ、こめかみから眼の底を、ツンと、涙に刺された。

「おうツ」

と、かれは吠えたが、——そして望外な大てがらに、われを忘れるほど歓喜したが、次に、くだすべき手を、わすれていた。

すると、崖の下から、ガサガサと、先をあらそつて駈け登つて来たかれの味方たちが、

「安藤彦兵衛ツ、見参」

「上村伝右衛門、これに」

「あツ、勝入か。徳川家の蜂屋七兵衛はちやべえツ」

と、名乗りかけ、名乗りかけて、一個の首を、あばき合つた。

首は、たれの手にかげられたか、とにかく、まっ赤な手が、もとどりをつかんで、ふり廻しながら、

「大将、池田勝入信輝いけだしやうにゆうのぶてるのくび、永井伝八郎、打つたぞツ」

「安藤彦兵衛、打つたりツ」

「上村伝右衛門ツ、勝入の首を打つた——ツ」

血のあらし、声のあらし、功名慾の自我のあらし。——四人、五人、もつと多くになつた一かたまりの武者が、一個の首を中心に、自陣の家康のいる方へ向つて、まるで一陣のはやて雲みたいに駈けて行つた。

勝入討死——の聲は波になつて、あなたの峰、こなたの沢、全戦場の徳川勢に、わあつと、歓呼をあげさせた。

声なき人々は、みな池田勢の打ちもらされた人々だつた。

かれらは、瞬間に、大地と大空を失つて、その生命を託す所を、枯葉のようにさがしまわつた。

「ひとりも、生かして返すな」

「追えや、追えや」

勝者は、あくなき勢いを駆つて、そのちりぢりなものを、思うままに屠^{ほふ}つた。すでに自己の生命すら忘却しきつている人々にとっては他の生命を打ち散らすことも、落花^{たわむ}に戯^{たわむ}れているような心理なのかもしれない。

勝入も果て、鬼武蔵も討死し、のこる田ノ尻方面の一陣地も、いまは、あとかたなく、徳川勢に駈け散らされていた。

そこは、勝入の子のきいのかみゆきすけ紀伊守之助と、三左衛門輝政の兄弟が、指揮していた一線だったが、側面の味方の総くずれと、前面からの敵の突撃に、一たまりもなく揉もみつぶされて、「三左。何としたことだろう?」

「兄上。お退ひきなさい。もう、危険です」

「ばかをいえ。勝入の子ともある者が」

「でも、この敗色が立つては、もはや、味方の逃げ足を止めるすべはありません」

ふたりは、あたりを見まわして、寥りょうりょう々たる味方の影に、齒がみをして、死地はここ、死すは今、と観念した。

兄弟のまわりには、梶浦兵七郎、片桐与三郎、千田主人、秋田加兵衛などの八、九人しか見えなかった。

「長吉ながよしは、如何いかがした? 長吉は?」

と、兄弟おもしろいの之助ゆきすけは、ことし十五になる幼い末弟のすがたが見えないので、だれにともなく、こう口走った。

だが、乱軍の中、たれも、知る者はなく、その安否も聞かないうち、またも一群の敵の騎馬兵が、怒濤どとうの一呑ひとみを示してここへ向つて来るのを迎えた。

「お二^{ふた}方は、お退^ひきなされい。しんがりは、われわれに、おまかせあつて」

旗本たちは、槍ぶすまを作つて、防ぎに当つたが、勝ちほこつている精銳の騎馬隊にたいし、若い主將ふたりの一命を庇^{かば}おうとする敗残の数士では、まるで戦鬪にならなかつた。

片桐与三郎、千田主水など、あつというまに、枕をならべて仆れ、岩越次郎左衛門や秋田加兵衛も、たたかいたたかい、血けむりの叫^{きょう}喚^{わん}のなかに姿を没し去つた。

紀伊守之助^{ゆきすけ}は、備え場から二町もあとへ退^さがつて、そばを見ると、梶浦兵七郎ひとりしかそばにいない。

「兵七。弟は」

「三左様も、血路をひらいて、遠くへ、お立ち退^のきとおもわれます。あなた様も、おはやく」

「いや、わしはなお、父上の先途^{せんど}を見とどけねばならぬ。父上はいかがなされたやら」
かれはもう一軍の將であるよりも、ひとりの人の子だった。兵七郎の止めるもきかず、また引つ返して、父の陣地の山へ、登つて行つた。

ちようどその時、勝入の首を上げた一群の味方とわかれて、ひとり降りてきた徳川家の安藤彦兵衛と、ばつたり出会つた。

道は急な山腹であつた。

おうつと、上から叫び、おうつと下からも叫んだ。相見たとたん、こう二人の槍は、からみ合つて、すさまじい一旋風せんぷうを巻いてたたかたが、紀伊守之助のほうは、当然、その地の理からも、不利をまぬかれず、彦兵衛の槍の下に、ことし二十六歳の若い命を、あえなく、朱あけのよろいにつつんで、最期をとげてしまった。

彦兵衛は、首しゅ級きゆうをかかえて、

「紀伊守を討つたる者、安藤彦兵衛直次ツ」

と、躍るがごとく、駈け去つた。

之助ゆきすけの家臣、梶浦兵七郎は、その敵を、追いかげにかかつたが、届かないため、槍を抛ほうり投げた。けれどその槍がまだ地へ落ちないうちに、流りゅう弾だんのため、どうと仆れて、かれの体も、急な崖をゴロゴロころがって行つた。

一方、兄にわかれた三左衛門輝政も、

「父上の安否も知れぬうちに、戦場を退けようか。父上は？ 兄上は？」

と、潰かいらん乱らんする味方の流れから駈けもどつて、どうしても、退かなかつたが、そのうちに、勝入の老臣、伴道雲ばんどううんが、来あわせて、

「いや大殿には、矢田川の方へ、はやお立ちのきです。そのお姿を、道雲も、お見かけ申してござる」

と、時にとつての機智で、こう止めたので、輝政も、

「父上が御無事ならば」

と、ついに駒を回して、まわ敗走する味方のあとから、共に、逃げ落ちて行つた。

——もう、負けいくさ。

と、鬪志を失つた池田の士卒は、三々五々、田のあぜ、山の小道、林や湿地のあいだなど、道をえらばず、かいそつ潰走していた。——その思い思いな人間の流れは、やがて、みな矢田川の岸へ出た。

その中に、勝入の側臣、池田丹後守もまじっていた。これは早退はやのきして来たものとみえ、傷手もすくない士卒を四、五十人もつれて、そろそろと逃げていた。

すると、あとから、

「池田丹後よな。丹後、返せツ」

と、ただ一騎で、田の道を、追いつたつて来た徳川家の荒武者がある。

大久保七郎右衛門の息子——しんじゆうろうただちか新十郎忠隣だった。まだよい敵に会わないで、今朝

から不遇ふぐうをかこつていたかれは、せつかく、目ざす敵に近づいたとき、あぶみを踏みはずして、落馬しかけた。

「しまった」

と、あせるところへ、また、うしろから退いて来た池田方の一武者が、新十郎のよろいの揚巻あげまきを目がけて槍を突きさした。

槍は、わずかに、皮膚をかすつて外れたが、新十郎は、泥田の中へ、ころげ落ちた。

ざつと、泥水が、かれの全姿へも、敵の顔へも、刎はねかかった。逃げ退いて来た敵ではあるが、その男、すこぶる磊落者らいらくものとみえ、突然、わははははと、泥だらけな顔をくずして笑った。そして、田の中の新十郎にむかい、

「おい、小せがれ。汝のような乳くさい青武者の首をとつても荷物になるだけのことだ。

首の代りに、逃げるに欲しいこの馬をもらつてまいるぞ。——いつか、この馬で、おれがまた戦場へ出たら、取り返すがいい」

と、新十郎の馬へ飛び乗り、ふりむいて、また一笑を与えたまま、さつそうと、駈け去った。

新十郎は、這はい上がって、歯がみをかんだが、ふとみると、その敵も、あわてていたか、

さきに自分を突きそこねた槍を、地上におき捨てていた。

「いまましいやつ」

かれは、槍を拾って、歩いて帰った。そして後に、家康の床几しょうぎのまえに呼ばれたとき、事の次第を、無念がって話すと、

「そちは、敵に馬を取られたと嘆くが、槍も武者には大事な道具。面目めんぼくの上では、まず五分五分の取り換えごとと申してよかろう。よしよし。そう恥じ入るな。萎縮いしゆくするな」と、家康も大いに笑ってなぐさめたという。

たつじんがん
達人眼

家康の金扇陣の下には、手柄をみやげに、追々と、ひき揚げてくる諸将がたえなかった。その中の一人、水野藤十郎とうじゅうろうは、大久保新十郎の顔を見て、

「おう、めでたく、帰られたか。さつき、泥田へ落馬されたときは、あわれ、よい若者をひとり徳川家から失くしたと見ていたが……」

と、かれの無事を祝した。

その藤十郎のはなしで、新十郎の馬を奪つて逃げた豪胆ごうたんらしい落な敵は、池田家の臣でなく、三好秀次みよしひでつぐの家来、土肥権右衛門どひごんえもんという者であることが分つた。

「三好勢は、とくに、長久手ながくてから総くずれに逃げ去つたのに、どうして、秀次の家来たる土肥権右衛門が、池田勢のなかにいたのだろうか」

と、不審ふしんがる声があつた。

天野三郎兵衛だの、小栗又市などが、答えた。

「いや、土肥権右ばかりでなく、秀次の家来は、幾人もこの辺の戦場で見かけ申した。そのわけは、秀次の軍が、まつ先にやぶれたのを、しのびがたき恥として、主君も主隊も、楽田がくでんをさして、逃げ落ちたあと、ひとり引つ返して、池田勢のうちへ、陣借りして、戦つていたものとみえる」

そう聞いて、人々は、

「道理で、特にかれらは、強かつた」

と、思いあわしたが、新十郎も自分の出会つたのが、その一人であつたと知つて、

「よし、覚えておこう、いつかまた、他の戦場で、きよの愉快な敵に、めぐり会うことがあるかもしれぬ」

と、忘れぬように、その日、拾い取って来たあいての槍の柄に、

——土肥権右衛門二返上ヲ期ス物也。

と、小柄こづかで彫りつけておいた。

将士は、こんな話題に、はればれと、勝かち軍いくさのよろこびを沸きたたせていたが、家康を中心とするごく周辺の帷幕いはくのうちには、なお、容易に、凱歌がいかをあげていなかった。

「すくない。どうも……ちとすくないぞ」

家康は、何か、憂うれれている。

この大将は、よろこびも、かなしみも、めったに、気色にあらわさないのを、普通としていた。

さつきから、かれがしきりに、少ないとつぶやいていたのは、すでにここから幾度も、引き揚げの貝の合図を吹かせているのに、勝ちに乗って、敗軍の敵を追いかけて行った味方が、意のままに帰って来ないのを、案じているらしいのである。

家康は、さつきから、二度も三度も、云っていた。

「勝ちに勝ちを重ねぬものだ。——勝つたるうえに、なお勝とうとするのは、よくないぞ」
かれは、秀吉という名をここでは出さなかったが、あの天性の兵略家が、すでにになにか、

自軍の大敗北にたいして、一指をこの方角にさしていることを、どこかで、直感していたにちがいない。

「長追いは危ないぞ。四郎左は、行ったか」

「はっ。とうに、御命令をもつて、駈けております」

井伊兵部いひひょうぶが、答えると、家康はさらに、

「兵部、そちも行け。長追いすなど、騎虎きこの者どもを、叱ッて来い」

と、いいつけた。

いまは見栄みえもなく敗走していた池田方の士卒は、志段味しだみ、篠木しのき、柏井かしわい——と支離滅裂しりめつれつになつて、遁走とんそうしたが、矢田川やだがわを越え得たものは、みな助かつた。

「打ちもらすな」

と、追撃して来た徳川勢も、その川原まで来ると、内藤四郎左衛門の一手が、横列を作つて、各、槍の柄を横にならべ、

「止まれッ」

「止まり召されっ」

「長追いは相成らぬと、御本陣からの命でござるぞ」

「長追いは無用」

と、口々に云つて、この急迫して来た怒濤をあとへ押しもどした。

井伊兵部も、駈けて来て、

「いたずらに勝ち驕り、なお図に乗つて追う者は、帰陣のせつ、軍罰に問わんと、おこ
とばであるぞ。——もどれ、もどれ」

と、声をからして、味方のなかへ、云つてまわつた。

ようやく、騎虎のいきおいは熄み、徳川勢は、矢田川を境として、みなひきあげた。

時刻は、午の下刻うまげこく（午後一時）ごろであつた。

陽は、ちようど中ちゆうてん天。四月初めとはいえ、雲は、夏近いすがたを示し、将士の顔は、

どれもこれも、土と血と汗にまみれて、燃えるような色をしていた。

未の刻ひつじ（午後二時）——家康はふじヶ根山の陣所を降りて、香流川かなれがわをわたり、権道ごんどう

寺山じざんのすそで、首実検の式をあげた。

今朝から半日の全戦場にわたつて、秀吉方の死者は、二千五百余人とかぞえられ、徳川、北畠、両軍の損害は、討死五百九十余人、手負いは、数百名にもものぼつた。

しかし、秀吉方にくらべて、徳川方の犠牲は、約三分の一強であつた。

そのとき、本多佐渡守は、家康へいった。

「この大捷たいししょうは、あまり自慢にはなりません。なぜならば、秀吉方の軍勢は、かれが上方からひっさげて来た全兵力の一支隊にすぎないものですが、お味方は、小牧にある全軍をあげてこれへ臨んだものです。——然るに、もし万一のやぶれをここで取ると、お味方にとつては、致命的なものになる。——一刻もはやく、小幡城おばたじょうまで、お立ち退きあるが万全かと思われまます」

すると、高木主水清秀たかぎもんどきよひでは、

「いやいや。勝目かちめがついたときは、大胆に、勝目を取っておくのが勝負というものでござろう。——必定ひつじょう、秀吉はこの大敗を聞いて、怒りをもよおし、手勢をすぐり、軽装のまま、駆けつけて来るにちがいない。それを迎え打って、一挙に、猿面公ざるめんこうの首をあげるこそ、兵家の手につばして待つところではござるまいか」

その両論にたいし、家康はここでもまた、同じことばをくり返した。

「勝ちに勝ちを重ねぬものよ」

そして、また、

「部下もみなつかれておる。——今にもここへ筑前（秀吉）が砂塵をあげて来ることは確

かだが、きょうは早や筑前と会うべきではない。小幡へ移ろう」

と、即座にきめて、白山林の南をとおり、まだ陽もたかい申の刻さる（午後四時）ごろ、小牧山のつなぎ城じょう——小幡城おぼたじょうのうちへ入った。

つなぎ城とは、繋ギの意味で、出城でじょうとも、取出し城ともいったりする。

中心基地の本城から、予想される各戦線の主要地に、足溜りあしだまとして、あらかじめ守兵や糧食を入れておく飛び飛びの「点」でもある。

これは、武田信玄たけだしんげんがよく用いた甲州流兵学の特徴であったが、長篠ながしのの合戦かっせんののち、徳川家には多くの武田の遺臣が身をよせていたので、家康の戦術には、以来、いちじるしく信玄風が加味されていた。

こんどの場合も、小幡、岩崎の二つのツナギ城が、どれほど大きくものをいったかわからない。

ことに小幡城は、小牧から出て来たときも、ひき揚げにも、ここが家康の完全なる前線基地となつて、その進退を、頗る速すみやかにさせたのであった。

「これで、よし」

家康は、小幡城へ全軍を入れ、八方の城門をとじてから、初めて、きょうの大勝を、心

から味わつたにちがいない。

かえりみても、きよう半日のたたかいは、まず彼としても、

「そつはなかつた」

と、満足を感じたろう。将卒たちの会心かいしんとするところは、一番首、一番槍などの手からにあったが、主將たる者のひそかな満足は、ただひとつ、自分の達見たっけんが的中してたと感じるところにある。

だが、達人は達人を知る。この直後の、秀吉のうごき一つに、かれの関心はいま傾けいちゆ注うされていた。

「……筑前来らば」

と、家康もそれにたいして、「変通へんつう」をふくみ、努つとめて、こころも体もやわらかにもち、そしてしばしを、小幡の本丸で休息していた。

さて、秀吉は。

かれは、その本拠ほんきよ、楽田がくでんにあつて、池田父子が発向したあと、つまり九日の朝——
細川忠興ほそかわただおきをよんで、

「ひと当て、当てよ」

と、小牧の攻撃を、急に、命じた。

日根野弘就ひねのひろなりにもいいつけ、高山右近長房たかやまうこんながふさにも、同じ命をくださった。

そして井楼せいろう(組み櫓)のうえに登って、戦況をながめていた。

増田仁右衛門も、そばにひかえて、はるかを見ていたが、

「あれ。忠興どのの血気、あのように、深入りしても、大事ありませんまいか」

細川兵が、余りにも、小牧の敵塁へ近づくの案じて、秀吉の眼いろを見あげた。

「大事な大事ない。忠興は若くとも、思慮ぶかい高山右近もひとつに出ておる。右近が行くほどなら、仔細しさいはない」

今朝の攻勢は、ここで勝つための攻撃ではない。小牧の敵を牽制けんせいするための、秀吉の偽計ぎけいであった。秀吉のこころは、遠く、

(勝入父子の首尾しゅびいかに)

と、実は、その吉左右きつそのみを、心にかけていたのだった。

すると、午ひるごろ。

長久手からこれへ引つ返して来た数騎があつた。どれもこれも、惨憺さんたんたるすがたをも

ち、口々につたえてくることはみな悲報だった。——三好秀次の本軍、総くずれとなり、秀次の生死も知れないとある。

龍泉寺川
りゅうせんじがわ

「なに、秀次が？」

秀吉は、正直、おどろいた。——驚くべきことを、驚かないような顔はしてられない
彼である。

「さては、ぬかつた」

これが二度目のことばであった。これも、秀次や池田父子のぬかりを罵ののしつたわけではなく、自分の落度として、あきらかに、敵の家康の活眼かつがんを、ほめたたえるような声だった。しかし、三度目は、かれのよくやる口ぐせの——

「よし、よし。……」
であった。

「仁右衛門。早貝はやがい、早貝」

「はっ」

増田仁右衛門のごときは、事態の重大さに、顔色を失っていたが、主人のよしよしを聞いてから、やや意気をとり返し、命ぜられたまま、貝を持って、やぐらの上から早貝を吹き鳴らした。

秀吉は、たちまち味方の各陣地へ、黄母衣きほろの者を飛ばして、非常令をつたえ、それから、半刻もたたないうちに、二万の兵が、ここ楽田がくてんを発して、長久手ながくての方へ、いそぎ出した。この大きな、しかも急速な大移動を、小牧山こまきやまの徳川方の本營が見のがしているわけではない。

家康は、すでにいない。そして留守は、わずかな人数で、守られていたのである。

「やあ、秀吉自身、楽田の軍勢をあらましひきいて、大挙、東の方へいそぐらしいぞ」留守番の一将、酒井左衛門尉忠次さかいさえもんのだつぐは、これを知ると、手を打って云った。

「思うつぼよ。秀吉以下、主力の出払った虚について、楽田の本營、黒瀬くろせの砦とりでなど、片ツぱしより焼きたてて、秀吉を、立往生にさせて打ち取らんは今にあり。——各、この忠次について、大功をたて給え」

すると、これも留守をあずかる一方の部将、石川数正いしかわかずまさが、正面から反対した。

「なに逸^{はや}り給うか酒井どの、秀吉ほどな神算鬼謀^{しんさんきぼう}に富むものが、いかに取りいそいで発向したとは申せ、あとの本營に、守りも得ぬほどな将士をのこさずに参ろうか」

「いや、いかなる人間でも、あせりを思うては、日ごろの器量^{きりよう}も出ぬものだ。——あの、またたくまに早貝鳴らして打ち出た様子は、さすがの秀吉も、長久手の敗を聞き、狼狽^{ろうばい}したさまが、眼に見ゆるようだ。いまを外^{はず}して、猿面公の尻に火をつけるときはない」

「浅慮^{あきはか}浅慮」

石川数正は、大いに笑つて、なお極力、反対した。

「秀吉の手ぐちとしては、むしろ相当な兵力をのこし、われらが、小牧の堅塁^{けんるい}を離れて、出たところを、付け入らせるといふ策をのこしておるやも知れん。——この小人数で打つて出るなどは、もつてのほか」

評議はまちまち。事態は急である。もし、人々が自我にとらわれていたら、機会は、その人たちのあらゆる考えをみな振りすてて去りかねない。

そのとき、この紛論^{ぶんろん}に、あいそをつかして、慨然^{がいぜん}と、席を突つ立つた一将がある。
本多平八郎忠勝^{ほんだへいはちろうただかつ}だつた。

「議論か。いや、議論ずきは大きいにしゃべり合っているがいい。この方は、安閑^{あんかん}と、こ

うしてはおられぬ。——おさきへ御免」

かれは、口ベタで、意志の男であった。めんどろくさくなつたとみえる。

いたずらに、我説がせつを固持こじして、論争の陣を張つていた酒井忠次も石川数正も、かれが憤ふ然んぜんと席を蹴つたすがたに、眼をみはつて、

「平八郎。どこへ行くか」

と、あわててたずねた。

本多平八郎は、ふり向いて、

「この方は、子飼こいいからの、殿けいの家人けいじんでござる。この期ごにあたつて、殿のおそばへ参るよりほか、行く所はござらぬ」

と、何かふかく思いきめたように云い放つた。

「待て」

と、数正は、単なるかれの血氣と見たらしく、手をあげて、制した。

「われらは、殿より小牧の留守をこそ命ぜられたが、勝手にうごけとは、命ぜられておらぬ。まずまず、落着かれい」

忠次も、一しよになつて、たしなめた。

「平八郎。今さら、おぬしひとりが参つたとて、何の足しになろう。それよりは、小牧のお留守が大事というものぞ」

すると、本多平八郎は、かれらのせまい考えをあわれむような口辺の微笑をちらとゆがめたが、みな年上の上將なので、ことばはていねいに、こういった。

「いや決して、諸將をかたろうて行くのではござらぬ。各は、おこころ任せだ。ただ平八郎としては、いま秀吉が新手の大軍をひきいて、殿の出先へ押しかかるのを見ては、手をこまぬいて、じつと、ここにはいられないというだけのこととござる。——思うてもみられない。夜来、また今朝と、戦いつかれておらるる殿の軍勢へ、秀吉の二万が、敵に加わつて、前後からつつみ打てば、何条、御無事でおられようか。平八郎一人たりとも、長久手に駈けゆき、もし殿のお討死とあらば、共に、御死骸をまくらとして、この方も死ぬまでの心得でござる。おかまいあるな」

かれの言に、座中の雑音は、はたと、声をひそめてしまった。

平八郎忠勝は、自分の手勢わずか三百余をひっさげ、小牧から駈け出した。

かれの意気を感じて、石川さえもんやすみち左衛門康通もまた、部下二百余人をつれて、

「この世のおもい出を共にいたそう」

と、決死行に加わった。

あわせて、六百に足らない小人数であつたが、平八郎の意気は、小牧を出るときから、乾坤^{けんこん}を呑んでいた。二万の敵軍何ものぞ、一猿面公、何するものぞ、という気概^{きがい}だつた。歩兵は、軽装とし、旗は巻かせ、馬にムチ打つて、一団の砂けむりは、つむじのように、東へ駈けた。

そして、龍泉寺^{りゅうせんじ}川の南の岸へ出たとき、秀吉の大軍が、その北岸を、流れにそつて、続々、下つてゆくのに追いついた。

「おう、あれこそ」

「金瓢^{きんびょう}の馬じるし」

「群れ立つてゆく旗本どものなかにこそ、秀吉はいるにちがいない」

平八郎以下、息もつかずに、ここまで来て、一川^{いっせん}を中に、対岸をながめた士卒は、騒然と、指さしたり、小手をかざして、武者ぶるいした。

おおーい、と呼べば、おおーい、と敵からの声もとどいて来そうな距離である。その敵の顔顔顔、二万の足音にまじる無数の馬蹄のひびき。それも、川をこえて、こっちの胸へこたえて来る。

「左衛門、左衛門」

平八郎は、うしろから来る馬上の石川康通^{やすみち}へ呼びかけた。

「おうい、なんじゃ、平八」

「左衛門。対岸を見たか」

「いや、おびただしい大兵じやの。この龍泉寺川の長さよりも長く見える」

「あはははは。さすがは秀吉、わずかな間に、^まこれだけの大兵を、手足のごとく、^{すみ}速やかにうごかして来たのは手際^{てぎわ}といえる。敵ながら、^ほ賞めておこう」

「さつきから、打ち眺めておるが、秀吉は、どの辺におろう。あの金のひさごの馬じるし
の見えるあたりか」

「いやいや。おそらく、他の騎馬武者のなかに、姿を没しておるにちがいない。——鉄砲
の的^{まと}になるような所に、のんのんと、馬を進めておるわけではない」

「敵の士卒も、急ぎに急いで、早足だが、みな、こつちを向いて、いぶかしげな顔をして
おる」

「左衛門。われらの、ここになすべきことは、秀吉をして、この龍泉寺川の道を、寸時で
も、ひまどらせることにある」

「かかるのか」

「いや、敵は二万、味方は五百余人、かかったところで、ほんのいっとき一瞬、ここの川面かわもを、赤く染めてしまっただけだ。討死は、覚悟だが、その死を、できるだけ有効にして死なねばならぬ」

「おお、さすれば、長久手ながくてにある殿の軍勢も、充分、備えをあらためて、秀吉を待つ余裕を生じるわけだの」

「そのことよ」

と、平八郎忠勝は、馬のくらをたたいて、うなずいた。

「長久手の味方に、時をかせがすため、われらは、死をもって、秀吉の足にくい下がり、すこしのひまでも、秀吉の進撃が、おくるるように励むのじゃ。左衛門、その心得で、働こうぞ」

「よし、わかった」

左衛門康通と、平八郎忠勝は、ちよつと、馬首を横に向けて、

「鉄砲隊は、三段にわかれ、道をいそぎながら、交互、一組ずつ折敷いて、対岸の敵を、撃ち浴びせては、進んで行け」

と、いう命をさずけた。

川水の早さにも似て、敵は、向うの岸を急いでいるので、こっちも、それと同調して、急ぎ足をつづけているため、挑むにも、作戦するにも、また隊伍の編制替えも、すべて駈け足をとりながらやらねばならぬ。

——が、この命令一下とともに、三段になった鉄砲隊は、まず、その第一組から、水ぎわ近く折敷いて、ドドドドツと、撃ち始めた。

水辺なので、銃声は、何倍にも大きくひびき、弾たまけむりが、ばくばくと、幕をひいた。すぐ、その組は、先へ駈け出し、次の組が、銃口をそろえる。そして駈け出すと、またすぐあとの組が代って、対岸へ撃ちあびせる。

秀吉方の人数の中に、バタバタと、仆れる影が見えた。

あきらかに、急行軍中の列は、動揺し出した。何か、ののしり騒ぐ声と、そして動作とが、手にとるようにかかる。

「や。何者か、あれしきの小人数をひきいて、挑いどみかかっておる者はいったい誰か」
秀吉も驚いたらしい。非常なおどろきの眼を放って、おもわず駒をそこに止めた。

浅野弥兵衛あさのやへえ、有馬刑部ありまぎょうぶ、山内猪右衛門やまのうちのえもん、片桐助作かたぎりすけさくなど、かれの駒をつつんでいた

諸将や近衆きんじゆなども、共に手をかざして、対岸を見たが、秀吉の問いに、すぐ答えられる声もなかった。

「さてさて、不敵な奴もあるものよ。千にもたらぬ小勢をもって、筑前のこの大軍にたいして、けなげなる振舞いをなす者。敵なればなお、名を知っておかねばならぬ。——たれぞ、あの敵将を見知っている者はないのか」

秀吉は、なお前後の味方を見まわして、しきりに、それを訊くのだった。

すると、前列の方で、

「存じておりまする」

と、いう声があつた。

見ると、美濃みの安八郡あはちごおり曾根そねの城主で、こんどの大戦にあたり、秀吉のために、老軀ろうくをひつさげて、途みちの案内に立ち、終始、かれのそばにあつた稲葉伊予守入道いなばいよのかみにゆうどう一鉄いつてつであつた。

「おう一鉄。そちは川むこうに見ゆる敵将を、たれなるか、見知っておるや」

「されば、あの鹿角かづのの前立まえだて打ツたる兜かぶとと、白糸おどしのよろいには、すぐる年、姉川あねがわの合戦で、しかと、見覚えがござりまする。——彼こそ、家康の股肱ここうの臣しん、本多平八郎に

ちがいありません」

聞くと、秀吉は、今にも、涙のたれそうな眼をして、

「ああ、剛氣ごうきなやつよ。一をもつて方に当る。平八郎とやらは、まさに、大丈夫というべき者だ。おのれは、ここに死して、一刻たりと、われを龍泉寺川りゅうせんじがわに阻はばめ、主人家康をのがれしめんとする心根のいじらしさよ」

そう、つぶやいてまた、

「あわれ、あわれ。たとえ、彼奴きやつよりどんなに撃ちかけてまいるとも、味方は、一矢一弾も、かれに放つな。……他日、もし縁もあらば、この筑前の家中に加えて、愛めつべき男……撃つな撃つな、見すてて行けやい」

こういう間も。

もちろん、対岸からは、容赦ようしやなく、三だん交代の銃手が、弾たまごめせわしく、撃ちつづけていたし——その一、二弾は秀吉のそばをかすめた程だった。

そして、秀吉が、眼をこらして見ていた装よそおいの武者——鹿角のかぶとをかぶった平八郎忠勝は、そのとき、水ぎわへ寄つて、馬から降り、馬の口を、川の流れて洗っていた。

一川をへだてて、秀吉もかれを見、平八郎も、あきらかに、秀吉ありと見ゆる一群が、

馬を止めているのを、じつと、眺めているふうである。

「ひともなげな態度」

「小憎い敵」

秀吉軍の一銃隊は、あわや応戦の火ぶたを切りかけたが、秀吉は、ふたたび、

「本多にかまうな。ただ急げ、先へ急げ」

と、全軍を叱咤しつたして、いよいよ馬を早めた。

それと見て、対岸の平八郎も、

「やるな」

と駆け足になつて、道の先をとり、龍泉寺附近で、ふたたび物すごく挑戦したが、秀吉は、相手にせず、まもなく長久手ノ原にちかい一山へ陣地をとつた。

目的地に着くやいな、秀吉はすぐ、堀尾吉晴ほりおよしはる、一柳市助ひとつやなぎいちすけ、木村隼人きむらひはやとのすけ佑の三部

将に、

「長久手から小幡へひき揚げてゆく徳川勢を、見かけ次第打つてとれ」

と、いいつけて、三隊の軽騎兵群を、その方角へ駆けさせた。

ここ龍泉寺山は、その直後に、かれの本陣となり、赤い夕陽の下に、二万余の新鋭が、

いぎ、主力と主力との雌雄しゆうを決せん——と、きよ用の勝てる敵家康へ、雪辱せつじよくの意を示して、展開した。

「大物見おおものみ」

と、秀吉は呼んだ。小坂こさか甚助じんすけ、天野源右衛門あまのげんえもんのふたりが、物見頭となつて、まもなく、小幡城の方へ潜行する。

そのあとで、秀吉は、ただちに、全軍にわたる作戦行動の案をねっていた。——ところが、その命令のまだ発せられないうちに、

「家康の姿は、すでに、きよ用の戦場には、見えません」

と、いう飛報がはいった。

「そんなはずはあるまい」

と諸将もうたがい、秀吉も沈黙していると、さきに長久手へ向けた木村、一柳、堀尾などが、駈けもどつて来て、

「敵のツナギ城小幡へさして、家康以下の主力はすでにひきあげました。われらは、小幡へ駈けおくれた敵のこぼれに出会つたのみで、せめて、もう半刻も早かりせば——と、残念ながら立ちもどりました」

と、口々にいう。

それでも、約三百人の徳川兵を、打つには打ったものの、目ぼしい将は、その中にいなかった。

「おそかったか」

と、秀吉は、やり場のない怒気どきを、あきらかに、面おもてに燃やした。天野、小坂の物見の復命も、

「小幡の城は、かたく城門をとじ、もはや、もの静かに見うけられました」

と、家康がそこに引き取つて、悠々ゆうゆうと、きよしの勝ち軍いくさを味わい、身をやすめている様を、証言した。

秀吉は、複雑な感情のうちに、おもわず、家康のために、手を打つて祝ってしまった。

「さすがは家康。よくも逸いちはや早く、ツナギ城へ引き取つて、誇ることなく、城門を閉じたことよ。さてさてモチでも網でも捕とれぬ男ではある。……だが見よ、やがて、幾年か後には、その家康に長袴ながばかまをはかせて、秀吉のまえに、礼をとらせてみせるであろう」

ときすでに薄暮はくぼであり、夜に入つての城攻めは、兵法の禁もつとされているし、長驅ちようく、楽田から息もつかずに来た人馬なので、こよいの行動は一時見あわせ、

「兵糧をつかえ」

と、いう命に変わった。

宵の空に、おびただしい炊煙すいえんがたちのぼった。

小幡の偵察隊は、その様子をすぐ、家康に知らせた。

家康は、眠っていたが、その情報に起されて、そう聞くと、

「さらば、われらは」

と、急に、小牧山へ帰る発令をした。

水野、本多、その他の諸将は、夜半、秀吉の龍泉寺山を夜襲しようと、極力、すすめたが、家康は笑って、しかも、まわり道して、小牧へ去った。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（十）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年8月11日第1刷発行

2009（平成21）年3月2日第20刷発行

初出：太閤記「読売新聞」

1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日

続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙

1949（昭和24）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第十分冊

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>